

び じょう い せき
美 女 遺 跡

— 遺物編 —

1998. 3

長野県飯田市教育委員会

び じょう い せき
美 女 遺 跡

— 遺物編 —

1998. 3

長野県飯田市教育委員会

例 言

1. 土器分類の表記については、遺構編と遺物編で異なる部分がある。詳細については、第 I 章第 1 節を参照されたい。
2. 土器図版については、住居址の遺物を優先し、次いで竪穴・炉穴・集石・貯蔵穴・土坑の遺物、最後に遺構外の遺物を掲載した。各々について、草創期～早期前半の遺物を先にまとめ、それ以外の時期の遺物は後半に一括した。
3. 各遺構の遺物は、先頭番号のものにのみ、原則表示した（例えば、第34図 2～10は S K 314の遺物であり、第34図 2 にのみ表示をした）。
4. 第 II 群土器のうち、胎土に繊維を含むものについては、断面にスクリーントーンで表示した。第 III 群～第 VI 群土器については、こうした表示を特に行っていない。
5. 石器実測図の表現については、第 II 章第 2 節を参照されたい。
6. 本文末に、遺構別の石材別石器組成表（比較的遺物量の多い主な遺構）と石器組成表（それ以外の遺構）を付した。石器の基礎整理段階で作成したもので、これを基礎に第 II 章の整理・分析作業を行っている。ただし、組成表と第 II 章との器種分類は必ずしも一致しない。
7. 遺物編の執筆は、第 I 章 馬場保之、第 II 章 角張淳一が担当した。
8. 本書の編集は調査員の協議により馬場が行なった。第 II 章各節の見出し以外で使用したゴシックは原文による。

本文目次

目次

第I章 美女遺跡の土器について	1	(2) 第II群第1類土器について	35
第1節 土器の分類	1	第II章 美女遺跡の石器について	55
(1) 分類	1	第1節 資料の観察と選択及び概要について	55
(2) 第II群第1類土器の分類について	2	(1) 石器の時期	55
第2節 遺構出土の土器	8	(2) 石材からみた石器の特徴	55
(1) 竪穴住居址	8	第2節 用語の説明、図面の見方	56
(2) 竪穴	24	(1) 用語の説明	56
(3) 炉穴	24	(2) 図面の見方	60
(4) 集石	25	第3節 縄文時代の石器－竪穴住居址－	62
(5) 貯蔵穴	26	(1) 早期前半の石器	62
(6) 土坑	26	(2) 早期後葉の石器	75
第3節 遺構外出土の土器	30	(3) 前期の石器	75
(1) 第I群土器	30	(4) 中期の石器	75
(2) 第II群土器	30	第4節 弥生時代後期の石器	76
(3) 第III群土器	33	第5節 竪穴住居址以外の諸遺構の石器	76
(4) 第IV群土器	33	(1) 竪穴の石器	76
(5) 第V群土器	33	(2) 炉穴の石器	77
(6) 第VI群土器	34	(3) 集石の石器	77
(7) 第VII群土器	34	(4) 貯蔵穴の石器	77
(8) 第VIII群土器	34	(5) 土坑の石器	77
(9) 第IX群土器	34	(6) 遺構外の石器	78
第4節 総括	35	第6節 総括	80
(1) 第I群第2類土器について	35	引用文献	105

挿図目次

挿図1 第II群第1類土器の分類(1)	5	挿図5 器形各類の出現率(住居址別)	38
挿図2 第II群第1類土器の分類(2)	6	挿図6 口唇部形状各種の点数(器形別)	39
挿図3 文様の組成比(住居址別)	36	挿図7 口唇部形状各種の出現率(器形別)	40
挿図4 器形各類の点数(住居址別)	37	挿図8 口唇部施文(住居址別)	41

挿図9	口唇部施文（主な文様の類型別）	42	挿図16	口唇部施文の方向の消長	47
挿図10	口唇部施文の点数（器形別）	43	挿図17	各住居址における文様構成各型	48
挿図11	口唇部施文の出現率（器形別）	44	挿図18	胎土の組成比（住居址別）	48
挿図12	口唇部施文の部位（住居址別）	45	挿図19	部位別の器厚の平均値	49
挿図13	口唇部施文の方向（口唇部形状別）	46	挿図20	炭化物出現率（住居址別）	50
挿図14	口唇部施文の方向（口唇部部位別）	46	挿図21	炭化物出現率（住居址別）と、	51
挿図15	口唇部施文の方向（住居址別）	47		その消長	

遺物図版目次

第1図	S B 01・08出土遺物	第27図	S B 26・23出土遺物
第2図	S B 08出土遺物	第28図	S B 03・09・07・16出土遺物
第3図	S B 08出土遺物	第29図	S B 16・17、竪穴、炉穴出土遺物
第4図	S B 11・14出土遺物	第30・31図	炉穴出土遺物
第5図	S B 14出土遺物	第32図	集石、貯蔵穴出土遺物
第6図	S B 14・18出土遺物	第33図	貯蔵穴、土坑出土遺物
第7図	S B 18出土遺物	第34図	土坑出土遺物
第8図	S B 18出土遺物	第35図	土坑出土遺物
第9図	S B 18出土遺物	第36図	土坑出土遺物
第10図	S B 19出土遺物	第37図	土坑、竪穴、集石出土遺物
第11図	S B 19出土遺物	第38図	集石、貯蔵穴、土坑出土遺物
第12図	S B 19出土遺物	第39図	土坑出土遺物
第13図	S B 19・20出土遺物	第40図	土坑、遺構外出土遺物（1）
第14図	S B 20出土遺物	第41図	遺構外出土遺物（2）
第15図	S B 20出土遺物	第42図	遺構外出土遺物（3）
第16図	S B 20出土遺物	第43図	遺構外出土遺物（4）
第17図	S B 20出土遺物	第44図	遺構外出土遺物（5）
第18図	S B 20出土遺物	第45図	遺構外出土遺物（6）
第19図	S B 20出土遺物	第46・47図	遺構外出土遺物（7）
第20図	S B 20・21出土遺物	第48図	遺構外出土遺物（8）
第21図	S B 21出土遺物	第49図	遺構外出土遺物（9）
第22図	S B 21出土遺物	第50図	遺構外出土遺物（10）
第23図	S B 21・24・25出土遺物	第51図	遺構外出土遺物（11）
第24図	S B 25出土遺物	第52図	遺構外出土遺物（12）
第25図	S B 25出土遺物	第53図	遺構外出土遺物（13）
第26図	S B 25・26出土遺物	第54図	遺構外出土遺物（14）

- | | | | |
|------|-----------------------|-------|---------------|
| 第55図 | 縄文時代早期前半の大形石器（1） | 第91図 | 竪穴の石器 |
| 第56図 | 縄文時代早期前半の大形石器（2） | 第92図 | 炉穴の石器 |
| 第57図 | 縄文時代早期前半の大形石器（3） | 第93図 | 集石の石器（1） |
| 第58図 | 縄文時代早期前半の大形石器（4） | 第94図 | 集石の石器（2） |
| 第59図 | 縄文時代早期前半の大形石器（5） | 第95図 | 貯蔵穴の石器 |
| 第60図 | 縄文時代早期前半の大形石器（6） | 第96図 | 土坑の石器（1） |
| 第61図 | 縄文時代早期前半の大形石器（7） | 第97図 | 土坑の石器（2） |
| 第62図 | 縄文時代早期前半の大形石器（8） | 第98図 | 土坑の石器（3） |
| 第63図 | 縄文時代早期前半の大形石器（9） | 第99図 | 土坑の石器（4） |
| 第64図 | 縄文時代早期前半の大形石器（10） | 第100図 | 土坑の石器（5） |
| 第65図 | 縄文時代早期前半の大形石器（11） | 第101図 | 土坑の石器（6） |
| 第66図 | 縄文時代早期前半の大形石器（12） | 第102図 | 土坑の石器（7） |
| 第67図 | 縄文時代早期前半の大形石器（13） | 第103図 | S K 243の石器（1） |
| 第68図 | 縄文時代早期前半の大形石器（14） | 第104図 | S K 243の石器（2） |
| 第69図 | 縄文時代早期前半の大形石器（15） | 第105図 | S K 243の石器（3） |
| 第70図 | 縄文時代早期前半の大形石器（16） | 第106図 | S K 243の石器（4） |
| 第71図 | 縄文時代早期前半の大形石器（17） | 第107図 | S K 243の石器（5） |
| 第72図 | 縄文時代早期前半の大形石器（18） | 第108図 | 遺構外の小形石器（1） |
| 第73図 | 縄文時代早期前半の大形石器（19） | 第109図 | 遺構外の小形石器（2） |
| 第74図 | 縄文時代早期前半の大形石器（20） | 第110図 | 遺構外の小形石器（3） |
| 第75図 | 縄文時代早期前半の大形石器（21） | 第111図 | 遺構外の砥石 |
| 第76図 | 縄文時代早期前半の大形石器（22） | 第112図 | 遺構外の礫器 |
| 第77図 | 縄文時代早期前半の大形石器（23） | 第113図 | 遺構外の大形剥片素材の石器 |
| 第78図 | 縄文時代早期前半の大形石器（24） | 第114図 | 遺構外のハンマーと石核素材 |
| 第79図 | 縄文時代早期前半の大形石器（25） | 第115図 | 遺構外の石核（1） |
| 第80図 | 縄文時代早期前半の大形石器（26） | 第116図 | 遺構外の石核（2） |
| 第81図 | 縄文時代早期前半の小形剥片石器（1） | 第117図 | 遺構外の石核（3） |
| 第82図 | 縄文時代早期前半の小形剥片石器（2） | 第118図 | 遺構外の打製石斧（1） |
| 第83図 | 縄文時代早期前半の小形剥片石器（3） | 第119図 | 遺構外の打製石斧（2） |
| 第84図 | 縄文時代早期前半の小形剥片石器（4） | 第120図 | 遺構外の打製石斧（3） |
| 第85図 | 縄文時代早期前半の小形剥片石器（5） | 第121図 | 遺構外の磨製石斧とその素材 |
| 第86図 | 縄文時代早期前半の小形剥片石器（6） | 第122図 | 遺構外の磨石類（1） |
| 第87図 | 縄文時代早期後葉の石器 | 第123図 | 遺構外の磨石類（2） |
| 第88図 | 縄文時代前期と中期の石器（1） | 第124図 | 遺構外の石皿（1） |
| 第89図 | 縄文時代前期と中期の石器（2） | 第125図 | 遺構外の石皿（2） |
| 第90図 | 弥生時代後期の石器と遺構外の弥生時代の石器 | 第126図 | 遺構外の石皿（3） |

第Ⅰ章 美女遺跡の土器について

第1節 土器の分類

(1) 分類

今次調査で出土した土器を、以下の第Ⅰ～Ⅹ群と各類に分類した。なお、本報告書遺構編の入稿後に遺物編を執筆したため、遺構編の表記とは異なる部分がある。例えば、第Ⅱ群第2類土器は、遺構編では、樋沢式土器と表記されている。あらかじめお断りしておく。

- 第Ⅰ群土器 縄文時代草創期の土器
 - 第1類土器 爪形文土器
 - 第2類土器 爪形文に絡条体圧痕文が併用される土器
 - 第3類土器 表裏縄文土器
- 第Ⅱ群土器 早期前半の土器
 - 第1類土器 立野式土器および同時期と考えられる土器
 - 第2類土器 樋沢式土器
- 第Ⅲ群土器 絡条体圧痕文が施文される土器
- 第Ⅳ群土器 早期後葉の条痕文系前半の土器
 - 第1類土器 関東系の土器
 - 第2類土器 東海系の土器
- 第Ⅴ群土器 早期末葉の条痕文系後半の土器
 - 第1類土器 関東系の土器
 - 第2類土器 東海系の土器
- 第Ⅵ群土器 前期の土器
 - 第1類土器 前期初頭の土器
 - 第2類土器 前期前半の土器
 - 第3類土器 前期末から中期初頭にかけての土器
- 第Ⅶ群土器 中期後半の土器
- 第Ⅷ群土器 後期の土器
 - 第1類土器 後期前葉の土器
 - 第2類土器 後期後葉の土器
- 第Ⅸ群土器 晩期終末ないし弥生時代前期の土器
- 第Ⅹ群土器 弥生時代後期後半の土器

第Ⅰ群第3類土器については、現状では、関東の撚糸文土器群以前に置く立場と、一部撚糸文土器群に併行させる立場とがある。本分類では、この問題を棚上げして、一応草創期としておく。また、第Ⅲ

群土器には、厚手のものや薄手のものがあり、多時期の遺物を含む可能性がある。しかし、第Ⅰ群第Ⅱ類土器や第Ⅴ群土器とは胎土等が異なっている。SB23および遺構外に若干の遺物を見るのみで、位置づけができなかったのも、とりあえず一括しておく。第Ⅳ群第Ⅰ類土器は便宜的に関東系としたが、本遺跡に隣接する半の木遺跡では、東海地方東部の影響を受けた茅山下層式土器1個体が土坑から出土している。本遺跡では該期の資料は破片に限られるため、この問題を棚上げしておく。

(2) 第Ⅱ群第Ⅰ類土器の分類について

これまでの立野式土器研究史の中で取り上げられてきた時間差・地域差に関わる属性として、文様の類型、器形、口唇部の形態および施文、文様構成、原体の刻み方、胎土がある。出土遺物の大半が破片であり、全体の器形や文様構成が把握できる資料は限られているため、部分から全体を復元する方法を取らざるを得ず、推測に依ったところが多い。なお、本遺跡から出土した立野式土器は、押型文・縄文・捺糸文・網目状捺糸文・無文の土器からなる。これまで立野式土器が出土した遺跡で、縄文・捺糸文・網目状捺糸文土器が相当の割合で出土していることや、器形や胎土が共通することから、これらの土器は客体的な存在ではなく押型文土器と切り離して扱うべきでない。無文土器を除いては、原体の回転により文様が施文されることから、以下の分類においては、一括して扱う。無文土器についても、飯田市立野遺跡や八窪遺跡2号住居址での共伴の事例、本遺跡での胎土の共通性などから、立野式土器を構成する要素という立場をとる。

本遺跡での分類や記述は、文様の類型（押型文原体の刻み方や単位数を考慮する）を中心に行ない、それに器形、口唇部の形状・施文、文様構成（施文方向と施文方法の総体、内面施文を含む）、原体の特徴（原体長・原体幅・単位数・条数）、胎土などの属性を絡めていく。文様の類型を中心とした理由は、ひとえに破片資料が多く、他の属性では欠落する情報が多いことによる。

①文様の類型（挿図1・2）

遺物で観察される文様は、棒軸の刻み方、施文の仕方、施文のタイミング、施文される部位等々で様々に変化する。例えば、土器面の乾燥が進んでから施文する場合には施文された文様が浅く不鮮明であるのに対し、まだ乾燥がそれほど進んでいない場合には深く鮮明で文様の形が歪むことが多い。また、同一の原体を使用した一箇体の土器でも、別の部位では、異なった原体に見えることもある。その一方で、中間的な文様も存在することも事実で、特に小さな破片の場合、判断に苦慮したこともある。

楕円文・山形文・格子目文といったポピュラーな押型文では、原体の特徴が細かくとらえられている（例えば、会田 1971）。こうした各文様の細かい差異を検討する前に、押型文全体を横断的に見通すことが必要という立場から、こうした細分は行なわない。また、小破片でははなはだ困難であるが、文様の反復を細かく観察することにより、棒軸の刻み方が判る。いわゆる立野式土器の刻み方は縦刻みであることが指摘されている（岡本 1980）が、本遺跡や立野遺跡の場合、棒軸に対して横ないし斜に彫刻が施されるものが少量ながらある。こうした点を考慮して以下のとおり分類する。

棒状文という用語については十分吟味していない。棒状文は縦刻みであり（矢野 1993）、これについては、別に簾状文・柵状文・縦縞様押型文（駒ヶ根市教委 1972）等の呼称がある。また、横刻みの

ものや斜刻みのものにはいずれもそぐわない。横刻みについては、東北地方の日計式土器に平行線状押型文と呼ばれるものがあるが、混乱を招くおそれがあるので使用しない。現状では、刻み方を問わず平行線状に文様が現れるものを総称して棒状文としておく。

第Ⅱ群第1類土器以外の押型文についても、以下の分類を準用する。複合文は伊那市百駄刈遺跡の山形と横線を組み合わせた例を考慮して1類型設けた。

なお、()内は立野遺跡発掘調査報告書（飯田市教育委員会 1998予定）の文様の類型との対照を示す。

格子目文

- A 斜格子目文（立野D類…以下立D類と略す。）
- B 斜傾した格子目文（立E類）
- C 簾状の長方形格子目文。縦刻み原体（立C類）
- D 縦と斜めからなる平行四辺形状の格子目文。縦刻み原体
- E 簾状の長方形格子目文。横刻み原体
- F 横と斜めからなる平行四辺形状の格子目文。横刻み原体
- G 正格子目文（立B類）
- H 綾杉状の格子目文（立I類）。山形文と棒状文の複合文と考えられないこともない。

山形文

- A 振り幅の大きい1単位の山形文。凸部が細く、立野式に特徴的とされる（立F類）
- B 振り幅の小さい2単位の山形文（立H類）
- C 縦刻みと考えられる山形文
- D 振り幅の小さい山形文。1単位と考えられ、凸部が細い（立G類）

楕円文

- A 凸部が低く大きめの楕円文。縦刻み原体（立K類）
- B A類よりも凹部が細くなり、網目状に近い楕円文。縦刻み原体
- C A類と異なり、凸部がやや疎らで原体の長軸方向・原体の回転方向とも揃う大きめの楕円文。縦刻み原体
- D 凸部が低く大きめの楕円文。横刻み原体（立M類）
- E B類よりも凹部が細くなり、網目状に近い楕円文。横刻み原体
- F 凸部の形状が円形を呈する楕円文

市松文

- A 正方形の市松文
- B 長方形を基調とした2単位の市松文。縦刻み原体（立A類）
- C レンガ積み状の文様。横刻み原体
- D レンガ積み状の文様。縦刻み原体

小楕円文

- A 斜傾した、凸部が小さく疎らな楕円文（立N類）

- B 凸部が小さく疎らな楕円文。縦刻み原体（立L類）
- C 凸部が小さく疎らな楕円文。凸部は原体の長軸方向・原体の回転方向とも揃う。横刻み原体
- D 凸部が小さく疎らな楕円文。横刻み原体

棒状文

- A 原体に対して斜めに刻まれる
- B 縦刻み原体
- C 横刻み原体。平行線状を呈する

ネガティブ文

- A 凹部が小さく疎らで斜傾したネガティブな楕円文（立P類）
- B 斜傾したネガティブな楕円文。原体の回転方向に揃う
- C 斜傾したネガティブな楕円文。原体の長軸方向に揃う
- D いわゆるネガティブな楕円文で、凹部が密なもの。縦刻み原体（立O類）
- E いわゆるネガティブな楕円文で、凹部がD類より疎らなもの。縦刻み原体
- F いわゆるネガティブな楕円文で、凹部が疎らで、原体の長軸方向・原体の回転方向とも揃う。
縦刻み原体
- G いわゆるネガティブな楕円文で、凹部が密なもの。横刻み原体
- H 凹部が方形や円形など不整形なネガティブ文
- I 爪形状を呈するネガティブ文

複合文

その他の押型文

縄文

撚糸文

網目状撚糸文

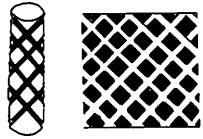
無文

②器形（挿図2）

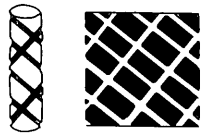
全体の器形が把握できるものはごく一部である。挿図2には全体の器形を例示したが、厳密には胴部以下は不明なものが多い。主に口縁部の傾きや長さ等で判断している。

- A類 波状口縁を一括する。
- B類 強く頸部が屈曲する。
- C類 B類に比べ屈曲が弱くなり、口縁部が長い。また胴部の張りが弱くなる。
- D類 口縁部はさらに屈曲が弱く、やや外反する程度である。
- E類 開き気味の直線的な口縁を呈する。胴部以下は不明である。
- F類 口縁が直立し、砲弾状を呈する。
- G類 口縁がやや内湾し、砲弾状を呈する。
- H類 口縁がやや外傾気味で、砲弾状を呈する。

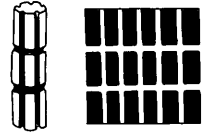
文様



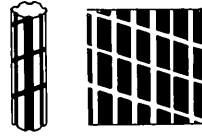
格子目文 A



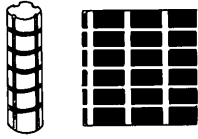
格子目文 B



格子目文 C



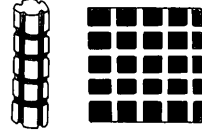
格子目文 D



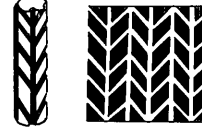
格子目文 E



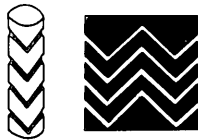
格子目文 F



格子目文 G



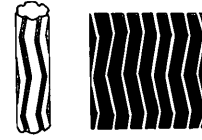
格子目文 H



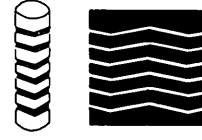
山形文 A



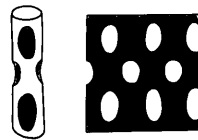
山形文 B



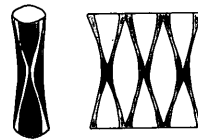
山形文 C



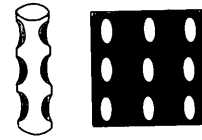
山形文 D



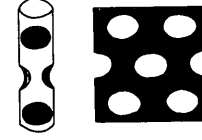
楕円文 A



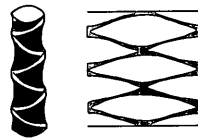
楕円文 B



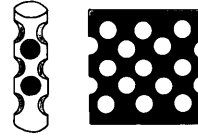
楕円文 C



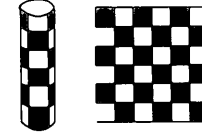
楕円文 D



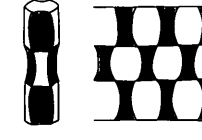
楕円文 E



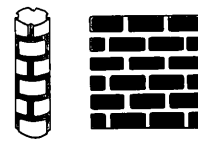
楕円文 F



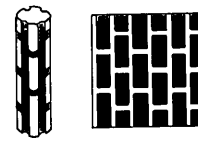
市松文 A



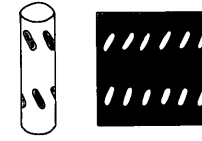
市松文 B



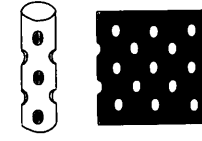
市松文 C



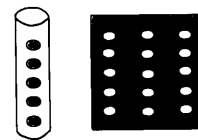
市松文 D



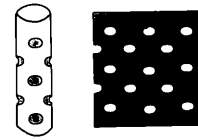
小楕円文 A



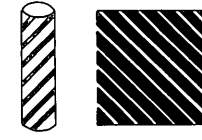
小楕円文 B



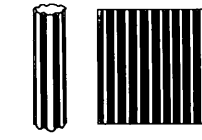
小楕円文 C



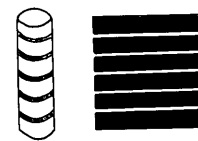
小楕円文 D



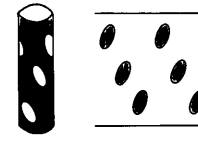
棒状文 A



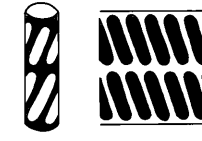
棒状文 B



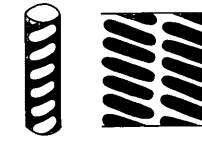
棒状文 C



ネガティブ文 A

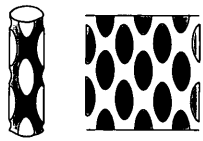


ネガティブ文 B

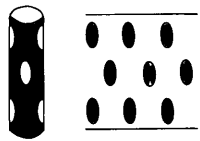


ネガティブ文 C

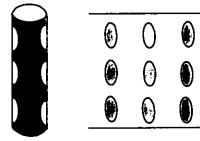
挿図 1 第Ⅱ群第1類土器の分類 (1)



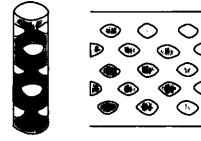
ネガティブ文D



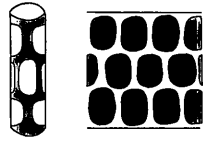
ネガティブ文E



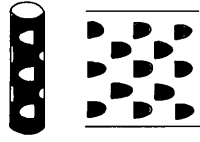
ネガティブ文F



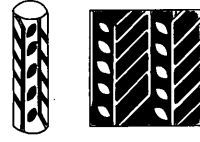
ネガティブ文G



ネガティブ文H

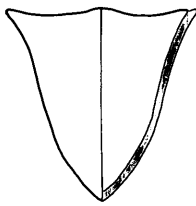


ネガティブ文I

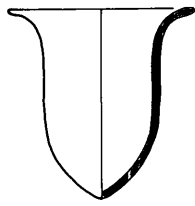


複合文

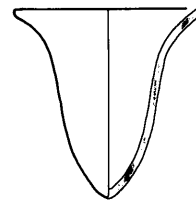
器形



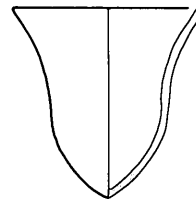
A類



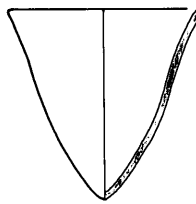
B類



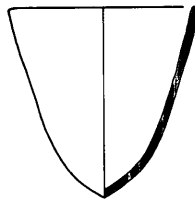
C類



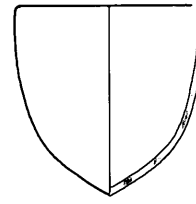
D類



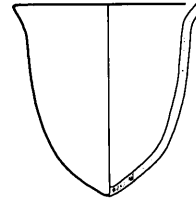
E類



F類



G類



H類

口唇部形状



a種



b種



c種



d種

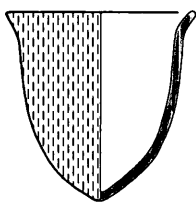


e種

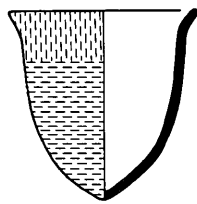


2種

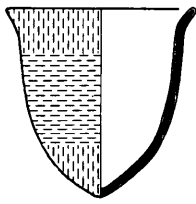
文様構成



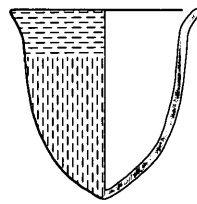
I型



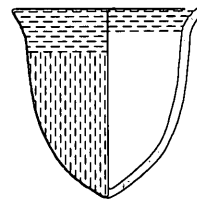
II a型



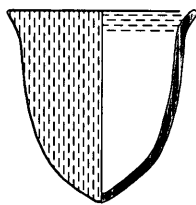
II b型



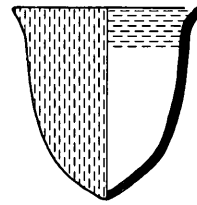
III型



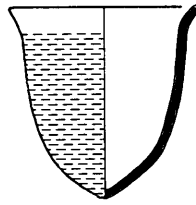
IV型



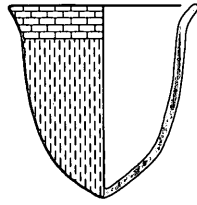
V a型



V b型



VI型



VII型

挿図2 第II群第1類土器の分類(2)

③口唇部の形状（挿図2）

- a種 端面が平坦なもの
- b種 平らだがやや丸みを帯びるもの
- c種 丸みを帯びるもの
- d種 尖るもの
- e種 外縁が削がれた状態のもの

また、それぞれについて、外縁が通常のもの（1種）と、肥厚するもの（2種）がある。例えばa 1種、c 2種のように表示する。

④口唇部の施文

刻みおよび原体による回転施文がある。刻みは、その施文方向を正面ないし上方からみたときの方向で表示する。また、原体の回転方向は、口縁部に沿うものを横位、これに直交する方向のものを縦位とする。

⑤施文方向・施文方法・文様構成（挿図2）

施文方向は、原体が回転する方向。原体が口縁部と直交する方向に置かれるものを横位、平行する方向のものを縦位、斜交するものを斜位と表記する。施文方法の呼称はあまり用いられないが、密接施文・帯状施文の別がある。文様構成は、施文方向と施文方法との総体である。以下の各型に分類する。ただし、VII型は、異種原体が併用される点のみ取り上げており、こうした類型設定に沿わないもので、本来I～VI型の中に含まれるべきものである。なお、明確に斜位施文を意図したものはないことから、以下では縦位施文の中で理解しておく。

- I型 全面縦位密接施文と考えられるもの。
- II型 口縁部縦位密接・胴部横位密接施文と考えられるもの。底部まで横位密接施文されるII a型と、胴部下半が縦位密接施文されるII b型がある。
- III型 口縁部横位密接・胴部縦位密接施文と考えられるもの。
- IV型 外面口縁部横位密接・胴部縦位密接施文、内面横位帯状施文と考えられるもの。
- V型 外面全面縦位密接施文、内面横位施文と考えられるもの。内面が横位1帯施文のV a型と、2帯（以上）密接施文のV b型がある。
- VI型 口縁部無文帯・胴部横位密接施文と考えられるもの。
- VII型 異種原体が併用されるもの（刺突を含む）。

⑥原体の特徴

文様の凸部・凹部の形態や間隔等も考慮すべきであるが、主に原体の反復が把握されることによって得られる情報－単位数・条数・原体長・原体幅－で表記する。単位数は棒軸に直交する方向に施された彫刻の数（あるいは原体が1周する間に同一軌跡上に現れる文様の数）、条数は、棒軸の長軸方向に施された彫刻の数、原体長は原体の長さで、土器面に回転押捺させた際の軌跡の幅（可児 1969）あるいは帯状文の幅（会田 1971）、原体幅は原体が一回転して同一の圧痕が現れるまでの距離である。

第2節 遺構出土の土器

(1) 竪穴住居址

1) 早期前半

① S B 01 (第1図)

第Ⅰ群第3類土器および第Ⅱ群第1類土器が出土した。

第Ⅰ群第3類土器は表裏縄文土器(第1図1～3)および胎土等が共通する縄文施文の土器がある。第1図1は原体R Lで、外面縦位施文、内面は横位施文される。

第Ⅱ群第1類土器の出土量は他の住居址に比べて少なく、格子目文F 1点(4)、山形文A 1点(5)、楕円文D 1点(6)、市松文C 2点(7～9)、縄文 1点、撚糸文13点(10～17)、無文 2点(18)、不明 2点、その他小破片20片が出土した。部位の内訳は、口縁部 1点、胴部19点、胴下部 2点、底部 1点である。

格子目文Fは、縦位密接施文される胴部破片で、4単位、原体幅は14mmを測る。楕円文Dも、同様に縦位に密接施文される胴部片で、1単位、原体幅は24mmと原体の径が大きい。市松文Cは口縁部(7)・胴部(8)とも縦位密接施文される。7・9は同一個体である。器形F類・口唇部c 1種で端面に右下斜の刻みが施される。

② S B 08 (第1～3図)

第Ⅱ群第1類土器がほとんどで、記述対象の破片は150点、その他小破片は57片を数える。層ごとの出土点数は1層47点、2層54点、床上20点、炉 1点、その他埋土28点で、量の多寡はあるものの、文様の種類の構成は全体の傾向とほぼ一致する。S B 08全体の構成は、格子目文A 31点(第1図19～第2図13)、同B 1点(14)、同F 2点(15)、山形文A 6点(16・17)、同B 3点(18・19)、同D 3点(20)、楕円文A 5点(25)、同D 2点(26・27)、同AないしD 5点(第3図1～3)、市松文B 3点(第2図21・22)、同C 1点(同23)、ネガティブ文D 14点(第3図4～14)、同E 16点(15～20)、その他押型文 20点、縄文 7点(21～24)、撚糸文 2点(25・26)、網目状撚糸文 3点(27)、無文 17点(28)、不明 9点である。部位の内訳は、口縁部12点、口縁部～胴部 1点、胴上部13点、胴部116点、胴下部 6点、底部 1点、不明 3点である。

格子目文Aは、器形C類が 1点、D類が 1点ある。口唇部外縁に刻みが施されるものは 4点あり、器形C類は口唇部c 1種で、右上斜に施文される。縦位に施されるものは 3点で、うち 2点は口唇部c 2種である。縦位密接施文—口縁部 5点・胴上部 3点・胴部 6点、横位密接施文—胴上部 1点・胴部 14点、上横位密接／下縦位密接施文—胴下部 1点で、文様構成Ⅱb型をとると考えられる。原体の特徴として、単位数のわかるものでは、4単位10点、3単位 2点、2単位 2点で、4単位が多い。原体幅は 4単位が 13.5～17.5mm、3単位・2単位が 8.0～10.5mmと原体の径が異なる。第1図19・第2図1は同一個体である。格子目文Bは、横位に密接施文される胴部 1点がある。原体幅 17.0mmを測る。格子目文Fは縦位密接施文されるものと横位密接施文されるものが胴部で各 1点あるが、文様構成は不明である。単位数のわかる 1点は 2単位で、原体幅 9.5mmを測る。

山形文A・B・Dは、全体の文様構成が把握されるほどの遺物はないが、いずれも縦位密接施文される。第2図16は樋沢式的な原体である。

楕円文Aは、器形H類・口唇部e 1種が1点あり、外縁に右下斜の刻みが施される。縦位密接施文－胴部1点、上縦位密接／下横位密接施文－胴部1点、横位密接施文－口縁部1点・胴部1点、上横位密接／下縦位密接施文－胴下部1点で、文様構成Ⅱb型をとるものと、Ⅲ型の可能性を示すものがあると考えられる。原体は、2単位・1単位が各1点あり、原体幅は9.0～10.0mmを測る。楕円文Dも、器形H類・口唇部e 1種が1点あり、やはり外縁に右下斜の刻みが施される。縦位密接施文－口縁部1点、横位密接施文－胴部1点で、文様構成Ⅱ型をとる可能性がある。原体は、1単位が1点あり、原体幅は16.0mmを測る。

市松文Bは、横位に密接施文される胴部破片が3点あるのみで、文様構成は詳らかでない。原体は、2単位が1点で、原体幅は10.5mmを測る。

ネガティブ文Dは、器形C類・D類・H類が各1点ある。口唇部の形態はa 1種が1点、c 1種が2点あり、いずれも刻みが施される。端面に施文される2点は右下斜、他の1点は外縁に右上斜に施文される。縦位密接施文－口縁部3点・胴上部4点・胴部2点、横位密接施文－胴部5点で、文様構成Ⅱ型をとると考えられる。原体は、2単位が6点あり、原体幅は10.0～12.0mmを測る。ネガティブ文Eは、器形C類1点がある。口唇部の形態はe 1種が2点あり、いずれも外縁に刻みが施される。縦・右上斜各1点である。文様構成は、縦位密接施文－口縁部2点・胴上部2点・胴部1点・胴下部2点、横位密接施文－胴部9点で、文様構成Ⅱb型をとると考えられる。原体は、2単位が3点あり、原体幅は10.5～13.0mmを測る。

その他押型文に含めた中に、凸部が細い楕円文が山形文状に連続するものがあり、縦位施文される。

縄文は、横位密接施文される胴部破片が6点あり、原体はRL 5点、LR 1点である。第3図24は他の縄文とはやや異質な感じがある。撚糸文は斜位に施文されるもので、うち1点は1段の撚り紐Lが左巻きされたものである。網目状撚糸文は、口縁部縦位密接施文1点、胴部横位密接施文1点で、文様構成Ⅱ型と考えられる。端面に右下斜の刻みが施される。

この他、埋土中に第Ⅱ群第2類土器（第3図29）が2点ある。山形文Bが上横位／下縦位に帯状施文される。

③S B11（第4図）

第Ⅱ群第1類土器がほとんどで、記述対象の破片は23点、その他小破片は18点を数える。層ごとの出土点数は1層5点、2層54点、床上2点、その他埋土16点である。全体の文様の構成は、格子目文A 1点、同F 1点、山形文A 6点（第4図3～6）、同B 2点（7）、楕円文AないしD 3点、市松文B 5点（1・2）、ネガティブ文F 1点（8）、その他押型文1点、縄文2点、撚糸文1点である。部位の内訳は、口縁部2点、胴上部1点、胴部19点、胴下部1点である。

山形文Aは、縦位密接施文－胴部4点・胴下部1点、横位密接施文－胴部1点で、横位密接施文される胴部破片の存在が目立つ。原体幅17.5mmを測るものが1点ある。

市松文Bは、器形C類・口唇部c 1類が1点あり、外縁に縦の刻みが施される。縦位密接施文－口縁

部2点・胴上部1点、横位密接施文－胴部2点、文様構成Ⅱ型をとると考えられる。

ネガティブ文Fは、横位密接施文される胴部破片である。

④SB14（第4～6図）

第Ⅱ群第1類土器が大半を占める。記述対象の破片は254点、その他小破片は159片を数える。層ごとの出土点数は1層30点、2層180点、3層4点、その他埋土40点、量の少ない1・3層は2層の文様のバリエーションに収斂する。SB14全体の構成は、格子目文A19点（第4図9～13）、山形文A13点（14～21）、同B3点（22）、同D4点（23・24）、楕円文A19点（25～30）、同C1点（33）、同D2点（31・32）、同AないしD8点、市松文B14点（第5図1～7）、小楕円文A1点（8）、ネガティブ文C2点、同D35点（9～第6図4）、同E43点（5～16）、同F1点（17）、格子目文A・ネガティブ文Dの併用1点（19）、その他押型文48点（18）、縄文4点（20・21）、撚糸文3点（22・23）、無文5点（24）、不明28点である。部位の内訳は、口縁部23点、胴上部24点、胴部184点、胴下部12点、底部2点、不明9点である。

格子目文Aは、口唇部外縁に縦の刻みが施されるものが1点あり、口唇部a2種である。縦位密接施文－口縁部1点・胴部6点、横位密接施文－胴部4点、文様構成Ⅱ型をとると考えられる。原体の特徴として、単位数のわかるものでは、3単位2点、2単位1点、原体幅は3単位がそれぞれ12.0mm、2単位が15.5mmを測る。

山形文Aは、口唇部施文に刻みと山形文Aとが各1点ある。刻みは、c1種の口唇部の外縁に右下斜に施されるもので、山形文Aが施文される第4図15は、横位に施文される。縦位密接施文－口縁部1点・胴上部1点・胴部3点、横位密接施文－胴上部2点、文様構成Ⅱ型をとると考えられる。この他に立野式に特徴的といわれる原体で、口縁部横位帯状、胴部縦位帯状かと思われる破片各1点がある。胎土も第Ⅱ群第1類土器と同じであることから、この範疇に含めておく。原体の特徴として、原体長のわかるものが2点あり、27.0mmと19.5mmを測り、後者は3条が彫刻されている。原体幅は15.0～17.5mmと径の大きめの原体である。山形文Bは、縦位密接施文－胴部2点、横位施文－胴部1点、文様構成は判然としない。原体幅17.5mmを測る。山形文D胴部3片は縦位密接施文される。

楕円文Aは、器形C類2点、G類1点がある。C類は、a2種の端面に口縁に平行して刻みが施されるものと、c1種の外縁に縦の刻みが施されるものがある。また、G類は口唇部施文はない。縦位密接施文－口縁部3点・胴上部2点・胴部2点、横位密接施文－口縁部1点・胴部10点、上横位密接／下縦位密接施文－胴下部1点、文様構成Ⅱb型をとるものと、Ⅲ型の可能性を示すものがあると考えられる。原体は2単位が8点あり、原体幅は7.5～14.0mmを測る。楕円文Cは横位施文で、原体は3単位、原体幅16.0mmを測る。楕円文Dは、器形H類が1点あり、c1種の口唇部の外縁に右上斜の刻みが施される。縦位密接施文－口縁部1点、横位密接施文－胴部1点、胴部破片は縦に部分的に磨り消しにより無文部が作られる。原体は2単位が1点、原体幅は13.0mmである。

市松文Bは、器形B類1点、C類1点、C類は口唇部c1種で端面に縦位の刻みが施される。縦位密接施文－口縁部3点・胴上部2点・胴部2点、横位密接施文－胴上部1点・胴部6点、上横位密接／下縦位密接施文－胴下部1点、文様構成Ⅱb型をとるものと考えられる。原体の特徴は3単位1点、

2単位6点で、原体幅は8.5～12.0mmを測る。

小楕円文Aは、横位密接施文の胴部破片である。

ネガティブ文C・Fは横位密接施文の胴部破片である。ネガティブ文Dは、縦位密接施文－胴上部7点・胴部2点・胴下部2点、横位密接施文－胴部20点、上横位密接／下縦位密接施文－胴部1点・胴下部1点で、推定される文様構成はⅡb型である。原体は、2単位が20点あり、原体幅は8.5～15.5mmを測る。ネガティブ文Eは、器形不明であり、口唇部の形態はe1種とc2種が各1点あり、いずれも外縁に刻みが施される。刻みの方向は、前者が右上斜、後者が右下斜である。文様構成は、縦位密接施文－口縁部1点・胴上部5点・胴部5点、上縦位密接／下横位密接施文－口縁部1点、上横位密接／下縦位密接施文－胴下部3点、上横位密接／下右下斜密接施文－胴部1点で、大部分が文様構成Ⅱb型をとるが、胴部下半が斜位施文のものがわずかにある。原体は、3単位が1点、2単位が16点あり、原体幅は3単位が17.0mm、2単位が8.5～12.5mmを測る。

格子目文A・ネガティブ文Dが併用される第6図19は、横位密接施文されているが、全体の文様構成は不明である。

その他押型文は器形や口唇部の形状が不明なものが多々あり、器形A類・C類が各1点あり、口唇部a1種2点、c1種3点、e1種1点、e2種1点がある。口唇部の刻みは12点中11点に施され、外縁9点、端面2点、刻みの方向は縦位3点、右下斜3点、右上斜5点である。

縄文は、縦位密接施文－胴上部1点・胴部1点、横位密接施文－胴部1点、原体はRL1点、LR2点である。撚糸文は縦位密接施文－胴部2点、右下斜密接施文－胴部1点で、1段の撚り紐Lが密に左巻きされたものが1点、撚り紐Rが密に右巻きされたもの2点である。

この他、2層より、山形文Dが磨り消されて無文部が作出され、縦位の帯状構成をとる第Ⅱ群第2類土器1点が出土している。

⑤SB18（第6～9図）

第Ⅱ群第1類土器が大半で、記述対象の破片は311点、その他小破片は93片を数える。層ごとの出土点数は1層46点、2層121点、3層34点、その他埋土110点で、量の少ない1・3層は2層の文様のバリエーションに収斂する。しかしながら、2層における各文様の比率は、全体の量的関係を反映してはいない。SB18全体の構成は、格子目文A20点（第6図25～第7図2）、同B1点（3）、同F2点（5）、山形文A29点（6～11）、同B14点（12～18）、同D6点（19～22）、楕円文A5点（23～25）、同B8点（26～第8図7）、同D3点、同E8点、同AないしD11点（8～13）、同BないしE8点、市松文B1点（14）、小楕円文B1点、同C1点（15）、同D1点（16）、棒状文A12点（17～22）、同B1点（23）、ネガティブ文A2点（24）、B1点（第7図4）、同D27点（第8図25～第9図4）、同E25点（5～11）、同G1点、同H1点（12）、同DないしG1点（13）、楕円文Dと同Eの併用1点、その他押型文55点（14）、縄文9点（15～17）、撚糸文11点（18～20）、網目状撚糸文5点（21～23）、無文18点（24・25）、不明24点である。部位の内訳は、口縁部28点、胴上部25点、胴部248点、胴下部6点、不明4点である。

格子目文Aは、器形C類・口唇部b1種が1点あり、外縁に縦の刻みが施される。縦位密接施文－胴

上部1点・胴部2点、横位密接施文－胴部2点、上横位密接／下右下斜密接施文－胴下部1点、文様構成Ⅱb型をとると考えられる。格子目文Fは、器形C類・口唇部c1種で、外縁に右下斜の刻みが施される。上横位密接／下右下斜密接施文－口縁部1点、文様構成Ⅲ型をとる。原体は、2単位である。

山形文Aは、口縁部4点のうち器形の判ずるものとしてC類・F類各1点、口唇部はc1種が4点ある。刻みは、そのうちの1点に施され、外縁に右下斜に施される。縦位密接施文－口縁部4点・胴部22点、文様構成はⅠ型をとる。原体の特徴として、原体幅は14.5～19.5mmと径の大きめの原体である。第7図8は波頂部の一部が繋がって、綾杉状に見える。山形文Bは、器形C類2点、D類1点、C類1点の口唇部の形状はa1種、D類はb1種である。口唇部施文は刻みが施されるもの2点があり、いずれも端面に右下斜に施される。縦位密接施文－口縁部2点、胴部11点、やはり文様構成Ⅰ型と考えられる。原体幅15.0～20.0mmを測る。第7図13は口縁部に横位施文がわずかにあるかもしれない。山形文Dは器形A類1点、G類1点、後者は口唇部e1種である。口唇部施文はない。器形A類（第7図19）は、胴部の湾曲から波状口縁としたが、文様からすれば平縁の可能性もある。あまり波状口縁は立野式土器には例がないことから、あるいは小形土器かもしれない。縦位密接施文－口縁部1点、胴部4点、山形文A・Bと同様、文様構成Ⅰ型であろう。原体幅16.5mmを測る。

楕円文Aには、器形C類・口唇部a1種1点と、器形不明・口唇部c1種がある。前者は端面、後者は外縁にそれぞれ縦位の刻みが施される。縦位密接施文－口縁部2点・胴部1点、横位密接施文－胴部2点、文様構成Ⅱ型をとる可能性があると考えられる。原体の単位数がわかるものは2単位が1点あり、原体幅は11.5mmを測る。楕円文Bは器形D類が1点、口唇部c1種である。口唇部に楕円文Bが口縁に平行して施文される。施文方向・施文方法別にみると、縦位密接施文－口縁部1点・胴上部2点・胴部1点、上縦位密接／下横位密接施文－胴部1点、横位密接施文－胴部2点、文様構成Ⅱ型をとる。原体は3単位1点、2単位3点、3単位は原体幅13.0mm、2単位は同9.5～10.0mmを測る。楕円文Dは、縦位密接施文－胴部1点・胴下部1点、横位密接施文－胴部1点、文様構成はⅠ・Ⅱb型が考えられる。原体は2単位、原体幅は11.0、17.5mmである。楕円文Eは、縦位密接施文－胴部3点、上縦位密接／下横位密接施文－胴上部1点・胴部1点、横位密接施文－胴上部1点・胴部2点、縦位および横位密接施文－胴部1点、文様構成Ⅱ型と考えられる。原体は2単位、原体幅は9.0～10.5mmを測る。このうち、第8図7は同種の原体幅が異なる二つの原体を併用している。

市松文Bは、横位密接施文される胴部破片で、原体は2単位で原体幅9.0mmを測る。

小楕円文B・Cは、いずれも横位密接施文の胴部破片である。

棒状文Aは、器形C類2点、口唇部c1種である。口唇部施文はない。縦位密接施文－口縁部2点・胴上部1点・胴部8点、横位密接施文－胴部2点、文様構成Ⅱ型をとると考えられる。原体は4単位が3点、原体幅は9.5～12.5mmである。

ネガティブ文Aは横位密接施文の胴部破片、ネガティブ文Bは縦位密接施文の胴上部破片で、いずれも単位数は2単位である。ネガティブ文Dは、器形C類・口唇部a1種が1点あり、端面に右下斜の刻みが施される。縦位密接施文－口縁部1点・胴上部1点・胴部8点、上縦位密接／下横位密接施文－胴部1点、横位密接施文－胴部10点、上横位密接／下縦位密接施文－胴部1点、斜位密接施文－胴部1点、文様構成Ⅱb型と考えられる。原体は、3単位1点が原体幅15.0mmであるのに対し、2単位が5点は原体幅9.5～13.5mmである。ネガティブ文Eは、器形C類が2点ある。文様構成は、縦位密接施文－胴上

部3点・胴部2点、上縦位密接／下横位密接施文－胴部1点、横位密接施文－胴部12点、上横位密接／下縦位密接施文－胴下部1点、大部分が文様構成Ⅱb型をとると考えられる。原体は2単位が4点あり、原体幅8.5～13.0mmを測る。第9図7は2個一対にみえるが、原体の彫り方がわかる例である。ネガティブ文Gは器形C類・口唇部c1種で、端面に右下斜の刻みが施される。ネガティブ文Hは器形不明、やはり口唇部c1種で、外縁に右上斜の刻みが施される。両者とも、縦位に密接施文される。

楕円文Dと楕円文Eが併用される1点は、上部を楕円文Dで横位密接、下部を楕円文Eで縦位施文されている。楕円文Dは2単位、原体幅13.0mmである。

その他押型文は、器形D類・口唇部b2種1点、この他器形C類1点、不明2点がある。D類1点は端面に文様があるが、不鮮明で判然としない。器形不明の2点は端面に刻みが施され、右下斜・縦位各1点である。第9図14は、山形文とも、あるいは棒状文Aに楕円文が併用されたとも考えられ、貼付がなされる。

縄文は、器形C類が1点あり、縦位密接施文－胴部1点、横位密接施文－胴上部1点・胴部2点・胴下部1点である。原体RL・LRとも各2点である。原体幅は12.5mmを測る。撚糸文は縦位密接施文－胴部4点、1段の撚り紐Rが密に右巻きされたものが1点、撚り紐Rが疎に左巻きされたものが1点である。網目状撚糸文は、器形C類が1点あり、縦位密接施文－口縁部1点・胴部2点である。原体は、1段の撚り紐Rが右巻きおよび左巻きされたものが3点、撚り紐Lが右巻きおよび左巻きされたものが1点である。無文は器形G類1点である。

不明は器形C類が1点、口唇部の施文は外縁に刻みが施されるもの2点、施文のないもの2点がある。刻みの方向は縦と右上斜各1点である。

第Ⅱ群第2類土器（第9図26・27）は埋土中からの出土で、同一個体である。外面は横位1帯以下縦位の带状施文で、口唇部に横位、内面は2帯横位施文、無文帯を挟んで以下横位施文される。外面の施文は、縦位施文が先で横位が後である。

⑥SB19（第10～13図）

記述対象の破片は292点、その他小破片は96点を数える。層ごとの出土点数は1層30点、2層82点、3層100点、炉址6点、その他埋土74点、格子目文および文様の併用がほぼ3層に限られる以外は、各層の文様のバラエティー・比率は類似する。SB19全体の構成は、格子目文A14点（第10図1～6）、同D2点（7）、同F1点（8）、山形文A23点（9～20）、同B5点（21・22）、同D6点（23～25）、楕円文A7点（第11図1～5）、同B5点（6・7）、同D4点（8～10）、同F1点（11）、同AないしD11点、同BないしE2点、市松文B11点（12～16）、同C1点（17）、小楕円文C1点（18）、ネガティブ文B1点、同C1点、同D43点（19～第12図5）、同E25点（6～16）、同F2点（17・18）、同DないしG1点、山形文Aと楕円文Aの併用1点（21）、山形文Aと棒状文Cの併用1点（22）、その他押型文59点（20）、縄文20点（第13図1～8）、撚糸文5点（9・10）、網目状撚糸文1点、無文7点（11～13）、不明31点である。部位の内訳は、口縁部20点、口縁部～胴部1点、胴上部26点、胴部235点、胴部～底部1点、胴下部6点、底部2点、不明1点である。

格子目文Aは、器形D類が2点あり、口唇部c1種で外縁に右上斜の刻みが施される。縦位密接施文－

胴部1点、横位密接施文－胴部2点、文様構成Ⅱ型ないしⅥ型をとると考えられる。第10図4は格子目が潰れている。格子目文Dは、胴部破片で文様構成は不明である。格子目文Fは、縦位施文－胴部1点である。

山形文Aは、口縁部4点のうち器形の判ずるものとしてC類3点・H類1点がある。C類の口唇部形状は、c1種が2点、d1種1点である。H類は、口唇部a1種で、内面に横位施文される文様構成Ⅴ型をとる。刻みは、器形C類・口唇部c1種のうち1点に施され、外縁に縦位に施される。縦位密接施文－口縁部3点・口縁部～胴部1点・胴上部1点・胴部10点、文様構成は前述のⅤ型1点を除き、Ⅰ型をとる。原体の特徴として、原体幅は12.0～16.5mmと径の大きめの原体である。山形文Bはいずれも胴部破片で、器形や口唇部の形状は不明である。縦位密接施文－胴部3点、やはり文様構成Ⅰ型ないしⅤ型と考えられる。山形文Dは器形D類をとる胴上部1点があり、横位施文されるⅢ型ないしⅣ型と考えられる。他は、縦位密接施文される胴部4点、山形文A・Bと同様、文様構成Ⅰ型ないしⅤ型であろう。

楕円文Aには、器形C類の胴上部破片がある。縦位密接施文－胴上部1点・胴部3点、上縦位密接／下横位密接施文－胴部1点、横位密接施文－胴部2点、文様構成Ⅱ型他をとる可能性があると考えられる。原体の単位数がわかるものは2単位が3点あり、原体幅は10.0～16.0mmを測る。楕円文Bは器形D類の胴上部が1点ある。施文方向・施文方法別にみると、縦位密接施文－胴上部2点・胴部1点、横位密接施文－胴部2点で文様構成Ⅱ型をとる。原体は2単位4点、原体幅は9.0～14.0mmを測る。楕円文Dは、縦位密接施文－胴上部1点・胴部1点、横位密接施文－胴部1点、文様構成はⅠ・Ⅱ型と考えられる。原体は1単位、原体幅は15.5mmである。

市松文Bは、器形C類1点、D類2点、口唇部c1種が各種1点ある。口唇部の施文はC種が外縁右下斜、D種1点が外縁右上斜に施される。縦位密接施文－口縁部2点・胴上部1点、横位密接施文－胴部2点、文様構成Ⅱ型が考えられる。原体は3単位1点、2単位4点、前者は原体幅13.5mm、後者は原体幅11.0～13.5mmを測る。市松文Cは上縦位密接／下横位密接施文される胴部で、文様構成Ⅱ型と考えられる。下位に山形文が併用されているかもしれない。

小楕円文Cは、縦位密接施文の胴部破片で、1単位、原体幅13.0mmである。

ネガティブ文Bは縦位密接施文される胴部破片で、単位数は3単位である。ネガティブ文Cは横位施文の胴部破片。ネガティブ文Dは、器形C類2点、D類2点、C類は口唇部c1種1点、e1種1点である。外縁に縦位・右下斜・右上斜の刻みが施されるものが各1点あり、いずれも内面施文はない。縦位密接施文－口縁部2点・胴上部5点・胴部3点、上縦位密接／下横位密接施文－口縁部1点・胴上部1点、横位密接施文－胴部17点、文様構成Ⅱ型をとると考えられる。原体は、2単位が11点、原体幅10.0～13.5mmである。第11図20は胴部が先に施文され、次に口縁部に施文される。ネガティブ文Eは、器形C類が3点、D類2点、C類の口唇部形状はc1種1点、e1種2点がある。c1種は外縁に右下斜、e1種は縦位の刻みが施される。いずれも内面施文はない。文様構成は、縦位密接施文－口縁部2点・胴上部4点、上縦位密接／下横位密接施文－胴部1点、横位密接施文－胴部10点、文様構成Ⅱ型をとると考えられる。原体は2単位が10点あり、原体幅8.0～11.5mmと原体の径が小さい。ネガティブ文Fは縦位密接施文される胴部が1点ある。

山形文Aと楕円文Aの併用例は、上部を山形文Aで縦位密接、下部を楕円文Aで縦位密接施文されて

いる。山形文Aは原体幅15.0mm、楕円文Aは2単位・原体幅10.0mmである。山形文Aと棒状文Cの併用例は、上部が棒状文Cで横位密接、下部が山形文Aで縦位密接施文される。胎土が若干他と異なる。

その他押型文には、器形不明・口唇部a 1種で端面に縦位の刻みが施されるものが1点ある。第12図20は、あるいは市松文が施文されているかもしれない。

縄文は、器形C類1点、D類1点で、口唇部はC類がa 1種、D類がc 1種である。他にc 1種が1点ある。口縁部4点のうち、器形不明の1点に外縁に縦位の刻みが施される。内面施文されるものはない。密接施文されるものが多く、原体R Lで横位密接—胴部1点、同縦位密接—胴部～底部1点がある。第13図6・7の色調は赤味が強い。撚糸文の口縁部1点は、器形E類・口唇部c 1種で、外縁に右下斜の刻みが施される。縦位密接施文され、原体は撚り紐Rが密に右巻きされる。無文は器形E類・口唇部a 1種が1点である。口唇部および内面も施文がない。

不明は器形G類・口唇部e 1種が1点あり、口唇部に右下斜の刻みが施される。

⑦S B 20 (第13～20図)

記述対象の破片は657点、その他小破片は356片を数える。層ごとの出土点数は1層137点、2層219点、その他埋土一括301点である。楕円文F・棒状文C・ネガティブ文Iは1層に、小楕円文B・棒状文A・同B・ネガティブ文Cは2層に、山形文C・楕円文B・市松文B・同C・同Dは2層およびその他埋土一括に、また、格子目文E・同F・楕円文D・小楕円文C・ネガティブ文Bはその他埋土一括に限られる。さらに、各文様の量的な関係は、格子目文・山形文・楕円文といった主要な押型文で1層・2層の出土量が拮抗している。現状では、層ごとでなく、全体をまとめて記述しておく。S B 20全体の構成は、格子目文A 30点 (第13図14～20・第17図28・第18図4)、同E 1点 (第13図21)、同F 1点 (第14図1)、山形文A 33点 (2～14)、同B 31点 (15～22)、同C 3点 (24～26)、同D 12点 (27～33)、山形文CないしD 3点 (34)、楕円文A 55点 (第15図1～第16図11)、同B 5点 (12～14)、同D 1点 (15)、同F 4点 (16～19)、同AないしD 44点 (20～26)、同BないしE 3点 (27)、市松文B 7点 (第17図1～3)、同C 2点 (4)、同D 2点 (5)、小楕円文B 1点 (6)、同C 3点 (7)、棒状文A 1点 (8)、棒状文B 1点 (9)、棒状文C 1点 (10)、ネガティブ文B 1点、同C 1点 (11)、同D 58点 (13～27・第18図1～3・5～8)、同E 51点 (9～28)、同I 1点 (第19図1)、その他押型文144点、縄文20点 (2～10)、撚糸文36点 (11～19)、網目状撚糸文23点 (20～26)、無文18点 (27～第20図4)、不明59点である。部位の内訳は、口縁部45点、口縁部～胴部1点、口縁部～胴上部1点、胴上部51点、胴部539点、胴下部14点、底部4点、不明3点である。

格子目文Aは、器形C類が1点ある。外面の施文は、縦位密接施文—胴上部1点・胴部1点、横位密接施文—胴部2点がある。前者の原体は単位数2、原体幅12.5mm・13.5mm、後者は3単位で原体幅14.5mm・22.5mmである。格子目文Eは縦位密接施文で、原体は2単位・原体幅17.0mm、原体長は31.0mm以上である。異質な土器である。格子目文Fは、縦位施文される。

山形文Aは、口縁部1点、胴上部3点、胴部29点で、口縁部は器形C類・口唇部a 2種である。端面に横位に刻みが施される。胴上部はいずれも器形D類である。外面の施文は、縦位密接施文—胴上部2点・胴部11点、縦位施文—口縁部1点・胴上部1点・胴部9点、それに横位密接施文—胴部1点がある。

文様構成は、主にⅠ型と考えられる。原体幅は11.5～19.5mmを測り、平均15.3mmである。第14図4・5・12は器壁が薄く、胎土が細かい。同一個体の可能性もある。山形文Bは、口縁部2点、胴上部2点、胴部27点である。口縁部はいずれも端面に山形文Bが横位に施文され、うち1点は器形F類、口唇部b1種である。外面横位施文され、内面施文はない。胴部は縦位密接施文10点、上横位密接／下横位密接施文1点で、文様構成はⅠ型およびⅢ型と考えられる。原体の特徴がわかるものは4点で、いずれも2単位、原体幅は11.5mm・16.0mm・18.0mm・20.5mmを測る。第14図15～17・23は文様。胎土がやや異質な感じを受ける。山形文Cは縦位密接施文－胴部1点、横位密接施文－胴部2点がある。山形文Dは口縁部2点、胴上部1点、胴部9点で、いずれも縦位密接施文される。口縁部は、器形E類・口唇部b1種と、器形G類・口唇部a2種があり、それぞれ端面に山形文Dが横位施文される。内面施文はない。原体幅は、13.5mm・17.5mm・18.5mm・19.0mmを測る。

楕円文Aには、口縁部7点、胴上部2点、胴部47点、胴下部2点がある。口縁部は、口唇部に刻みが施されるもの3点と、施文のないもの4点がある。刻みが施されるものは、器形不明・口唇部c2種、器形D類・口唇部e2種、器形D類・口唇部c1種の3種類で、前二者は外縁に右上斜、後者は端面に右下斜の刻みである。口唇部施文のないものは、器形C類・口唇部a1種1点、器形C類・口唇部c1種2点、器形D類・口唇部c1種1点がある。器形C類・口唇部a1種1点（第15図1）は、上横位密接／下縦位密接施文（わずかに斜位であるが）で、口縁部より胴部が後に施文される。胴部の一部にナデ消された箇所がある。他の口縁部破片はいずれも縦位密接施文である。胴上部は器形C類・D類が各1点で、D類のものは横位密接施文される。胴部以下では縦位密接施文－胴部11点・胴下部1点、上縦位密接／下横位密接施文－胴部2点、上横位密接／下縦位密接施文－胴下部1点、横位密接施文－胴部30点があり、文様構成は主にⅡb型をとると考えられる。原体は、2単位37点、3単位1点、原体幅8.5～13.0mm、平均11.1mmを測る。楕円文Bは器形C類の胴上部が1点ある。縦位密接施文－胴上部1点・胴部1点、横位密接施文－胴部1点がある。単位数2が4点で、原体幅は8.0mm・10.5mm・11.0mm・11.0mmを測る。楕円文Dは縦位施文で、単位数1・原体幅16.0mmである。楕円文Fは胴上部2点で、縦位密接施文および上縦位密接／下横位密接施文があり、文様構成Ⅱ型と考えられる。いずれも2単位で、原体幅10.0mm・11.0mmと径の小さい棒軸が用いられている。楕円文AないしDの口縁部破片は1点で、器形D類・口唇部c1種、外縁に右上斜の刻みが施される。第16図23は、胎土に繊維が混入し、砂粒の入り方が若干異なる。色調は赤味が強い。

市松文Bは、口縁部2点、胴上部2点、胴部3点がある。口縁部のうち1点は、器形不明・口唇部e1種で、外縁に縦位の刻みが施される。もう1点も、外縁に右下斜の刻みが施される。どちらも内面は施文されない。胴上部2点は器形D類である。外面の施文は、縦位密接施文－口縁部1点・胴上部1点・胴部1点、縦位施文－口縁部1点・胴上部1点、横位密接施文－胴部1点、横位施文－胴部1点で、文様構成Ⅱ型が考えられる。原体は2単位・原体幅12.5mmが1点ある。市松文Cは胴部破片で、縦位密接施文される。市松文Dは、口縁部・胴部各1点がある。口縁部破片は縦位施文で、口唇部および内面の施文はない。胴部は横位密接施文される。文様構成Ⅱ型と考えられる。

小楕円文Bは、横位密接施文の胴部破片で、2単位、原体幅13.0mmである。小楕円文Cは胴上部は縦位施文、胴部2点のうち1点は上横位密接／下縦位密接施文で、3単位・原体幅16.5mmを測る。

棒状文Aは縦位にほぼ密接施文される胴上部破片である。棒状文Cも縦位密接施文される。

ネガティブ文Dは、口縁部7点、胴上部7点、胴部42点、胴下部1点、底部1点がある。口縁部は、器形B類・口唇部a1種が1点あり、端面に右上斜の刻みが施される。器形C類・口唇部c1種が2点で、口唇部施文なしと外縁に縦位の刻みが施されるものがそれぞれ1点ある。器形D類・口唇部c1種は3点で、口唇部施文なし・端面に右下斜の刻み・外縁に縦位の刻みが各1点ある。器形D類・口唇部e1種が1点で、外縁に縦位の刻みが施される。いずれも、内面施文はない。胴上部で器形が判るものは、C類1点、D類2点である。外面の施文についてみると、縦位密接施文－口縁部4点・胴上部2点・胴部2点・底部1点、上縦位密接／下横位密接施文－胴下部1点、上横位密接／下縦位密接施文－胴部2点、横位密接施文－口縁部1点・胴部22点あり、文様構成はI型・IIa型・IIb型・III型等が考えられる。原体は2単位のもの15点あり、原体幅9.5～13.5mm、平均11.1mmと径の小さい棒軸が用いられている。このうち原体長のわかる1点は、36.0mmを測る。ネガティブ文Eは、口縁部5点、口縁部～胴部1点、胴上部7点、胴部33点、胴下部5点である。口縁部は器形C類・口唇部e1種が3点で、外縁に縦位の刻みが2点、端面に右上斜の刻みが1点ある。器形D類・口唇部e1種が1点、外縁に縦位の刻みが施される。また、器形E類・口唇部e1種が1点、端面に縦位の刻みが施される。いずれも外面縦位（密接）施文で、内面施文はない。口縁部～胴部の資料は口唇部・内面ともに施文はない。上横位密接／下縦位密接施文される。胴上部で器形の判るものは、C類・D類各2点ある。口縁部以外の資料で外面施文についてみると、縦位密接施文－胴上部2点・胴部3点・胴下部1点、上縦位密接／下横位密接施文－胴上部1点・胴部1点、上横位密接／下縦位密接施文－胴下部3点、横位密接施文－胴部10点・胴下部1点で、文様構成はネガティブ文Dと同様、I型・IIa型・IIb型・III型等が考えられる。原体は単位数2が10点で、原体幅8.5～12.5mm、平均10.0mmである。ネガティブ文Iは、横位密接施文される。

その他押型文には、口縁部が9点ある。器形D類で、口唇部a1種、a2種、e1種が各1点ある。上記順に端面に横位、端面に縦位、外縁に縦位の刻みが施される。この他器形・口唇部の形態不明のもので、端面に右下斜の刻み2点、端面に横位の刻み1点、外縁に縦位の刻み1点、外縁に右下斜の刻み1点の口唇部施文がある。さらに口唇部施文がなされないものが1点あるが、この内面には押型文が施文されているようである。

縄文は、器形D類・口唇部c1種と、器形不明・口唇部c1種が各1点で、口唇部・内面とも施文はない。外面の施文は、縦位密接施文－胴部1点・胴下部1点、横位密接施文－胴部1点、縦横位施文－胴上部1点・胴部1点である。原体はRLが4点に対して、LR1点と少ない。第19図4は粘土の剥落した下に文様がある。撚糸文の口縁部2点のうち1点は、器形D類・口唇部b1種で、端面に横位に撚糸文が施文される。外面は縦位密接施文で、内面施文はない。他の1点は、外縁に右下斜の刻みが施され、外面縦位施文される。胴上部は器形D種が1点ある。口縁部以外の外面施文は、縦位密接施文－胴上部2点・胴部1点、この他胴部の横位施文が1点ある。原体は、撚り紐Rの右巻き1点、撚り紐Rの左巻き3点、撚り紐Lの左巻き2点、撚り紐Lの右巻き1点である。網目状撚糸文では、器形D類・F類が各1点あり、それぞれ口唇部c1種である。後者は、口唇部・内面とも施文されない。外面の施文は、縦位密接施文－口縁部2点・胴上部3点、横位密接施文－胴部1点である。原体は、単軸絡条体第5類（山内 1979）で、撚り紐Rの右巻きと左巻きが9点で、撚り紐Lの右巻きと左巻き1点を凌ぐ。また、2単位が2点ある。

不明は器形C類・口唇部c 1種の口縁部破片1点、器形C類の胴上部破片1点がある。前者の口唇部施文についてははっきりしない。

この他、埋土中から格子目文A（第20図5）・山形文B・縄文が縦位に帯状施文される第Ⅱ群第2類土器各1片の出土をみる。

⑧SB21（第20～23図）

出土土器の主体は第Ⅱ群第1類土器で、記述対象の破片は287点、その他小破片は159片を数える。出土点数は1層点取り190点、埋土一括97点で、各層の文様のバラエティー・比率は点取り・埋土一括とも類似する。SB19全体の構成は、格子目文A10点（第20図6～11）、同D1点、山形文A27点（12～18）、同B13点（19～23）、同D6点（24・25）、楕円文A4点（26～28）、同AないしD12点（29～31）、市松文B4点（32～34）、同C43点（第21図1～8）、同D1点、棒状文A2点（9・10）、ネガティブ文B3点（11～13）、同C4点（14）、同D12点（15～19）、同E5点（20）、同H2点（21・22）、同DないしG1点、山形文Aと市松文Cの併用2点（第22図1・2）、その他押型文59点、縄文8点（第21図23～27）、撚糸文18点（28・29・第23図1～5）、無文6点（6～8）、不明44点である。部位の内訳は、口縁部11点、口縁部～胴部2点、胴上部22点、胴部242点、胴部～底部1点、胴下部4点、底部1点、不明4点である。

格子目文Aは、器形D類の胴上部が2点ある。縦位密接施文－胴上部1点で、4単位、原体幅16.5mmを測る。

山形文Aは、器形C類1点・H類1点で、器形不明のものに口唇部c 1種1点がある。口唇部施文のないものが1点ある。縦位密接施文－胴上部5点・胴部9点で、口縁部破片も縦位施文される。ただ、横位施文される胴部破片も4点あることから、文様構成はⅠ型が多いものの、他にⅡ型等の存在も考えられる。第20図14は波頂部が丸みを帯びており、特異な彫刻である。山形文Bは口唇部a 1種で、いずれも横位に山形文Bが施文される。1点は器形E類・内面施文は不明、もう1点は器形不明で内面施文はない。縦位密接施文－口縁部1点・胴上部1点・胴部4点で、文様構成はⅠ型をとると考えられる。山形文Dは器形D類をとる胴上部1点がある。いずれも縦位施文されるが、縦位密接施文－胴部3点で、文様構成はⅠ型等が考えられる。

楕円文Aには、横位密接施文－胴上部1点・胴部2点・胴下部1点で、文様構成Ⅱ型の可能性がある。原体の単位数がわかるものは2単位が2点あり、原体幅はいずれも12.0mmを測る。

市松文Bは、縦位密接施文－胴上部1点、横位密接施文－胴部3点で、文様構成はⅡ型と考えられる。原体は2単位が1点あり、原体幅14.0mmを測る。市松文Cはいずれも縦位施文で、縦位密接施文される胴部が14点ある。文様構成はⅠ型と考えられるが、山形文Aと市松文Cの併用の一部である可能性もある。第21図3は胎土が愛知・岐阜方面のものと類似しており、搬入品である。また、7も白色味が強く、搬入品の可能性がある。

棒状文Aは、密接施文される胴部破片がある。

ネガティブ文Bは縦位施文が2点、横位施文が1点ある。ネガティブ文Cの口縁部1点は、縦位施文され、口唇部a 1種の端面に右下斜の刻みが施される。胴上部1点は縦位密接施文、胴部1点は横位密

接施文されることから、文様構成Ⅱ型が考えられる。ネガティブ文Dは、器形D類が2点あり、口唇部a 1種1点は口唇部施文・内面施文ともない。器形不明の口縁部1点は、端面に右下斜の刻みが施されるほか、内面施文はない。口縁部はいずれも縦位施文され、縦位密接施文－胴上部1点、横位密接施文－胴上部1点・胴部4点、文様構成Ⅱ型と考えられる。原体は、2単位が2点、原体幅9.5・15.5mmである。ネガティブ文Eは、縦位密接施文－胴上部1点、横位密接施文－胴部2点、上横位密接／下縦位密接施文－胴部1点、文様構成Ⅱb型をとると考えられる。2単位・原体幅10.0mmが1点ある。ネガティブ文Hの口縁部は、器形D類・口唇部a 1種にネガティブ文Hが縦位施文される。外面は縦位密接施文、内面施文はない。原体は2単位で、原体幅24.0mmを測る。ほかに3単位の胴部破片が1点あり、横位密接施文される。

山形文Aと市松文Cの併用例（第22図1）は、器形H類・口唇部a 1種に山形文Aが横位施文される。口唇部は面取りされており、大川式的である。外面は、口縁部に1帯市松文C、以下1帯山形文Aを横位密接し、その下位を市松文Cで縦位密接施文している。内面施文はない。山形文Aは原体幅19.5mm、市松文Cは2単位・原体幅21.0mmである。同2は1と同一個体と考えられる胴部から底部にかけての資料で、胴部は山形文A、底部は市松文Cが縦位に密接施文される。

その他押型文には、器形不明・口唇部c 1種が1点あり、施文はない。

縄文は、原体RLで横位密接－胴部1点、LRの横位密接－胴上部1点、同右下斜の密接施文－胴部1点がある。撚糸文は口縁部破片が2点あり、1点は、器形F類・口唇部a 1種で、端面に右下斜の刻みが施される。外面縦位密接施文され、原体は撚り紐Rがやや疎に右巻きされる。内面も同種の原体で右上斜位に施文される。他の1点は、口唇部a 1種の端面に右下斜の刻みが施される。外面はやはり縦位施文され、原体は撚り紐Rが密に右巻きされる。胴部破片も縦位密接施文が多く、原体のわかるものは、撚り紐Rの左巻き4点、撚り紐Rの右巻き1点、撚り紐Lの左巻き1点である。無文土器とした底部（第23図8）は僅かに撚糸文ともみえる部分がある。あるいは底部は無文の文様構成をとるものがあるかもしれない。

不明には口縁部破片が1点あり、器形不明・口唇部a 1種で外縁に右上斜の刻みが施される。

⑨SB24（第23図）

遺物出土は少ないが、第Ⅱ群第1類土器が主体である。記述対象の破片は21点、その他小破片は9片を数える。層ごとの出土点数は1層3点、小柱穴1点、その他埋土14点、非常に遺物出土が少ない。このため全体の文様のバラエティー・比率で代表させる。SB24全体の構成は、格子目文A 1点（第23図9）、同F 1点、山形文A 1点、同B 1点（10）、同D 3点（11）、楕円文A 1点（12）、同D 3点（13）、ネガティブ文B 2点（14～16、14・15は同一個体）、同C 1点（17）、同D 1点（18）、同E 1点、同H 1点（19）、その他押型文1点、縄文1点（20）、撚糸文1点、網目状撚糸文1点である。部位の内訳は、胴上部2点、胴部17点、胴下部2点、底部2点である。

格子目文Aは、横位密接施文される胴部破片で、原体は3単位・原体幅16.5mmを測る。格子目文Fは、縦位密接施文される胴部破片である。

山形文Aは、横位施文される胴部破片で、原体幅14.0mmである。山形文Bは胴下部で、縦位密接施文

される。山形文Dは横位密接施文－胴上部1点・胴部1点、縦位施文－胴部1点で、文様構成Ⅲ型ないしⅣ型と考えられる。他は、縦位密接施文される胴部4点で、文様構成Ⅰ型ないしはⅤ型であろう。胴上部破片は、原体長28mm、原体幅25mmを測る。

楕円文Dは、縦位密接施文－胴部1点・胴下部1点で、文様構成はⅠ型・Ⅲ型・Ⅴ型等の可能性が考えられる。

ネガティブ文B～Dは、縦位密接施文される胴部破片である。このうちネガティブ文Dは、3単位・原体幅15.0mmである。ネガティブ文Eは横位施文の胴部破片。単位数2・原体幅11.0mmを測る。ネガティブ文Hは横位の帯状構成をとる。

縄文は、原体R Lで横位密接施文される。撚糸文・網目状撚糸文は縦位施文される。

⑩ S B 25 (第23～26図)

第Ⅱ群第1類土器の他、若干の第2類土器の出土をみる。

第Ⅱ群第1類土器は、記述対象の破片229点、その他小破片56片を数える。出土点数は1層51点、2層112点、その他埋土66点で、格子目文D・ネガティブ文Hの出土が2層点取りにないのを除けば、2層および全体の文様のバラエティー・比率は同様の傾向を示している。S B 25全体の構成は、格子目文A 12点(第23図21～26)、同C 1点(27)、同D 2点、山形文A 9点(28～第24図2)、同B 2点(3)、同D 7点(4～8)、楕円文A 9点(9～11)、同D 2点(12・13)、同E 2点(14)、同F 1点(15)、同AないしD 14点(16～18)、市松文A 5点(19～23)、同C 2点(24)、小楕円文B 1点(25)、同C 3点(26・27)、棒状文A 1点(28)、同B 2点(29)、ネガティブ文D 42点(30～第25図10)、同E 10点(11～14)、同H 2点(15・16)、その他押型文42点(17)、縄文7点(18～21)、撚糸文13点(22～27)、網目状撚糸文6点(28～31)、無文14点(32・33)、不明18点である。部位の内訳は、口縁部23点、胴上部17点、胴部180点、胴下部9点である。

格子目文Aは、口縁部が1点あり、器形D類・口唇部e 1種で、外縁に格子目文Aが横位に施文される。縦位密接施文－口縁部1点・胴部2点、上縦位密接／下横位密接施文－胴部1点、横位密接施文胴部1点で、文様構成Ⅱ型が考えられる。原体は、4単位・原体幅12.5mm、3単位・原体幅11.0mmのものが各1点ある。格子目文Cの胴上部1点は、器形D類、縦位密接施文され、4単位・原体幅14.0mmの原体が用いられる。格子目文Dの口縁部1点も、器形D類・口唇部a 1種で、端面に右下斜の刻みが施される。外面縦位施文で、内面施文はない。他に縦位密接施文の胴部破片がある。

山形文Aは、いずれも胴部破片で、器形の知れるものはない。縦位密接施文が8点で、うち2点に磨り消しが施される。岡谷市下り林遺跡・塩尻市八窪遺跡等で指摘されている格子目文の磨り消しと同様に考えられるかもしれない。原体幅のわかる2点は、12.5mmと19.0mmである。山形文Bの口縁部1点は、器形D類・口唇部c 1種で、端面に縦位の刻みが施される。外面縦位施文である。胴部も縦位密接施文され、2単位・原体幅17.5mmを測る。山形文Dは胴部6点・胴下部1点で、いずれも縦位密接施文される。原体幅は13.0mm、13.5mm、14.0mm、14.5mmを測る。

楕円文Aは口縁部1点、胴部8点がある。口縁部は器形D類・口唇部c 1種で、外縁に縦位の刻みが施される。外面縦位密接施文され、内面施文はない。胴部は、縦位密接施文1点、横位密接施文6点で、

楕円文Aの文様構成はⅡ型が考えられる。原体は3単位2点、2単位6点があり、前者は原体幅16.0mm、後者は同11.0～16.5mm・平均12.2mmを測る。楕円文Dはいずれも胴上部で、うち1点は器形C類、外面縦位・内面横位施文される。単位数2・原体幅15.0mmである。他の1点は、縦位密接施文され、単位数1単位と考えられる。楕円文Eは口縁部1点、胴上部1点で、いずれも器形D類で、縦位密接施文される。口縁部破片は、口唇部c1種で、外縁に右上斜の刻みが施される。内面施文はない。楕円文Fは、縦位施文で2単位・原体幅11.5mmである。楕円文AないしDの口縁部は1点あり、器形D類・口唇部e2種である。外縁に右上斜の刻みが施され、内面は施文されない。

市松文Aは、器形不明・口唇部e1種の口縁部1点と、器形C類の胴上部1点、胴部2点、胴下部1点がある。口縁部は端面に右下斜の刻みが施される。いずれも縦位密接施文され、文様構成はⅠ型と考えられる。市松文Cは、胴部破片で、横位施文される。

小楕円文Bは横位密接施文される胴部破片で、原体は3単位、原体幅13.0mmを測る。小楕円文Cは胴部および胴下部で、2点は横位密接、もう1点は下部が無文になると考えられる。2単位・原体幅11.0mmが1点ある。

棒状文Aは、横位密接施文、同Bは縦位密接施文される。後者は、2単位・原体幅14.0mmである。

ネガティブ文Dは口縁部7点、胴上部8点、胴部18点、胴下部1点がある。口縁部は、器形D類・口唇部a2種2点、器形D類・e1種2点、この他器形不明で口唇部b2種、c1種、e1種が各1点ある。口唇部施文は、7点のうち6点に刻みがみられ、外縁に右上斜が2点、外縁に縦位が3点、端面に右下斜が1点ある。胴上部は器形D類が6点ある。外面の施文についてみると、縦位密接施文－口縁部5点・胴上部5点、縦位施文－口縁部2点・胴上部1点・胴部1点、上縦位密接／下横位（密接）施文－胴上部2点、横位密接施文－胴部12点、上横位密接／下縦位施文－胴下部1点等があり、文様構成Ⅱb型が考えられる。ただし斜位施文の胴部が1点ある。原体は2単位が18点で、原体幅は8.5～13.0mm、平均10.4mmと径の小さい原体を用いている。ネガティブ文Eの胴上部2点は器形D類、単位数2、原体幅9.0mm・9.5mmを測る。縦位密接施文－胴上部2点、横位密接施文－胴部2点で、文様構成はⅡ型と考えられる。ネガティブ文Hの口縁部は、器形D類・口唇部a1種で、外縁に右下斜の刻みが施される。内面施文はない。胴部1点は、縦位密接施文で、2単位・原体幅15.0mmを測る。

その他の押型文のうち口縁部破片は2点で、いずれも器形不明であるが、外縁に縦位・右上斜（第25図17）の刻みが施される。17は山形文施文であろうか。

縄文は、原体のわかるものはLRで、縦位密接施文－口縁部1点・胴下部1点、縦位施文－胴部1点、施文方向を変えて鋸歯状の文様効果を得ているもの－口縁部1点がある。口縁部はいずれも器形D類・口唇部a1種で、上記鋸歯状の縄文が施されるものが端面、他の1点が外縁にそれぞれ右上斜に刻みが施されている。撚糸文は原体撚り紐Rが2点、撚り紐Lが1点で、胴下部の縦位密接施文される資料では、棒軸にL巻きされる。網目状撚糸文の口縁部（第25図28・29）は同一個体で、器形D類・口唇部a1種で、端面に右下斜の刻みが施される。原体撚り紐Rの左巻きと右巻きされた単軸絡条体第5類が用いられる。30は、器形D類・口唇部a1種で、口唇部施文はない。外面は、口縁部横位以下縦位の密接施文（口縁部施文の方が新しい）で、内面口縁部も横位施文される。文様構成Ⅳ型である。2単位・原体幅14.0mmの原体で、やはり単軸絡条体第5類と考えられる。無文はいずれも胴部破片である。

第Ⅱ群第2類土器には山形文B（第26図1～3）・ネガティブ文Ⅰ（4）・縄文がある。山形文B

(1) は口縁部から縦位に帯状施文される。ネガティブ文 I は立野式の原体であるが、無文帯をもつことからこの類に含めた。縄文は縦位帯状施文され、原体 L R で、胎土は立野式土器に類似する。

① S B 26 (第26・27図)

第Ⅱ群第1類土器が大半で、記述対象の破片は120点、その他小破片は62片を数える。出土点数は1層87点、その他埋土一括33点で、全体の傾向が1層の文様のバラエティー・比率とほぼ一致する。S B 26全体の構成は、格子目文 A 4点(第26図5～7)、同 D 1点(8)、同 F 12点(9～14)、山形文 A 8点(15～18)、同 B 11点(19～23)、同 D 5点(24)、楕円文 A 5点(25～29)、同 D 1点(30)、同 A ないし D 1点、市松文 C 1点、ネガティブ文 B 1点(第27図1)、同 D 9点(2～7)、同 E 2点(8)、その他押型文26点、縄文3点(9～11)、撚糸文7点(12～15)、網目状撚糸文1点(16)、無文7点(18・19)、不明15点である。部位の内訳は、口縁部12点、胴上部6点、胴部98点、胴下部2点、底部2点である。

格子目文 A は、いずれも胴部破片で、密接施文されるが、施文方向は定かではない。格子目文 D は縦位密接施文される胴部破片である。格子目文 F は縦位密接施文－胴上部1点・胴部9点で、原体の特徴が判明する4点は3単位で、原体幅12.0mm・16.0mm・17.0mm・17.0mmを測る。

山形文 A は、縦位密接施文される胴部が4点あり、うち1点は原体幅20mmを測る。山形文 B は口縁部2点、胴部5点ある。口縁部のうち1点は、器形 D 類・口唇部 a 1種で、端面に山形文 B が横位施文される外面口縁部は横位施文され、内面施文はない。文様構成Ⅲ型が考えられる。原体は2単位・原体幅18.0mmを測る。他の1点は、器形 D 類・口唇部 e 1種で、外縁に右下斜の刻みが施される。外面縦位密接施文される。この他、縦位密接施文－胴部4点・胴下部1点と多いが、横位密接施文－胴部1点もある。文様構成Ⅰ型の他、Ⅱ型ないしⅥ型が少数ながら存在する。原体は上記以外に2単位・原体幅17.5mmが1点ある。山形文 D はいずれも縦位密接施文され、Ⅰ型と考えられる。

楕円文 A は口縁部1点、胴部3点、胴下部1点がある。口縁部は器形 D 類・口唇部 c 1種で、外縁に右下斜の刻みが施される。外面縦位密接施文され、内面施文はない。この他、縦位密接施文－胴部1点、横位密接施文－胴部2点、上横位密接／下縦位密接施文－胴下部1点があり、文様構成はⅡ b 型が考えられる。原体は2単位が2点あり、原体幅13.0mm・14.5mmを測る。楕円文 D は縦位密接施文される胴部破片で、原体幅12.0mmである。

市松文 C は、文様構成等ほとんど読み取れない。

ネガティブ文 D は口縁部2点、胴上部3点、胴部5点がある。口縁部は、いずれも器形 D 類で、口唇部は c 2種、d 1種各1点がある。前者は口唇部施文はないが、後者は外縁に右下斜の刻みが施される。外面の施文についてみると、縦位密接施文－口縁部2点・胴上部1点・胴部1点、上縦位密接／下横位密接施文－胴上部2点、横位密接施文－胴部2点で、文様構成Ⅱ型が考えられる。原体は2単位2点で、原体幅は9.0・10.0mmを測る。ネガティブ文 E は縦位密接施文－胴上部1点、横位施文－胴部1点がある。

縄文は、口縁部1点、胴部2点がある。口縁部は器形 D 類・口唇部 a 1種で、外縁に右上斜の刻みが施される。外面は、原体 L R で縦位密接施文される。この他、原体 R L で横位密接施文される胴部破片

が1点ある。撚糸文は口縁部2点、胴部5点がある。口縁部は器形D類と器形F類があり、それぞれ口唇部c1種である。前者は端面に右下斜の刻みが施され、外面縦位密接施文される。内面施文はない。後者は口唇部施文・内面施文ともなく、外面は縦位施文される。原体撚り紐Rが疎に右巻きされる。この他、縦位密接施文－胴部2点、横位密接施文－胴部1点等あり、後者は原体撚り紐Rが右巻きされる。網目状撚糸文は、原体撚り紐Rの左巻きと右巻きされた単軸絡条体第5類で、縦位密接施文される。無文はいずれも胴部破片である。

不明には、口縁部が4点あり、器形D類・口唇部c1種で、外縁に右下斜の刻みが施されるもの、器形・口唇部の形態が不明で口唇部施文のないもの、器形不明・口唇部c1種で端面に右下斜の刻みが施されるもの、器形不明・口唇部b1種で外縁に右上斜の刻みが施されるものがある。

2) その他の時期

① S B 23 (第27図)

第Ⅲ群土器(20～22)、第Ⅳ群第1類土器(23～25)、第Ⅴ群第2類土器(26～33)が出土している。20～22は、胎土に繊維を含み、器厚等の特徴は第Ⅳ群第1類土器に類似する。25は縄文が施文されることからあるいは茅山上層式かもしれない。32は弧状に爪形文が施文される石山式土器。26～31は塩屋式土器で、26・28は粘土紐上に櫛状工具により条線が、30は擬似縄文が施される。

② S B 03 (第28図)

第Ⅵ群第1類土器(1～3)は木島式土器で、細線が弧状ないし直線状に配される。

③ S B 09 (第28図)

第Ⅴ群第2類土器(5～11)が出土した。5～7は爪形文により弧状に文様が描かれる石山式土器である。

④ S B 07 (第28図)

第Ⅵ群第3類土器が出土した。12・13は浮線文、15～17は結節浮線文、18・19は地文縄文に半截竹管で施文される。主体は、十三菩提式土器である。22～24は土器片錘。

⑤ S B 16 (第28・29図)

第Ⅵ群第3類土器が出土した。第28図26は西壁寄り立位で出土した深鉢。胴部上半の文様は不明であるが、下半は縄文を地文に、4単位2条の眼鏡状隆帯が垂下し、その間に浮線文が配される。25・第29図1は同一個体。波状口縁で、内外面縄文地に浮線文が円形・弧状に配され、文様が描かれる。大歳山式である。2は地文縄文に結節浮線文が垂下する。3は胴部に条線文が施される、中期初頭の五領ヶ台式。

⑥ S B17 (第29図)

出土遺物はほとんどなく、炉体に使用された第X群土器の甕(第29図4)があるのみである。

(2) 竪穴

① S B04

第IV群第1類土器(第37図9~12)が出土した。内外面条痕が施され、胎土に繊維を含む。9・10は口唇部が内削ぎされる。茅山下層式土器である。

② S B06

第II群第1類土器(第29図5・6)が出土している。5は山形文Aの縦位密接施文。

③ S B12

第II群第1類土器(第29図7~11)、第IV群第1類土器(第37図13・15)、同第2類土器(14)が出土した。第37図13は段上に刻みが施される、茅山下層式土器である。

④ S B22

第II群第1類土器(第29図12~20)が出土している。

(3) 炉穴

① S K220-225-226-228

第II群第1類土器が出土している。第29図21は市松文Bが縦位密接施文される。

② S K412

第II群第1類土器(第29図22~24)が出土している。22は器形D・口唇部a1種で、楕円文Bが類口縁部から縦位密接施文される。口唇部端面には、同種原体により横位施文される。この他、棒状文A(23・24)、ネガティブ文B、同E、撚糸文等が出土している。

③ S K411-426-427

第II群第1類土器(第30・31図)が出土している。1は、口径22.0cm、器高29.5cm、約1/2が遺存する土器で、器形D類・口唇部e1種である。外縁に右上斜の刻みが施される。ネガティブ文Dが口縁部縦位密接/胴部横位密接/底部縦位密接施文され、文様構成IIb型をとる。原体は2単位・原体幅11.0mmを測る。胎土に雲母を多く含み、内面の色調は黒色を呈する。14は市松文Bと山形文Bが併用される胴上部~胴部の破片で、それぞれ縦位密接施文される。この他、格子目文B、同C(2)、山形文D(5)、楕円文B、ネガティブ文B(9・10)、同H、撚糸文等が出土している。

(4) 集石

①S I 07

第Ⅱ群第1類土器(第32図1・2)他が出土した。第Ⅱ群第1類土器は、格子目文A、ネガティブ文D、同E、縄文、撚糸文がある。ネガティブ文Dは器形不明・口唇部c1種、外縁に縦位の刻みが施される。

②S I 08

第Ⅱ群第1類土器(第32図3～6)、第Ⅴ群第1類土器(第37図17)、同第2類土器(同16・18)が出土した。第Ⅱ群第1類土器は、山形文A、楕円文A(第32図6)、ネガティブ文E(3)、撚糸文等がある。3は口唇部端面に刻みが施される。第37図17は神之木台式、16・18は塩屋式と考えられる。

③S I 09

第Ⅱ群第1類土器(第32図7・8)他が出土した。第Ⅱ群第1類土器には、山形文A、ネガティブ文D、撚糸文等がある。

④S I 13

第Ⅱ群第1類土器(第32図9・10)が出土した。9は市松文Bが横位密接施文される。10は楕円文Aである。

⑤S I 14

第Ⅱ群第1類土器(第32図11～13)が出土した。11は山形文Aで、大川式と考えられる。

⑥S I 16

第Ⅱ群第1類土器(第32図14)が出土した。14はネガティブ文Dの胴下部で、上横位密接/下縦位密接施文される。

⑦S I 17

第Ⅱ群第1類土器(第32図15～17)他が出土した。山形文B、ネガティブ文D等がある。16は外面に擦痕がみられる。

⑧S I 21

第Ⅱ群第1類土器(第32図18・19)が出土した。18は内外面縦位に施文される。19は網目状撚糸文で原体撚り紐Rが右巻き・左巻きされる。

⑨S I 22

第Ⅱ群第1類土器(第32図20・21)、第Ⅵ群第3類土器(第38図1～3)が出土した。第Ⅱ群第1類土器には、格子目文A、ネガティブ文Dがある。後者には底部が1点あり、砲弾状を呈する。第38図1

は五領ヶ台式。

⑩ S I 24

第Ⅱ群第1類土器（第32図22～28）他が出土した。格子目文F、山形文A（23・24）、同B、楕円文A（25）、同F、市松文B（26）、ネガティブ文D（27）、同E、縄文（28）、撚糸文、網目状撚糸文がある。

(5) 貯蔵穴

① S K 01

第Ⅸ群土器（第38図4・5）が出土した。4は甕底部で、木葉痕がある。5は縦羽状の条痕文が施される。

② S K 72

第38図6は第Ⅳ群第1類土器で、胎土に多量の繊維を含み、焼成はやや不良である。口縁部は、張り出しを持ち、原体LRが縦位施文される。

③ S K 233

第Ⅱ群第1類土器が出土し、格子目文A（第33図1）、ネガティブ文E等がある。

④ S K 328

第Ⅱ群第1類土器（第33図2）、および第Ⅸ群土器（第38図7～10）が出土した。第38図8は口縁部に押圧突帯が付された壺形土器、10は細密条痕が施される。

⑤ S K 380

第Ⅵ群第3類土器（第38図11・12）等がある。11・12は五領ヶ台式である。

⑥ S K 400

第Ⅱ群第1類土器（第33図3～5）が出土した。楕円文B（3）、市松文C、ネガティブ文D、同E、撚糸文（5）等がある。

⑦ S K 478

第Ⅵ群第3類土器（第38図13）等が出土した。13は朱彩される。

(6) 土坑

数が多く、遺物が断片的に得られている土坑が多いので、時代毎に代表的な土坑を抜き出して記述す

る。

1) 草創期

① S K 525

第 I 群第 2 類土器が出土した。第 37 図 7・8 は同一個体で、S B 25・S B 26 埋土中にも同一個体片が含まれていた。直立やや外傾する器形で、横位に絡条体圧痕文を 9 段施文し、その下位にハの字状に爪形文を施文する。口唇部外縁にも、爪形文が施される。胴部以下の施文については判らない。内面に指頭痕をとどめる。胎土に細かい雲母を多く含み、焼成良好、内外面の色調は黒色である。外面口縁部付近に炭化物が付着する。

2) 早期前半

① S K 45

格子目文 A (第 33 図 8)、山形文 B、同 D、楕円文 B (9)、ネガティブ文 E (10) 等がある。10 は、器形 C 類・口唇部 e 1 種で、外縁に右上斜の刻みが施される。外面は縦位密接施文される。

② S K 114

ネガティブ文 D 胴上部 (第 33 図 15) は、縦位密接施文される。

③ S K 147

山形文 A (第 33 図 17)、楕円文 A (18)、ネガティブ文 D (19)、無文等がある。ネガティブ文 D には、器形 D 類・口唇部 a 1 種で、端面に右下斜の刻みが施される口縁部破片がある。

④ S K 211

楕円文 A、同 E (第 33 図 20・21) 等がある。20 は器形 C 類・口唇部 a 1 種、端面に右上斜の刻みが施される。21 は器形 C 類・口唇部 c 1 種、外縁に右上斜の刻みが施される。いずれも外面縦位密接施文される。

⑤ S K 232

格子目文 A (第 33 図 22)、山形文 B、楕円文 A ないし D (23)、ネガティブ文 B、同 D (24) 等がある。22 は縦位密接施文で、原体は 4 単位・原体幅 21.5mm を測る。ネガティブ文 B は器形 C 類・口唇部 a 1 種で、端面に右下斜の刻みが施され、外面縦位密接施文される。

⑥ S K 314

遺物出土が多く、山形文 A (第 34 図 4)、同 D (3・5・6)、楕円文 A (8)、同 D (7)、市松文 B、棒状文 C、ネガティブ文 B、同 E、撚糸文、網目状撚糸文、無文等が出土している。10 は砲弾状を呈する底部である。

⑦ S K 336

格子目文C、楕円文D（第34図19・20）、ネガティブ文D、同E等が出土している。19・20は同一個体で、口縁部から胴部にかけての資料である。器形D類・口唇部c 1種で、外縁に右上斜の刻みが施される。外面は上横位密接／下縦位密接施文で、文様構成Ⅲ型をとる。原体は、2単位・原体幅13.5mmを測る。胎土に雲母を多く含む。

⑧ S K 339

遺物の出土量が多い。格子目文F、山形文A、楕円文F（第35図1）、ネガティブ文D（2・3）、無文等がある。格子目文Fは胴上部で、縦位密接施文される。ネガティブ文Dは口縁部－縦位密接施文、胴上部－縦位密接施文、胴部－縦位密接施文・横位密接施文・上縦位密接／下横位密接施文で、文様構成はI型ないしII型と考えられる。

⑨ S K 399

楕円文AないしD、棒状文BないしC、ネガティブ文D（第35図9～15）等がある。9は器形D類・口唇部e 1種、外縁にやや右上斜の刻みが施される。ネガティブ文Dの外面施文は、口縁部－縦位密接施文、胴部－横位密接施文、胴下部－縦位密接施文で、文様構成はII b型と考えられる。

⑩ S K 436

山形文A、同C、楕円文BないしE、ネガティブ文C、同D（第36図1）、同E（2）等が出土した。第36図1は胴部－横位密接施文、胴下部－縦位密接施文で、上半を欠くが文様構成II b型と考えられる。底部は剥落するが、乳房状を呈すると考えられる。山形文Cは横位施文される。

⑪ S K 481

格子目文A（第35図22）、山形文CないしD、楕円文D、ネガティブ文B（23・24）、同E、撚糸文等がある。23は縦位密接施文され、3単位・原体幅17.0mmを測る。

⑫ S K 498

遺物出土が多い。山形文A（第36図5）、同B（6）、同C、楕円文E（7）、ネガティブ文D（9）、同E（8・10）、縄文、撚糸文（13）、無文等がある。9は器形C類・口唇部b 1種、外面の施文はわずかに右下斜位である。8は器形D類・口唇部e 1種、外縁に縦位の刻みが施される。

⑬ S K 524

山形文A（第37図4）、同B、楕円文A（5）、縄文（6）、無文等がある。6は器形D類・口唇部e 1種で、外面は原体LRで縦位密接施文、口唇部端面には同種原体で縦位に縄文が施文される。

3) 早期後葉

それぞれの遺構の時期は別時期であるが、図版に掲示したものの説明をしておく。

① S K 26

第IV群第1類土器（第38図15・16）が出土した。15・16は同一個体で、口唇部内削ぎされ、胴上部に段をもつ。外面は縄文が施されるが、内面には条痕がない。胎土に繊維の他、石英・雲母を多くを含む分厚い土器である。内外面褐色を呈する。

② S K 94

第39図1は第IV群第2類土器で、内外面に爪形文で弧状に文様が描かれる。また、口唇部に刻みが施される。粕畑式土器である。

③ S K 311

第IV群第2類土器が出土している。第39図6は内外面条痕が施され、胎土に繊維が含まれる。4単位の波状口縁で、波頂部は肥厚する。胎土の特徴等から、粕畑式土器と考えられる。

④ S K 464

第IV群第2類土器（第40図6）、粕畑式土器が出土している。

4) 早期末葉

S K 488からは第V群第1類土器（打越式土器）が出土している（第53図6）。内外面条痕が施され、外面は口縁部に貝殻腹縁により鋸歯状に文様が施される。口唇部外縁に刻みが施される。胎土に繊維は含まれておらず、内外面褐色を呈するやや焼成不良の土器である。搬入品と考えられる。

第V群第2類土器のうち、石山式土器はS K 149等から、塩屋式土器はS K 45・S K 53・S K 123・S K 135等から、それぞれ出土している。塩屋式は、S K 53（20・21）・S K 123（第38図22）のものは貼付された粘土紐の上に擬似縄文が施され、一方、S K 45（19）・S K 135（23・24）では粘土紐の上に櫛状工具で条線文が施される。

5) 前期末～中期中頭

第VI群第3類土器のうち五領ヶ台式土器は、S K 313・S K 329・S K 357等から出土している。

6) 晩期終末ないし弥生時代前期

S K 41からは縦羽状の条痕文が出土している（第38図18）

第3節 遺構外出土の土器

(1) 第Ⅰ群土器

1) 第1類土器(第40図9～11)

いずれも同一個体で、ハの字状に近い爪形文である。粘土を摘むように施文されたもので、第Ⅰ群第2類に併用される爪形文とは施文の仕方が異なる。木曾郡上松町お宮の森裏遺跡のものと同様、左下がりの爪形が右下がりのものより深い傾向にある。器面に若干の指頭痕をとどめ、胎土に細かい石英・雲母が目立つ。外面黒褐色を呈する。

2) 第3類土器(12～14)

第Ⅱ群土器とは、胎土等異にする。12は原体不明で、施文方向を変えている。13は原体L Rで、内・外面とも横位に施文される。14は胴下部破片で、原体R Lを縦位に施文している。この部位では内面施文はない。

(2) 第Ⅱ群土器

1) 第1類土器

格子目文A(第40図15～22)は、器形B類1点・C類2点・D類1点で、口唇部の形状はc 1種3点・e 1種1点である。口唇部施文は、いずれも刻みが施され、外縁に縦位の刻みが3点、端面に右下斜が1点である。口唇部施文のないものはない。また、内面に施文されるものもない。外面の施文は、口縁部－縦位密接施文、胴上部－縦位密接施文・上縦位密接／下横位密接施文、胴部－縦位密接施文・横位密接施文、胴下部・底部－不明で、胴部は、縦位密接施文より横位密接施文が圧倒的に多い。文様構成は、Ⅰ型およびⅡ型で、Ⅱ型が主体と考えられる。格子目の細かいものには、磨り消しにより無文部が作出されるものがある。単位数は2～4単位である。格子目文B(23・24)は、いずれも胴部破片で、文様構成等は不明である。格子目文C(第41図1～10)は、器形B類2点・C類2点、口唇部はc 1種が3点あり、外縁に右下斜1点、右上斜2点刻みが施される。内面施文はない。口縁部・胴上部－縦位密接施文、胴部－縦位密接施文・横位密接施文、胴下部・底部－不明で、胴部の縦位密接施文は僅かである。文様構成は、主にⅡ型と考えられる。単位数の判るものは、4ないし5単位である。格子目文F(11・12)は、胴部は縦位密接施文されるが、全体の文様構成は不明である。

山形文Aの口縁部6点は、器形B類2点・C類4点で、口唇部c 1種5点、a 2種1点である。器形C類のうち、口唇部c 1種1点とa 2種1点は、外面縦位密接施文される。いずれも口唇部に刻みが施され、施文の部位・方向は外縁・縦位2点、端面・右上斜1点、端面・右下斜3点である。内面の施文はない。外面の文様は、口縁部－縦位密接施文・横位密接施文、胴上部－縦位密接施文・横位密接施文、胴部－横位密接施文・縦位密接施文、胴下部－縦位施文、底部－縦位密接施文で、全体の文様構成が判るものはないが、Ⅰ型に属する一群と、Ⅲ型に属する一群があると考えられる。山形文B(第42図1～12)は、器形C類4点(うち、外面縦位密接施文3点、横位密接施文1点)・D類1点(同横位密接施文)、口縁部の3点については、口唇部の形状はc 1種1点(同縦位密接施文)、b 1種2点(同縦位密

接施文・横位密接施文各1点)、いずれも外縁に刻み(右上斜2点、右下斜1点)が施される。内面施文はない。外面の施文は、口縁部-縦位密接施文・横位密接施文、胴上部-縦位密接施文・横位密接施文、胴部-横位密接施文・縦位密接施文、胴下部・底部-不明で、胴部は圧倒的に縦位密接施文される。山形文Aと同様、文様構成はI型とIII型が考えられる。山形文D(13~26)の口縁部は、器形はいずれもC類で、口唇部a1種が2点、b1種が1点である。前者は端面に(施文方向右上斜・右下斜各1点)、後者は外縁にそれぞれ刻みが施される。内面施文はない。外面の施文は、口縁部-縦位密接施文、胴上部-縦位密接施文・横位密接施文、胴部-縦位密接施文・横位密接施文、底部-縦位密接施文で、胴上部・胴部とも横位密接施文は僅少である。おそらく文様構成は、I型が主体で、他に少量のIII型があると考えられる。

楕円文A(27~第43図11)の口縁部は、器形C類・口唇部c1種2点、C類・e1種1点、D類・c1種1点である。口唇部の施文は、器形D類にはなく、C類はいずれも外縁に刻み(縦位2点、右下斜1点)が施される。内面施文はない。外面の施文は、口縁部-縦位密接施文、胴上部-縦位密接・上縦位密接/下横位密接施文・横位密接施文、胴部-縦位密接施文・横位密接施文、胴下部-上横位密接/下縦位密接施文、底部-不明である。文様構成の主体はII型で、胴上部の横位密接施文、また、胴下部まで縦位密接施文されるものが存在することから、I型ないしIII型も少量あると考えられる。楕円文B(12~20)は、口縁部破片が2点あり、器形C類およびD類が各1点、口唇部の形状はc2種とe1種が各1点ある。いずれも外縁に刻みが施される。内面は施文されない。口縁部・胴上部-縦位密接施文、胴部-上縦位密接/下横位密接施文・横位密接施文、胴下部-不明で、全体の文様構成はおそらくII型と考えられる。楕円文C(21)は胴部1点で、横位密接施文と思われるが、全体の文様構成は不明である。楕円文D(22~第44図1)の口縁部1点は、器形不明・口唇部c1種で、口唇部外縁に右下斜の刻みが施される。内面施文はない。口縁部・胴上部-縦位密接施文、胴部-縦位密接施文・横位密接施文・上横位密接/下縦位密接施文、胴下部-縦位密接施文で、断片的であるが、文様構成はI型・II型がほぼ同数と思われる。楕円文Dには、この他胎土に微量の繊維を含むもの(2~5)がある。繊維を含む押型文土器は、東海地方東部の土器群、ないし在地では細久保式以降の土器群があるが、胎土から前者ではないかと考えられる。横位密接施文の胴部破片ばかりで、全体の文様構成は不明であるが、静岡県若宮遺跡第V群土器のように全面横位密接施文されるのではないかとと思われる。楕円文F(6~8)は、胴部-横位密接施文があるが、断片的で全体の文様構成は不明である。

市松文A(9・10)は、胴上部-縦位密接施文、胴部-横位密接施文で、小破片のみで全体の文様構成は不明であるが、おそらくII型をとると考えられる。市松文B(11~19)は、口縁部が3点あり、器形いずれもC類、口唇部はc1種2点、e1種1点である。いずれも外縁に刻み(施文方向右上斜2点、縦位1点)が施される。外面の施文は、口縁部・胴上部-縦位密接施文、胴部-縦位密接施文・横位密接施文・上縦位密接/下横位密接施文、胴下部・底部-不明であり、縦位密接施文は胴部上半までに限られることから、おそらくII型が主体であると考えられる。市松文C(20・21)胴部は、縦位密接施文されるが、全体の文様構成は不明である。SB21にみられたような、胎土に鉄石英を含むものはない。

小楕円B(第45図1)は、胴部破片で、横位密接施文される。

棒状文Aも胴部破片ばかりで、おそらく縦位密接施文される。棒状文B(2~6)は、胴上部-縦位密接、胴部-横位密接で、小破片のみで全体の文様構成は不明であるが、おそらくII類であろう。

棒状文C（7）は、胴部－縦位密接施文される。

ネガティブ文B（8～13）は、断片的で全体の文様構成は不明であるが、縦位密接施文されている。ネガティブ文D（14～第46・47図21）は、遺構外で最も出土量が多い。器形は、B類1点、C類8点、D類6点で、口唇部の形状は、a 1種1点、b 1種5点、c 1種6点、e 1種3点である。口唇部の施文を口唇部の形状別にみると、a 1種－端面にネガティブ文D 1点、b 1種－端面に刻み2点（縦位・右下斜各1点）・外縁に刻み2点（縦位）・なし1点、c 1種－外縁に刻み4点（縦位1点、右下斜3点）・なし2点、e 1種－端面に刻み3点（縦位2点、右下斜1点）である。外面の施文は、口縁部－縦位密接施文、胴上部－縦位密接施文・上縦位密接／下横位密接施文、胴部－縦位密接施文・横位密接施文、胴下部－横位密接施文・縦位密接施文・上横位密接／下縦位密接施文である。なかでも、第46・47図1は口縁部から胴部にかけての資料で、口縁部縦位密接以下横位密接施文される。全体の文様構成のわかるものは少ないが、Ⅱ型と考えられる。ネガティブ文E（22～第48図5）はネガティブ文Dに次いで量が多い。器形C類5点、D類4点、口唇部の形状は、a 1種1点、b 1種1点、c 1種3点、d 1種1点、e 1種3点である。口唇部の施文を形状別にみると、a 1種－端面に刻み（右下斜）、b 1種－無文、c 1種－外縁に刻み（縦位・右上斜・右下斜各1点）、d 1種－外縁に刻み（縦位）、e 1種－端面に刻み（縦位1点、右上斜2点）である。外面の施文は、口縁部－縦位密接施文、胴上部－縦位密接施文・上縦位密接／下横位密接施文、胴部－縦位密接施文・横位密接施文・上縦位密接／下横位密接施文・上横位密接／下縦位密接施文、胴下部－上横位密接／下縦位密接施文であり、復元される文様構成は、Ⅱ型である。ネガティブ文Gは、器形C類1点で、口唇部の形状はe 1種、端面に縦位の刻みが施される。外面は縦位施文される。ネガティブ文H（6・7）は、胴上部－縦位密接施文、胴部－縦位施文される。断片的で全体の文様構成は不明である。

複合文（8）は胴部小破片数1点のみで、横位施文と考えられる。あるいは細久保式か。

楕円文Aと山形文Dの併用例（9）は、胴上部で、楕円文A・山形文Dともに縦位密接施文される。胴部下半は不明であるが、おそらく縦位密接施文と考えられる。この他、楕円文Aに刺突が施される例がある。楕円文Aは横位密接施文される。

縄文（11～23）は、原体RL 4点、LR 3点、RLR 1点があり、RLは横位密接施文、LRは横位密接施文・縦位密接施文、RLRは横位密接施文される。撚糸文（第49図1～14）は、器形F類・口唇部b 1種2点で、口唇部・内面とも施文はない。原体は、撚り紐Rの右巻き9点（うち細い撚糸文2点）、撚り紐Rの左巻き8点（うち細い撚糸文2点）、撚り紐Rの巻き不明5点、撚り紐Lの右巻き4点（うち細い撚糸文3点）、撚り紐Lの左巻き8点（うち細い撚糸文2点）等がある。原体別にみると、撚り紐Rの右巻きは、口縁部－縦位密接施文、胴部－縦位密接施文・横位密接施文、胴下部－縦位密接施文である。撚り紐Rの左巻きは、胴部－縦位密接・右下斜密接施文、胴下部－右下斜密接施文である。R巻き不明は、胴部－縦位密接施文・横位密接施文である。撚り紐Lの右巻きは、胴部－縦位密接施文、また、撚り紐Lの左巻きは、口縁部・胴部－縦位密接施文である。この他、原体不明の中に、底部－右上斜密接施文、胴部－右下斜密接施文がある。全体の文様構成がわかるものはないが、Ⅰ型が多いと考えられる。撚糸文のうち、第48図24は胎土に繊維が含まれるが、楕円文Aの繊維を含むものよりは量が多い。口縁部から胴部にかけての破片で、器形F類・口唇部a 1種で、端面に右下斜の刻みが施される。原体は撚り紐Rの左巻きで、下半は不明であるが、上半は縦位密接施文されている。あるいは高山寺式

に伴うものであろうか。網目状撚糸文（第49図20～22）は器形G類。口唇部a 1種2点で、いずれも網目状撚糸文が施文される。内面施文はない。原体は、撚り紐Rが右と左に巻かれるものと、撚り紐Lが右巻き・左巻きされるものとがあり、前者が多い。外面の施文は、口縁部・胴部・胴下部とも縦位密接施文である。無文（23）は胴上部・胴部破片で、胴上部には右下斜のケズリ痕がみられる。

2) 第2類土器

山形文B施文（第50図1～4）と、縄文施文（5～7）がある。前者はいずれも縦位に帯状施文される胴部破片である。5は、外面は口縁部から縦位に帯状施文される。口唇部は横位、内面は横位に1帯施文される。原体は同一のLRである。

(3) 第Ⅲ群土器（第50図8～11）

第Ⅰ群第2類土器の絡条体圧痕と異なるものを一括した。器壁の薄い8・11と、厚い9・10があり、前者はあるいは草創期まで溯るかもしれない。

(4) 第Ⅳ群土器

1) 第1類土器

第50図12は鶴ガ島台式土器で、口縁部波状を呈する。13～第51図13は、茅山下層式土器および厚手で、内外面に条痕が施される土器を一括した。第50図13～15は波状口縁で、14は内削ぎされる。16～24・27・第51図3～6は胴部に段をもち、その上に刻みを施すものがある。第50図13・16・17・20は凹線で弧線文や平行線が、15・22は刺突で文様が描かれる。また、第51図1・2は幅広の工具で連続押し引きされる。14・15は縄文施文で、茅山上層式とも考えられるが、14に段があるため下層式としておきたい。

2) 第2類土器

第51図16～第52図6は粕畑式土器を一括した。第1類土器よりも薄手で、内外面に条痕が施される。第51図16～20は波状口縁、21は平縁であり、17は突起が付される。口縁の内外縁や胴上部に主に弧状に爪形文が施文される。

(5) 第Ⅴ群土器

1) 第1類土器

第53図12～15は神之木台式土器。12～14は平縁、15は波状口縁である。

2) 第2類土器

第52図7は小破片であるが、上の山式と考えられる。8～第53図5は石山式土器で、口縁部は、平縁（第52図8～13）と、波状縁（14～19）がある。口縁部はほぼ垂直に立つ。微量の繊維を含む薄手の土器で、焼成は良好である。条痕は顕著でなく、内外面に擦痕状に看取されるものがある。爪形文が直線状ないし弧状に施文される。7～11は、断片的であるが、天神山式土器と考えられ、7・8は小波状を

呈する。9～11は櫛状工具で波状文が描かれる。16～第54図26は塩屋式を一括した。口縁部付近に細い粘土紐が直線状・波状等に貼り付けられ、その上を櫛状工具等で条痕を施すもの（第53図17・23～27等）、擬似縄文が施されるもの（18～21等）の別がある。口縁部は直立ないしやや外傾し、平縁（16～第54図8）が多いが、波状縁（9～11）もある。9は突起が付される。第53図30・第54図24・26は粘土紐が剥がれて凹線状に圧痕が残る。

以下の土器はきわめて断片的である。

(6) 第Ⅵ群土器

1) 第1類土器

第54図27～32は、木島式土器を一括した。いずれも薄手で、内外面に指頭痕をとどめる胴部破片である。

2) 第2類土器

第54図33は波状口縁で、外面に結節浮線文がある。

3) 第3類土器

第54図34～36は地文縄文で、細い粘土紐が渦文状ないし直線状に貼付される。

(7) 第Ⅶ群土器

第54図37～39は中期後半の土器で、37・38は、小波状を呈する。40は加曽利E 4式併行の土器で、磨消縄文が施される。

(8) 第Ⅷ群土器

1) 第1類土器

第54図41は深鉢形土器の口縁部で、内面に沈線が巡らされる。

2) 第2類土器

第54図42は粗製の深鉢形土器片で、口唇部に押圧が施される。

(9) 第Ⅸ群土器

図示しなかったが、細密条痕の施された深鉢片が出土している。

第4節 総括

(1) 第Ⅰ群第2類土器について

S K 525から出土した1個体がある。本類のように、絡条体圧痕文に爪形文が併用される土器は、木曾郡上松町お宮の森裏遺跡・新潟県東蒲原郡上川村室谷洞穴に類例がある他、須坂市石小屋洞穴遺跡・諏訪市片羽町A遺跡・沼津市清水柳北遺跡等に絡条体圧痕文土器がある。お宮の森裏遺跡の併用例は、本遺跡のように横位に施文するもの他、絡条体を右上斜・右下斜に組み合わせて施文するものがあり、それぞれその下位に横方向に連続するハの字状の爪形文がある。室谷洞穴では12・13層から出土した第Ⅰ群（室谷下層）土器に「細鋭の爪形文が施され」（中村・小片 1964）ている。

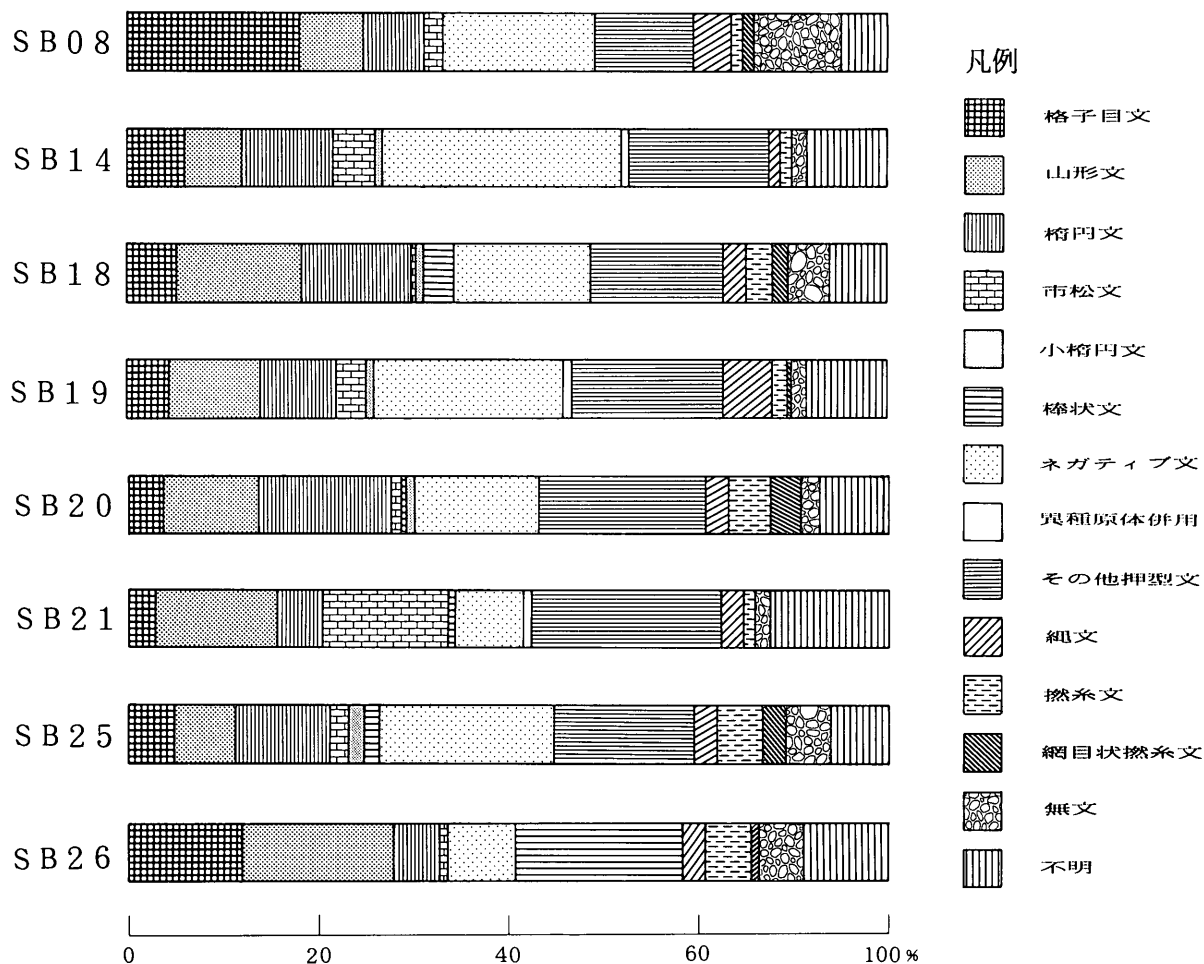
この他、石小屋洞穴遺跡では、短縄文施文で無文部に爪形文が施文されるものがある。また、絡条体圧痕文には、縄の中程を結びそこから折り曲げたもので刺突を施す例がある。片羽町A遺跡の場合、押圧縄文土器と絡条体圧痕文土器があり、後者にはへら状工具により刺突文が併用されている。沼津市清水柳北遺跡では、絡条体圧痕文に原体末端を使用したと思われる圧痕が併用される例がある。大仁町仲道A遺跡では、時間差はあるとされるが、絡条体圧痕の他、爪形文・竹管文・自縄自巻・撚糸文・撚紐側面圧痕文・縄文など多様な文様がある。さらに、埼玉県西谷遺跡の爪形文・縄文併用例、同宮林遺跡での爪形文土器と多縄文系土器群との共伴を背景として、爪形文土器との一部併行関係が考えられている（大塚 1989）ことから、本遺跡やお宮の森裏遺跡の絡条体圧痕文と爪形文併用も、こうした爪形文土器と多縄文系土器群の併行期の、地域的様相と考えることが可能であろう。

(2) 第Ⅱ群第1類土器について

第1節(2)で前述したように、第Ⅱ群第1類土器の大半は破片資料であり、残念ながら断片的な資料から全体を復元せざるを得ない。総点数は4,850余点にのぼる。

1) 時間軸の設定

本報告では、文様の類型を分類・記述の基準とした。そして、遺構の新旧関係をもとに、各住居址における文様の組成比を比較し、変化の方向性を抽出するとともに、同じような組成比を示すものを同時期として括った。なお、S B 01・S B 11・S B 24については、出土遺物の量が少ないため、時間軸への位置づけが困難な部分がある。各住居址の文様の組成比は、挿図3のとおりである。大まかには、市松文の多いS B 21（A群）、山形文・楕円文が多く市松文が少ないS B 14・S B 18・S B 19・S B 20・S B 25（B群）、格子目文の多いS B 08・S B 26（C群）の3つのグループに分けることができる。一方で、S B 25（古）→S B 26（新）の新旧関係からは、楕円文・市松文・ネガティブ文の減少傾向、格子目文・山形文の増加傾向が指摘できる。すなわち、B群からC群への推移が考えられる。さらにB群からC群への変化として、もちろん個々には差があるが、全体として格子目文の増加傾向と市松文の減少傾向が指摘できる。そこで、本報告では、A群→B群→C群という時間軸を設定する。



挿図3 文様の組成比（住居址別）

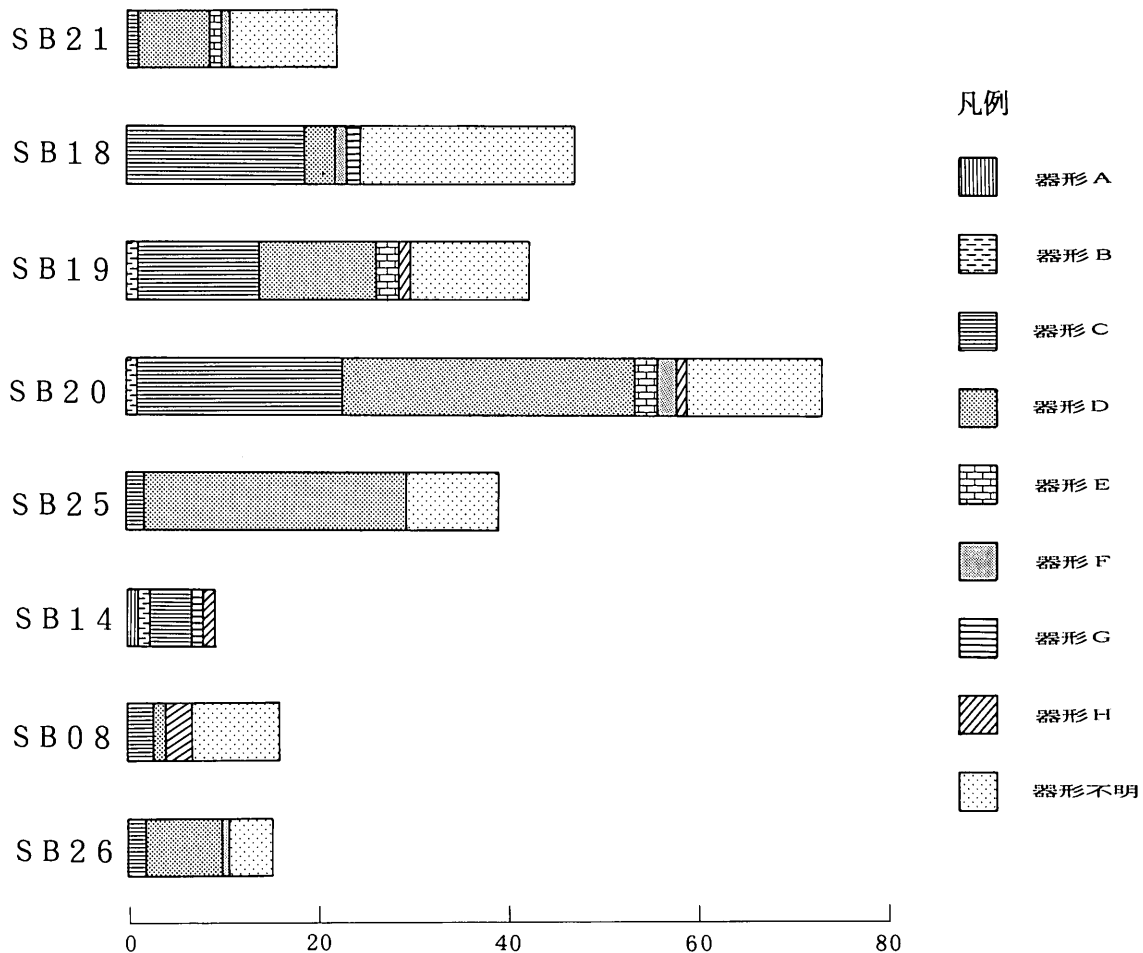
2) 各属性の時間的变化

①文様の類型の消長

A群からC群まで変わらずに存在する文様の類型は、格子目文A、同D、山形文A、同B、同D、楕円文A、市松文B、同C、ネガティブ文D、同E、縄文、撚糸文、無文である。B群で出現する類型は、格子目文B、同C、同E、同F、山形文C、楕円文B～F、市松文A、小楕円文A～C、棒状文B、同C、ネガティブ文A、同F、同G、同I、網目状撚糸文で、B群にはほぼ全ての類型が出揃う。さらにB群→C群の変化として、格子目文C、同E、山形文C、楕円文B、同C、同E、同F、市松文A、同D、小楕円文A～C、棒状文A～C、ネガティブ文A～C、同F～I、それに異種原体の併用がなくなる。

②器形および口唇部の形状

A群およびC群で器形の判別できる資料数が少ないため、的確に器形の変化を捉えられているか、若干疑問があるが、A群→B群→C群への変化として、器形B類・C類・G類の減少傾向、D類・F類・

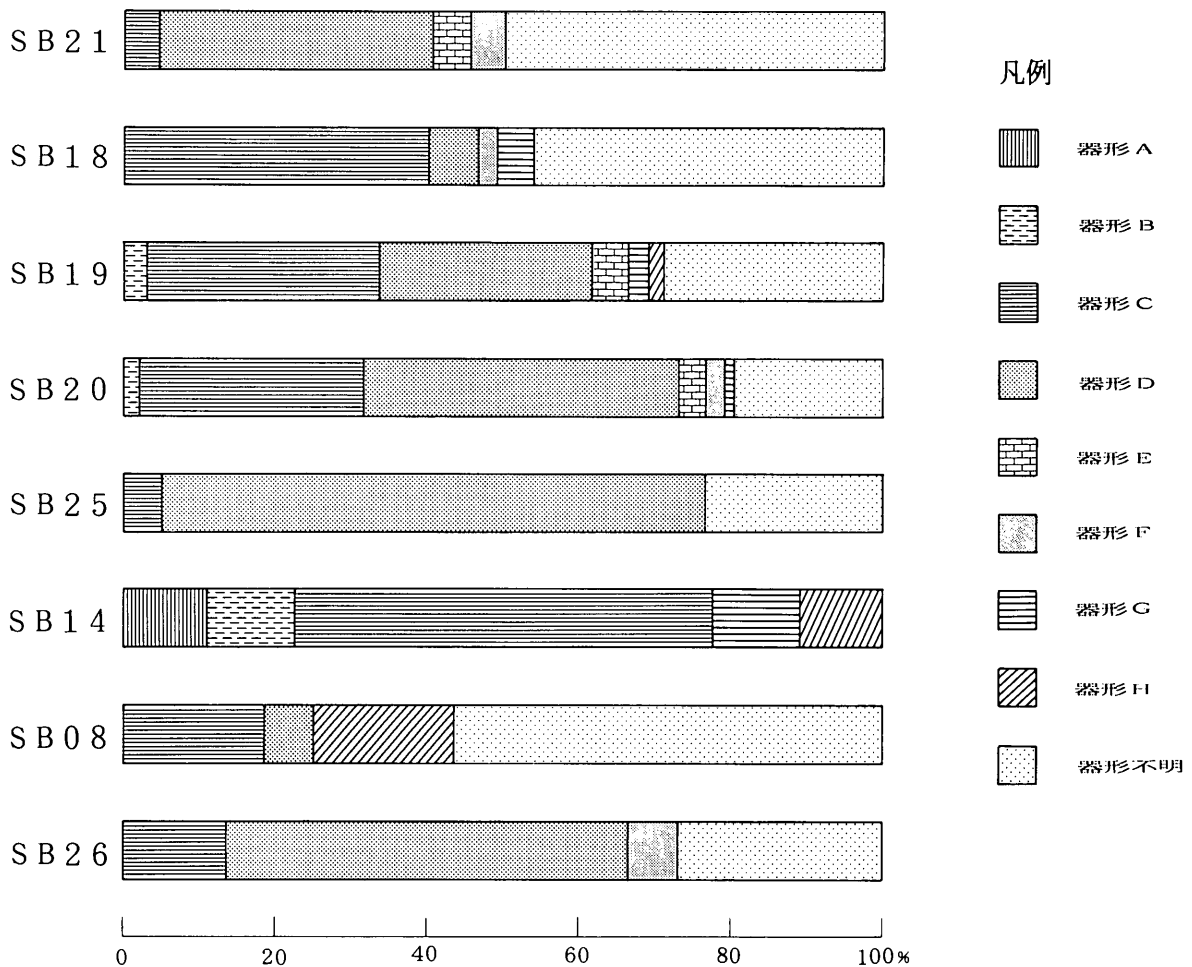


挿図4 器形各級の点数 (住居址別)

H類の微増、E類が増加し次いで減少する傾向が指摘できる (挿図4・5)。B類・C類が減少しD類が増加する傾向は、大鼻・大川式系の押型文で口縁部の外反の度合いがだんだんに弱まる傾向と軌を一にしている (山田 1988)。

底部は砲弾状をなすものが多い。B群のSB19 (第12図20)・SB20 (第16図26) はやや乳房状を呈しているが、他の多くは砲弾状を呈する。また、C群のSB08では乳房状尖底1点のみである。このことから、底部は砲弾状尖底から乳房状尖底に変化すると考えられる。

また、口唇部の形状は、減少傾向を示すもの - a 1種、増加した後減少するもの - b 1種・c 1種・e 1種・a 2種・b 2種・d 2種・e 2種、増加傾向を示すもの - c 2種、微増すると考えられるもの - d 1種、である (挿図6・7)。特に、c 1種・e 1種・c 2種・e 2種の変化が注目される。器形と口唇部の形状の特定の結びつきはないようであるが、上述の器形の変化と対応して、口唇部の形状が変化することは注目される。すなわち、口縁部が次第に立ってくるにつれ、口唇部は平坦→丸みを帯びる→外縁が削がれた状態のものに変化する。こうした口唇部の形状の変化は、土器を正面から見た場合に口唇部の見える部分が変化することを反映した結果と考えられる。

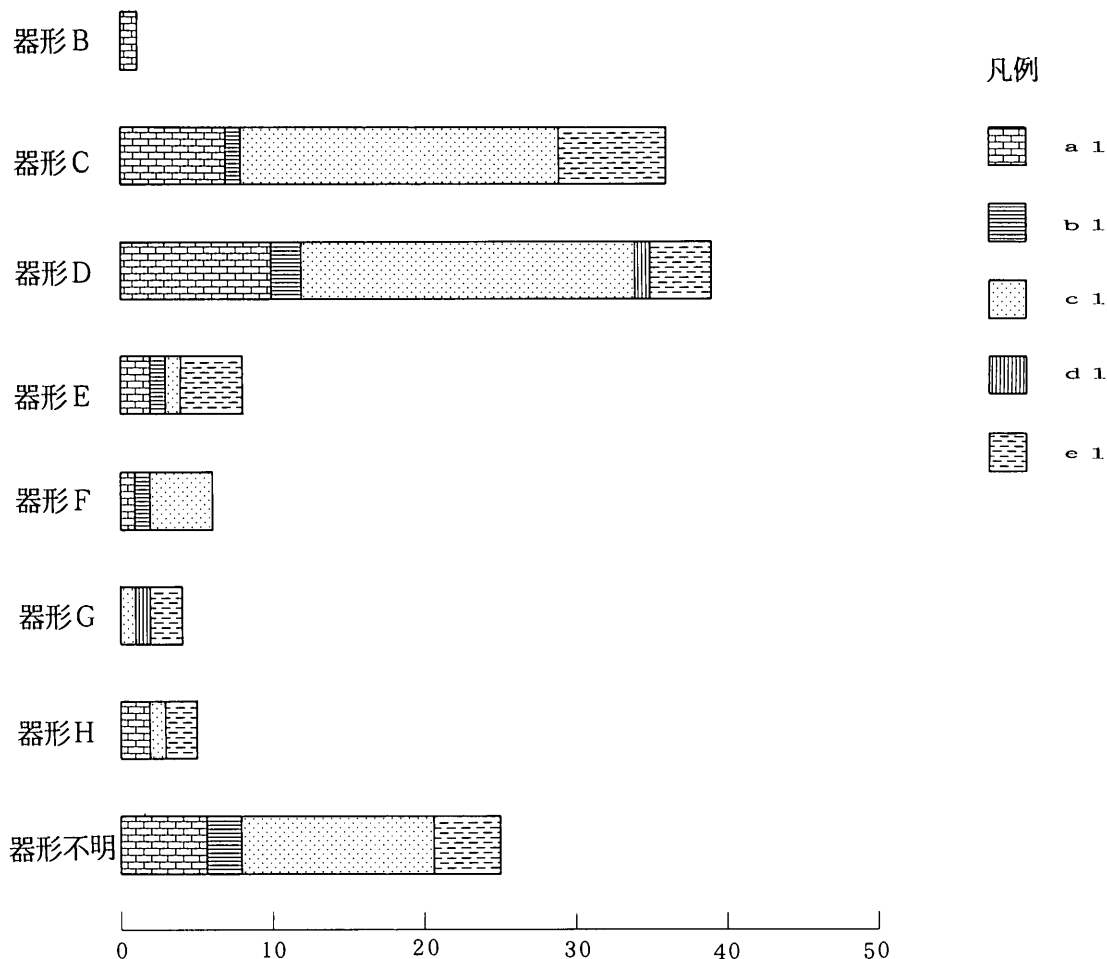


挿図5 器形各種の出現率（住居址別）

③口唇部の施文

刻みを施すもの、外面施文と同種原体により文様が回転施文されるもの、施文のないものがある（挿図8）。A群→B群→C群の変化をみると、口唇部施文の比率が増加すること、刻みの比率が増加すること、同種原体による施文が減少すること、が指摘される。こうした変化は、これまで立野式土器の口縁部施文について指摘されている経時的変化とは逆の傾向を示している。すなわち、山田 猛氏は、刻みが施される立野a式が、刻みの施されない立野b式よりも古い（もちろん、口唇部施文以外にも立野式土器の型式細分に関わる属性はあるが）としている（山田 同前）し、矢野健一氏は、刻みが施される割合が減ずる（矢野 1993）としている。このことに関しては、本遺跡での傾向と、立野式土器全般を見据えた両氏の指摘事項とは、比較のレベルが異なることが原因か、あるいはどちらか一方が的確に変化を把握しているかであろう。

口唇部施文と主要な文様の類型との関係についてみると（挿図9）、施文される比率は、格子目文－100%（9/9）、山形文－66.7%（16/24）、楕円文－77.3%（17/22）、市松文－88.9%（8/9）、ネガティブ文－90.7%（39/43）、となっている。格子目文と市松文は母集団が小さいことから比較は



挿図6 口唇部形状各種の点数（器形別）

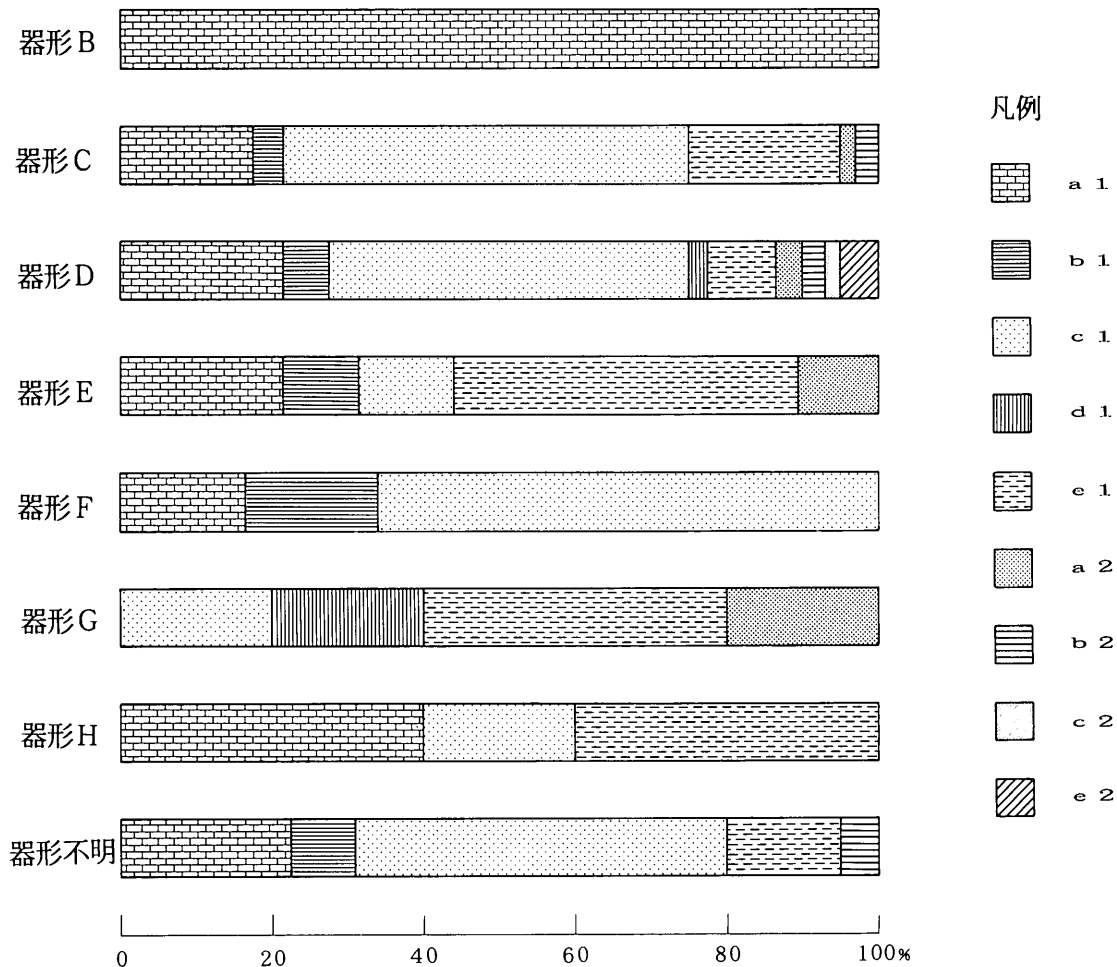
難しいかもしれないが、本報告書で時間軸の指標とした格子目文において、口唇部施文の比率が高いことは注目すべきかもしれない。

口唇部施文の施される部位については、口唇部端面から外縁に変化している（挿図12）。この点は、上述の口唇部形状の変化と連動する動きと考えられる。

④文様構成

各住居址で把握された文様構成各型は、挿図17のとおりである。A群→B群→C群の変化として、異種原体併用（Ⅶ）型が減少しC群ではみられないこと、Ⅲ型～Ⅴ型がB群で登場すること、Ⅱa型がB群に、Ⅵ型がC群にその存在する可能性が指摘されること、があげられる。Ⅶ型は、異種原体が併用される以外は、Ⅲ型の文様構成と同じ口縁部横位密接施文／胴部以下縦位密接施文であり、A群からC群まで連続するととらえることができる。こうしてみると、本遺跡ではⅠ型～Ⅲ型が変わらない文様構成と考えられる。

Ⅱa型は、SB20のネガティブ文D・同Eにその存在の可能性が指摘されたが、他遺跡でも伊那市三



挿図7 口唇部形状各種の出現率（器形別）

つ木遺跡例があるくらいである。本遺跡においても底部まで復元できるものはⅡb型が圧倒的多数であり、存在が疑問視される。

住居址やその他の遺構、および遺構外を横断して、文様別にどの文様構成がとられるかをみると、

格子目文A-I型・Ⅱb型（・Ⅳ型）、同C-II型

山形文A-I型～Ⅲ型・Ⅴ型、同B-I型・Ⅲ型（・Ⅴ型）、同D-I型・Ⅲ型（・Ⅳ型・Ⅴ型）

楕円文A-IIb型（・Ⅰ型・Ⅲ型）、同B-II型、同D-I型・Ⅱb型（・Ⅲ型・Ⅴ型）

同E-II型、同F-II型

市松文A-I型・Ⅱ型、同B-IIb型、同C-I型・Ⅱ型、同D-II型

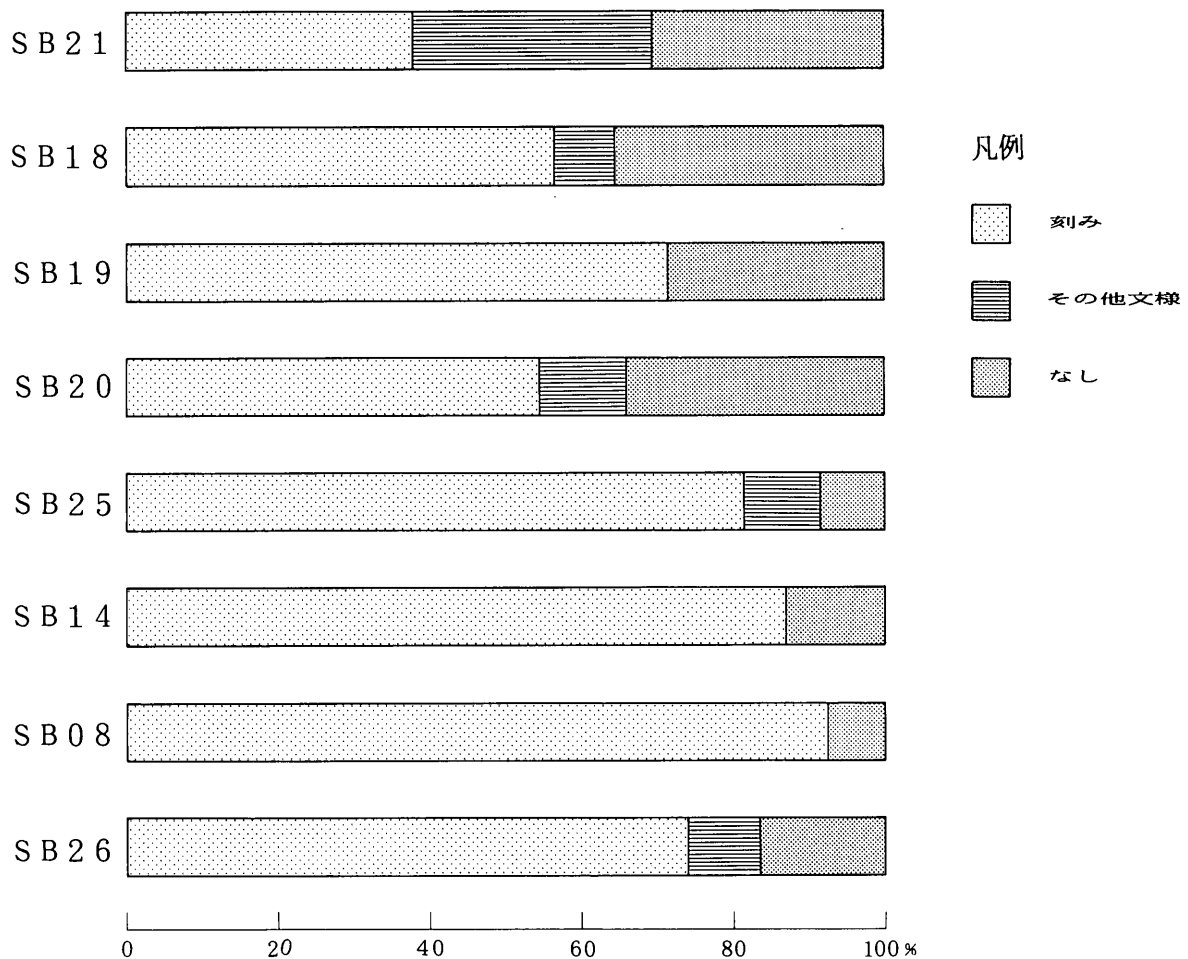
棒状文A-II型、同B-II型

ネガティブ文B-II型、同D-I型・Ⅱb型・Ⅲ型（・Ⅱa型）

同E-I型・Ⅱb型・Ⅲ型（・Ⅱa型）

撚糸文-I型、網目状撚糸文-II型・Ⅳ型

である。上述のように、本遺跡でⅠ型～Ⅲ型の文様構成が変わらずにとられていることは、格子目文



挿図8 口唇部施文（住居址別）

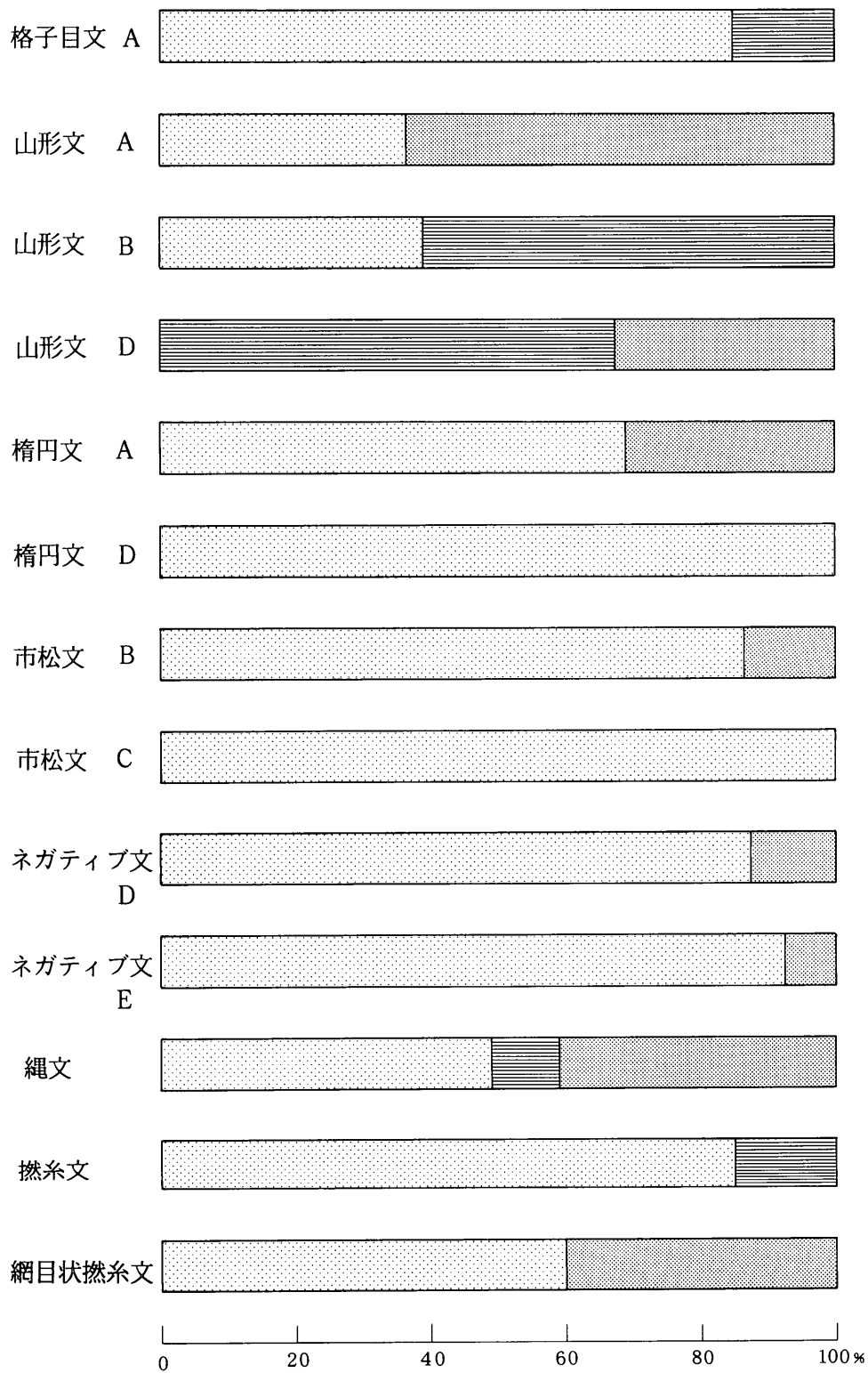
A・山形文A・同B・同D・楕円文A・同D・ネガティブ文D・同Eが、A・B・C各群において安定的にあった所以であろう。

⑤原体

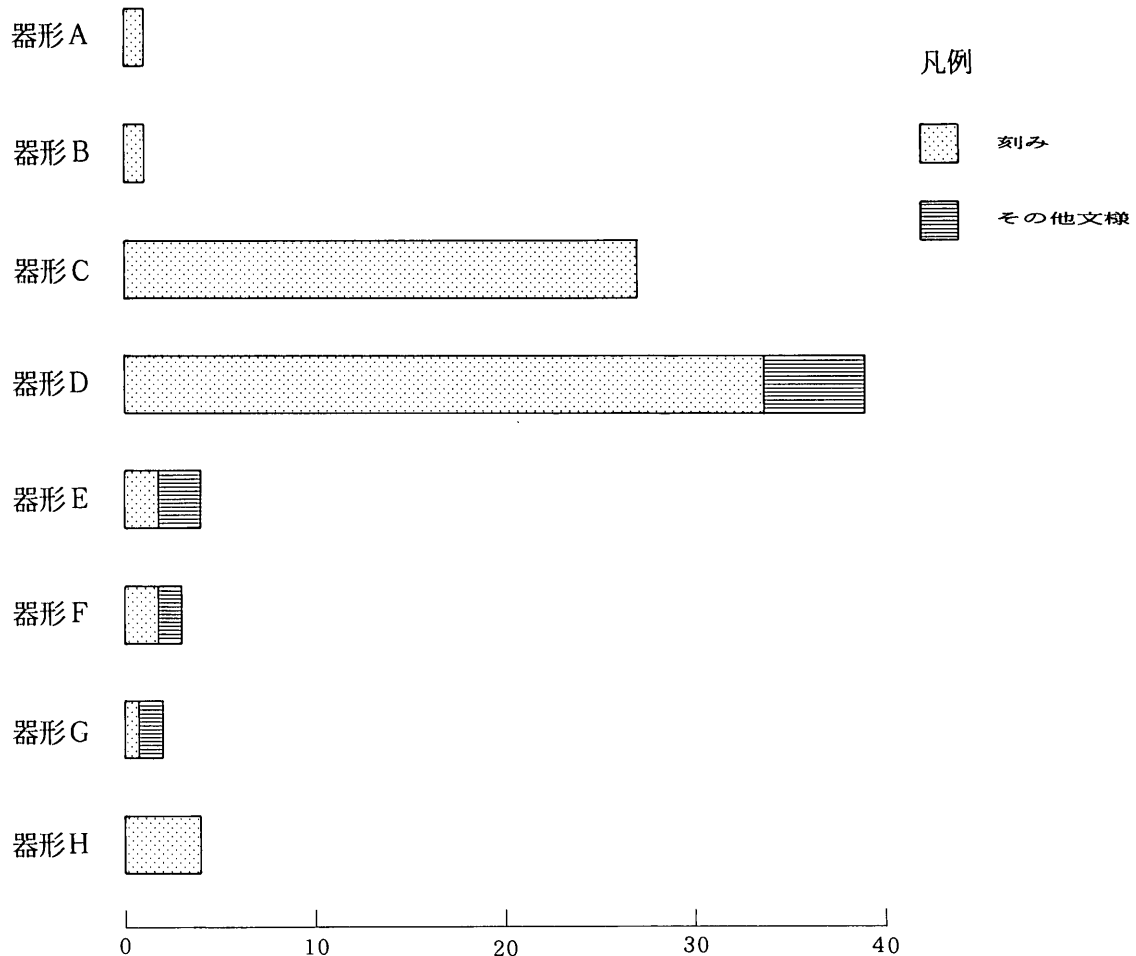
格子目文Aは、4単位12点・3単位10点・2単位6点で、4単位の増加と、3単位・2単位の原体が減少する傾向がある。原体幅は平均で16.5mm→14.7mm→13.9mmと減じる。格子目文Dは、4単位・原体幅14.0mm・17.0mmを測る。格子目文Eは、原体長は31.0mm以上、4単位・原体幅17.0mmと2単位・原体幅14.0mmがある。格子目文Fは、3単位4点・2単位1点で、原体幅は9.5mm～17.0mm、平均14.3mmを測る。

山形文Aは、原体長の判るものは19.5mm・27.0mmで、原体幅は11.5mm～20.0mm、平均15.8mmを測る。山形文Bは、2単位が13点で、原体幅は14.0mm～20.5mm、平均17.6mmを測る。山形文Cは、2単位1点、原体幅12.5mmである。山形文Dは、原体長28.0mm、原体幅は13.0mm～25.0mm、平均16.5mmを測る。

楕円文Aは、3単位3点・2単位59点・1単位2点で、原体幅は7.5mm～16.5mm、平均11.4mmを測る。



挿図9 口唇部施文（主な文様の類型別）



挿図10 口唇部施文の点数 (器形別)

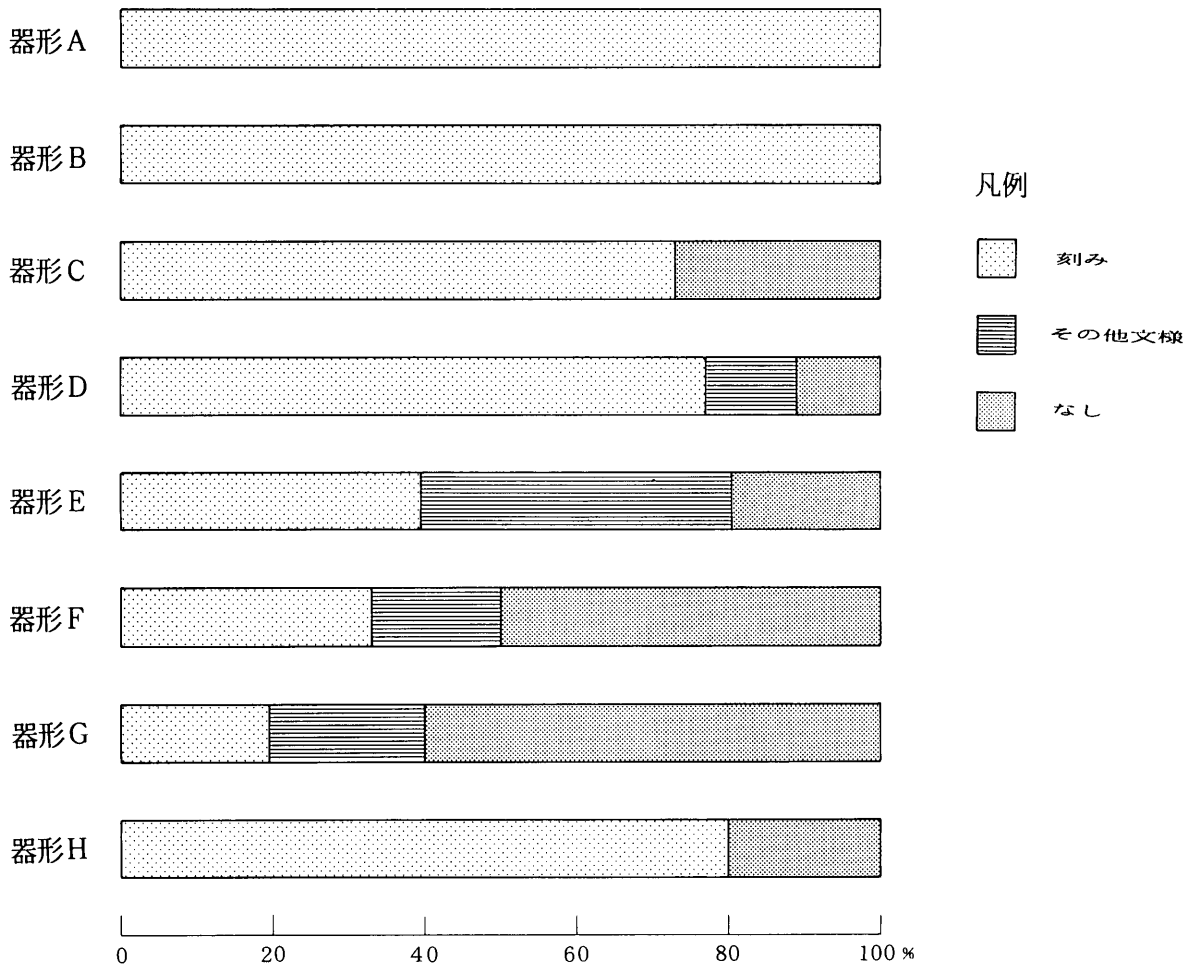
楕円文Bは3単位1点・2単位8点で原体幅は8.0mm~14.0mm (平均10.8mm)、楕円文Cは3単位1点・原体幅16.0mm、楕円文Dは2単位4点・1単位6点で原体幅は11.0mm~24.0mm (平均16.0mm)、楕円文Eは2単位3点・原体幅9.0mm~10.5mm (平均9.7mm)、楕円文Fは2単位3点・原体幅10.0mm~11.5mm (平均10.8mm) である。

市松文Bは3単位2点・2単位13点で原体幅8.5mm~14.0mm (平均11.4mm)、市松文Cは2単位で原体幅21.0mm・23.0mmを測る。

小楕円文Bは3単位・2単位各1点で原体幅はどちらも13.0mm、小楕円文Cは3単位・2単位・1単位各1点で原体幅11.0mm~16.5mm (平均13.5mm) を測る。

棒状文Aは4単位で、原体幅9.5mm・12.5mmである。

ネガティブ文Aは2単位、ネガティブ文Bには3単位のもの2単位のものがあると考えられる。ネガティブ文Dは、原体長36.0mm、3単位2点・2単位77点で原体幅8.5mm~15.5mm、原体幅平均のA群→B群→C群の推移は、12.5mm→11.2mm→10.8mmと小さくなる。ネガティブ文Eは3単位1点・2単位34点で原体幅8.0mm~13.0mm (平均10.5mm)、ネガティブ文Hは3単位1点・2単位2点で原体幅は15.0



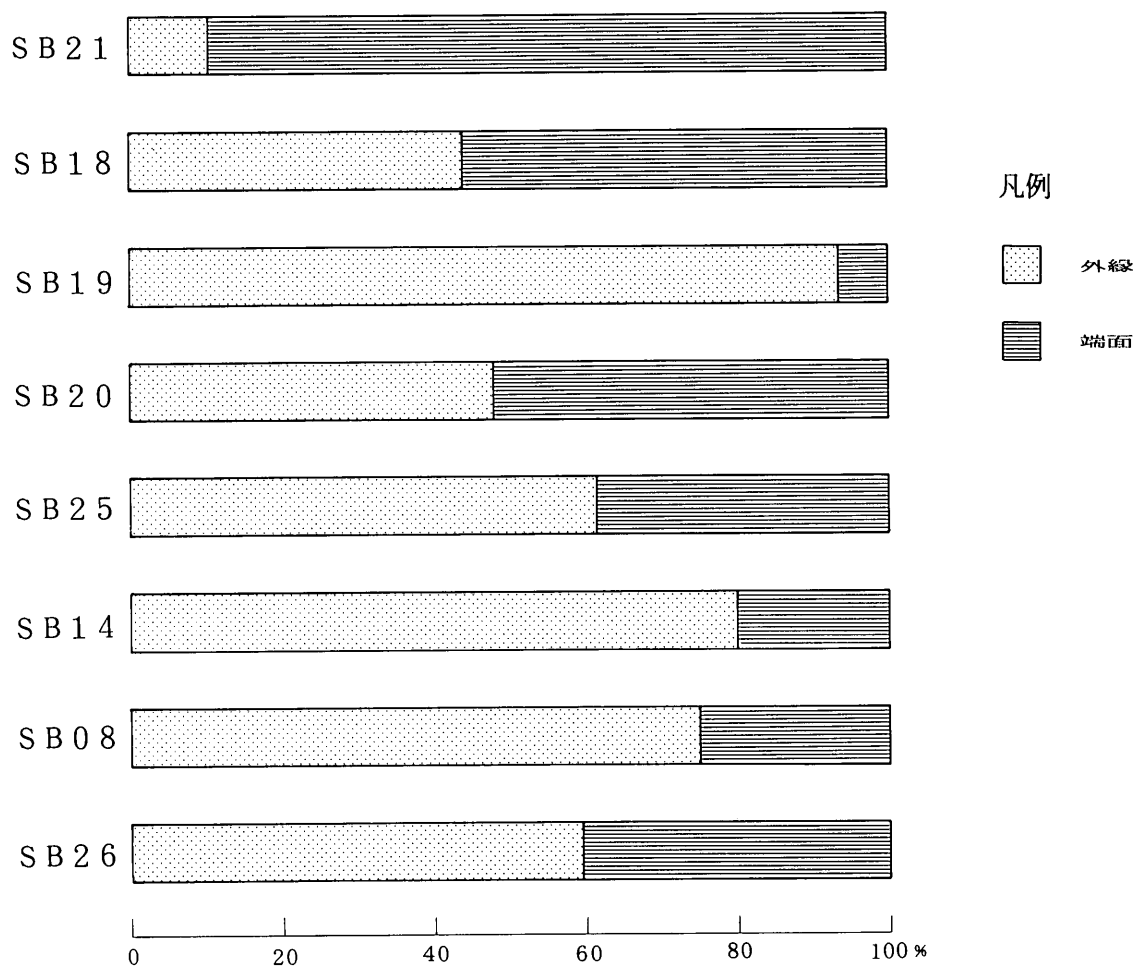
挿図11 口唇部施文の出現率 (器形別)

mm・24.0mmを測る。

縄文は、撚紐LRが13点、撚紐RLが19点で、原体幅の判るものは12.5mmである。撚糸文は、撚紐LのL巻き5点、同R巻き2点、撚紐RのL巻き13点、同R巻き12点で、撚紐の選択の仕方が縄文とは対照的である。網目状撚糸文は、撚紐LをR巻き・L巻きしたものが6点、撚紐RをR巻き・L巻きしたものが1点で、これまた撚糸文とは撚紐の選択が異なっている。2単位の原体で、原体幅8.5mm～14.0mm (平均12.8mm) である。

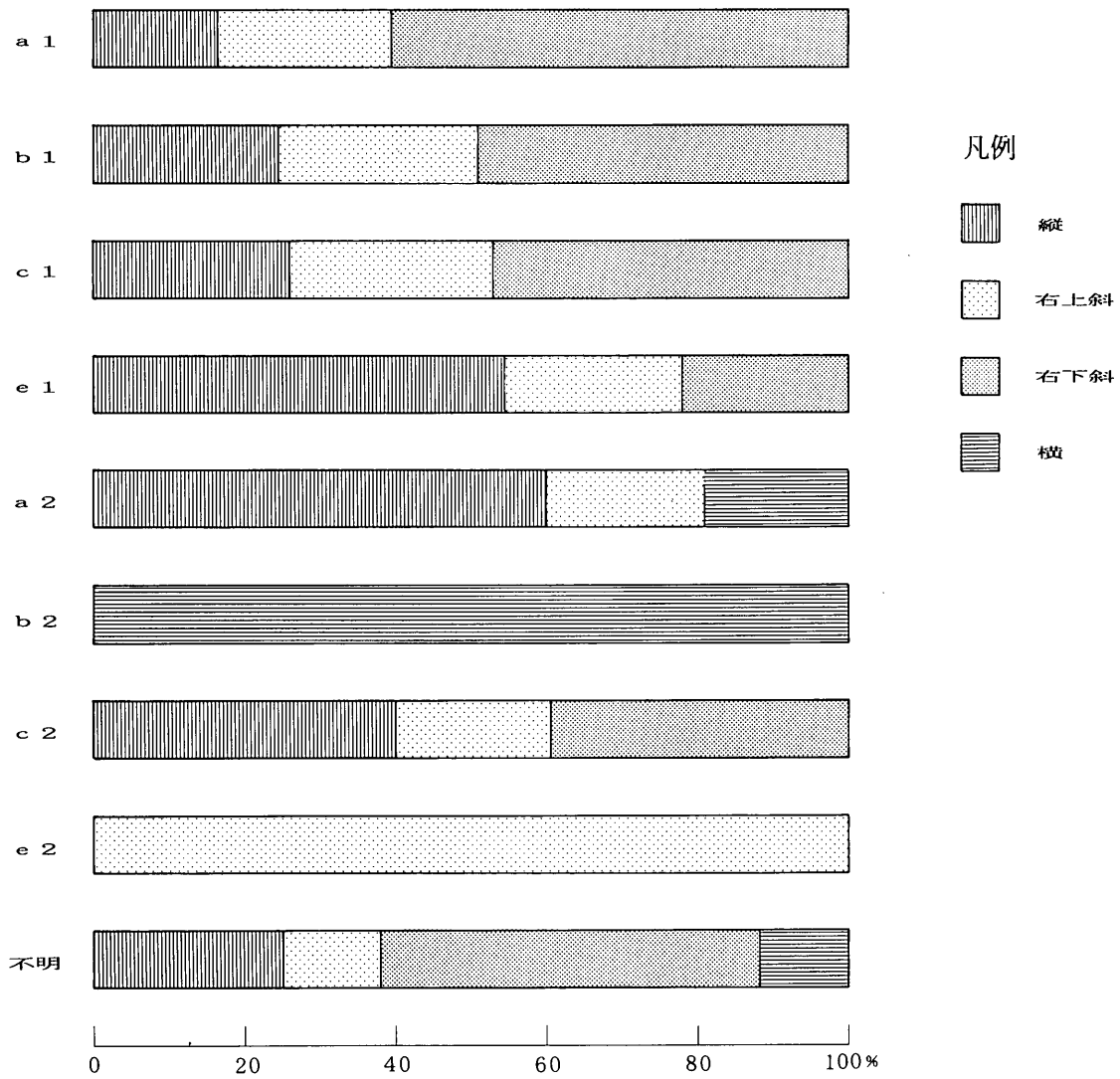
以上のように、原体幅15mm前後の径の大きな棒軸を用いる格子目文・山形文・一部の楕円文 (C・D) およびネガティブ文Hと、原体幅10mm程度の径の小さな棒軸を用いる楕円文 (A・B・E・F)・市松文・棒状文・ネガティブ文 (H以外)、それに中間的な径の棒軸を用いる小楕円文とがある。さらに、原体長の平均は28.3mm程度と長めの棒軸が使用されている。また、原体幅の経時的变化は、A群・C群の母集団がB群よりかなり少ないため十分に把握できていないが、小さくなる傾向があるようである。

⑥胎土

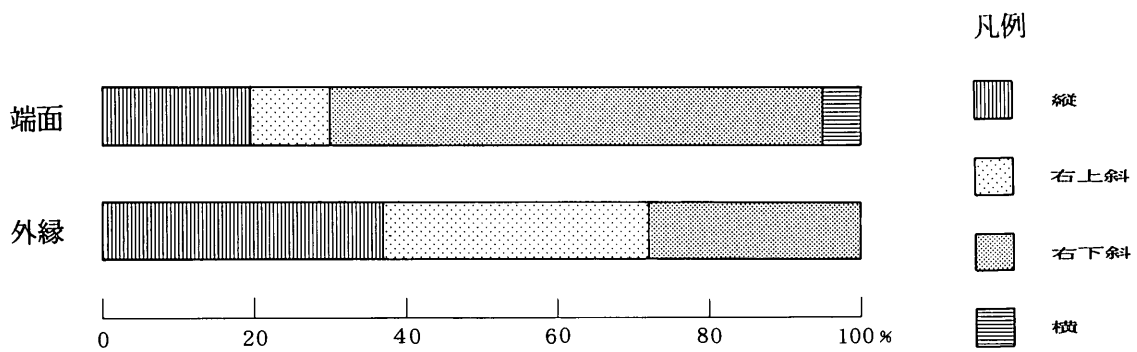


挿図12 口唇部施文の部位 (住居址別)

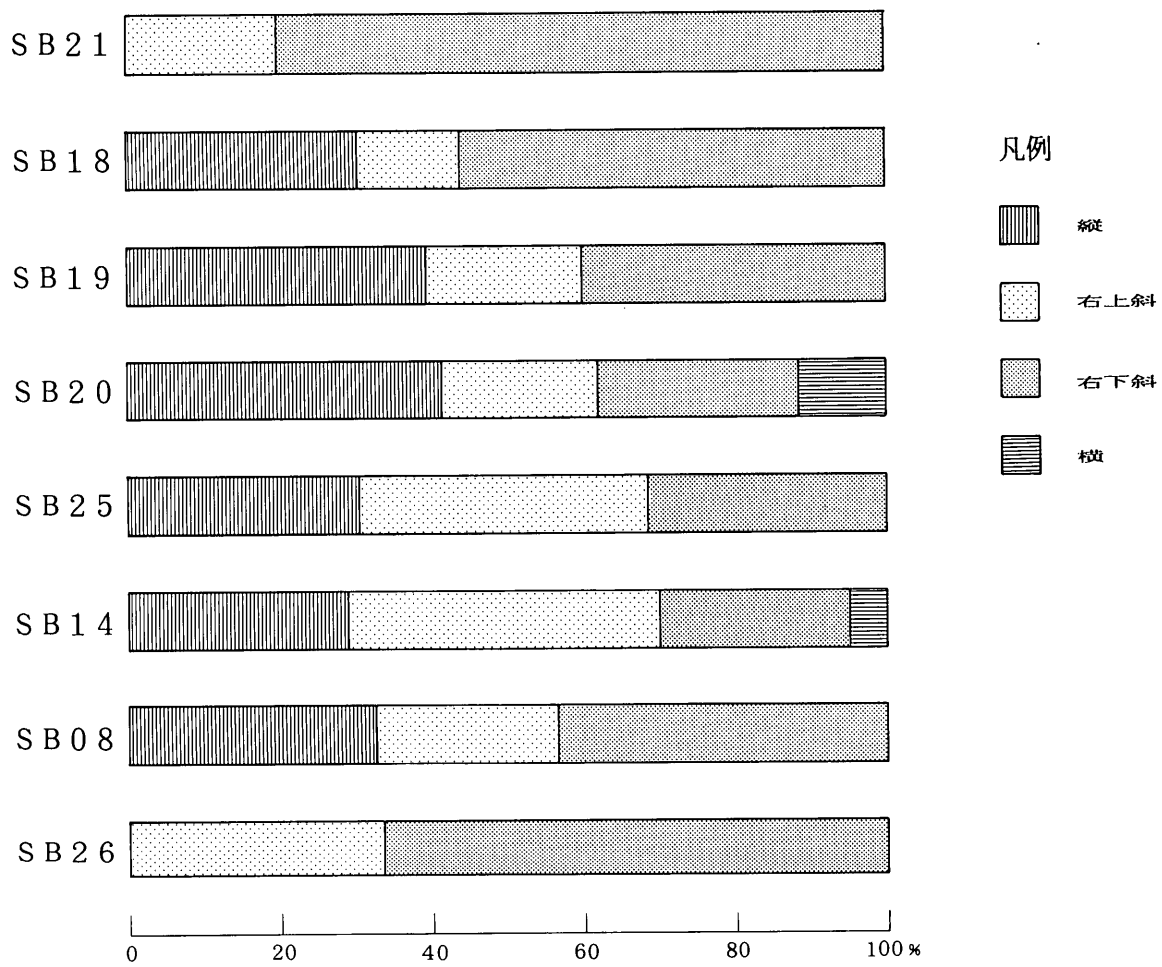
個々の遺物の記述の中では、特記されるものを除き記述を省略してきたが、いわゆる立野式土器の特徴として「石英・長石そして雲母の粉末を多量に含む。」(松島 1957) ことがあげられる。個々の遺物で観察された内容は、石英・長石を含むもの (胎土A)、石英・長石・雲母を含むもの (胎土B)、石英・長石・雲母を含みかつ繊維を含むもの (胎土C)、石英・長石を含みかつ繊維を含むもの (胎土D)、わずかに石英を含むもの (胎土E)、のおおむね5種類がある。繊維を含むものの割合は、きわめて小さい。各住居址別にみると挿図18のとおりであり、A群→B群→C群の変化として、雲母が減少する傾向が指摘できる。これは、雲母が細片化するとともに、内外面の調整が丁寧になるため、肉眼での観察が容易でないということに起因している。こうした特徴の他、雲母と同様、石英・長石も細片化するようである。マトリックスの特徴は等しいことから、使用される粘土が変化するのではなく、むしろ混和材が播り潰されるなどして細片化した可能性があるかもしれない。直接的にそれを裏付けるものはないが、石皿や硬砂岩素材の特殊磨石などはこれと関連して考えるべきかもしれない。また、内外面の調整が丁寧に行なわれることは、土器の器面調整具としての磨製石斧がB群から登場することと関連づけられるだろう。



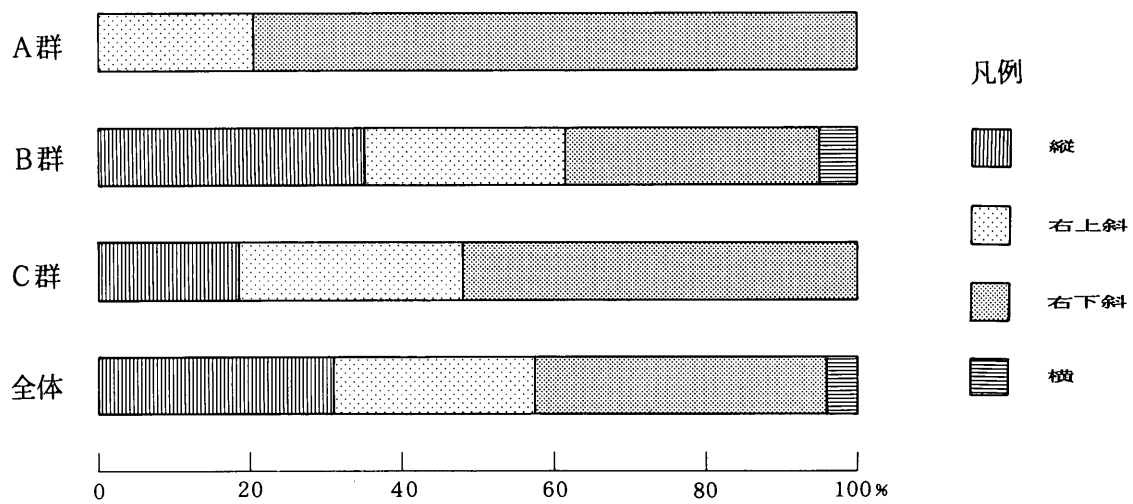
挿図13 口唇部施文の方向 (口唇部形状別)



挿図14 口唇部施文の方向 (口唇部部位別)



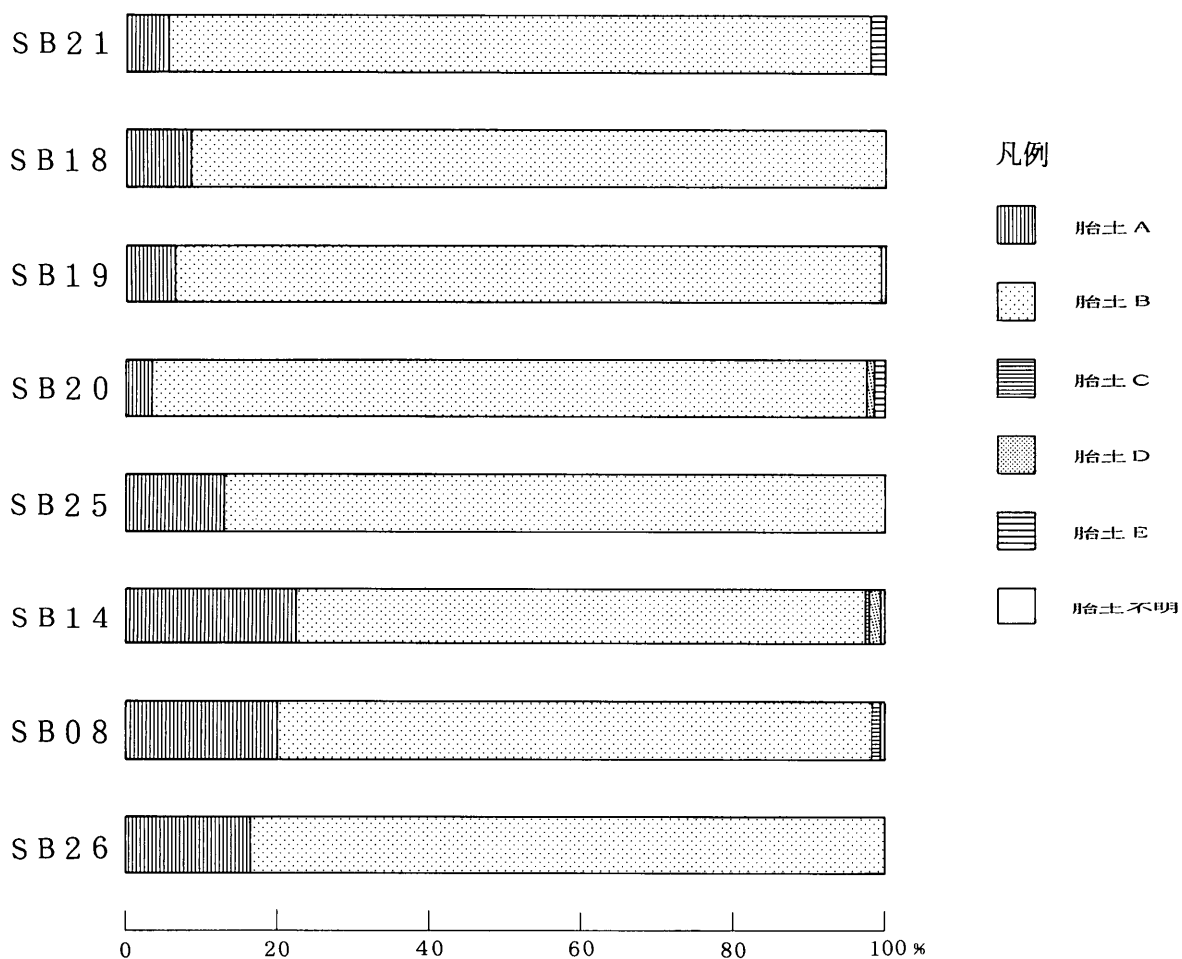
挿図15 口唇部施文の方向（住居址別）



挿図16 口唇部施文の方向の消長

	I型	II型		III型	IV型	V型		VI型	VII型
		II a型	II b型			V a型	V b型		
SB21	○		○						○
SB18	○		○	○					○
SB19	○		⊙	?	?		⊙		○
SB20	○	?	○	○					
SB25	○		○		○				
SB14			○	?					
SB08			○	?					
SB26	○		○	○				?	

挿図17 各住居址における文様構成各型（?は存在する可能性があるもの）



挿図18 胎土の組成比（住居址別）

	口縁部	胴上部	胴部	胴下部	底部
S B21	8.1	7.5	7.3	8.0	7.0
S B18	6.9	7.0	7.0	6.8	7.8
S B19	8.0	7.4	7.3	7.2	6.5
S B20	6.9	7.5	7.0	7.3	6.0
S B21	7.0	7.1	6.5	7.8	
S B14	7.0	7.2	6.8		10.0
S B08	6.4	7.3	6.8	6.8	
S B26	7.3	7.7	7.3	6.0	

A 群	8.1	7.5	7.3	8.0	7.0
B 群	7.1	7.3	6.9	7.5	7.0
C 群	6.8	7.4	7.0	6.6	

挿図19 部位別の器厚の平均値（単位：mm）

⑦器厚

胎土と同様、個々の遺物について、特記されるもの以外記述を行なわなかった。各住居址の器厚の範囲（その平均）は、S B21-4～11mm (6.6mm)、S B18-4～12mm (6.9mm)、S B19-5～12mm (7.4mm)、S B20-4～12mm (7.1mm)、S B25-4～10mm (6.6mm)、S B14-4～11mm (7.0mm)、S B08-4～11mm (6.8mm)、S B26-4～10mm (7.3mm)

平均のA群→B群→C群の変化は、6.6mm→7.0mm→7.0mmで、やや厚みが増すといい得るかもしれない。

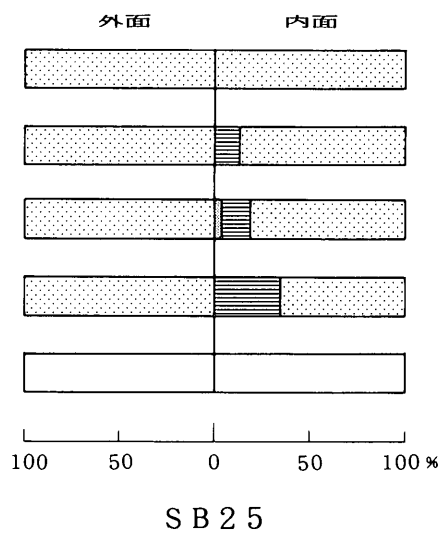
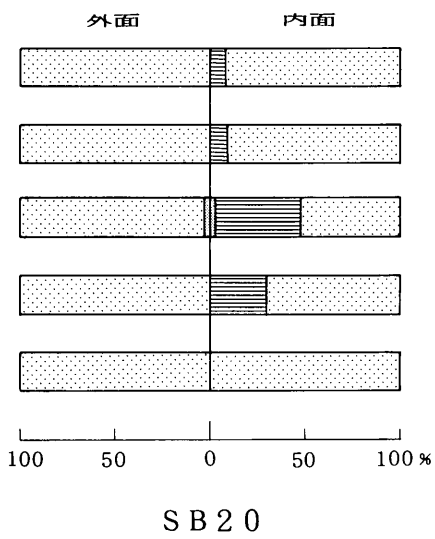
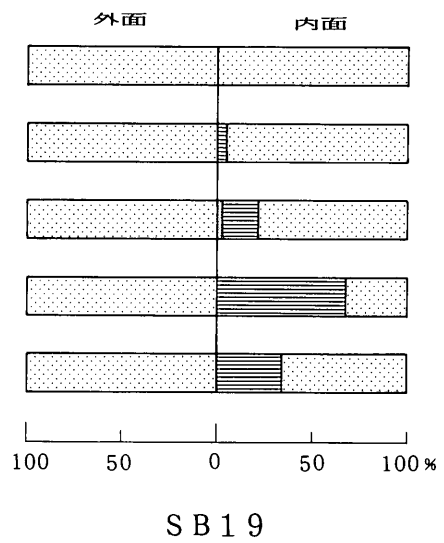
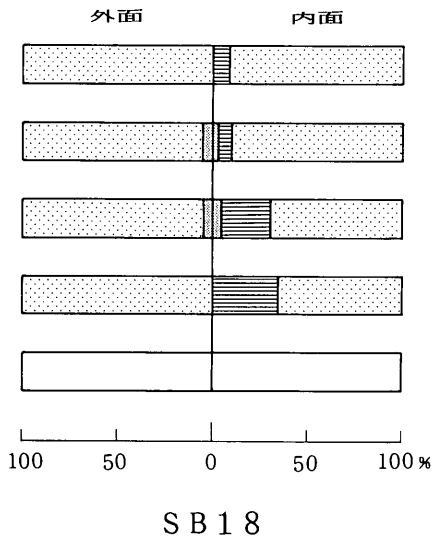
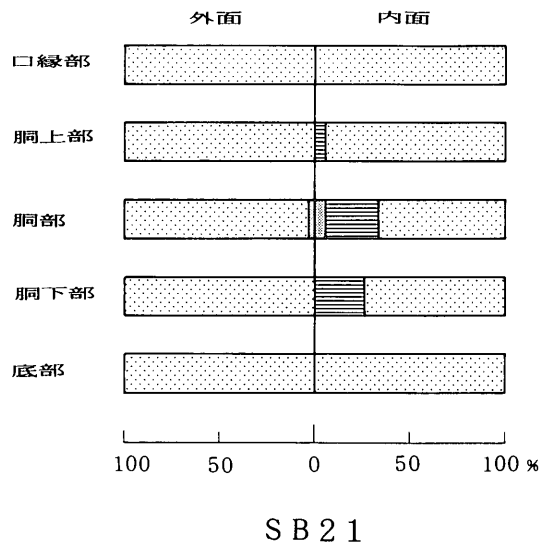
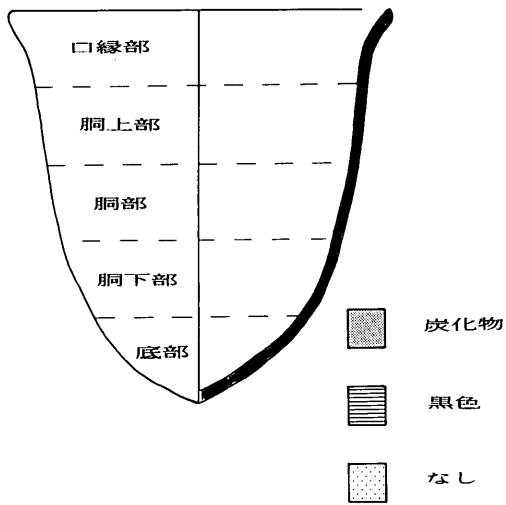
器厚の平均値でみると（挿図19）、S B21では、口縁部は厚く胴部にかけて薄くなり、胴下部はやや厚く底部は薄くなる。S B18は口縁部から胴下部までほぼ一定の厚さで、底部は厚くなる。S B19は口縁部は厚く、底部にかけて厚さを減じる。S B20は口縁部はやや薄い胴上部は厚くなり、底部にかけて器壁が薄くなる。S B21・S B14は胴部まではS B20と同様だが、以下底部にかけて厚くなるようだ。S B08・S B26の底部は判らないが、おおむねS B20の器壁と同様の变化を辿る。

A群→B群→C群の変化としては、口縁部および胴部～胴下部が薄くなるのに対して、胴上部はあまり変化せず、結果として胴上部が一番分厚くなっている。

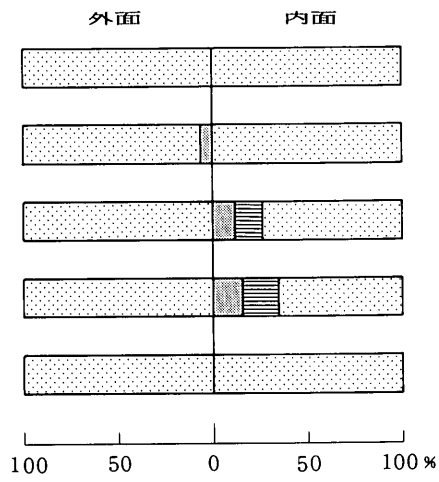
⑧炭化物

本遺跡出土の土器には、内面に炭化物（いわゆるおこげ）が付着するもの、内面が黒色を呈するもの、あるいは外面に炭化物（煤）が付着するものが多いが、個別に記述は行わず、全体の傾向をまとめておく。

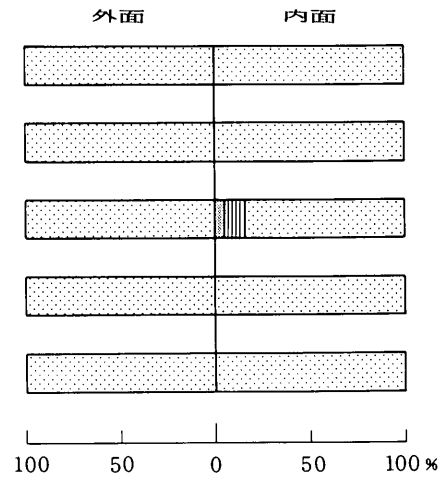
各住居址別に、内面に炭化物が付着するもの、同黒色を呈するもの、外面に炭化物が付着するものの出現率を部位別にみたのが、挿図20・21である。底部および胴下部は出現率が高いが、これは資料数の少ないことが原因になっているので、注意を要する。内面の炭化物は胴部を中心に胴上部および胴下部



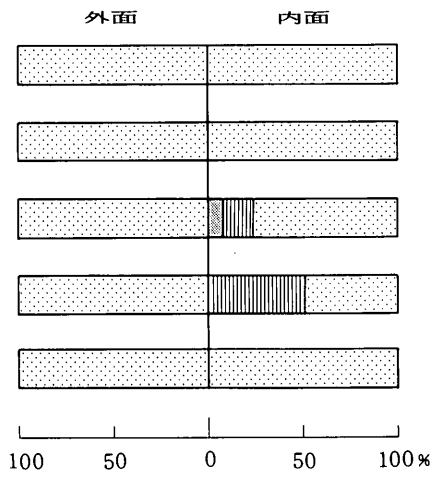
挿図20 炭化物出現率 (住居址別)



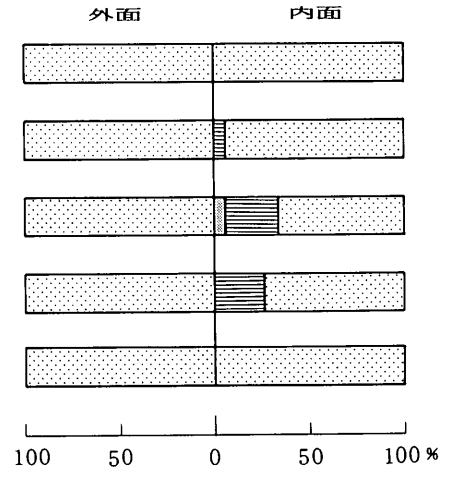
SB14



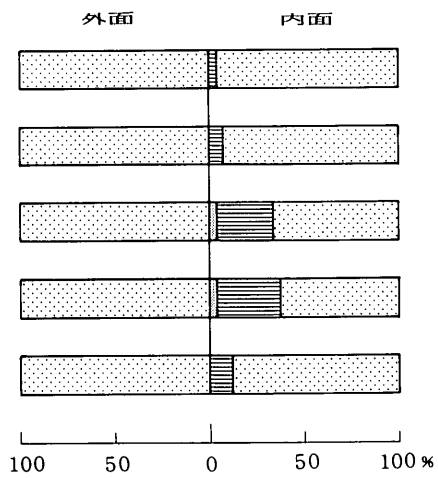
SB08



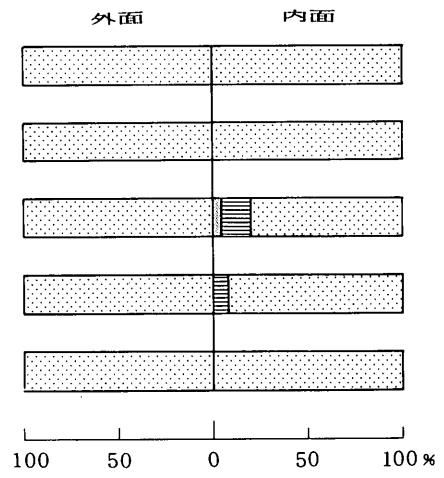
SB26



A群



B群



C群

挿図21 炭化物出現率（住居址別）とその消長

にもわずかにみられる。内面黒色を呈するものは、やはり、胴部を中心に胴下部から胴上部の出現率が高く、S B 18・S B 20では口縁部まで及んでいる。A群→B群→C群の変化として（挿図21）、B群の出現率が高く、口縁部にまでおよぶ変化が観察される。盛んに煮沸が行なわれたことを示すと考えられる。住居址内に地床炉をもつもの（S B 08・S B 14・S B 18・S B 19・S B 21）ともたないもの（S B 20・S B 25・S B 26）では、内面の炭化物付着・黒色化の出現率には、特に差異はない。

土器外面の観察からは、土器がどのように煮沸に用いられたかを考える手掛かりが得られている。まず第1に、土器外面の炭化物の付着部位は、胴部および胴上部である。口縁部にまで炭化物の付着がおよんでいないことから、この部分は火にあたっていなかったと考えられる。第2に、外面底部付近の特徴として、尖底部が剥落したもの、熱を受け白色を呈するものが多い。このことは、底部に火が直接あっていたことを示すものである。これに関連して、第3に、東日本の縄文時代早期の貝殻文土器で指摘されている（佐川 1979）ような、同心円状ないし螺旋状の擦痕が底部には観察される例がない。すなわち、土器を正立させるために地面に突き刺したとは、本遺跡の場合考え難い。第4に、先述のとおり、内面の炭化物や黒色化の出現率は、住居址内に地床炉があるなしとは特に関係がない。すなわち、地床炉が煮沸が行なわれた場であることの裏付けはない。こうした状況から、炉穴の機能の一つとして、土器による煮沸があったのではないだろうか考える。炉穴S K 411-426-427から土器1個体（約1/2遺存）が出土していることも、傍証となろう。あるいは、土器の口縁部が大きく外反するものが多いのは、こうした使用方法の故かもしれない。ただ、これまでのところ、炉穴の調査例でこうした土器を火にかける構造のものはみつかっていない。

⑨土器の製作技術

成形は、上下端に表れた接合痕の観察から、粘土帯積み上げによると考えられるものがほとんどである。粘土帯の幅は、第24図27では47mmを測る。樋沢遺跡では、「矩形を呈する破片では上下幅3～4cmの値のものに、擬口縁をもつ例が多い。この幅が一粘土帯幅を示す可能性がある。」ことが指摘されており（小杉 1987）、本遺跡でもこうした傾向がある。

接合痕には、上端で上向きに凸ないしは下端で下向きに凹のものが多く、上端上向き凹ないし下端下向き凸、あるいは上下端に内傾・外傾の接合痕（外傾・内傾については小杉康氏の用法と佐原真氏の用法が異なっている。本報告書は学史に則り、佐原 1967の用法に準拠する。）が観察されるものが若干ある。

上端上向き凸ないし下端下向き凹の接合痕は、全ての部位で確認されている。特に、胴下部では、S B 01で上端上向き凸が1点、S B 20は上端上向き凸、下端下向き凹が各1点あり、下端下向き凸はネガティブ文Eが上横位密接／下縦位密接施文される。S B 25では上端上向き凸が3点、S B 26には上端上向き凸2点があり、前者の1例にはネガティブ文D、後者の1例には楕円文Aがそれぞれ上横位密接／下縦位密接施文される。

これとは逆位の、すなわち、上端が上向きに凹、ないしは下端が下向きに凸の接合痕は、胴部から底部に限られる。S B 14では、胴部2点に下端下向き凸の接合痕があるが、そのうち1点はネガティブ文Dが上横位密接／下縦位密接施文で、胴下部に近いと考えられる。S B 18も胴下部に下端下向き凸の接合痕が1点ある。S B 20では、下端下向き凸－胴部1点・胴下部1点、上端上向き凹－胴部1点がある。

S B21・S B26には、下端下向き凸の胴部破片がそれぞれある。遺物の上下方向は主に内壁の湾曲度により決定したため、胴部の直立する器形においては上下の判別に苦慮したものがあるが、胴下部においては上下が間違える可能性はほとんどない。

上記2者は、上下方向は異なるものの、小杉康氏が第1～4手法に類型化した積みあげの第1手法（小杉 同前）に該当する。第1手法で粘土帯を積み上げる場合、通常上に乗せた粘土帯の内外面の粘土を下方に移動させ、粘土帯同志を接着させるため、接合後も下段の上端の形状が保持される。上端上向き凸ないしは下端下向き凹の接合痕が観察されるのは、このケースである。反対に、上端上向き凹、下端下向き凸の場合、積み上げられた順序が逆で、上段が先・下段が後ということが考えられる。

本遺跡では、底部から胴部にかけては、上端上向き凹ないし下端下向き凸の接合痕と、上端上向き凸ないし下端下向き凹の接合痕が観察される一方で、口縁部から胴部にかけては、上端上向き凹ないし下端下向き凸の接合痕は観察されていない。このことから、成形においては、2段階の製作過程があり、第1段階の器体下半については、2通りの積み上げ方法がある。1つは底部から胴部に広げながら積み上げていく方法、もう1つは胴部から底部にすぼめながら積み上げていく方法である。次に、第2段階として胴部から口縁部が積み上げられる。

この他に、内傾・外傾の接合痕がある。この場合も、下段粘土帯の上端部（内傾では外面側、外傾では内面側）は接合後も形状が保持される。しかし、先端が鋭くなっているためたいてい欠損しており、実際に観察できるのは内傾の内面側および外傾の外面側である。同様に、上段粘土帯の下端部では内傾の外面側および外傾の内面側で接合の様子が良好に観察できる。これらを把握できれば、口縁部側から逆位に積み上げたか、あるいは底部側から積み上げられたかを判断できる。また、粘土を土器の内側に継ぎ足したか、それとも外側に継ぎ足したかも判る。粘土を内側に継ぎ足すものは、「内傾した擬口縁を用意し、それにあらかじめ平たくした粘土紐を土器の内側の斜め上方から継ぐ」（小杉 同前）第2手法に相当するが、外側に継ぎ足すものについては類型化されていない。そこで、小杉氏の定義に続け第5手法として、「外傾した擬口縁を用意し、それにあらかじめ平たくした粘土紐を土器の外側の斜め上方から継ぐ手法」を定義しておく。すると、内傾・外傾の接合痕については、以下の4種類に整理できる。a 底部側から第2手法で積み上げたもの（第7図14・第14図31・第20図4等）、b 底部側から第5手法で積み上げたもの（第7図12・第14図31等）、c 口縁部側から逆位に第2手法で積み上げたもの（第23図29等）、d 口縁部側から逆位に第5手法で積み上げたもの（第7図18等）、と整理できる。しかし、第1手法に比して数は微々たるもので、部位別に特徴を把握するまでには至らなかった。現状では、第1手法を用いた成形と同様、2段階2種の積み上げ方法があったと考えておきたい。

なお、第19図4は、接合の際に上段から引き伸ばされた粘土の下に施文がみられ、施文後にさらに積み上げが行なわれたことを示す。

3) 予察

以上、住居址出土の遺物を中心に美女遺跡の第Ⅱ群第1類土器の特徴をまとめた。本報告書は資料提示を第一義とし、立野式土器の編年研究を目的としたものではないので、若干の予察を述べて、出土資料の位置づけ、まとめとしておきたい。

S B01・S B11・S B24については、出土遺物が少ないため、設定した時間軸上への位置づけが困難であった。ただ、S B01については表裏に縄文が施文される土器と共伴しており、本遺跡でも古い段階（A群かそれ以前）に位置づけることができそうである。果たしてこの表裏に縄文が施文される土器が、表裏縄文土器に含められるのかどうか、さらに表裏縄文土器を他地域のどの土器群と併行関係におくのかなど、様々な問題がある。これらの問題について十分な検討を行っていないのが現状であるが、一応表裏縄文土器としておく。S B01では表裏に縄文が施文される土器の他に、撚糸文が施文される土器が多く、こうした縄文・撚糸文が表裏縄文土器と押型文土器の間を埋める土器である可能性がある。東海地方東部においても、同様の指摘があることは注目される（矢野 1993）。今後、こうした縄文・撚糸文土器をどう位置づけるかが課題である。あるいは、上伊那郡宮田村向山遺跡での表裏縄文土器と立野式土器の出土例について、再検討することが必要なのかもしれない。

本遺跡で古い段階に位置づけたS B21では、口縁部横位以下縦位密接施文され、異種原体が併用される等、大川式土器に類似したの特徴をもつ土器が1個体出土している（第22図1・2）。この土器を搬入品とみるか、それとも在地の土器とみるかは、立野式土器の成立に対する見解に大きく関係しよう。すなわち、前者は表裏縄文土器に立野式の起源を求める立場であり、後者は近畿地方の大鼻・大川式系押型文の影響を受けて立野式が成立したとする立場である。胎土からみる限り、第22図1・2は在地の土器で、後者に分があるように思われる。

本遺跡で設定した時間軸では、時間が下降するに従い格子目文が増加することが指標となった。この延長線上には、伊那市百駄刈遺跡・茅野市頭殿沢遺跡・更埴市鳥林遺跡等、格子目文が主体の遺跡を位置づけることが可能かもしれない。現状では、百駄刈遺跡以南において格子目文主体の遺跡は調査例はない。こうした空白域があることからすれば、地域差である可能性も考慮すべきであるが、格子目文が主体でない遺跡もこれらの地域では調査されていることから、地域差ではなく時間差と考えることが妥当かもしれない。とすれば、本遺跡は立野式の第1段階、上記の格子目文が主体の遺跡は立野式の第2段階とすることができるし、十分な型式学的検討を経た上では立野式土器の細分もでき得る。

最後に他地域との関係について触れる。先述のS B21出土土器は、大鼻・大川式系の押型文のうち、山田猛氏の「大川a式」（山田 1988）、あるいは矢野健一氏の「大川式古段階」に近い特徴をもつと考えられ、近畿地方との併行関係を論じる定点となる。関東地方の撚糸文土器群との関係については、立野式土器の構成要素となる撚糸文土器はあるが、関東地方のそれはない。第49図1等が手懸りとなろうか。楕円文Aのうち、S B20（第16図23）や遺構外出土の一部（第44図2～5）に繊維が含まれるものがある。こうした繊維が含まれる押型文土器は、細久保式以降にもあるが、原体の特徴等は細久保式とは異なっている。繊維が入る東海地方東部の土器群との関係を検討すべきと考えられる。

第Ⅱ章 美女遺跡の石器について

第1節 資料の観察と選択及び概要について

(1) 石器の時期

美女遺跡は主に縄文時代早期、前期、中期、弥生時代後期の土器を出土した遺跡である。石器もその時期に対応することを前提としよう。

美女遺跡の資料整理は、最初に観察・分類・選択を図化に先だてて行い、有効な資料体をあらかじめ決めた。資料体として選択した資料は2679点である。そのうち図化に有効な資料823点を本文に掲載した。図化したが本文に掲載しない資料や図化しなかった資料は1856点で、その内訳は、遺構内の大形石器474点、遺構内の小形石器（主に剥片類）514点、遺構外の大形石器567点（石核26点、削器87点、剥片類354点、磨石19点、石器・磨石断片81点）、遺構外の小形石器301点（石鏃106点、ピエスエスキュー130点、削器・搔器類65点）である。

美女遺跡の石器のうち、最も多いのは縄文時代早期前半の押型文土器にともなう石器群である。この資料で図化したものは532点である。その他の時代の資料は291点である。

(2) 石材からみた石器の特徴

全体の傾向として美女遺跡の石器はその石材属性で大きく二分される。天竜川の河川の円礫を石核にして、そこから剥離される剥片を素材とした5センチ～20センチの長さの石器。これを大形石器とする。一方和田峠の黒曜石、岐阜県の下呂石、近隣に産地があると思われる赤・青のチャート、黒色で緻密な頁岩（凝灰岩？）などを利用する5センチ以内の剥片石器がある。これを小形石器とする。

大形石器は天竜川の硬質砂岩の円礫を素材とするものが9割以上である。その石材属性は、目が粗く堅いが、一度砕けると緻密でないために、多様な偶発剥離を起こす性質をもつ。さらに円礫特有の潜在的割れや、節理面の介在などから、剥離の方向や切り合い関係に十分な目の慣れが要求された。この困難な状況のために、未だ十分に剥離の状態（技術）が観察しきれていないのが本報告での現状である。しかし、資料のほぼすべてを一度は観察し、図化するにあたって再度観察し直した結果、有る程度の見通しを得ることとなった。その大形石器で製作される器種は、ほとんどが削器類・礫器である。

小形剥片石器の石材はその9割が黒曜石である。黒曜石の産地は肉眼では和田峠とも思われるが、最近には県内でも神津島の黒曜石が確認されるなど、注意が必要である（註1）。美女遺跡では、とりあえず、良質で小形の原石が用いられていることに注意したい。その他の石材の下呂石、チャートなどは極端に少ない。凝灰岩や黒色頁岩は土坑内に石器として出土しているが、遺跡内で製作された痕跡はない。これら黒曜石以外の石材は総点数で50点に満たない。わずかにチャートに碎片があるが、下呂石、凝灰岩、頁岩などは石器が遺跡内に搬入されている。器種はピエス・エスキューと石鏃が最も多く、次に削器、搔器、ドリルなどである。黒曜石で製作されるこれらの器種は、膨大な二次加工碎片が出土しているため、遺跡内で製作されている。

第2節 用語の説明、図面の見方

報告をするにあたり、用語の整理をしておきたい。用語には、技術や現象を記述する用語（記述用語）と、記述用語を総合し分析するための用語（分析用語）の2種類がある。記述用語は、主に技術を記述する用語であるので、その内容は客観的で、記号的である。石器の表面に付いている剥離面の状態を記述するだけなので、没評価的である。一方の分析用語は、技法の内容を表現する用語なので、その石器の評価に関わる用語である。どちらも本報告で必要なので、以下に敷衍する。また、以下の用語は、竹岡俊樹氏用語を用いることにする（註2）。

(1) 用語の説明

1) 記述用語の説明

①石器の技術（註3）

石を割る技術は、ハンマーの種類と両手の動かし方という身振りで定義される。身振りによって実現される剥離面の多様性は、剥離角・刃先角などの角度と割れ円錐の広がり、稜線の立ち方など剥離面の面的状態である。身振りと道具によって角度と状態の様々な種類が生み出される。その根拠を以下に示す。

右手にハンマー、左手に素材をもつとき、ハンマーが素材にあたる角度は両手の動きで自在に変化させることが可能である。この角度によって剥離面の角度は自由に制御できる。一方、ハンマーの種類は剥離面の大きさ、稜線の立ち方、バルブの発達など、剥離面そのものの属性を決定する。

②自然石

人工の手が加えられていない石。美女遺跡では主に川原の円礫がある。

③石核

剥片を剥離するための素材。美女遺跡では大形石器では川原の円礫、小形石器は黒曜石の小形角礫が石核の素材である。

④剥片

石核から人工的に剥がされた石片。打面が残る、もしくは推定されるものに限る。打面のないものを裂片と呼ぶ。

⑤剥片の種類

剥片の種類は、石器の製作系列に応じて3種類ある。

- 1 剥片剥離作業で生ずる剥片。
- 2 剥片石器の二次加工のときに生ずる剥片。
- 3 礫器の製作で生ずる剥片である。

美女遺跡では、これらのすべての剥片がある。

⑥石器

狭義の石器は、それ自体が目的のとみなせる人工品。広義の石器は自然遺物と区別するための人工品。

⑦礫端片

自然面を打面として円礫から主に最初に剥がされる剥片。打面も背面もすべて自然面。通常は石核成形のための剥片だが、美女遺跡では、規格的な礫端片を目的剥片として剥離して、片刃削器の素材にしている。

⑧礫面剥片

打面に剥離面が残され、背面が自然面に覆われている剥片。礫端片のあとに剥がされ、通常は石核成形の剥片である。美女遺跡では、円礫石核から目的剥片として剥離されて両刃削器、搔器、ノッチ、鋸歯状削器の素材となっている。

⑨二次加工

狭義の石器を製作する目的で、素材に加えられた加工のこと。

⑩二次加工になる剥離面

二次加工になる剥離面を剥離角と加工具の違いによって以下のように分類・記述する。

a. 通常の剥離の加工

剥離角が40度から70度前後のハードハンマーの直接打撃剥離。美女遺跡では主に削器の加工と成形加工に用いられる。

b. 急角度剥離の加工

剥離角が70度よりも急な剥離。ハードハンマーの直接打撃のほか、ハンマーストーンの垂直押圧剥離でも形成される。美女遺跡では主に前者が大形石器の搔器の加工に、後者が小形石器の搔器の加工に用いられる。

c. 平坦剥離

剥離角が40度よりも小さく、面が広がる剥離。美女遺跡では、ハードハンマーの直接打撃で、主にノッチと鋸歯状の刃部に用いられる。

d. 押圧剥離

先の尖った剥離具を、素材の縁辺に押しつけて、小さな剥片を剥離する技術。美女遺跡では主に石鏃と削器に用いられる。

e. 垂直打ち

ハンマーストーンを上から振り下ろす技術。美女遺跡では、打製石斧を製作する刃潰し加工、磨石を成形する叩きなどに用いられる。

f. 研磨

対象物にむかって磨く技術。磨石のほかに、美女遺跡では円礫石核の成形にも用いられる。

以上が石器の技術を記述するうえで必要な用語である。記述用語以外に必要なのが、その記述に石器の技術属性として評価を与え、次の分析に耐えうるデータにする個別分析用語である。この記述用語と個別分析用語の定義と用法が曖昧であると、観察された現象はデータにならない。そこで以下に個別分析用語を整理する。

2) 個別分析用語の説明

①器種

考古学者が特定の石器を他の石器と区別するために付けた、私たちの呼ぶ石器の名前。その定義や名前の由来は観察者による印象的で恣意的な属性から付けられる。従って石器文化の中に実在する、製作者により作り分けられた石器の種類ではない。しかし、器種によって私たちは、文化を横断した共通のコミュニケーションができる（註8参照）。

②石器の種類

製作者によって作り分けられた石器の分類のこと。器種からはじまった分類は、その製作技法の分析を経て、製作者の意図を示す石器の種類への分類へといたるのが石器の分析である。器種と石器の種類は、厄介なことに、一致することもあれば、一致しないこともある。この場合、用語はどうしても直感的な利用法になるので、今後解決しなければならない課題である。いずれにしろ私たちの言葉で過去を復元するためには、「器種」（私たちの呼び名）と「石器の種類」（文化の中での固有の分類）という2種類の用語が必要になる。（註6参照）

③石器の技法

天然の素材を思うとおりに作りかえるには、製作者のデザインとそれを実現する技術の組み合わせが必要である。技法とは製作者が意図する石器のデザインを製作者が保有する技術で実現するための「技術のプログラム」のことである。従って、石器の企画が素材から意図されるような固定的なデザインの場合は、技法を構成する技術プログラムはスタティックになり、多分に模型的になる。石刃技法から製作されるナイフ形石器が良い例である。一方、素材の多様性を許容する石器は、その技術の構成は柔軟になり、ときに全く異なる技術が用いられるような多様性をもつ。この場合は、素材の多様性を分析し、その多様性に適用できる技術が選択されているので、技法はダイナミックな技術プログラムになる。

「技法」は「分析用語」と「比較分析用語」の2種類で使い分けられるので注意が必要である。文化の中で明らかにされた技法は文化名を付して固有名詞となる（分析を総合させる比較分析用語となる）が、分析用語としての技法は「作り方」という没評価の意味になる。単に「技法が違う」といった場合には、「石器の作りかたのプログラム（の一部）が違う」という意味となる。

④美女遺跡の特徴的な二次加工の種類

a. ノッチ

大きな剥離で抉りをいれる剥離。図では「N」。加工の種類は、通常、平坦、押圧剥離などがある。

大形石器は主に平坦剥離で刃部が形成される。石鏃は押圧剥離で鋸歯状の側辺が形成される。

b. 鋸歯状の刃部（側辺）

ノッチを連続させて実現する刃部、もしくは側辺。

c. 刃潰し加工

刃のある縁辺をハンマーの垂直打ちによって潰す剥離。美女遺跡では、早期の削器類の側辺の成形に用いられが、あまり例は多くない。主となるのは縄文中期の打製石斧の側辺の加工で用いられる。図では「T」。

d. 敲打

平面の凸凹をハンマーの垂直打ちで滑らかにする剥離。図では「K」。美女遺跡では、円礫石核の成形、磨石の成形、凹石に用いられる。

e. 研磨

磨いて滑らかにする加工。図では「S」。美女遺跡では、円礫石核の成形、磨石の成形、凹石に用いられる。研磨は技術であるが、それ自体が技法を評価する場合もある。これを1技術1技法の石器という。

以上のほかに、直線状の刃部（主に削器）、緩い弧状の刃部（主に搔器）などがある。

⑤器種分類と石器の種類

美女遺跡の器種の種類は以下である。

a. 削器（器種）

剥片を素材として、二次加工によって角度の浅い刃を付けた石器。美女遺跡では、通常は（平滑面付き）片刃削器（石器の種類）である。そのほかに特殊な刃の種類にノッチ、鋸歯状の刃部をもつ削器などがある。

b. 搔器（器種）

剥片を素材として、素材の背面、礫端片の場合は主に自然面に二次加工によって急角度の刃を付けた石器。美女遺跡では次の2種類が製作されている。どちらも押型文土器と共存する。大形搔器（石器の種類）は円礫石核や石核断片を素材として、直接打撃で急角度剥離の刃部を形成している。円形搔器（石器の種類）は黒曜石の小形角礫や両極石核を利用して押圧剥離で急角度剥離の刃部を形成している。

c. 打製石斧（器種）

扁平な剥片を素材として、素材の両側辺を刃潰し加工によって成形した石器。美女遺跡の石斧の刃部は通常の剥離によるものが多い。美女遺跡では大形打製石斧（石器の種類）と中・小形打製石斧（石器の種類）の2種類が製作され、素材から作り分けられている。どちらも縄文時代中期の所産である。

d. 磨製石斧（器種）

全体を剥離し、敲打したあとに磨いて成形し、磨いた刃部をもつ石器。美女遺跡では次の3種類の石器が製作され、それぞれ時期が異なる。

- 1 敲打を丁寧に行い研磨する乳棒状磨製石斧（石器の種類）
- 2 敲打を行うが、素材が扁平な礫・剥片の中形扁平磨製石斧（石器の種類）
- 3 敲打をまったく行わない小形剥片を素材とする小形扁平磨製石斧（石器の種類）

である。

e. ドリル（器種）

黒曜石などの石材を利用して、直接打撃による通常・急角度剥離の二次加工で、意図的に断面を三角形にした先端部を作り出す石器。今回は、ドリルの分析ができなかったので、器種で記述する。

f. 石匙（器種）

つまみの付いた削器のこと。ドリルと同様に器種として記述する。

g. ピエス・エスキュー、両極石核

楔形石器とも呼ばれる。楔のような用途とは別に、対象物とハンマーとの間で、特徴的な割れ方をしているものを総称する。美女遺跡では、黒曜石が圧倒的だが、硬質砂岩のものもある。黒曜石のものは、石鏃の素材剥片の石核。後者は、楔の可能性もある。両者は明らかに目的が違うが、器種としては同一である。石器の種類としては、黒曜石のものを両極石核と呼ぶ。

3) 比較分析用語

以下に、個別分析を分析を総合するための比較分析用語を示す。石器分析は記述用語を介在させて分析に耐えうるデータを分析用語で作成し、さらに以下の比較分析用語で遺跡間を総合するという手続きをふむ。

①石器文化

石器の分析から、石器製作技法の全体構造が明らかにされたとき、その石器製作技法の構造全体を石器文化と呼称する。「石器文化」は、石器の分析から導かれる過去の模型（モデル）である。

②石器の型式学

石器の記述と分析の方法。これによって文化の発生・広がり・消滅を記述できる（註4）。

③石器の形式

石器文化のなかで作り分けられた石器の種類のこと。器種とは違う（註5）。

④石器の型式

形式を遺跡間で比較するときに必要な時間の属性。細分された形式とは違う（註5）。

⑤形式・型式分析

個別の石器の文化上の時間的・空間的位置を明らかにする（記述する）こと。個々の石器の特定文化の中のアドレスをもち、「文化」・「形式」・「型式」で表現される。例えば、美女遺跡の石鏃3類は、「立野式土器文化の中のY字鏃形式の美女型式」となる。

(2) 図面の見方

1) 図面の見方

図面は正面図を基本に、正面図の左を左側辺（特にエッジを強調して記述する場合は左側縁とする）、

正面図の右を右側辺、その隣を裏面とする。

裏面の側辺を記述する場合には、必ず「裏面の右側辺」というようにする。

図の部分名称は、正面図に向かって下から時計回りに、「基辺」、「左側辺手前」、「左側辺真中」、「左側辺向こう」、「末端辺」、「右側辺向こう」、「右側辺真中」、「左側辺手前」、「基辺」というように記述する（註2に同じ）。

2) 図の記号

必要に応じて図には記号を付けた。図の内容によって2種類の表記がある。

①縄文時早期前半の大形石器、および各時代の石器の記号

切り合い関係の記号と二次加工の種類記号、及び辺の領域を示すバーなどがある。二次加工の種類記号は前述してある。

O：面が折れている状態を示す。

OS：石器に折れ面が付いている場合、その折れ面が二次加工以前の素材のときからの折れを示す。

OR：直角に強い力で剥離されている剥離面を示す。折れ面と間違えやすく、従来は折り取りといわれる面。

T：刃潰し加工を示す。

K：敲打の加工を示す。

S：磨面を示す。

M：磨滅を示す。主にドリルに示して有る。

②縄文時代早期前半の小形石器

石鏃の分類をA, B, C, D, Mの記号で表記した。

石鏃以外の器種を以下の記号で表記した。

P：ピエス・エスキーユ

R：削器

E：搔器

G：石錐

PO：石槍

第3節 縄文時代の石器－竪穴住居址－

(1) 早期前半の石器

1) 大形石器

縄文時代早期の石器は特に数量が多いために、石材属性に従って大分類をして図版を作成した。大形石器とは硬質砂岩等の石材を用い、円礫を石核の素材とする石器を総称した。

①大形石器の石器の種類と石器製作技法について

大形石器の種類は素材によって以下の3種類に分類される。ここに説明する石器の項目は、「石器の種類」であって、美女遺跡の石器の観察と分析によって製作者による分類体系を復元したものである。「器種」と一部の用語が重複することに注意してほしい。

A. 円礫を石核とする剥片製の大型石器の種類とその素材剥片剥離技法

A-1. 石器の種類

a. (平滑面付き) 片刃削器

規格性の強い礫端片、礫面剥片を素材に、直線や、やや緩い弧状の刃部を形成する削器。二次加工の種類は通常の剥離が主体で、主要剥離面になされる。刃部を手前(図の下)にもってきたときの縦断面は、平滑で緩やかな弧の自然面と二次加工で刃を付けられた平らな面となる。円礫石核から剥離される剥片を規格化して製作されている石器で、この文化を代表する規格的な大型石器である。

b. 両刃削器

素材は礫端片を主に、礫面剥片・剥片も少量ながら用いられる。加工の種類は片刃削器とほぼ同様だが、背面・裏面の両面に加工がなされている削器で、刃部の背面が滑らかな面を必要としないことが特徴である。

c. ノッチ、鋸歯状削器

礫端片・礫面剥片・剥片などの多様な素材の主要剥離面や石核の大きなネガ面を二次加工する刃部の面に利用する。二次加工が平坦剥離で単独の大きな抉りをいれる削器(ノッチ)と、平坦剥離や通常の剥離で連続した抉りを入れる鋸歯状削器がある。鋸歯状削器のほうが大型の素材を選択する傾向があるため、両者は作り分けられているという見通しがある。

d. 搔器

急角度剥離で片刃の刃部を形成した石器。礫端片、礫面剥片、剥片、石核断片などの多様な素材が選択される。裏面に平らな面と、背面に急角度剥離で刃部が形成される。刃部を手前(図の下)にもってきたときの縦断面は、傾斜の面に急角度剥離で刃部が形成され、それに平らな面が向かいに付く。つまり搔器は片刃削器と刃の位置がリバースになるのが特徴である。この条件を満たす素材剥片は、平らな裏面と傾斜のある背面をもつことである。このとき素材剥片の剥離要素(背面に自然面及びネガ面、裏面にポジ面)は特に規制されず、平らな自然面に傾斜のあるポジ面でも搔器は製作される。求められる剥片の要素を満たす規格的剥片剥離技法が、この文化にはないともいえよう。

A-2. 円礫石核の剥片剥離技法

上記の削器・搔器類の素材は、以下の円礫石核の剥片剥離技法で製作される。

最も規格性の高いのは片刃削器の素材である礫端片の製作である。片刃削器は背面に平滑な面を作ることが必要なので、この素材を円礫から剥離する工程が最初に求められている。これは平滑な自然面であれば、素材の天然の性質をいかせる。しかし、河川礫特有の潜在的な割れ円錐のヒビや凹凸のある場合には石核を加工しなければならない。石核の作業面の加工は真中部分の敲打と研磨によってノイズの凹凸をすり減らす作業である。これが円礫石核の作業面を平らに加工して、片刃削器の素材である礫端片を準備する技術である。こうして準備された作業面に対して、石核の側辺から加撃がなされ、貝殻状の背面が平滑な素材剥片が剥離される。この素材剥片は、1個の石核に対して、多くて4枚程度しかとれない。多くの石核が遺跡内に残されている状態は、片刃削器の素材剥片の生産性が低いことも一因として考えられる。

一方両刃削器やノッチ・鋸歯状石器などは必ずしも刃部に平滑な面を必要としない。最初に円礫から礫端片が剥離された後に、同じ石核から剥離される礫面剥片や通常の剥片が素材になる。

ところで、円礫の剥片剥離に際し石核の打面も平坦で滑らかな打面が求められる。打面にも敲打と磨りの技術が適用される。かくして、多様な円礫の表面は、作業面・打面ともに加工によって平滑にされてから貝殻状の横長剥片（礫端片）が最初に剥離され、その後に礫面端片、剥片類が順次剥離されることになる。それぞれの剥片類は選択されて、数種類の石器となる。

この剥片剥離技法は、石核成形に敲打と磨りをあらかじめ加えるという、極めて特徴的な剥片剥離技法なので、今後注意される必要がある。また1種類の石核から属性の異なる剥片が生産され、その剥片類を使い分けて数種類の石器を製作する技法も注意する必要がある。

B. 礫を素材とする刃のある大形石器（礫器）

B-1. 石器の種類

a. 片刃礫器

半割した円礫を素材にして、主に片刃の急角度剥離の刃を付けた石器。素材は円礫を半割したもののほかに、円礫石核を転用する場合もある。

B-2. 片刃礫器の製作技法

礫器の製作技法は、円礫を真っ二つに半割することから始まる。この半割面を打面として、自然面にむかって平坦剥離が行われる。これが礫器のエッジを作る打面になる。その平坦剥離を打面として急角度剥離が行われて刃部が作り出される。ときとして角度の条件が満たされれば平坦剥離はされない。

C. 礫を素材としている磨面のある大形石器（磨石類）

C-1. 石器の種類

a. 特殊磨石

大形の長円礫で均等な厚い側面をもつ素材が選択され、その側面を3～4面磨っている加工礫。礫端片を剥離する石核や礫の素材の円礫とは、素材の形態が違うので識別可能である。

b. 通常の磨石

円礫で分厚いものが素材として選択され、正面・裏面、ときに側面に磨面がみられる。

c. くほみ石

長円礫の中形のものが素材として選択され、素材の平滑な面に敲打によってやや深い窪みが形成されている石器。敲打が目的か窪みが目的かは判断できない。

以上のように、美女遺跡の大形石器には素材と石器が強く結びつく3種類の石器製作構造がある。

A. 礫端片一片刃削器製作技法。

B. 半割礫－礫器製作技法。

C. 選択された礫－磨石類の製作技法。

この3種類は、各々独立した石器製作構造であり、その構造に互換性はない。

一方で、上記とは別の石器製作構造もある。

D. 剥片素材の多様な削器類（両刃削器、ノッチ・鋸歯状削器）の製作技法。Aの石核から素材剥片が製作される他に、Bの礫器類の製作剥片類も素材剥片として選択される。

A～Dの全体構造は、有る程度の規制の強い石器の製作系列ABC（石器製作の剛構造）とそれほど規制の強くない石器の製作系列D（石器製作の柔構造）が併存しているといえる。この石器製作の全体構造ゆえに、観察者のわれわれには当事者の分類がみえにくい資料の状態（非離散的構造 註2）となっている。

また、磨石類はときに円礫石核の素材となり、礫器類の素材に転用されることもある。しかし、この場合の素材の再利用は、石器製作構造とは別の次元で考えたほうがよさそうである。円礫を素材にするという特性から、磨石類が再利用されるのであるから、再利用のモデル（モデル）は各々の石器製作構造とその互換性とは別の次元、つまり素材を獲得するという次元の問題である。この点を石器製作構造内の互換性と誤解すると、石器の研究は混乱してしまうので、注意が必要である。

②大形石器についての今後の課題

今回の整理では、定量的に十分に石器の分析を行うことができなかった。それは統計的検定もできなかったことを意味する。今後は、石器の分類について以下の属性で、定量的な分析と統計的検定分析が必要になるだろう。

1、刃先角の一定性と多様性について。二次加工の種類と刃先角の相関を調べること。これによって片刃削器類が、さらに細分されるかがわかる。

2、素材剥片の剥離角と、刃先角との相関について。これによって工程ごとにうみだされる剥片とその刃先角の関係が明らかになり、1の分析とともに、より確かな石器分類ができるであろう。

3、磨石類と円礫石核との属性の差異を量的属性で示すこと。

4、それをふまえて、再度磨石類の属性を取り直し、磨石の性格を示す属性を発見してそれを明示すること。

本来は課題としたところまでは遺跡の分析をしなければならないが、今後の反省点としたい。

③大形石器の各住居址の石器についての事実記載

[S B01]

- 第55図 1、礫端片を素材にした削器。主要剥離面に剥離がある。片刃削器。
2、礫面剥片を素材にした両刃削器。
3、剥片を素材にして、その打面部分に通常の剥離で裏面に二次加工をした鋸歯状削器。
4、円礫の周囲に不規則な打撃を加えた石器。小形の石核の可能性はある。
5、円礫石核を素材に通常の剥離で両面ノッチ。刃先は図の見通し面。
6、礫端片を剥離した石核。
7、円礫石核の右側辺に通常の剥離で二次加工した鋸歯状削器。
8、大形の石核から剥離された剥片。
9・10、磨石。

[S B08]

- 第56図 1、大形の剥片の裏面に通常の剥離で刃を付けた搔器。刃部は緩やかに内湾し、滑らかな刃部は大きな剥離面で代用している。
2、剥片の末端辺の両側に通常の剥離で刃を付けた両刃削器。裏面はやや不規則剥離。
3、大形の円礫の中央部分を剥離した礫器の素材。
4、消費のすすんだ石核。磨きによって中央部分を滑らかにしている。
5、石核の失敗品。両面を磨いて滑らかにしている。
6、ボロボロの砂岩の円礫。土器の混和材のための礫片。
7、特殊磨石。
8、磨石を転用した石核？ 性格不明の石器。

[S B11]

- 第57図 1、長円形の円礫の周囲を剥離した、剥離痕の重なる縁辺は潰れている。縄文中期の大型打製石斧の未製品。住居覆土内の混入。
2・3、円礫から剥離された貝殻状の剥片。削器の素材になる剥片。
4、貝殻状の剥片の縁辺に通常の剥離で刃を付けた鋸歯状削器。
5、円礫素材の石核断片。半割されている。礫器の素材を作った残りの可能性がある。

[S B14]

- 第57図 6、礫端片の側縁に通常の剥離で刃を付けた片刃削器。
7・9、貝殻状の礫端片。片刃削器に素材。
8、剥片の両側辺に平坦剥離で加工したノッチ。
第58図 1、厚い剥片の断片。2の搔器の素材。
2、厚い剥片を素材にした搔器。
3、剥片の裏面に急角度剥離で鋸歯状の刃部を付けた搔器。

- 4・5、剥片の縁辺に平坦剥離で薄い刃を付けた鋸歯状削器。
- 6、剥片の縁辺に通常の剥離で鋸歯状の刃を付けた鋸歯状削器。
- 7、大形剥片の打面部を通常の剥離で成形し、縁辺に通常の剥離で刃を付けた片刃削器。
- 8、よく磨いてある磨製石斧。敲打痕はみられない。
- 9、厚い剥片を素材にして、縁辺に通常の剥離で厚い鋸歯状の刃を付けた鋸歯状削器。なお主要剥離面は節理面でガタガタになっているが、それを磨きによって滑らかにしている。

第59図 1・3、石核。

- 2・4・5、石核断片。
- 6、円礫の中央部から剥離された剥片。礫器製作のために最初に剥離される剥片。
- 7、石英が入るボロボロの砂岩。土器の混和材として利用された可能性がある。

第60図 1・2、用意された石核。

- 3、磨石。角があるので石核ではない。石材はボロボロの砂岩。
- 4・5、石核断片。

[SB18]

第60図 6・7、貝殻状の礫端片を素材に、通常の剥離で刃を付けた両刃削器。

- 8、剥片の打面部にノッチをいれた削器。第100図5と第102図1に同じ石器がある。
- 9、礫端片の打面部分に通常の剥離で鋸歯状の刃部を付けた鋸歯状削器。

第61図 1、大形剥片の側打面部を通常の剥離で成形し、縁辺に通常の剥離で刃を付けた鋸歯状削器。

- 2、打面が節理面で折れた礫端片を素材に、折れた節理面をの縁に二次加工をしている。反対部分には刃潰し加工をしている。中期の小形打製石斧の未製品。
- 3、大形の剥片。裏面に残る剥離痕は、石核から剥離するときの傷でダブル打点になっている。縁辺は鋭い。
- 4、剥片。打面部分が階段状剥離になっている。二次加工かどうか不明。
- 5、中形の剥片の縁辺に通常の剥離で二次加工した片刃削器。打面は素材折れ。
- 6、石核の断片を利用した両刃削器。右側辺に自然面が残り、左側辺は折り取っている。折り取りのヒンジフラクチャーを平坦剥離で成形し、素材の縁辺に通常の剥離で刃を付けている。
- 7、石核の断片を利用した片刃削器。裏面（石核作業面）の上半を磨いている。
- 8、良く消費された円礫石核を素材に、正面の向こうに平坦剥離で鋸歯状の刃部を作る鋸歯状削器。

第62図 1、大形の石皿。扁平な素材の中央部に顕著な磨面が残る。

第63図 1、磨石を転用した搔器。

- 2、長円礫を素材にした搔器。円礫の側辺を磨いて成形している。
- 3、特殊磨石。
- 4、磨石から剥離された剥片。縁辺に不規則剥離がみられる。
- 5、礫端片を剥離する石核。正面・裏面ともに、滑らかな作業面を作り出す磨面が残されている。
- 6、小形の石核を素材に、裏面右側辺に平坦剥離で鋸歯状の刃部を作る鋸歯状削器。

7、石核断片。礫端片を剥離しようとして真中から2つに折れた石核。

第64図 1、礫器の素材。円礫の中央部から大きな剥離をしている。二次加工で刃は付けられていない。

2、石核断片を利用した片刃削器。基辺に平坦剥離と通常剥離で刃を付けている。

3～6、剥片。4の右側辺は不規則剥離。

[S B 19]

第64図 7～9、礫端片を素材にし、縁辺に通常の剥離で刃を付けた片刃削器。

10、剥片を素材にし両刃削器。

11、磨製石斧の断片を利用した両刃削器。正面・左側辺が磨かれている。縁辺に通常の小さな剥離で刃が付けられている。

12、横長剥片を利用した打製石斧。円礫の中央部から剥片が剥離され、側辺に刃潰し加工がされている。縄文時代中期の小形打製石斧。

第65図 1、礫端片を利用した片刃削器。いずれも裏面に通常の剥離で刃を付けている。

2、搔器。大形の礫端片を素材に急角度剥離で刃を付けている。縁辺が潰れている。

3、搔器。刃は粗い急角度剥離のためにやや鋸歯状になっている。

4、剥片を利用した搔器。裏面と正面からの通常の剥離によって二次加工されている。

5、鋸歯状削器。剥片の裏面に平坦剥離を行い、鋸歯状の刃部を付けている。刃は鋭い。

6、石核を転用した鋸歯状削器。裏面の左側辺から右側辺の向こうに通常の剥離で刃を付けている。

7、大形の剥片を利用した鋸歯状削器。側辺を刃潰し加工（右側辺）、裏面左側辺向こうに通常の剥離、裏面右側辺向こうに平坦剥離で刃部を作った削器。基辺は通常の剥離で成形されている。

8、石核素材の搔器。円礫を半割（節理面で割れ）し、そこから裏面に平坦剥離剥離。この平坦剥離で背面に刃部を作る打面を形成している。

9、片刃礫器。円礫を半割して、裏面に平坦剥離。この平坦剥離で刃の剥離の打面としている。刃は急角度剥離で形成されている。

第66図 1、磨製石斧。軟質の緑色岩製。側辺もきれいに角を形成している。製作時には敲打は行われていない。

2、磨製石斧未製品、もしくは刃部磨製石斧。緑色岩。剥片を素材にして両側辺を刃潰し加工。刃部が磨いてある。

3、磨きの有る剥片。磨きは石核の磨き。4と同一母岩。

4、石核。珪質頁岩。おそらく角礫を素材、角礫の表面を磨いて滑らかにし、剥片を剥離している。なおこの石核には遺構外の剥片が接合した。

5、くぼみ石。長円礫の表面に磨面に敲打を行っている。

6、半割された石核。礫器の素材。

7、磨石を転用した石核。半割した面を打面にして、磨面を作業面にして剥片を剥離している。

8、緑色岩の棒状礫。全面にわたって滑らかな面がある。自然面なのか人工の磨面なのかは判断

できない。磨製石斧の素材礫と思われる。

9、剥片の打面を平坦剥離で加工している鋸歯状削器。

10～11、礫端片。

[S B20]

第67図 1、礫端片素材の両刃削器。打面は節理で折れている。その折れ面を平坦剥離で成形。刃部はやや不整な剥離がある。

2、剥片素材の片刃削器。刃部に通常の剥離で刃を付けている。

3、礫端片の両刃削器。背面・裏面に不規則な剥離で刃が付く。

4、礫端片素材の片刃削器。背面には不整な剥離痕が付く。

5、礫端片の片刃削器。通常の剥離で鋸歯状刃部が形成されている。打面側は刃潰し加工されている。

6、礫端片の片刃削器。背面に不整な剥離が付く。

7、縄文中期の小形打製石斧未製品。両側辺に成形加工の刃潰し加工がある。

8、礫端片を素材に通常の剥離で刃部を形成している片刃削器。

9、剥片のバルブを平坦剥離で取り、側辺の裏面に通常の剥離で刃部を形成した片刃削器。

10、礫端片素材の鋸歯状削器。打面部に平坦剥離で刃部を形成。

11、礫面剥片を素材にする搔器。裏面右側辺の手前と向こうは階段状剥離で刃部成形。真中に通常の剥離で削器の刃部も形成している。

12、礫面剥片素材の搔器。自然面は平らな面。傾斜のある主要剥離面に通常の剥離でやや厚い刃部を形成。主要剥離面の右端真中が磨かれて角が落とされている。

13、剥片素材の両刃削器。打面は折れている（素材折れ）。側縁にやや潰れた不整な剥離の刃部をもつ搔器。

14、ノッチ。打面は素材折れ。その折れを成形する階段状剥離があり、その向こうに平坦剥離で形成されたノッチをもつ削器。

第68図 1、礫端片を素材にした鋸歯状削器。刃部は手前。打面は通常の剥離で成形されている。

2、剥片を素材にする鋸歯状削器。素材の打面は折れている。裏面の左側手前に成形のための磨面がある。刃部は通常の剥離でやや鋭い刃部を作り出している。

3、搔器。剥片素材。剥片の厚い末端に急角度剥離で刃部を作っている。素材の打面と右側縁は階段状剥離で成形されている。

4、礫端片を素材にして、平坦剥離でノッチを付けた削器。

5、剥片を素材にして裏面にノッチを付けた石器。裏面右側辺手前は通常の剥離で成形されている。

6、礫面剥片を素材にして、打面部に通常の剥離で、やや湾曲した刃部を付けた削器。裏面に通常の剥離で鋸歯状の刃が付けられている。

7、剥片を素材にして傾斜のある裏面に急角度剥離で鋸歯状の刃部を付けた搔器。自然面は平ら。

8、折れた剥片を素材にしてやや不規則な刃部をもつ鋸歯状削器。

- 9、軟質の緑色岩の鋸歯状削器。裏面左側辺に通常の剥離で刃部を付けている。裏面の右側辺には貝殻状の深い剥離痕がみられるが、小形磨製石斧の素材剥片を剥離した可能性がある。
- 10、剥片の右側辺に刃潰し加工をし、手前に通常剥離。縄文時代中期の小形打製石斧の未製品。
- 11、剥片の裏面左側辺に刃潰し加工をし、裏面右側辺に急角度剥離でやや鋸歯状の刃部をつくる搔器。
- 12、緑色岩の剥片素材の搔器。磨製石斧の素材剥片と思われる。
- 13、大形の剥片の裏面左側辺が両刃削器、右側辺にノッチのある削器。

第69図 1、大形の搔器。残核を利用して急角度の刃部を裏面右側縁に付けている。裏面左側辺は軽い敲打で成形している。

- 2、やや長円の礫を素材にした礫器。円礫を半割し、半割面を打面に平坦剥離を自然面に行う（正面の左側辺真中から向こう）。その平坦剥離を打面にして、半割面を作業面に通常の剥離と階段状剥離で刃部を形成している礫器。
- 3、ボロボロの砂岩の円礫を素材にしている。円礫の側辺を剥離し（裏面左側）、そこを打面にして背面に剥片をとっている。おそらく土器の混和材を作るために剥離され（砕かれ）た石。
- 4、円礫石核を素材にした鋸歯状削器。裏面右側辺に平坦剥離でやや鋭い刃部を形成している。
- 5、大形の剥片を素材にしている両刃削器。
- 6、大形の分厚い剥片を素材に、裏面左側辺は刃潰し加工で成形。周囲に刃を付けた鋸歯状削器。周囲に平坦剥離でノッチをつくる削器。
- 7、特殊磨石を素材にした礫器。裏面の大きな剥離面から急角度剥離で正面側に刃部を作ろうとしている。刃部が形成できなくて放棄された資料。
- 8、珪質岩の磨製石斧。叩きによる成形はない。
- 9、珪質頁岩製の剥片製磨製石斧。叩きによる成形はない。
- 10、緑色岩の磨製石斧。叩きによる成形はない。
- 11～13、粗い目をもつ砥石。

第70図 1、鋸歯状削器。磨石の剥片の両側辺通常の剥離鋸歯状の刃部をした削器。

- 2、磨製石斧の断片。
- 3、中形の剥片を両極剥離した結果できた剥片。凝灰岩。
- 4・5、特殊磨石。
- 6、特殊磨石を剥離してできた剥片。
- 7、礫端片を剥離するための石核。
- 8～13、小円礫。8・9・10は緑色岩。11は砂岩で石球状。12は扁平な砂岩。13は赤チャートの小円礫。これらの小円礫の性格は不明。

第71図 1～3、自然の円礫。おそらく石核の素材。

- 4～9、石核。作業面となる平坦な面を磨き、さらに側辺を敲打によって平らにして打面を作っている。

第72図 1、剥離のすすんだ順に石核を掲載した。4は石核素材の削器。8は礫器になるために真中から叩き折られた残核。

[S B21]

第73図 1・2・5・6、剥片類。6は磨製石斧の剥片。緑色岩。

- 3、打面部に通常の剥離で刃を付けた鋸歯状削器。
- 4、礫端片の両端に平坦剥離で抉りをいれたノッチ。
- 7、礫端片の縁辺に通常の剥離で薄い刃を付けた片刃削器。
- 8、礫端片の縁辺に不整な剥離のある片刃削器。
- 9、剥片の縁辺に平坦剥離で薄い刃を付けた鋸歯状削器。
- 10、剥片の打面部に、平坦剥離でノッチを付けた削器。
- 11、礫端片の打面部にノッチを付けた削器。ノッチと反対の辺には不整な剥離痕が背面にある。
- 12、剥片の縁辺に通常の剥離で刃を付けた搔器。刃部はやや厚く潰れている。
- 13、背面に深く小さな剥離面の付いている搔器。背面の自然面は磨かれている可能性もある。
- 14、剥片の打面部に刃潰し加工。小形打製石斧の未製品。
- 15、剥片の打面部に刃潰し加工の付く石器。打製石斧断片。
- 16、剥片の打面側にやや急角度の階段状になる通常の剥離で刃を付けている搔器。刃部は厚い。

第74図 1、剥片の鋭い縁辺に通常の剥離で鋸歯状の刃部を付けた鋸歯状削器。

- 2、裏面の左側辺に通常の剥離で鋸歯状の刃部、裏面の右側辺に通常の剥離で刃を付けた鋸歯状削器。
- 3、大形の折れた剥片を素材に、素材の鋭い縁辺にやや急角度剥離で鋸歯状の刃部を付けた搔器。
- 4、剥片の打面部に背面側から鋸歯状の剥離をいれ、それを打面にして主要剥離面に2つのノッチをいれた鋸歯状削器。
- 5、折れた大形の剥片を素材にして、その素材の縁辺に通常の剥離で刃を付けた両刃削器。
- 6・7、磨いて有る小円礫。土器を磨く「磨き石」か？
- 8、緑色岩の大形剥片。背面の自然面は磨いてある。主要剥離面の高い部分にわずかに磨きがある。縁辺の鋭い部分にも磨りがある。器種不明。
- 9、特殊磨石。

第75図 礫端片、礫面剥片、剥片を剥離する石核を掲載した。1・3～6はあまり剥離の進まない石核。

2は粗い砂岩製で、平坦面が最初の剥離なので礫器の素材の可能性もある。6～7は消費の進んだ石核である。

[S B24]

第76図 1、縦に半割された円礫を素材に、自然面側に通常の剥離でやや急角度の刃を付けた搔器。裏面には不整な剥離が残る。

- 2、敲打痕の残る長円礫素材の剥片。裏面左側に急角度で深い抉り。打製石斧の未製品。
- 3、縁辺に不整な剥離痕の付く礫端片。
- 4、大形の礫端片。主要剥離面の打点の下が碎けている。
- 5・6、円礫の半割されたもの。礫器の素材。
- 7～11、剥片。

[S B 25]

第77図 1、礫端片に微細で急角度の剥離で厚い刃を付けた両刃削器。

- 2、石核断片。
- 3、ノッチ。
- 4、剥片に通常の剥離で鋸歯状の刃部を付けた鋸歯状削器。
- 5、分厚い剥片に階段状の急角度剥離で鋸歯状の刃部を付けた搔器。
- 6、打面の折れた剥片。背面に不規則剥離が残る。
- 7、円礫石核を素材にして、平坦な自然面から急角度剥離で刃を付けた搔器。
- 8、消費された円礫石核。中形の剥片が剥離されている。
- 9、緑色岩。磨製石斧の素材を剥ぐ石核を素材にした鋸歯状削器。
- 10、円礫の両側を折り取り、折り取りのヒンジフラクチャーに不整な刃潰しが観察できる石器。
器種不明。先端部を意図的に作る可能性もあるが、本遺跡の中では、この資料しかないため不明。

第78図 1、特殊磨石の剥片。ピエス・エスキーユになっている。

- 2、ハンマーの断片。
- 3、緑色岩の石核。小形磨製石斧の素材を剥離する石核。
- 4、被熱した磨面のある剥片。
- 5、目の粗い砥石。扁平な円形で表裏ともに磨面。
- 6、石核の素材の自然石。
- 7、石核。側辺に敲打と磨面が残る。礫端片を剥離するための打面を作る敲打と磨り。この石核は右側辺にハンマーのあとがあり、正面に抜けきらない剥片がそのまま付いている。
- 8・9、磨面の残る小円礫。
- 10～14、剥片。

[S B 26]

第79図 1、折れた礫端片。縁辺に不整な剥離が付く。

- 2、剥片に平坦剥離でノッチを付けている削器。
- 3、大形の礫端片の打面側を通常の剥離で、反対側辺を通常の剥離で鋸歯状の刃部を付けている鋸歯状削器。
- 4、大形の礫端片に急角度剥離で鋸歯状の刃を付けている搔器。
- 5、石核断片を素材して、素材の分厚い部分に階段状剥離・急角度剥離で刃を付ける搔器。加工のない縁辺は鋭利で、微細な剥離痕が観察できる。
- 6、分厚く大形の剥片の縁辺にやや急角度の剥離で刃を付けた両刃削器。
- 7、磨製石斧の未製品。緑色岩。
- 8、磨製石斧。白色凝灰岩。
- 9、小形の磨製石斧。剥片素材の可能性はあるが、全面研磨のため不明。
- 10、目の粗い砥石断片。

11、石核に急角度剥離で刃を付けた削器、もしくは礫器の断片。

12・13、石核断片。

14、磨製石斧の素材剥片の石核。緑色岩

第80図1～6、石核。1は礫器の素材。3・6は大形剥片の石核。2・4は中形剥片の石核。5は小形剥片の石核。

7～15、剥片。

2) 小形石器

縄文時代早期の小形石器は、黒曜石を主体とする小形剥片石器である。その器種は、ピエス・エスキュー、石鏃、削器、搔器、ドリルなどがある。なお、個別の石器の説明を図版に記号で記述した。

石鏃はA類、B類、C類、D類を図に記入した。Mは石鏃の未製品である。ピエス・エスキューはP、削器はR、搔器はE、ドリルはGとした。

石材は、黒曜石が圧倒的に多いので、特に記号を付けていない。黒曜石以外の石材は石材名を記入した。

以下、各器種ごとにその技法の特徴と分類、所見を記す。

①石鏃の製作技法

石鏃はきわめて規格性の強い石器であるので、その製作技法を明らかにするとともに、各形式間に形式的親和性も明らかになる。形式間雑種（型式学的雑種）については後述する。

石鏃は製作技法によって4種類に分類される。

A類 二等辺三角形の尖端を尖らせる五角形鏃。

B類 脚部が大きく開く二等辺三角形の石鏃。

C類 正三角形の基部に丸く浅い抉りをいれた、いわゆるY字鏃。

D類 上記3類の石鏃の部分を組み合わせた形式間雑種（註4）の石鏃。

なお図ではA類、B類の性格を明らかにするために、図に加工の目印となる三角印をいれた。この記号をみることにより、石鏃尖端と胴部の加工の作り分けが視覚的に明らかになる。

ちなみにA類、B類、C類は大川遺跡、大鼻遺跡、お宮の森裏遺跡のいずれにも出土しているが、傾向としてA類、B類が大川・大鼻遺跡に主体的で、C類はお宮の森裏遺跡に主体的である。これは主体とする土器と石鏃が対になる作業仮説を導く所見である。美女遺跡ではB類とD類が主体である。

a. 石鏃A類の製作技法

フリーレイキングもしくは両極剥片を素材にして、側面と断面が滑らかな曲線を描く対称形になるような二等辺三角形の形態が製作されている。先端部の押圧剥離は器体から斜めにはいり、器体高よりも一段下がって製作される。A類の典型は第81図1・11である。

b. 石鏃B類の製作技法

主に両極技術の剥片を利用し正面がなめらかなレンズ状、裏面が平らに作られている。先端部は器体

から斜めの押圧剥離がはいり、A類のように尖端が細くなる。B類の典型は第81図20、第82図25である。

c. 石鏃C類の製作技法

両極剥片を利用し、正三角形を作る。そして基部に浅くて丸いノッチをいれる。側辺はしばしば鋸歯状になり、先端部よりも脚部の一方が特に尖鋭に製作される場合が多い。第83図23、第86図11・12（以上は局部磨製石鏃）、第83図28、第86図9が典型である。

d. 石鏃D類の製作技法

各類の技法的親和性がみられる石鏃である。

D 1 類 A類とC類の技法的親和性がみられる石鏃である。五角形鏃とY字鏃との形式間雑種。

A類の技法的要素；二等辺三角形のプロポーション、抉りによる五角形の先端部の作りだしである。

C類の技法的要素；短く丸い基部の抉りである。

第81図30・31にみられるように、正三角形のプロポーションの側辺に小さく尖った突起がでているY字鏃の先端に五角形鏃を作り出した石鏃である。

D 2 類 A類とB類の技法的親和性がみられる石鏃である。

A類の技法的要素；二等辺三角形のプロポーション、抉りによる五角形の先端部の作りだしである。

B類の技法的要素；尖鋭で広がる脚部の作りだしである。

第81図24、第83図17は、五角形鏃のプロポーションにB類の脚部をつけたため、脚部と胴部がスムーズな側辺にならない例である。

D 3 類 B類とC類の技法的親和性がみられる石鏃である。

B類の技法的要素；二等辺三角形の形態と尖鋭で広がる脚部の作りだしである。

C類の技法的要素；短く丸い基部の抉りである。

第82図25・26はB類のプロポーションにY字鏃の抉りを付けた石鏃である。

D 4 類 A、B、Cすべての技法の要素を取り入れた石鏃である。第83図14・18がその例である。

なお、18は東海以西の押型文土器文化の中にもみられる（註5）。

e. 石鏃分析の課題

本遺跡の分析は、おおまかな見通しを述べたものである。この分類を証明するために、より定量的な属性によって、統計的な分析が課題である。

②削器・搔器の製作技法

削器・搔器は、観察する限りそのプロポーションよりも刃部の属性に主体がおかれている。従って剥片剥離技法は、美女遺跡の削器・搔器に限っては関連性をもたない。むしろ原石地の転石を利用してることが多い。削器の刃部は押圧剥離でなされ、搔器の刃部は直接打撃の急角度剥離かハンマーストーンをエッジに垂直に強くこするようにした押圧剥離である。搔器のなかで円形搔器（第84図19・20、第86図1～3、同図14～15）は、表裏縄文土器に特徴的にともなう搔器である。

③ドリルの製作技法

フリーフレイキングの縦長剥片の尖端を主に搔器と同じ技術によって尖らせている石器である。第82図16～18、第83図2、第84図21～24の石器が該当する。第84図22は先端部が白く白濁し激しい磨滅の傷がある。

④両極石核・両極剥片について

両極石核とその剥片は、石鏃に拮抗する量の石器である。両極石核については、それを一つの石器の種類とする立場もあるが、美女遺跡では石鏃の製作に関わる石器のようである。美女遺跡の石鏃の素材は、その素材剥離面の観察から、かなり小さな素材であることがわかる。第81図25・28、第82図28・32、第83図15・19・21・24などがその例である。さらに石鏃未製品（図ではMの記号）の第81図15は両極剥片を素材にしている。これらのことから、大量にある両極石核、およびその剥片類は石鏃製作に関係する石器であると結論される。

⑤尖頭器と石匙について

美女遺跡では尖頭器1点（第85図17）と石匙1点（第84図1）が出土した。いずれも押型文土器の住居からの出土なので、重要な遺物である。尖頭器は肉眼観察で箱根産のガラス質安山岩が用いられている。両面加工のきれいな石器で、ソフトハンマーの直接打撃で製作されている。素材はおそらく横長剥片である。石匙は黒曜石製で、素材の縦長剥片の厚い末端部を通常の剥離で薄く成形し、打面部分に押圧剥離で加工してある。素材の打面は無打面と推定され、両極技術で剥離された剥片の可能性もある。つまみは押圧剥離によって作られている。尖頭器と縦長石匙は、表裏縄文土器文化の中にある石器と考えたい。両者が出土しているSB20、SB21は表裏縄文土器の石器として特徴的な円形搔器が出土していることは重要である。

⑥今後の課題と石器型式学

石器は従来型式学的分析の対象とはならなかった、それは機能を重視するといういわば先験的に決めつけられてきた研究の歴史による。石器の機能とは実際に明らかにされることは大切だが、それ以上に大切なのは技法の分析であろう。

ここで製作者によって作り分けられた石器の種類を「形式」としよう。また「形式」の時間差の属性を「型式」としよう。従来は形式も型式も混沌としているが、両者は表現する属性を異なるものとして取り扱うほうが現実に近い。混乱のものは「型式」を「細分形式」とするからである。「形式」は作り

分けた石器の種類であるから、文化の中で様々なレベルで分類される可能性がある。これを「型式」としてはならない。「型式」とは、細分された「形式」を異なる遺跡間を比較するための時間の物差しのことである。

さて、石鏃の形式は重要なことを物語っている。異なる土器群に異なる製作技法の石鏃が付いているというのが、今回の遺跡での作業仮説である。近畿地方の押型文土器には先端を五角形にする五角形鏃（美女遺跡ではA類）が、表裏縄文土器にはY字鏃（美女遺跡ではC類）が付いているという仮説である。このときに、異なる石器文化の石器の種類があり、それぞれの一部の技法が互換性をもって新しい形式を生み出す（美女遺跡の場合はD類）がある。これは異なる文化がモノを通じて解け合ったということになるだろう。詳細な分析は、この文化の解け合い方が、モノのどの部分に表現されているかを明らかにすることである。それを今回発見した課題としておきたい。

（2）早期後葉の石器（第87図）

第87図1～4は円礫石核から剥離された剥片を素材にした削器類である。4は特に磨かれた刃部をもつ。6は磨製石斧の断片に急角度剥離の刃を付けた搔器である。5と7は磨石である。石鏃は8～10。早期の石鏃とは違う技法のように思われるが、ここでは資料不足である。11はピエス・エスキーユ。資料不足で事実記載にとどめる。

（3）前期の石器（第88図）

第88図1は円礫石核剥片を利用した打製石斧未製品。2は磨石。3は石鏃である。この資料で明らかになることは少ない。

（4）中期の石器（第88・89図）

1) 石器の事実記載

第88図4～6は円礫石核からの石器類。早期に類似する。7～9は打製石斧である。10・11は石鏃。12はドリル、13・14は削器である。第89図1～4・7は磨石。5は円礫石核の断片を利用した搔器。8は石鏃である。

2) 中期の打製石斧について

打製石斧は扁平な素材の両側辺に刃潰し加工をした石器の総称である。この打製石斧は刃潰し加工という二次加工と素材の剥離の技法において、縄文時代早期の削器類とは明らかに区別される石器である。また美女遺跡の縄文時代早期には打製石斧がなく、中期になって出現しているというのが、この資料の意義である。

①打製石斧の製作技法について（第118～120図）

打製石斧の製作技法を遺構外の石器で説明する。美女遺跡の打製石斧の大きな特徴は背面に自然面を

残さない。この点で南関東の中期の打製石斧とは製作技法が違う。素材は横長剥片で、側辺からみるとそのプロポーションはやや湾曲して、一部に背の高いところがあるものと、ほとんどが平らなものと2種類ある。前者は大・中形打製石斧に、後者は中・小形打製石斧にみられる。石材は早期の大形石器と同じなので、石核素材は円礫であろう。

第118図は打製石斧の大形・中形品を掲載してある。長円形の礫から横長剥片を剥離して両側辺に刃潰し加工で成形している。1は円礫のネガ面が素材面、2は円礫のポジ面が素材面。これより、円礫を縦に半割して2つの横長剥片を剥離していることがわかる。また、それほど厚くない素材を利用して、礫のまま加工する場合もある。SB11の石器がその未製品（第57図1）である。大形打製石斧には刃部に磨滅痕が少ないのも特徴である。

中・小形の打製石斧を第119図に掲載した。自然面と素材の関係を観察すると、円礫の平坦面から側辺にかけて剥離軸が伸びている例が第119図の1・3・4・5・9・13にみられる。以上のことから、円礫の半割面を打面として円礫の平らな面から側辺の傾斜にかけて横長の剥片を剥離する技法が、中・小形打製石斧素材の剥片剥離技法であることがわかる。以上のように、打製石斧は大形と中・小形では素材の剥離技法が明確に分かれている。従って、打製石斧という器種のなかでも、大形と中・小形は作り分けられた異なる種類の石器である。

第120図には刃部に磨滅痕の顕著な石斧（1～4）と分銅形打製石斧（5）、石斧断片（6～14）を掲載した。

中・小形の打製石斧で、磨滅痕のあるものと無いものに作り分けがあるかどうかは今後の課題である。縄文時代中期の遺跡を分析する課題として掲げておく。

第4節 弥生時代後期の石器（第90図）

弥生時代の住居と遺構外から出土した石器を掲載した。1は磨製石斧の断片。2は側辺に刃潰し加工のある削器。3は磨石を転用して礫器にしている。4はボロボロの石材の円礫。炉の周辺から出土。5～9は石鏃とその未製品。10は搔器。11はSB17出土の石鏃未製品。12～17は遺構外の石器から選択した弥生時代の石器である。12は有茎石鏃。黒曜石の優品である。13は石包丁？、15～17は磨製石鏃未製品の先端であろう。14は両側辺に抉りのある扁平片刃磨製石斧である。

第5節 竪穴住居址以外の諸遺構の石器

(1) 竪穴の石器（第91図）

1は両側辺に刃潰し加工をし、先端に通常の剥離で刃部を形成する搔器。2は両側辺に刃潰し加工をした石器。打製石斧の未製品。3は石核の断片。4は両極石核。5は石鏃。6は押圧剥離で刃を付けた削器。7は磨石を礫器に転用しようとしたもの。加工で刃は付いていない。

(2) 炉穴の石器 (第92図)

1は石核。2は大形の剥片。3は石鏃。4は石核断片。5は片刃削器。背面は不規則剥離。6は磨石から剥離された剥片。

(3) 集石の石器 (第93・94図)

第93図1は緑色岩の石斧。扁平片刃磨製石斧の素材。2はボロボロの石材。3は押圧剥離で刃を付けた削器。4は砥石。5～7は石鏃。5・6はY字鏃。8は石核断片。9・10、第94図1は磨石。2は両極石核を素材にした削器。3は両極石核。4はおそらく用意された石核。5は比較的大きな両極剥片。6は厚い側面をもつ石鏃。7は磨石。8は礫端片。9は礫端片素材の尖頭削器。10は小形の磨石である。

(4) 貯蔵穴の石器 (第95図)

1は扁平な磨製石斧。2・3は両極石核。4は礫端片。裏面に不整な剥離痕。5は黒曜石製の削器。押圧剥離で鋸歯状の刃部を作っている。6は小形の円礫石核を転用した搔器。剥片を剥離した側辺が潰れている。7・8は石鏃。9は鋸歯状削器。背面の自然面側が平らになっている。10は凝灰岩製の尖頭削器、もしくはドリル。フリーフレイキングの剥片の打面を通常の剥離で成形している。

(5) 土坑の石器

1) 石器の事実記載 (第96～102図)

第96図1は黒曜石の石鏃。先端に抉り、基部に丸い抉りがある。五角形鏃とY字鏃との形式間雑種。2は礫端片素材の両刃削器。3は礫端片素材の使用痕のある剥片。4は硬質砂岩製のピエス・エスキュー。黒曜石製の両極石核とは目的の違う石器であろう。5は黒曜石の両極石核。6・7は特殊磨石。8は特殊磨石を剥離したもの。9は円礫の平らな部分を磨り、円礫の頂部に敲打痕のある石器。ハンマーストーン。10は黒色凝灰岩製の尖頭削器。フリーフレイキングの剥片の打面部に直接打撃でやや尖頭形になる刃部を作っている。11は乳白色の凝灰岩もしくはチャートの石鏃。五角形鏃とY字鏃の形式間雑種。石材特性とその製作技法から、注意されるべき石器。13は黒曜石製の石鏃未製品。第97図1は剥片にやや急角度剥離で加工した鋸歯状削器。2は円礫石核を素材にした、コア・スクレイパー。黒曜石製の円形搔器に類似するので、注意すべき石器。3は汚れた緑色岩を素材にする石斧断片。扁平磨製石斧の未製品の可能性がある。4はY字鏃。5は両極石核。6・8はY字鏃。7は五角形鏃。9は五角形鏃とY字鏃の形式間雑種。10は特殊磨石。11は剥片素材の片刃削器。12は磨石を素材にした石核の断片。第98図1は球状耳飾。あめ色のロウ石。2はドリル。断面が三角形に切り立つように製作されている。3は礫端片素材の片刃削器。4は特殊磨石。5は手前と向こうの先端に激しい磨滅痕のあるドリル。6は石鏃未製品。7は折れた剥片を素材にした削器。加工は押圧剥離。8は石鏃B類。9は特殊磨石の断片。10は礫端片素材の鋸歯状削器。打面部に加工してやや厚い刃を付けている。11は小形の特殊磨石未製品。敲打痕が表裏についている。12は礫端片の断片。13は礫石錘。第99図1は円礫の石核を素材にして平坦剥離で刃部を向こうに形成した鋸歯状削器。SB19に同じ石器がある(第65図7)。2は背面に大きな自然面を残す素材に急角度剥離の刃を付けた搔器。自然面は平らである。3は礫端片素材の片刃削器。4は石核もしくは磨石。5は円礫石核から剥離された剥片。6は礫端片素材の片刃削器。7は特

殊磨石。8はY字鏃。9は黒曜石の小形角礫素材の削器。加工は押圧剥離。10は赤チャートの削器。礫面剥片素材。石核素材は角礫。11は青チャートの石鏃。第100図1は磨製石斧の断片。2は凹石と叩石の複合石器。3は礫破片。打点の下の砕けが大きく残る。4は円礫石核。5はノッチ。打面側にノッチで挟りをいれている。第60図8（S B14）と同じ石器。6は叩石。右側辺は剥離のあとに研磨されている。7・9・10は石鏃。8は両極剥片。11は両極石核。12は剥片素材の削器。加工は押圧剥離。第101図1は礫端片素材の両刃削器。打面部は成形されている。2は磨石。3は小形の礫端片。4は礫端片素材の片刃削器。5・6は磨石。7は両極剥片素材の削器。加工は押圧剥離。8は両極石核。9は石鏃。第102図1はノッチ。S B14（第60図8）・S K383に同じ石器がある。2は礫端片。左側辺背面に不規則剥離。3は剥片。4は搔器。円礫から剥離された剥片の鋭い辺の主要剥離面に通常の剥離で刃を付けている。5は五角形鏃。6は石鏃の未製品。7は中形の剥片。8は両極石核。上半部は折れ面である。

2) 土坑243について（第103～107図）

土坑243の遺物は特殊である。総数17点の遺物は、いずれも大形の完形品であった。これについて遺物の性格を記述する。

第103図1～4は超大型の礫端片である。1・2は自然面をそのまま残すが、3・4は自然面に滑らかさを実現する加工を施す。縄文時代早期前半の石器素材剥片の見本、もしくは見本以上にデフォルメされた剥片である。実際に最も大きな礫端片としての石器を第113図に掲載しているが、これ以上の大きさの石器はない。従って、土坑に埋納された剥片は、剥片としての理想の姿を大ききでデフォルメしたものといえる。

第104図1～4は、石核のあるべき姿である。1は円礫の平面、そして側辺を加工してある。同様に2～4も石核のバリエーションを示しているようだ。したがって1～4は円礫素材の石核のあるべき理想の姿を具現したものといえよう。

第105～107は特殊磨石のバリエーションである。原石の形態と加工部位はこのバリエーションにおさまる。

土坑243の遺物は、美女遺跡の縄文早期の石器製作の理想の姿をデフォルメしたモノであるといえる。ここには、円礫素材の石器製作技法で動かしがたく、この文化に特徴的な石器の姿が埋納されているようである。それは個々の石器の分析とこの遺物との関係が物語っている。

(6) 遺構外の石器

遺構外の石器は、小形石器と大形石器で分けて掲載した。小形石器は今までの記述ではなかった石器の種類、黒曜石以外の石器などを掲載している。大形石器は特によく作られた石器を厳選して掲載した。

①小形石器（第108～110図）

第108図1は黒色の滑石製の玦状耳飾。2・3は石匙。2は異形石器の可能性もある。3は黒色安山岩の石器。4は黄灰褐色のチャートの尖頭器断片。5～10はドリル。10は先端に磨耗痕がある。11～13は先端が尖る削器。嘴状石器（ベック）としてもよい。この石器は他の縄文遺跡でもあるので、形式設定できる可能性がある。14・17は異形石器、ともに青チャート製。15・16は小形の両面加工石器。ともに黒曜石以外の石材を利用して同じ石器を製作している。第109図1～11は円形搔器。表裏縄文土器に

ともなう特徴的な円形搔器。素材は小形の角礫、厚い剥片、両極石核など多様。刃部の急角度剥離に規制が強く、素材に規制の弱い石器。12は青灰色の頁岩を用いた搔器。直接打撃で急角度の刃部を作っている。円形搔器ではないことに注意。13・15は両刃削器。加工は押圧剥離。14は尖頭削器。加工は押圧剥離。16・17は両刃削器。18は青チャートの両極石核。19は両極剥片素材の石鏃未製品。素材がよくわかる例。第110図1は青チャートの角礫を素材にした削器。裏面はバルブをとる加工がある。2は黒曜石の角礫の剥片。美女遺跡では比較的大形。3は平坦剥離でノッチを作った削器。4は青チャートの小形の両極石核。5はフリーフレイキングの剥片を素材にした両極石核である。

②砥石（第111図）

遺構外の砥石で、形状をとどめているものを図化した。ほとんどが断片である。1のみ左側辺に面がとってある。

③大形石器（第112図）

第112図は、遺構外の礫器・大形石器を掲載した。1は円礫を利用した片刃礫器。刃は左側辺。図化した右側辺は階段状で成形されている。2は円礫を縦に半割して、その側辺に刃を付けた両刃礫器。この場合の半割のネガ・ポジは剥片と石核の関係ではないので、礫器。3は石核断片を利用した両刃削器。背面に残る大きな面はネガ面。4は小形の石核を再利用して刃部を付けた鋸歯状削器。5は大きな剥片を利用した搔器。6は大きな剥片を利用した搔器。打面から両側辺にかけて通常の剥離で成形。刃部は裏面の右側辺。7は円礫素材の片刃礫器。縄文時代早期の礫器の製作技法のよくわかる資料。8は石核素材の搔器。右側辺に急角度剥離の刃。9は剥片を利用した鋸歯状削器。この素材は石核から剥がれ落ちた剥片。石核断片といってもよい素材。10は剥片を素材にした鋸歯状削器。平坦剥離で右側辺に刃部を形成している。打面部の平坦剥離剥離は、エッジを形成していないのではなく整形剥離。11は石核断片を利用した搔器である。

第113図は特に大形の剥片を利用した石器を掲載した。1は鋸歯状の急角度の刃部をもつ搔器。自然面が平ら。2は打面部分に鋸歯状の刃部、側辺に削器の刃部をもつ搔・削器。3は右側辺に刃部をもつ削器。刃は通常の剥離で形成され、打面は剥離によって折り取られている。4は搔器。主要剥離面に細かな剥離で鋸歯状の内湾する刃部を形成している。SB08（第56図1）と同じ石器。5は特に大形の剥片の主要剥離面に加工をした削器。手前の打面側の通常の剥離はおそらく整形。両側辺が刃部。6は背面に叩き痕と磨り痕のある剥片を素材にした片刃削器。7は大形の剥片を利用した両刃削器である。

④ハンマーおよび石核等（第114～117図）

第114図はハンマーと準備された石核を掲載した。1～4はハンマーの断片。ハンマーに磨り痕も残るが、磨石としても利用されていたのだろうか。磨り痕の性格は不明。6～10は準備された石核。円礫の平面を丁寧に研磨し、打面も叩きと磨りで準備している。9・10は円礫とは違うので磨石の可能性もある。しかし次の消費された石核にもこの形態のものがあるので掲載した。

第115図は、大形の石核でよく消費された石核を掲載した。細かな剥離で刃部を形成している6や、礫器の製作途上である5も掲載してある。いずれも美女遺跡での大形・中形の剥片を剥離している様子

が良く観察できる資料である。

第116図は中形の剥片で、よく消費された石核を掲載した。1・6は削器に、3～5は搔器に転用されている。

第117図は遺構外の多様な石器を掲載した。1・2は中形剥片を剥離しきった残核。3は剥片の抜けきらないまま放棄された石核。4～6はやや小形の石核。7は石核を利用したノッチ。正面の礫端片の剥離が階段状になり失敗したあと、反対側の中央の縁を剥離してノッチを形成している。8は剥片素材のノッチ。平坦剥離で右側辺に刃部を形成。9は打製石斧の未製品。手前に刃潰し加工。この形態の剥片から打製石斧が製作される。10は小形の石核の断片を利用したノッチ。11・12・13は小形の石核である。

⑤打製石斧（第118～120図）

打製石斧は、縄文中期の石器で触れてあるので、参照されたい。なお、第120図の分銅形打製石斧だけは、縄文時代中期後葉から後期以降の石器である。

⑥磨製石斧（第121図）

石材はほとんどが緑色岩であるが、3はヒスイの可能性もある。1は乳棒状の磨製石斧。刃部は折れた後、折れ面を叩きで成形され石槌になっている。2・5は中形の扁平片刃石斧。剥片をそのまま磨いている。3・4・8は小形磨製石斧。8はより小さな小形磨製石斧。7は乳棒状磨製石斧の断片。9・10は片刃磨製石斧の断片。11は扁平片刃磨製石斧の素材。12・13・14は素材の剥片に若干加工したもの。15は磨製石斧の未製品である。

⑦磨石類（第122・123図）

第122図1～4は特殊磨石。5～8は通常みられる磨石。美女遺跡では2種類の磨石がある。特殊磨石は長円礫を素材にし、通常の磨石は厚い円礫を素材にしている。

第6節 総括

美女遺跡の石器の記述から、以下のことが明らかになり、新たに次のような課題が明らかになった。

1. 美女遺跡では縄文時代早期前半の押型文土器にともなう石器が約2000点あまり出土した。石器の製作技法には大きく2群あり、それは石材に明確に対応している。天竜川流域の円礫を石核や礫器、磨石の素材とする大形石器群。和田峠の黒曜石を利用する小形石器群である。
2. 大形石器群のうち円礫を石核として利用した剥片石器は、5種類である。また円礫を素材にした片刃礫器は1種類である。磨石類は、背の高い円礫を利用した磨石と、背が高く長円礫の四方を研磨した特殊磨石の2種類が遺跡の中で製作されていた。したがって美女遺跡の縄文時代早期前半の大形石器の種類は8種類である。

3. 5種類のうち、円礫を加工して作業面に平滑な面を実現する石核から剥離された貝殻状の礫端片は、片刃削器となっている。片刃削器の加工領域は素材の主要剥離面に限定される。
4. 片刃削器の剥片を剥離された石核は、多様な剥片を剥離されている。その多様な剥片からは、
 - ・平らな主要剥離面を残し、背面に急角度剥離の刃部を形成する搔器。
 - ・背面と主要剥離面の両側に刃部を形成する両刃削器。
 - ・主に主要剥離面側に平坦剥離で大きな抉りを入れるノッチ。
 - ・ノッチを連続させる鋸歯状石器。などが製作された。
5. 片刃削器以外の削器・搔器は剥片形態に規格性がなく、多様な剥片類とともに石核の断片を素材にしても、それらは製作された。石核断片を素材とするときは、円礫の平坦な縁から剥片を剥離しながら二次加工としている。
6. 円礫を素材とし、その円礫を横に半割して、反対の自然面から半割面に急角度の刃部を形成する礫器も製作された。
7. 縄文時代早期前半の小形石器は、主に黒曜石で製作され、石鏃、削器、円形搔器、ドリルなどが製作された。他に石匙と尖頭器がある。
8. 石鏃は両極剥片からおもに製作された。
9. 石鏃は十分な分析はできなかったが、今後の分析方向の試みだけ提示した。石鏃は押圧剥離だけで製作されている難しい石器だが、押圧剥離のしかたによって、意識的に形態をつくるので、異なる系統の石鏃との技法の関連性が今後の課題である。統計処理も今後は必ず利用されなければならない。
10. 押圧剥離で刃をつける削器、直接打撃もしくはハードハンマーを縁にあてる押圧剥離で刃部を形成する搔器、搔器と同様な技術で先端を形成するドリルなどがある。
11. 少量だが極めて重要な小形石器に、石匙と尖頭器がある。どちらも縄文時代早期に組成するものである。異系統の石器か、形式間雑種の石器である可能性がある。
12. 以上の縄文時代早期前半の石器群は、大形石器が主に立野式土器にともなう石器、Y字鏃と円形搔器が表裏縄文土器にともなう石器である。両者は美女遺跡で共存する。これは奈良県大川遺跡、三重県大鼻遺跡、県内お宮の森裏遺跡の発掘報告の所見と美女遺跡の分析からいえることである。従って縄文時代早期前半の押型文土器文化と表裏縄文土器文化の人々は、ある時期に共存して、集落を営んでいたと結論された。これは土器からの分析ではないことにも注意してほしい。
13. 縄文時代中期の打製石斧の製作技法を明らかにした。打製石斧でも大形と中・小形は素材から作り分けられている異なる石器の種類である。分析した石器の大半が遺構外であるので、今後はより確かな資料操作が今後の課題である。
14. 弥生時代の石器は、遺構外であっても明確にわかる製作技術と技法を具備している。緑色岩を好み、磨製技術に卓越し、有茎石鏃を製作している。縄文時代の中期以前とはその石器文化は、一目見て理解できるほどの違いである。
15. 以上のようにみてきた石器の分類は、先験的に与えられたものではなく、美女遺跡の観察と分析を主に結論された。そして、石器を遺構ごとに図に整理したが、異なる石器の製作技法が混在する遺構もあった。たとえば、第57図1は、縄文時代早期前半の遺構（S B11）に中期の大形打製石斧の未製

品が混入した例である。S B20には弥生時代の磨製石剣（第90図16）が混入している。このように石器の分析は、石器そのものの属性から製作技法を明らかにし、それを再度遺跡の分布に戻して、再検討するという方法が望まれる。遺構の時期は、そこにはいつている遺物から即断できるものではなく、遺物の製作技法の分析を通して行われる必要がある。そしてそれは、石器と土器の両面から行われる必要がある。今回の報告では、石器の面からそれが十分にできなかった。その分析ができなければ、集落論もできなければ、文化の復元もできないのである。遺物の技法分析をもう一度分布図へおとして、遺構の性格を整理すること。これが今後の大きな課題である。

16. 今回は、お宮の森裏遺跡でおこなったような包括的で、想像的な、セツルメント・システムの記述は行わなかった。なぜなら、その記述は考古学研究として意味がないと判断したからである。先史時代の石材分析を通じて「埋め込み戦略」などのスタティックな行動モデル（モデル）が昨今は流行している。実はこの議論は、今回の分析をもう少し深化させ、さらに統計的検定処理を駆使して、遺跡の石器製作構造をハッキリさせ、その遺跡分析を原産地と消費地で積み重ねない限り、断じて論じてはならない性格のものである。たしかに美女遺跡でも小形石器は圧倒的に黒曜石である。しかも原産地は遠く、製作される器種も限定されている。しかし、これだけでは先史時代人の行動モデルは語れないはずである。なぜなら、先史時代人とは、私たちとは異なる文化をもつ人々であるからだ。先史時代の人々が、目的合理性にかなう行動にはしているなどと、誰も検証してはいない。目的合理性にかなう行動は現代資本主義社会だけの専売特許である。しかも現代資本主義は地域的にも歴史的にもきわめて限定されたところから発生し、その行動原理の目的合理性はきわめて宗教的動機によるものだからである（マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店）。

私たちが、先史時代を記述する目的は、私たちの価値観で先史時代を記述することではない。私たちの言葉をつかって、先史時代の文化を復元することである（考古学研究における文化の概念は先に用語のところで述べたので参照してほしい）。私たちの価値観が先にあるのではなく、私たちのロジック（つまり言語）で、どれだけ過去を正確に復元できるかが、考古学者の使命であろう。その困難さを埋めるために方法論（「型式学」）は存在する。私たちの言語で先史時代を復元しえるとき、想像を越える大きな力が、その歴史の記述に宿るであろう。文化の歴史の復元は古く、新しい（とされる）欧米の理論や進化論でモノを横断する人々は、遺跡内にある事実を翻弄されるだけである。現実からモデルを構築し、現実で検証するという考古学の手法は、現代に求められている歴史記述そのものである。

補註

註1 矢出川遺跡の細石刃石核に神津島産の黒曜石が発見された。堤 隆 1997 「海を渡ってきた黒曜石」 『佐久考古通信』No. 71

註2 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』 言叢社による。記述と分析と解釈の用語は一定の語彙と用法を守る必要がある。それが人文科学の学問としての条件である。わが国では竹岡俊樹氏の業績が卓越しているので、この用法を用いることとする。

註3 「技術」は人類ならだれでも習得・発見できる可能性のある石を割る身振りと道具の使い方。この「技術」を組み合わせて、人類は意図する人工物を製作する。その組み合わせ方の法が「技法」。従って「技術」を記述する言語は、観察事実を表現する記号の必要がある。客観的で、誰でも使いやすく、日本語として馴染みのある用語が望ましい。この点を完成させた竹岡俊樹氏の『石器研究法』は世界的にみても優れた業績である。

一方、この石器がどのような意図で製作されているのかは、別の言語が必要になる。その用語の用法は、「技術用語」＋「技法の用語」で表現されると、日本語ではわかりやすいだろう。たとえば、「押圧剥離による鋸歯状の刃部」と記述された場合、技術は「押圧剥離」で、製作者が特に実現したい意図は「鋸歯状の刃部」となる。そして「押圧剥離の鋸歯状の刃部」そのものが、石器の評価を決める重要なデータである。石器のデータはこのように作られることで、技法の構造分析に耐えうるようになる。

註4 「型式学」とは、モノを分類し分析する手法で、個別文化の内容を明らかにし、さらに各個別文化の比較研究によって人類の文化を歴史的に整理し、記述することを目的とする。その骨子は、1 観察した現象を一定の用語で記述する。この用語は、技術用語なので、技術を記述する以外に目的をもたない記述用語である。それは文化の中では没評価的用語である。2 その記述用語で記述された事実と事実に関連関係を発見し、それを一定の用語で記述する。これを石器の個別分析という。この用語を個別分析用語という。具体的な石器分析とは、二次加工と素材の関係を明らかにするところから出発し、その関係を延長したところにある素材の獲得技法を明らかにし、そして結果としてのデザインを明らかにするという3つの分析を行う。3 ここまでで、現象は一定の用語にデータ化され、さらにデータ間の相関も個別分析によって一定の用語で記述され、より高次のデータへと変換されている。そして個別分析によって明らかになったデータは、今度は遺跡間で比較される。遺跡間を比較する比較分析用語によって、個別の遺跡のデータは、さらに高次のデータへと変換される。その比較分析用語が、「石器文化」、「形式」、「型式」である。

さて、縄文石器研究は、型式学で文化を明らかにすることをしないで、個別の道具の使い方を復元することが文化を復元することと誤解して、混乱している。この不幸な学史について詳細は触れないが、「観察者が想像する機能」を基準とする分類が信仰にまでなっているのが、その元凶である。この分類は、あらゆる努力の果てに、「観察者が思いこんだ幻想」としての石器分類しか示さない不毛な分類作業である。竹岡俊樹氏の言葉を借りれば、「彼は先史時代の石器に、自分の分類を投影しているにすぎない」のである。

註5 形式と型式の比較分析用語を解説する。

石器は、製作者によって作り分けられたところの石器＝石器の種類が文化の中に実在する。その石器の種類を分析の結果、我々の普遍的用語で表現すると「形式」となる。いうなれば形式は、分析によって明らかにされた、作り分けられている石器のカテゴリーである。一方、形式の実体は時間差によってその製作技法の一部が変化する。同じ形式内で、時間差という原因で技法の一部が異なるときに、その形式は「型式」をもつという。いわば「型式」は同じ形式の製作技法の時間変遷を示す概念である。以上の区別を無視して「形式の細分」を「型式」と誤解すると、果てしない混乱におちいる。形式は個別の文化の中で階層的分類体系をもつものだから、個別文化の中の究極の細分形式を型式と同義とすると、型式は概念ではなく実体そのものとなり、文化の記述もできなければ、もちろん間文化分析も不可能になる。わたしたちは、形式と型式のないう属性をはっきりわけて考える必要があるのだ。繰り返すが、形式は製作技法そのものから明らかにされた、他とは異なる石器のカテゴリーのこと。型式は形式のもつ技法の時間的変異をしめす概念である。

註6 異なる2つの形式があり、さらに異形式間の合いの子のような形式があるとする。この合いの子形式を「型式学的雑種」、もしくは「形式間雑種」と呼ぶことを提唱する。大塚達朗氏のいう「石器のキメラ現象」である。もちろん、「型式学的雑種」もひとつの「形式」のほかならない。

註7 五角形鏃とY字鏃について

五角形鏃は三重県大鼻遺跡、奈良県大川遺跡にも出土している。Y字鏃はお宮の森裏遺跡（表裏縄文土器）で量的に安定して出土しているほか、三重県粥見井尻遺跡（縄文草創期の隆起線文土器）にも安定して出土している。五角形鏃とY字鏃とは製作技法が異なり、それぞれを保有する文化が、異なる系譜をもつ可能性がある。

註8 異文化の歴史を自国語で記述する方法について

最初に異文化を自国語で記述するために用語の用法について解説する。

異文化の固有名詞を自国語で記述するためには2種類の語彙が必要である。それは、異文化の固有名詞と、自国語の普通名詞で表現されなければならない。現代でも高速道路とか、鉄橋などの川の名称にその例がある。たとえば「千曲川」は日本語の固有名詞。しかし英語で記述される場合は「Chikumagawa, riv. (チクマガワ、リバー)」である。英語がネイティブの人たちには、「チクマガワ」は「リバー」であることを付さなければ、説明にならないのである。この場合の「リバー」は、コミュニケーションをとるだけの語彙（普通名詞）で、そこに価値観や評価は付随されない。しかし、このコミュニケーションの語彙がないと、不便きわまりない。

同時代の文化は以上のように比較的単純な記述構造である。というのも異文化には異文化の固有名詞が語彙としていまだ実在するからである。

次に異文化の歴史を自国語で記述する方法について解説する。

異文化はひとつではない。異文化ははるか時空の彼方に広がり、重なりあっていた（実在した）。しかも、異文化の固有名詞は、遙か彼方に失われてしまっている。ここに困難がたちはだかるのである。すなわち、異文化の固有名詞も自国語のコミュニケーション語彙も、まったくひとつの自国語で実現しなければならないのである。

最初に、多様で多数な異文化を自国語で表現するときには、自国語の中に、あらゆる文化を縦横

断できるような普通名詞の語彙がないと不便である。石器文化でいえば、旧石器時代・縄文時代・弥生時代など、石器文化を形成するあらゆる時代を通じて利用できる石器の名称が必要になってくる。これが「器種」の正体である。器種があるから、どんな文化のどんな石器でも、ある程度の共通の認識が研究者間に共有されるのだ。

一方、文化の中での固有性を示す記述・語彙も必要である。それを日本語で表現するならば、石器の種類という語彙になる。現実には個別文化の中での石器の種類は、「日本語の石器の説明の形容詞」+器種名で表示される。そして、その石器がその石器文化の固有名詞となったときに、「何何形式」として記述される。

以上のように人文科学は、大きな問題をはらんでいる。その最も大きな問題は以下にある。言葉による分析を前提とし、結果も言葉で出力しなければならぬ。その記述される世界は異文化であり、しかも消えてしまった過去であるので、日常言語のレベルではきわめて表現しにくい。しかし我々は日常言語以外の言語しか縦横に駆使できないのである。そして、歴史が日本国民に必要とされている今は、日常の日本語以外の言語で記述される、つまり外国語で記述される歴史は私たちにとって意味がない。しかも私たちは日本語で思考しているのだ。

この解決策は、現状では以下のようにしか思い浮かばない。石器の記述・個別分析・比較分析までは厳密な用語体系を整備して、日常言語とは切り離して用いる。そして石器文化の歴史的評価を日常言語で記述するという二重規範である。本報告は、石器の記述・個別分析でとどめるため、用語の解説を本文に掲載した。

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S B 01	硬 砂 岩		9										5			12	2	2	30
	緑 色 岩		1																1
	黒 曜 石		1													9	1		11
	合 計		11										5			21	3	2	42
S B 08	硬 砂 岩		1			4								1		17			23
	緑 色 岩					1							1						2
	黒 曜 石	1	3													109	2		115
	珪 岩															4			4
	砂 岩												1					1	2
	そ の 他															1		9	10
	合 計	1	4			5							2	1		114	2	10	131
S B 11	硬 砂 岩												1			3	2	1	7
	黒 曜 石															1			1
	玻璃質安山岩	1																	1
	合 計	1											1			4	2	1	9
S B 14	硬 砂 岩		10			2							3	3		52	1	4	75
	緑 色 岩									1						3			4
	黒 曜 石	4	2													63	4		73
	珪 岩															4			4
	玻璃質安山岩															1			1
	砂 岩												1					1	2
	そ の 他												4			1		56	61
	合 計	4	12			2				1			8	3		124	5	61	220
S B 18	硬 砂 岩		25			5							4	5		82	11	2	134
	緑 色 岩															4			4
	黒 曜 石	10	2		6	1	1									321	33	7	381
	珪 岩															7		1	8
	玻璃質安山岩															1			1
	砂 岩		1								4							1	6
	そ の 他		1												1	7		16	25
	合 計	10	29		6	6	1				4		4	5	1	422	44	27	559
S B 19	硬 砂 岩		42									1	11	6		95	2	9	166
	緑 色 岩		1							3		1				2		1	8
	黒 曜 石	9	10		2			1								226	36		284
	珪 岩		1													3	1	1	6
	玻璃質安山岩															5			5

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S B 19	砂 岩										1							2	3
	そ の 他		1							1						12		25	39
	合 計	9	55		2			1		4	1	2	11	6		343	39	38	511
S B 20	硬 砂 岩		86			8					2	1	18	4		345	95	5	564
	緑 色 岩		3							1			1			20	4	3	32
	黒 曜 石	31	30		1		2	1								1056	143		1264
	珪 岩	1														12	1		14
	玻璃質安山岩	1														4			5
	砂 岩					1					4						8		13
	そ の 他				1					2			6		1	21		91	122
	合 計	33	119		2	9	2	1		3	6	1	25	4	1	1466	243	99	2014
S B 21	硬 砂 岩		22			2							9	3		70	36	4	146
	緑 色 岩												1			7	4		12
	黒 曜 石	5	5		2											71	8		91
	玻璃質安山岩															2	1		3
	砂 岩																	1	1
	そ の 他															3		52	55
	合 計	5	27		2	2							10	3		153	49	57	308
S B 24	硬 砂 岩		3										1	1		15	2	1	23
	黒 曜 石	1														26	1		28
	珪 岩															1			1
	そ の 他		2										1						10
	合 計	1	5										2	1		42	3	1	62
S B 25	硬 砂 岩		14										9	2		41	13	1	80
	緑 色 岩		1											2		6	1		10
	黒 曜 石	5	6		2											79	5		97
	珪 岩															6			6
	玻璃質安山岩	2	1													11	1		15
	砂 岩										3		1			1			5
	そ の 他											1	1			10	1	9	22
	合 計	7	22		2						3	1	11	4		154	21	10	235
S B 26	硬 砂 岩		18		3					1			2	1		20		2	47
	緑 色 岩		1													2			3
	黒 曜 石	1		1												28	7		37
	珪 岩																1		1
	玻璃質安山岩															1			1

遺構名	石材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S B 26	砂岩										3							1	4
	その他								1							1		8	10
	合計	1	19	1	3				1	1	3		2	1		52	8	11	103
S B 23	硬砂岩		4										2			9			15
	緑色岩															1			1
	黒曜石	3			1											10	3		17
	珪岩															4			4
	玻璃質安山岩															1			1
	砂岩												1			1			2
	その他		1			1							1			2		8	13
	合計	3	5		1	1							4			28	3	8	53
S B 03	硬砂岩															2			2
	黒曜石															1			1
	合計															3			3
S B 09	硬砂岩		1											1					2
	黒曜石	1																	1
	その他												1						1
	合計	1	1										1	1					4
S B 07	硬砂岩		3						3				1	3		2			12
	緑色岩															1			1
	黒曜石	2	2			1										1			6
	合計	2	5			1			3				1	3		4			19
S B 15	硬砂岩												1	1				1	3
	黒曜石	1																	1
	合計	1											1	1				1	4
S B 13	硬砂岩		1										1	1					3
	珪岩	1																1	2
	その他								1				1						2
	合計	1	1						1				2	1				1	7
S B 17	黒曜石	1														1			2
	その他																	1	1
	合計	1														1		1	3
S B 04	硬砂岩		2													1			3
	黒曜石															14			14
	その他															1	1		2
	合計		2													16	1		19

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S B 05	黒 曜 石															3			3
	合 計															3			3
S B 06	硬 砂 岩		1													1			2
	黒 曜 石															6			6
	珪 岩															2			2
	そ の 他																	3	3
	合 計		1													9		3	13
S B 12	硬 砂 岩		1										1						2
	合 計		1										1						2
S B 22	硬 砂 岩		4											1		6			11
	砂 岩										1							2	3
	そ の 他											1	2					1	4
	合 計		4								1	1	2	1		6		3	18

集石

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S I 13	硬 砂 岩												1						1
	合 計												1						1
S I 14	硬 砂 岩															2			2
	黒 曜 石				1	1										8	1		11
	玻璃質安山岩															2			2
	そ の 他															1	5		6
	合 計				1	1										13	6		21
S I 17	硬 砂 岩															1			1
	黒 曜 石															4			4
	砂 岩										1								1
	合 計										1					5			6
S I 18	硬 砂 岩															1		1	2
	黒 曜 石		1													2			3
	そ の 他												1						1
	合 計		1										1			3		1	6
S I 21	硬 砂 岩		2														1	1	4
	黒 曜 石		1													1	1		3
	そ の 他												1					1	2
	合 計		3										1			1	2	2	9

炉穴

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 220- 225-226- 228	硬 砂 岩		1										1			4	2		8
	黒 曜 石	1				1										6			8
	そ の 他										1					3	3	12	19
	合 計	1	1			1					1		1			13	5	12	35
S K 221- 235-240- 247-248	硬 砂 岩												1			1	4		6
	黒 曜 石															1			1
	そ の 他		1													1	1	1	4
	合 計		1										1			3	5	1	11
S K 412	硬 砂 岩		1													4	4	1	10
	黒 曜 石				1	1										11			13
	そ の 他															1		4	5
	合 計		1		1	1										16	4	5	28
S K 411- 426-427	硬 砂 岩												1			2	2		5
	緑 色 岩															1			1
	黒 曜 石					1										7	1		9
	砂 岩										2								2
	そ の 他																	12	12
	合 計					1					2		1			10	3	12	29
S K 456	硬 砂 岩										1								1
	黒 曜 石															1			1
	合 計										1					1			2

貯蔵穴

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 400	硬 砂 岩		2													4	1		7
	緑 色 岩															3			3
	黒 曜 石	1														10	3		14
	そ の 他																2		2
	合 計	1	2													17	6		26
S K 403	硬 砂 岩															1			1
	そ の 他																	1	1
	合 計															1		1	2
S K 520	硬 砂 岩		1																1
	黒 曜 石															6			6
	そ の 他												1			1			2
	合 計		1										1			7			9

土坑

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 08	硬 砂 岩															2	1		3
	黒 曜 石	1			1	1													3
	合 計	1			1	1										2	1		6
S K 09	硬 砂 岩		1																1
	黒 曜 石					1										1			2
	合 計		1			1										1			3
S K 36	黒 曜 石															1			1
	合 計															1			1
S K 43	そ の 他																	2	2
	合 計																	2	2
S K 45	硬 砂 岩		2													3			5
	黒 曜 石		1													6	1		8
	合 計		3													9	1		13
S K 81	硬 砂 岩																2		2
	そ の 他																1		1
	合 計																3		3
S K 82	そ の 他															1			1
	合 計															1			1
S K 89	硬 砂 岩															4			4
	黒 曜 石					1										3			4
	そ の 他															1	1		2
	合 計					1										8	1		10
S K 91	黒 曜 石		1													1			2
	玻璃質安山岩															1			1
	砂 岩																	1	1
	そ の 他																	2	2
	合 計		1													2		3	6
S K 96	硬 砂 岩																1		1
	黒 曜 石															2			2
	珪 岩															1			1
	砂 岩																	1	1
	合 計															3	1	1	5
S K 97	硬 砂 岩												2						2
	砂 岩								1										1
	合 計								1				2						3

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 99	硬 砂 岩		1											1			1		3
	黒 曜 石															2			2
	合 計		1											1		2	1		5
S K104	硬 砂 岩															2			2
	黒 曜 石	1														1	3		5
	そ の 他															1		2	3
	合 計	1														4	3	2	10
S K114	硬 砂 岩															1			1
	黒 曜 石															2			2
	そ の 他																	1	1
	合 計															3		1	4
S K115	硬 砂 岩															1			1
	黒 曜 石															3			3
	そ の 他		1																1
	合 計		1													4			5
S K128	硬 砂 岩												1						1
	珪 岩	1																	1
	合 計	1											1						2
S K130	硬 砂 岩															1			1
	合 計															1			1
S K143	硬 砂 岩																1		1
	黒 曜 石															2	1		3
	そ の 他																	3	3
	合 計															2	2	3	7
S K145	硬 砂 岩		1																1
	黒 曜 石															2			2
	合 計		1													2			3
S K147	硬 砂 岩															1			1
	そ の 他		1															3	4
	合 計		1													1		3	5
S K175	硬 砂 岩															1			1
	黒 曜 石															2			2
	そ の 他																	1	1
	合 計															3		1	4

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 210	黒 曜 石															4			4
	そ の 他																	2	2
	合 計															4		2	6
S K 211	硬 砂 岩		1													2	1		4
	黒 曜 石				1											2			3
	珪 岩	1																	1
	合 計	1	1		1											4	1		8
S K 222	硬 砂 岩															1	1		2
	合 計															1	1		2
S K 223	黒 曜 石	1				1										4	1		7
	合 計	1				1										4	1		7
S K 229	緑 色 岩															1			1
	そ の 他																	1	1
	合 計															1		1	2
S K 232	硬 砂 岩													1		2		1	4
	黒 曜 石					1										2			3
	そ の 他																	1	1
	合 計					1								1		4		2	8
S K 233	硬 砂 岩															1			1
	玻璃質安山岩															1			1
	そ の 他																	10	10
	合 計															2		10	12
S K 245	硬 砂 岩															2			2
	合 計															2			2
S K 249	硬 砂 岩																1		1
	黒 曜 石															1			1
	合 計															1	1		2
S K 252	そ の 他															1		1	2
	合 計															1		1	2
S K 243	硬 砂 岩												4	3		3			10
	砂 岩												1						1
	そ の 他												4			1			5
	合 計												9	3		4			16

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 256	硬 砂 岩																	1	1
	そ の 他																	3	3
	合 計																	4	4
S K 271	硬 砂 岩															2			2
	そ の 他																	1	1
	合 計															2		1	3
S K 273	硬 砂 岩		1											1					2
	合 計		1											1					2
S K 279	硬 砂 岩															1	1		2
	黒 曜 石															2			2
	珪 岩					1													1
	そ の 他																	1	1
	合 計					1										3	1	1	6
S K 297	黒 曜 石															1			1
	合 計															1			1
S K 298	黒 曜 石															2			2
	珪 岩															1			1
	玻璃質安山岩	1																	1
	合 計	1														3			4
S K 305	硬 砂 岩															2			2
	黒 曜 石															1			1
	合 計															3			3
S K 314	硬 砂 岩		1										1	1		4	1		8
	緑 色 岩															1			1
	黒 曜 石															4			4
	合 計		1										1	1		9	1		13
S K 317	黒 曜 石				1														1
	合 計				1														1
S K 318	黒 曜 石															1			1
	合 計															1			1
S K 321	硬 砂 岩															1			1
	合 計															1			1

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K326	硬 砂 岩		1											1		2	2	1	7
	黒 曜 石	1		1	1											5			8
	珪 岩															1			1
	そ の 他															1		1	2
	合 計	1	1	1										1		9	2	2	18
S K327	硬 砂 岩		1													2			3
	黒 曜 石					1										2	1		4
	そ の 他															1			1
	合 計		1			1										5	1		8
S K334	黒 曜 石				1											6	5		12
	そ の 他																	1	1
	合 計				1											6	5	1	13
S K336	硬 砂 岩															1			1
	合 計															1			1
S K339	硬 砂 岩		2			4							1			1	1		9
	黒 曜 石	1		1	3											5			10
	そ の 他															1			1
	合 計	1	2	1	3	4							1			7	1		20
S K343	硬 砂 岩															1			1
	そ の 他															1			1
	合 計															2			2
S K345	硬 砂 岩		2													5	1		8
	黒 曜 石				1	2											1		4
	そ の 他																	3	3
	合 計		2		1	2										5	2	3	15
S K346	硬 砂 岩		1											1		2		2	6
	黒 曜 石					1										2		1	4
	珪 岩		1																1
	そ の 他															1			1
	合 計		2			1								1		5		3	12
S K352	黒 曜 石																1		1
	珪 岩															1			1
	合 計															1	1		2
S K354	黒 曜 石																1		1
	合 計																1		1

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 355	黒 曜 石																1		1
	合 計																1		1
S K 356	硬 砂 岩																1		1
	珪 岩															1			1
	そ の 他																	1	1
	合 計															1	1	1	3
S K 358	硬 砂 岩															1	1		2
	黒 曜 石															1			1
	合 計															2	1		3
S K 359	硬 砂 岩															2			2
	黒 曜 石															3			3
	そ の 他															1	1		2
	合 計															6	1		7
S K 361	黒 曜 石															2			2
	合 計															2			2
S K 362	黒 曜 石															1			1
	珪 岩															1			1
	砂 岩															1			1
	そ の 他																	7	7
	合 計															3		7	10
S K 363	黒 曜 石															3	1		4
	そ の 他																	4	4
	合 計															3	1	4	8
S K 364	硬 砂 岩																2		2
	黒 曜 石					2										1			3
	合 計					2										1	2		5
S K 367	黒 曜 石	1																	1
	合 計	1																	1
S K 369	硬 砂 岩		1															1	2
	黒 曜 石															1			1
	合 計		1													1		1	3
S K 375	硬 砂 岩												1						1
	黒 曜 石															1			1
	そ の 他																	2	2
	合 計												1			1		2	4

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 376	硬 砂 岩															2			2
	砂 岩																	1	1
	そ の 他																	4	4
	合 計															2		5	7
S K 378	黒 曜 石		1													2	1		4
	合 計		1													2	1		4
S K 385	硬 砂 岩															2	2		4
	黒 曜 石															10			10
	そ の 他																	3	3
	合 計															12	2	3	17
S K 390	黒 曜 石															2	1		3
	合 計															2	1		3
S K 397	そ の 他																	9	9
	合 計																	9	9
S K 399	硬 砂 岩															4	5		9
	黒 曜 石															13	1		14
	そ の 他										1						1	6	8
	合 計										1					17	7	6	31
S K 404	硬 砂 岩															1			1
	黒 曜 石		1													3			4
	合 計		1													4			5
S K 406	緑 色 岩															1			1
	黒 曜 石															1			1
	合 計															2			2
S K 407	硬 砂 岩															4	1		5
	緑 色 岩															2			2
	黒 曜 石															13			13
	珪 岩					1										1			2
	玻璃質安山岩															1			1
	そ の 他															1		12	13
	合 計					1										22	1	12	36
S K 409	黒 曜 石				1											1			2
	合 計				1											1			2
S K 410	黒 曜 石															2	1		3
	珪 岩															2			2
	合 計															4	1		5

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 413	硬 砂 岩		1													4			5
	黒 曜 石															3			3
	そ の 他																	1	1
	合 計		1													7		1	9
S K 424	黒 曜 石															1			1
	合 計															1			1
S K 435	黒 曜 石															1	1		2
	合 計															1	1		2
S K 436	硬 砂 岩															4			4
	黒 曜 石															2			2
	そ の 他																	4	4
	合 計															6		4	10
S K 438	硬 砂 岩															1			1
	黒 曜 石															8			8
	そ の 他																	1	1
	合 計															9		1	10
S K 441	硬 砂 岩												1			1			2
	黒 曜 石					2										3			5
	そ の 他																	4	4
	合 計					2							1			4		4	11
S K 444	そ の 他																	1	1
	合 計																	1	1
S K 446	硬 砂 岩													1					1
	黒 曜 石			1		1													2
	合 計			1		1								1					3
S K 455	硬 砂 岩		1													1			2
	合 計		1													1			2
S K 468	硬 砂 岩															2			2
	黒 曜 石					1										4			5
	そ の 他																	2	2
	合 計					1										6		2	9
S K 469	硬 砂 岩															6		1	7
	緑 色 岩												1			2			3
	黒 曜 石	1														3			4
	そ の 他																	3	3
	合 計	1											1			11		4	17

遺構名	石 材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	磨製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 472	硬 砂 岩		1													1	1		3
	合 計		1													1	1		3
S K 473	玻璃質安山岩															1			1
	そ の 他																	1	1
	合 計															1		1	2
S K 479	黒 曜 石															1			1
	合 計															1			1
S K 481	硬 砂 岩		1										1				1		3
	黒 曜 石	1														2	3		6
	合 計	1	1										1			2	4		9
S K 482	硬 砂 岩													1					1
	黒 曜 石				1											1			2
	珪 岩															1			1
	合 計				1									1		2			4
S K 487	硬 砂 岩		1													1		1	3
	黒 曜 石															5			5
	そ の 他															2			2
	合 計		1													8		1	10
S K 496	緑 色 岩															1			1
	砂 岩										1								1
	合 計										1					1			2
S K 498	硬 砂 岩		1										1			4			6
	緑 色 岩															1			1
	黒 曜 石	1				1										8	2		12
	玻璃質安山岩															1			1
	そ の 他		1															4	5
	合 計	1	2			1							1			14	2	4	25
S K 500	黒 曜 石															1			1
	合 計															1			1
S K 501	硬 砂 岩																1		1
	合 計																1		1
S K 506	硬 砂 岩												1			1	1		3
	玻璃質安山岩																1		1
	砂 岩															1			1
	そ の 他																	1	1
	合 計												1			2	2	1	6

遺構名	石材	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 507	硬砂岩												1				1		2
	黒曜石															1	1		2
	その他																3		3
	合計												1			1	5		7
S K 508	黒曜石																1		1
	その他																	1	1
	合計																1	1	2
S K 521	硬砂岩		1																1
	合計		1																1
S K 524	硬砂岩															2			2
	黒曜石	1		1												3			5
	珪岩															1			1
	合計	1		1												6			8
S K 532	玻璃質安山岩															1			1
	合計															1			1

集石

遺構名	出土土器	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S I 01	早期押型文 前期初頭					1										3		1	5
S I 04						1													1
S I 07	早期押型文 前期初頭					1										8		1	10
S I 08	早期押型文 前期		3	1	2				1				1			8			16
S I 09	早期押型文 前期初頭	3				1					1					20	11		36
S I 10													2	1					3
S I 11	早期押型文 前期															2			2
S I 16	早期押型文 前期初頭		1											1		3	3		8
S I 20																1			1
S I 22	早期押型文 中期初頭	1			1	1										5		2	10
S I 24	早期押型文 早期末葉		2			5							2			23	4	15	51
S I 25					1											1	1		3

貯蔵穴

遺構名	出土土器	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 01	弥生		1													3	1		5
S K 59																1			1
S K 72										1									1
S K 78	早期末葉		1													8		6	15
S K 311	早期末葉	1	1			1										24	2	9	38
S K 328	晩期・弥生		4	1		1										9	3	2	20
S K 365	早期押型文 中期初頭	1			2											2	2	1	8
S K 380	中期初頭															2		1	3
S K 478	中期初頭					1										6		1	8
S K 516	早期末葉		1		1											3		1	6
S I 12			1																1
S I 19																1			1

土坑

遺構名	出土土器	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 06																2			2
S K 12	中期初頭 早期末葉			1								1				1			3
S K 15	早期末葉					1										2		1	4
S K 16	早期末葉															2	1		3
S K 21	早期末葉															2	1	2	5
S K 25	早期末葉															1	2		3
S K 26	早期末葉・ 前期		1													2			3
S K 31	前期終末～ 中期初頭															2	1		3
S K 35																2			2
S K 41	不明															1			1
S K 42	早期末葉					2										3		4	9
S K 53	早期押型文 早期末葉・前期										1		1			13	2	4	21
S K 61	早期押型文															4		1	5
S K 71	前期初頭															1			1
S K 86	早期末葉		1													1			2
S K 90	中期初頭		1			1										3	3	1	9
S K 94	早期末葉															5	1		6
S K 98																1			1
S K 100																5			5

遺構名	出土土器	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K103	早期末葉												1			1		2	4
S K108	早期押型文 前期初頭															2		1	3
S K113																		1	1
S K116	早期末葉															2		2	4
S K118																		3	3
S K119																		1	1
S K122	早期末葉															1			1
S K125	早期末葉															3		1	4
S K127	早期末葉					1										1			2
S K129																1			1
S K132																1			1
S K136	不明															2			2
S K139		1																	1
S K141			1																1
S K146	早期末葉																	1	1
S K151	早期末葉															1			1
S K154	早期末葉															2		1	3
S K156		1																1	2
S K157																1			1
S K158	早期押型文 早期末葉		1										2				1		4
S K159																		3	3
S K163																1			1
S K166																1			1
S K174	不明															1		1	2
S K187																1		1	2
S K188																1		1	2
S K192																1			1
S K195	早期末葉		1																1
S K204						1													1
S K205																	1		1
S K207	早期末葉			1															1
S K208	不明	1															4		5
S K219																2	2		4
S K227																1			1
S K241	前期初頭												1			3			4
S K242	前期初頭												1			1			2

遺構名	出土土器	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	磨製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 243																	1		1
S K 244																	1		1
S K 246																1			1
S K 253													1			2			3
S K 262																	2	1	3
S K 264	早期末葉															4			4
S K 266	早期末葉																1	1	2
S K 267	早期末葉	1			1											2		1	5
S K 269																1			1
S K 276	前期初頭					1										2			3
S K 284																	1		1
S K 285						1										1			2
S K 289	前期初頭															4		1	5
S K 290	早期押型文 早期末葉															1			1
S K 291	早期末葉																	1	1
S K 292	不明				1										1	3	1	4	9
S K 295	不明															6			6
S K 299	不明															1			1
S K 301	早期末葉～ 前期初頭															3		1	4
S K 302	不明		1													4		瑣状 耳飾	9
S K 303						1													1
S K 304	不明															1			1
S K 308	前期? 早期		1		2		1						1			5	2	5	17
S K 312																1			1
S K 313	中期初頭		1						1							3		4	9
S K 315	早期末葉															3			3
S K 316							1									1	1		3
S K 322	早期押型文 前期					1										2	2		5
S K 323	早期押型文 早期末葉															10	1	1	12
S K 324	前期初頭															3		2	5
S K 325	早期末葉	1														4			5
S K 329	中期初頭															1		石錘	3
S K 330	前期															4		1	5
S K 332	不明												1						1
S K 335						1										3	1		5
S K 338																1			1

遺構名	出土土器	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K341																1			1
S K357	中期初頭	2											1			10	1	4	18
S K360	中期初頭																1	1	2
S K366																2			2
S K368			1													1			2
S K370	早期末葉												1			4		1	6
S K373	早期押型文 早期末葉															4		1	5
S K379	早期末葉															3		1	4
S K381	晩期															5			5
S K383			1													2		1	4
S K384	不明															4		4	8
S K391	早期押型文 前期初頭															3		3	6
S K392	早期末葉															4	2	2	8
S K394	不明												1			2			3
S K395	前期末葉		2													6			8
S K398	早期末葉																1		1
S K405		1		1												2		1	5
S K415	早期末葉															2	1	1	4
S K417	早期末葉																	2	2
S K418																2			2
S K422	前期初頭																	1	1
S K423																1			1
S K434	早期末葉																	1	1
S K448																		1	1
S K449																2			2
S K450																1			1
S K463																1		2	3
S K470	早期末葉																	1	1
S K471	不明															2			2
S K485																1			1
S K490																	1		1
S K491	早期末葉～ 前期初頭										1		1			1			3
S K492																1			1
S K497																1			1
S K502	早期															3			3
S K504																1			1

遺構名	出土土器	石鏃	搔器	削器	両極 石核	石核	石錐	石匙	打製 石斧	摩製 石斧	砥石	敲打 器	磨石 類	特殊 摩石	石皿	剥片	微細 剥離	その 他	合計
S K 510																2	1	1	4
S K 513																1			1
S K 514					2														2
S K 518	中期初頭															1		3	4
S K 522			1										1			3			5
S K 525	草創期															3		1	4
S K 528	早期押型文 早期末葉												1			3			4

※微細剥離……微細剥離痕のある剥片を示す。

剥片・微細剥離の項目には、微細な剥片も含めている。

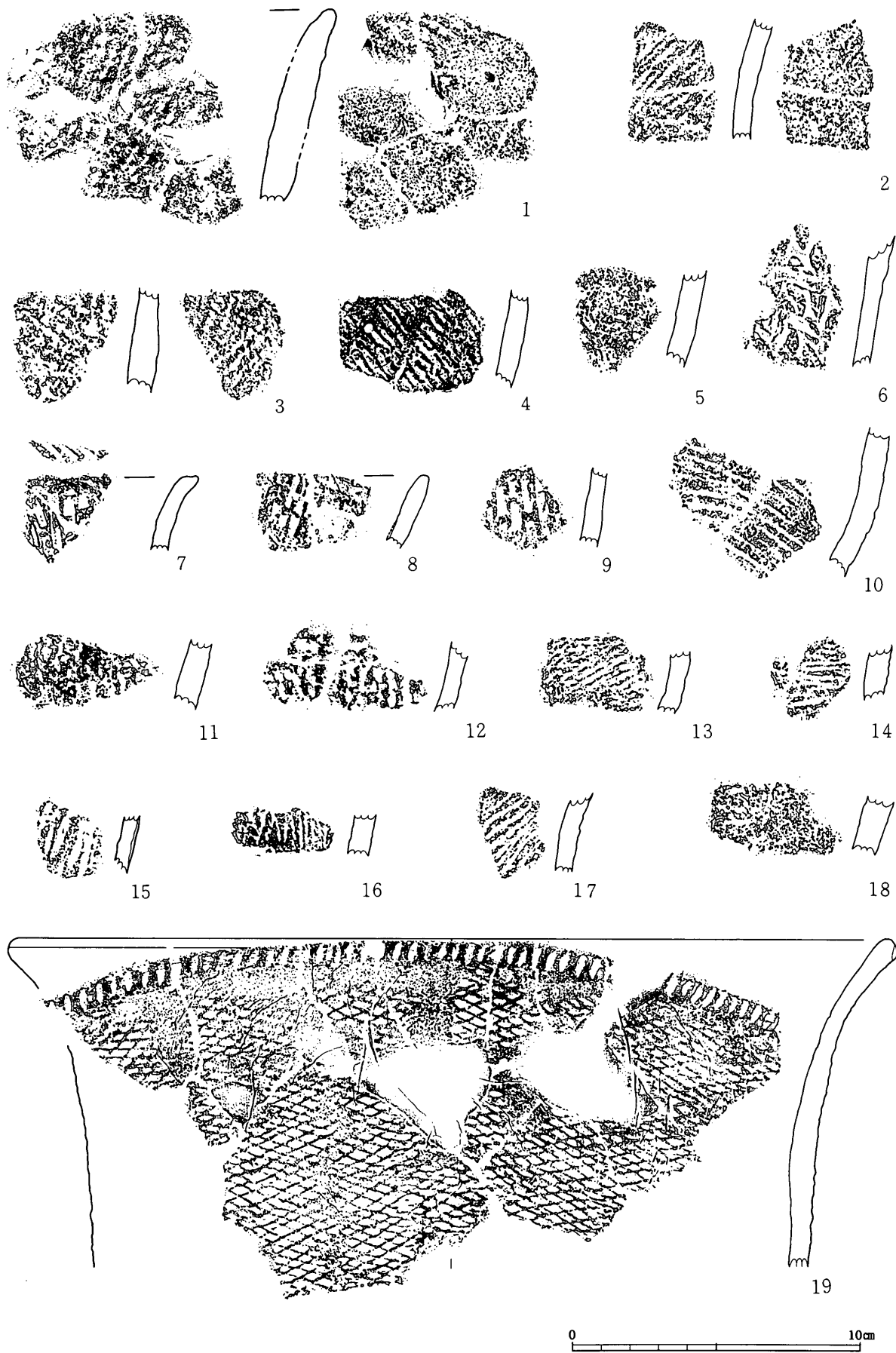
上記以外の器種については、その他に含めてある。

[引用文献]

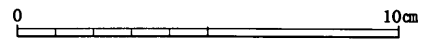
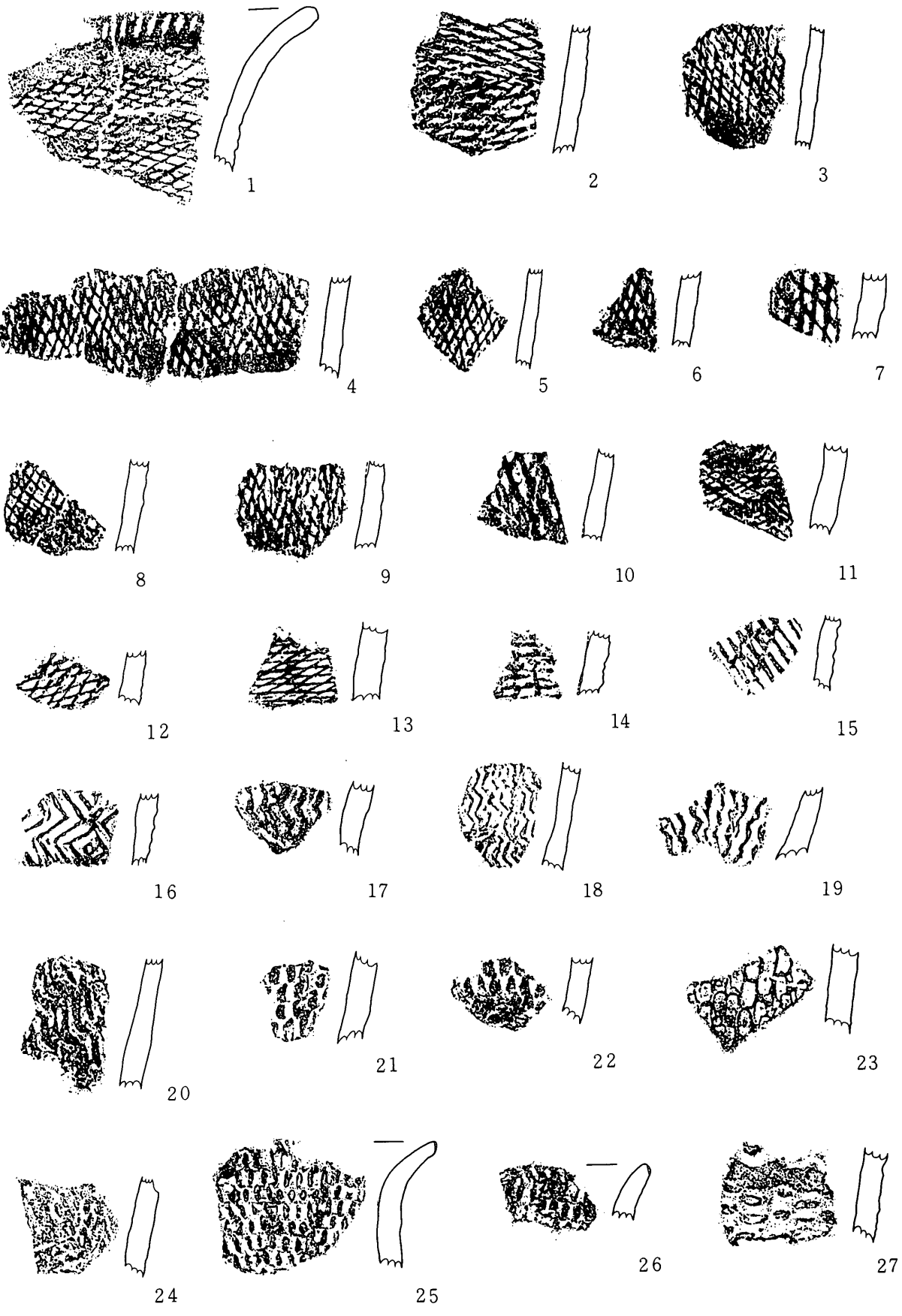
- 会田 進 1971 「押型文土器編年の再検討ー特に施文法・文様構成を中心としてー」『信濃』23-3
- 大塚達朗 1989 「草創期の土器」『縄文土器大観』草創期 早期 前期
- 岡本東三 1980 「神宮寺・大川式押型文土器についてーその回転施文具を中心にー」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』
- 可児通宏 1969 「押型文土器の変遷過程ー施文原体の分析を中心にした考察ー」『考古学雑誌』55-2
- 小杉 康 1987 「第5章 樋沢遺跡押型文土器群の研究」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』
- 駒ヶ根市教育委員会 1972 『羽場下・舟山』
- 佐川正敏 1979 「中野遺跡A地点〔グループⅡ〕37I地区の土器」『函館空港・中野遺跡』
- 佐原 真 1967 「山城における弥生文化の成立ー畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置ー」『史林』50-5
- 中村孝三郎・小片 保 1964 『室谷洞窟』
- 松島 透 1957 「長野県立野遺跡の捺型文土器」『石器時代』4
- 矢野健一 1993 「押型文土器の起源と変遷ーいわゆるネガティブな楕円文を有する押型文土器群の再検討ー」『考古学雑誌』78-4
- 山田 猛 1988 「押型文土器群の型式学的再検討ー三重県下の前半期を中心としてー」『三重県史研究』4
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』

圖

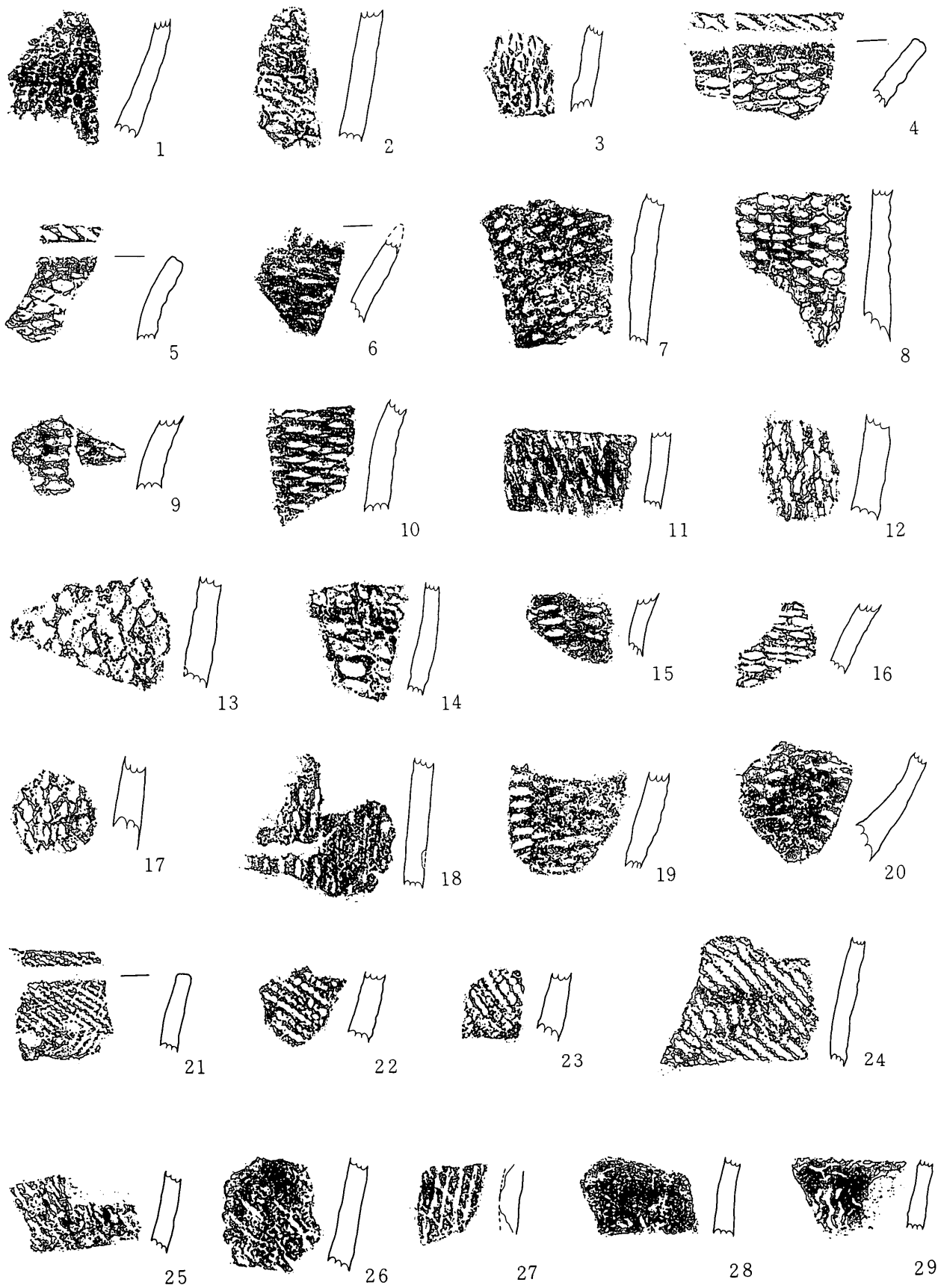
版



第1图 SB01・08出土遺物（1～18 SB01、19 SB08）

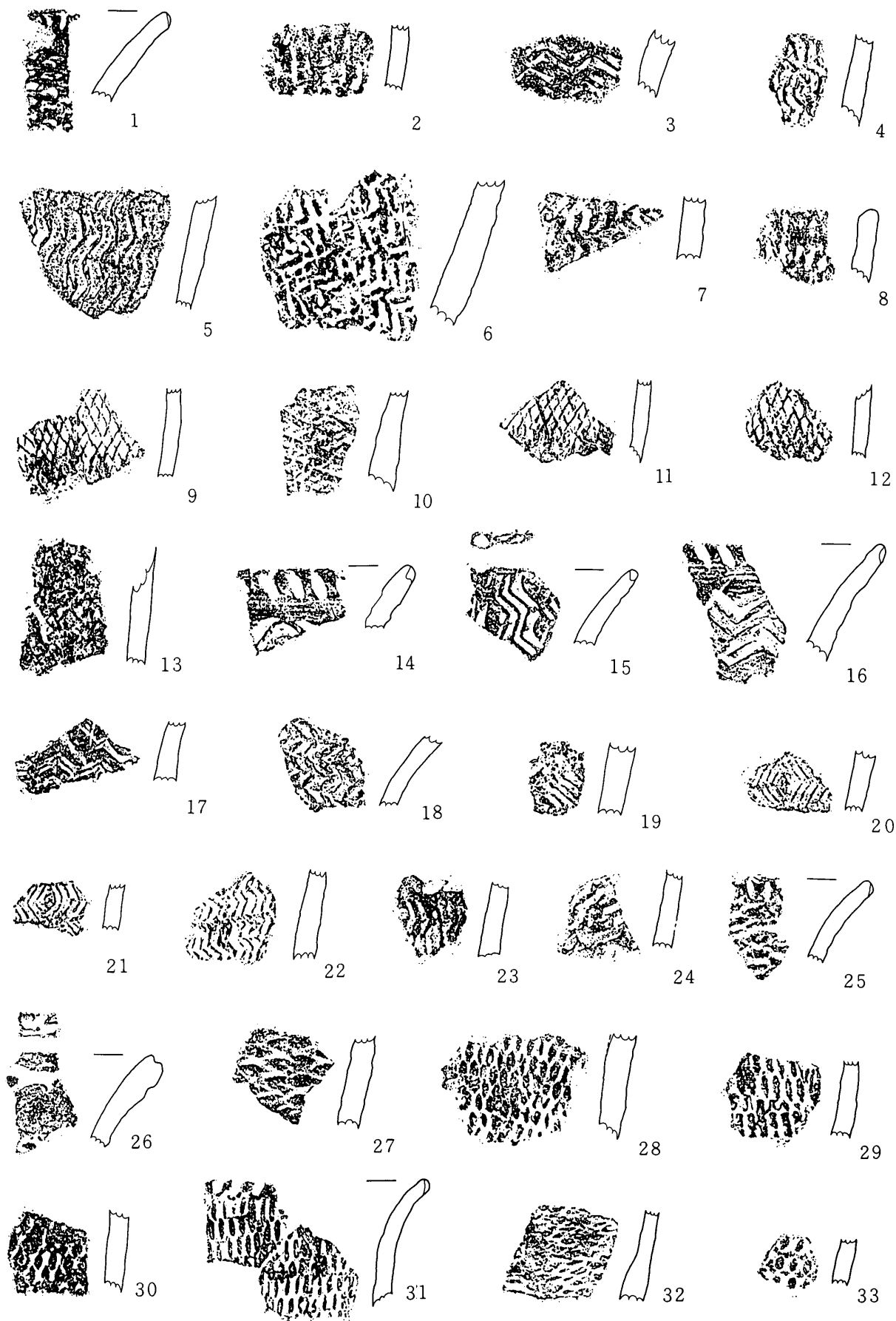


第 2 图 S B08出土遺物

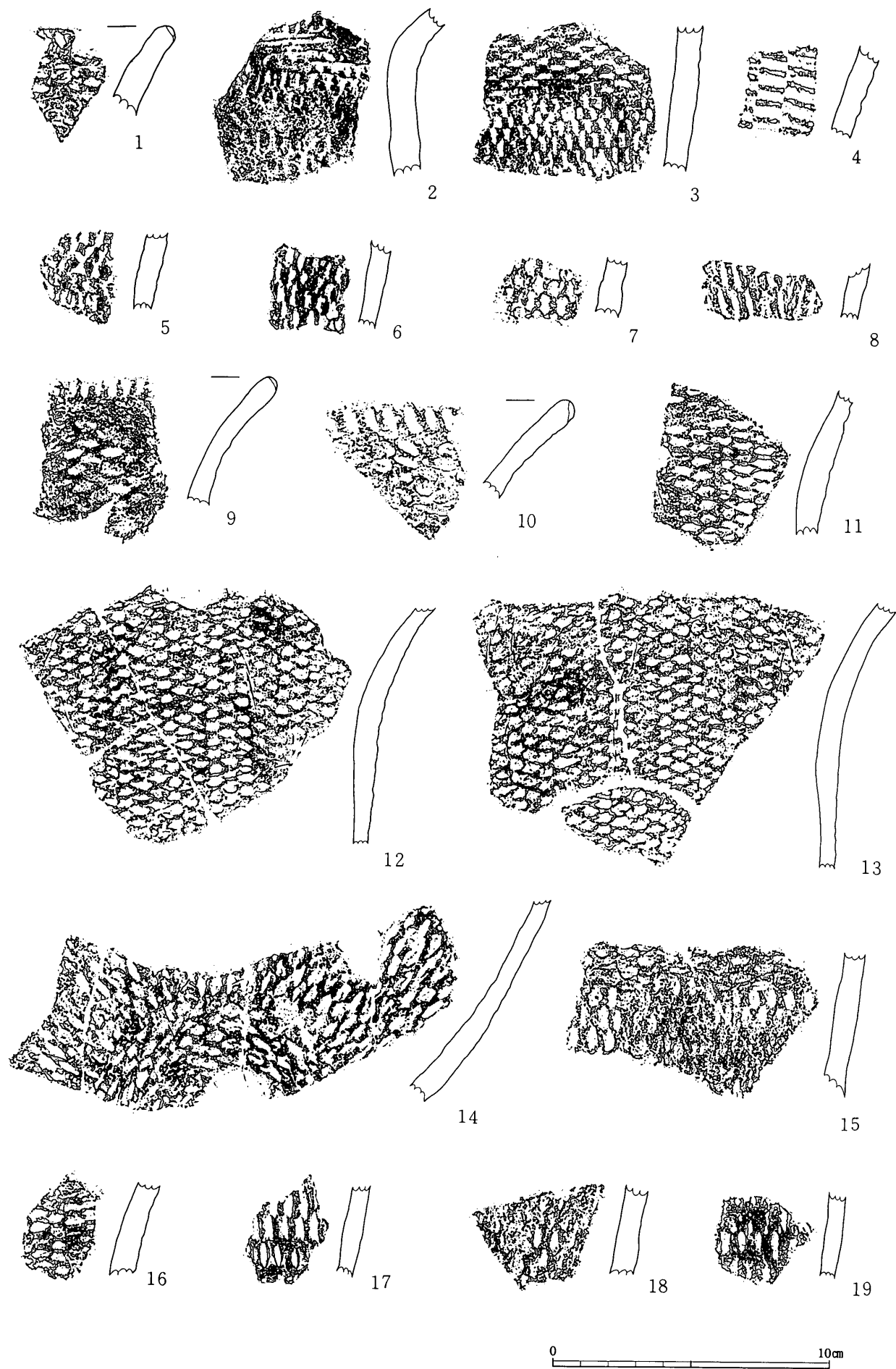


0 10cm

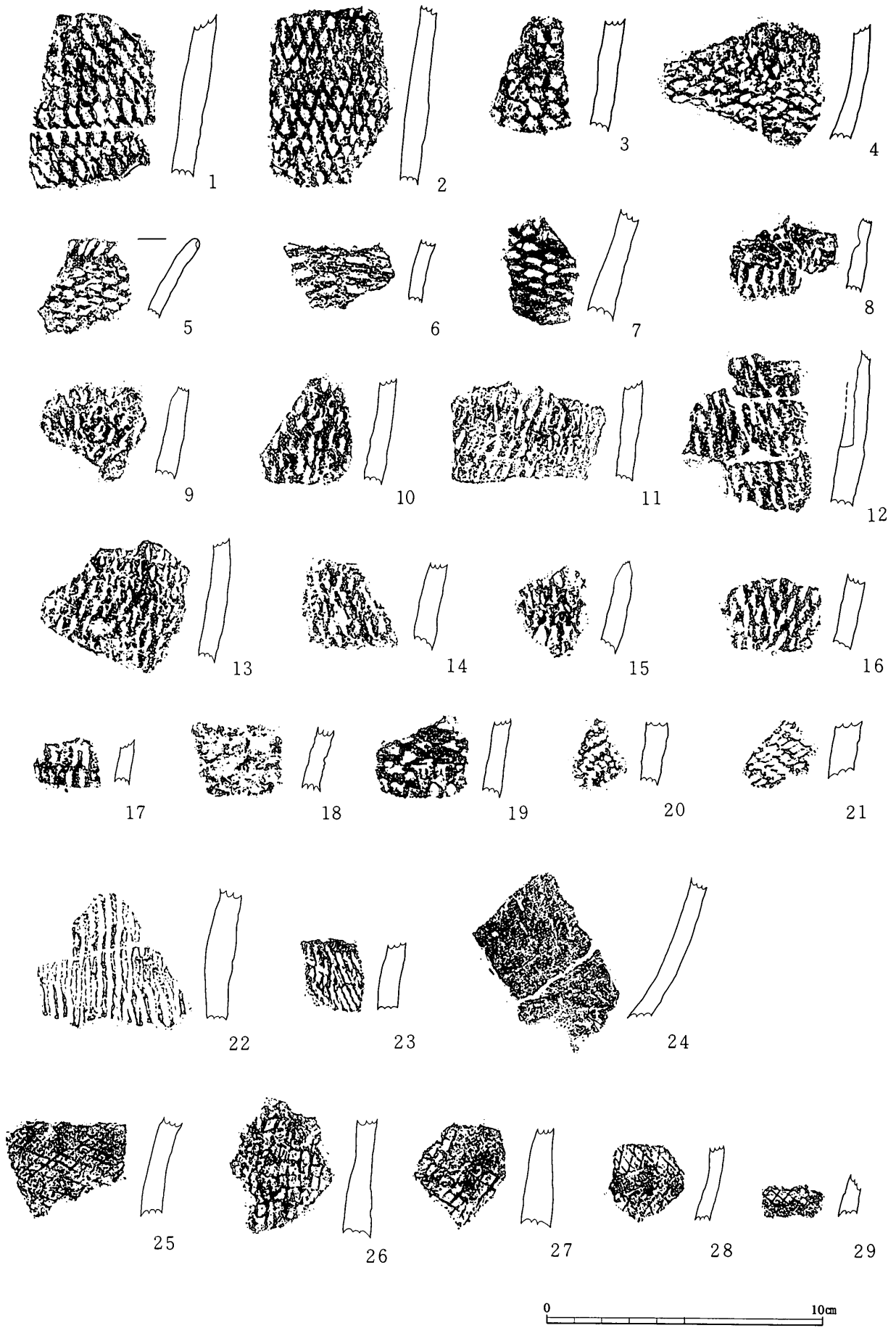
第3图 SB08出土遺物



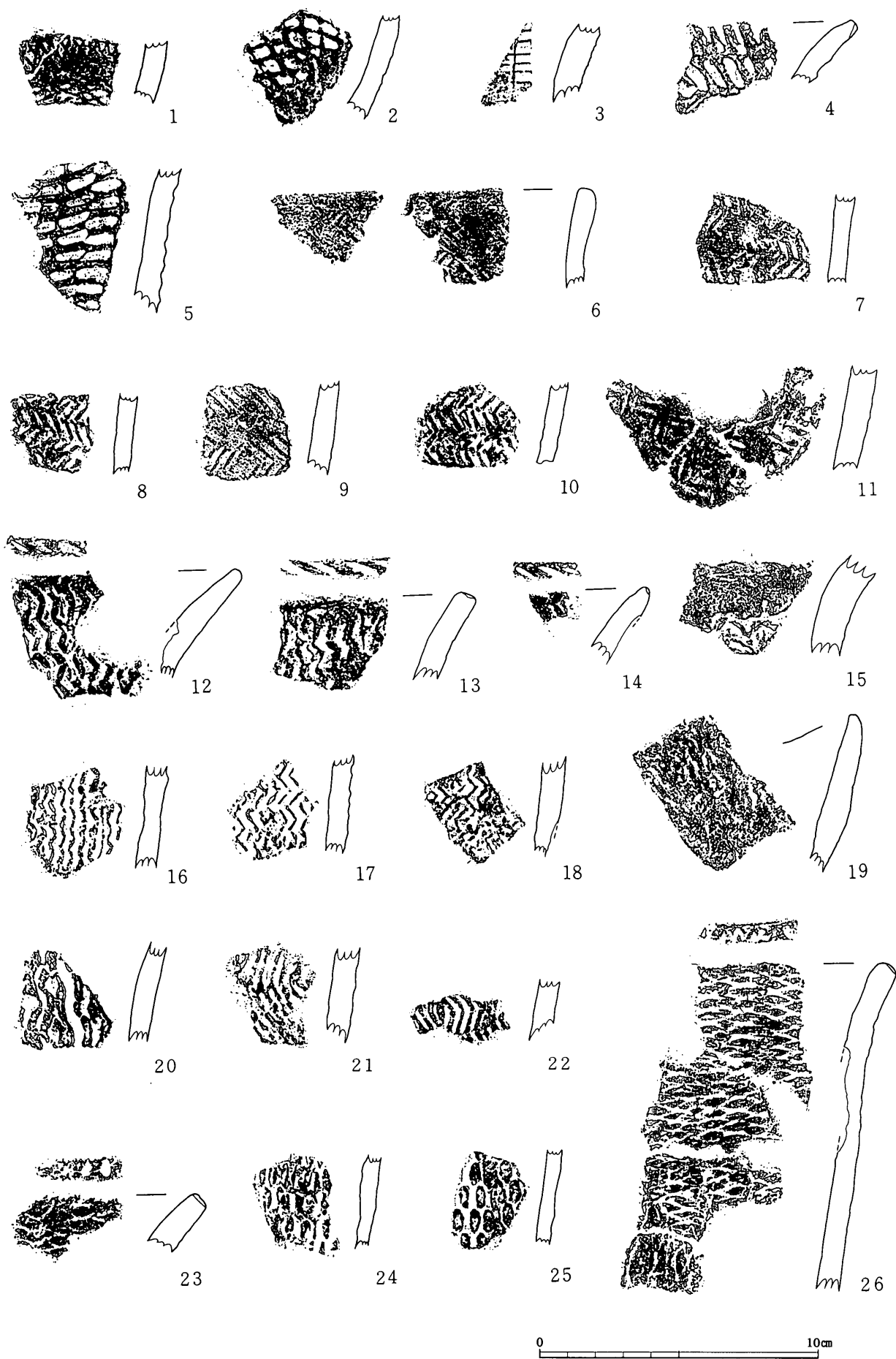
第4图 SB11·14出土遺物 (1~8 SB11、9~33 SB14)



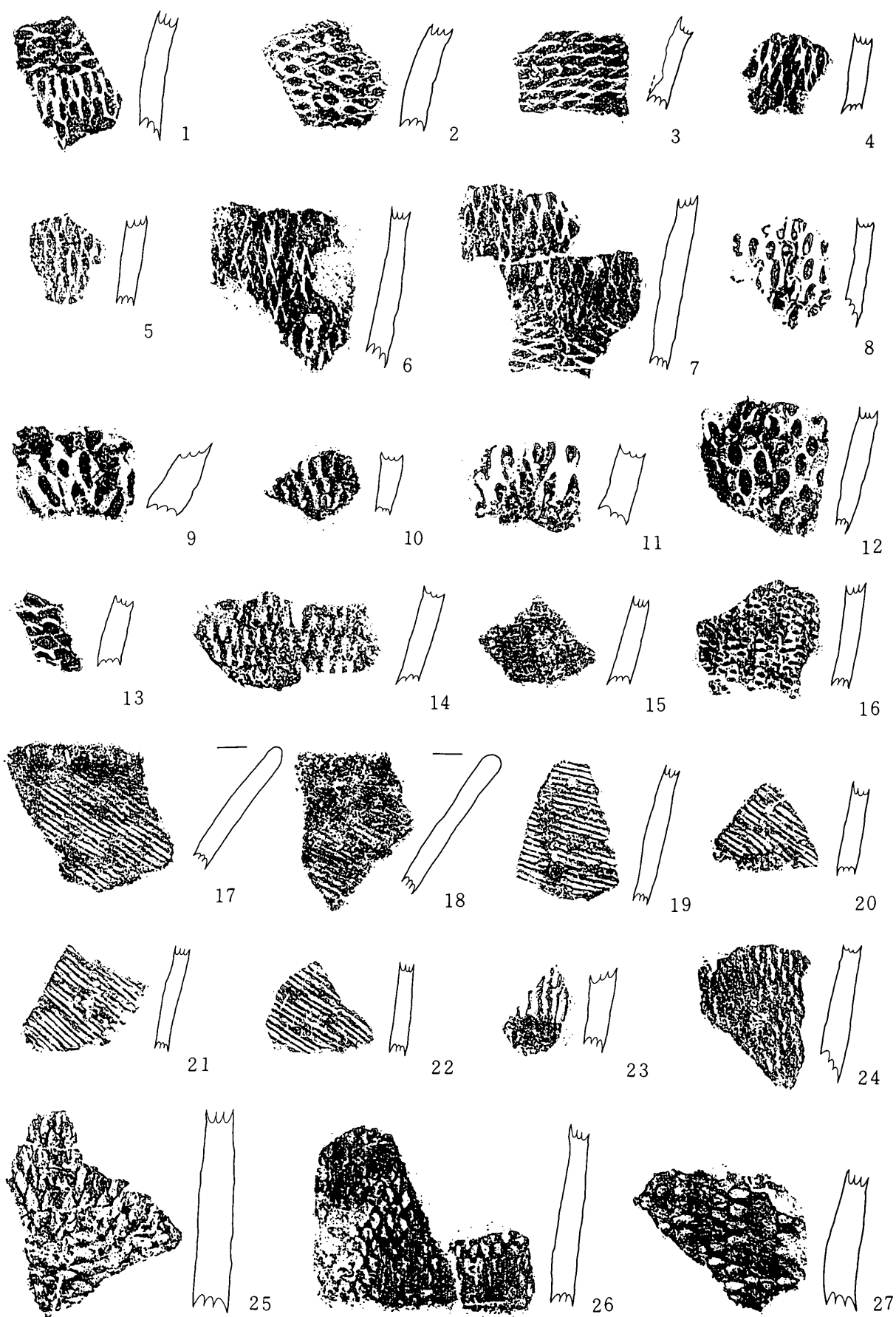
第5图 SB14出土遗物



第6图 SB14·18出土遺物 (1~24 SB14、25~29 SB18)

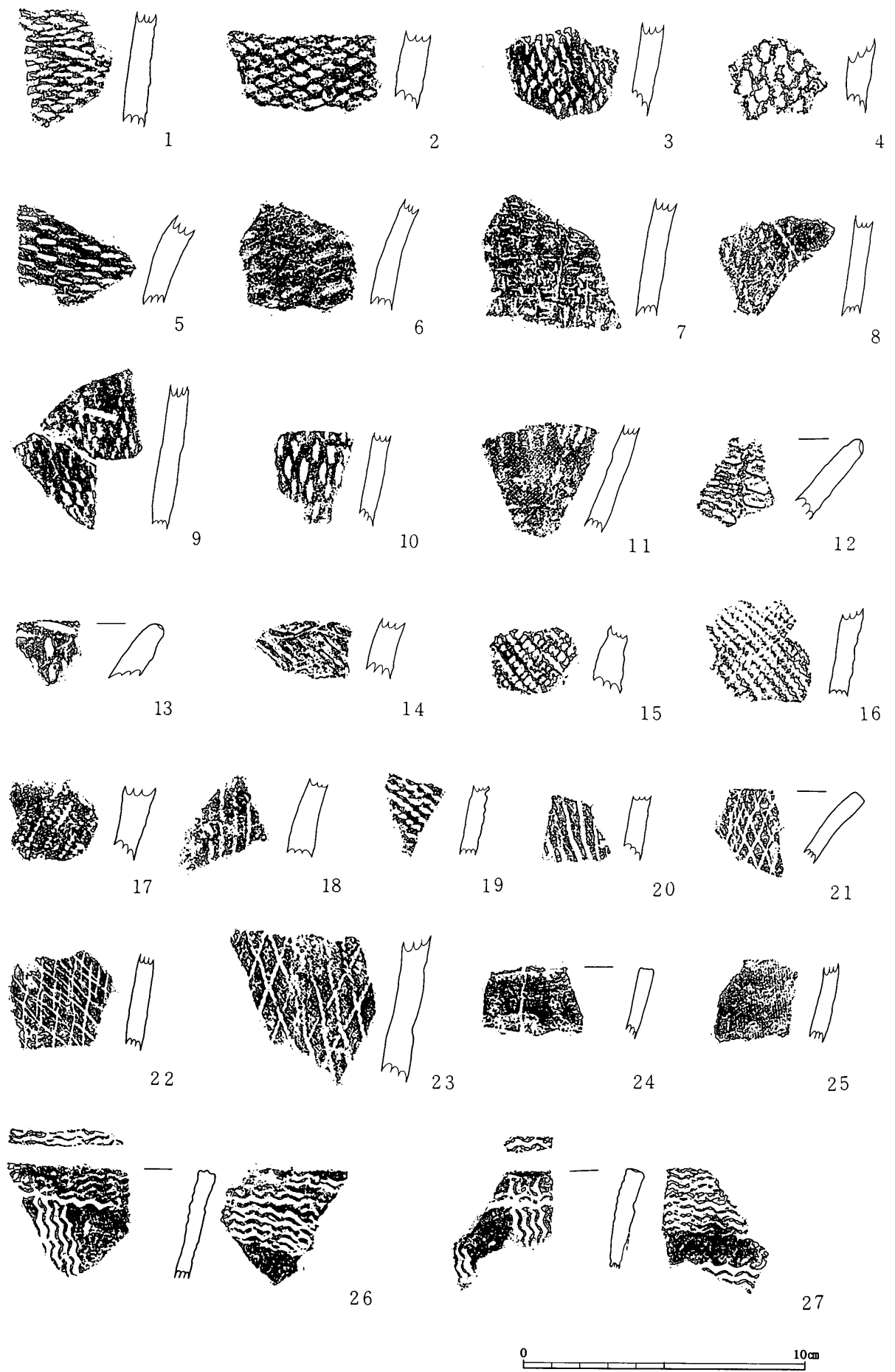


第7图 SB18出土遺物

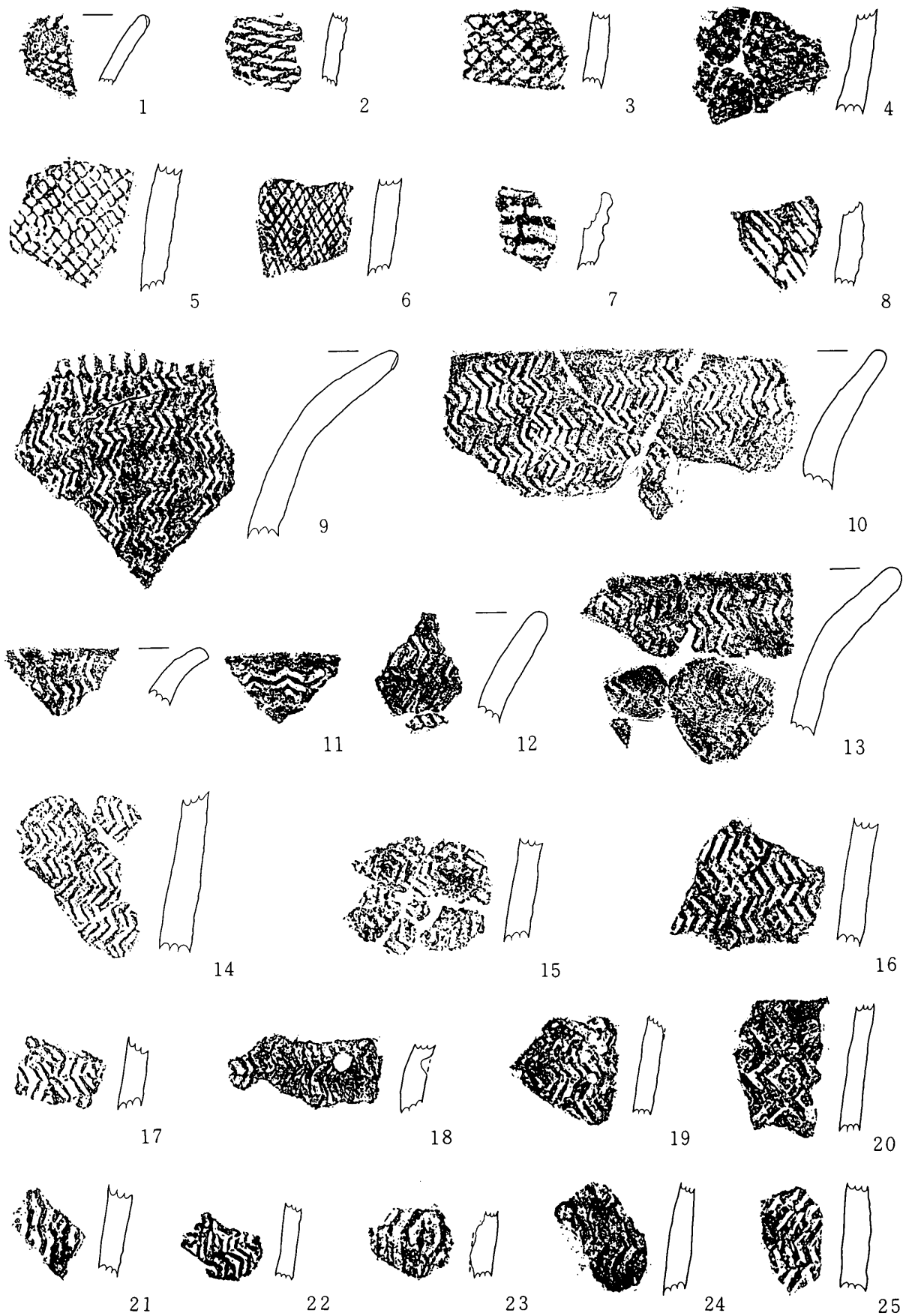


0 10cm

第8图 SB18出土遺物

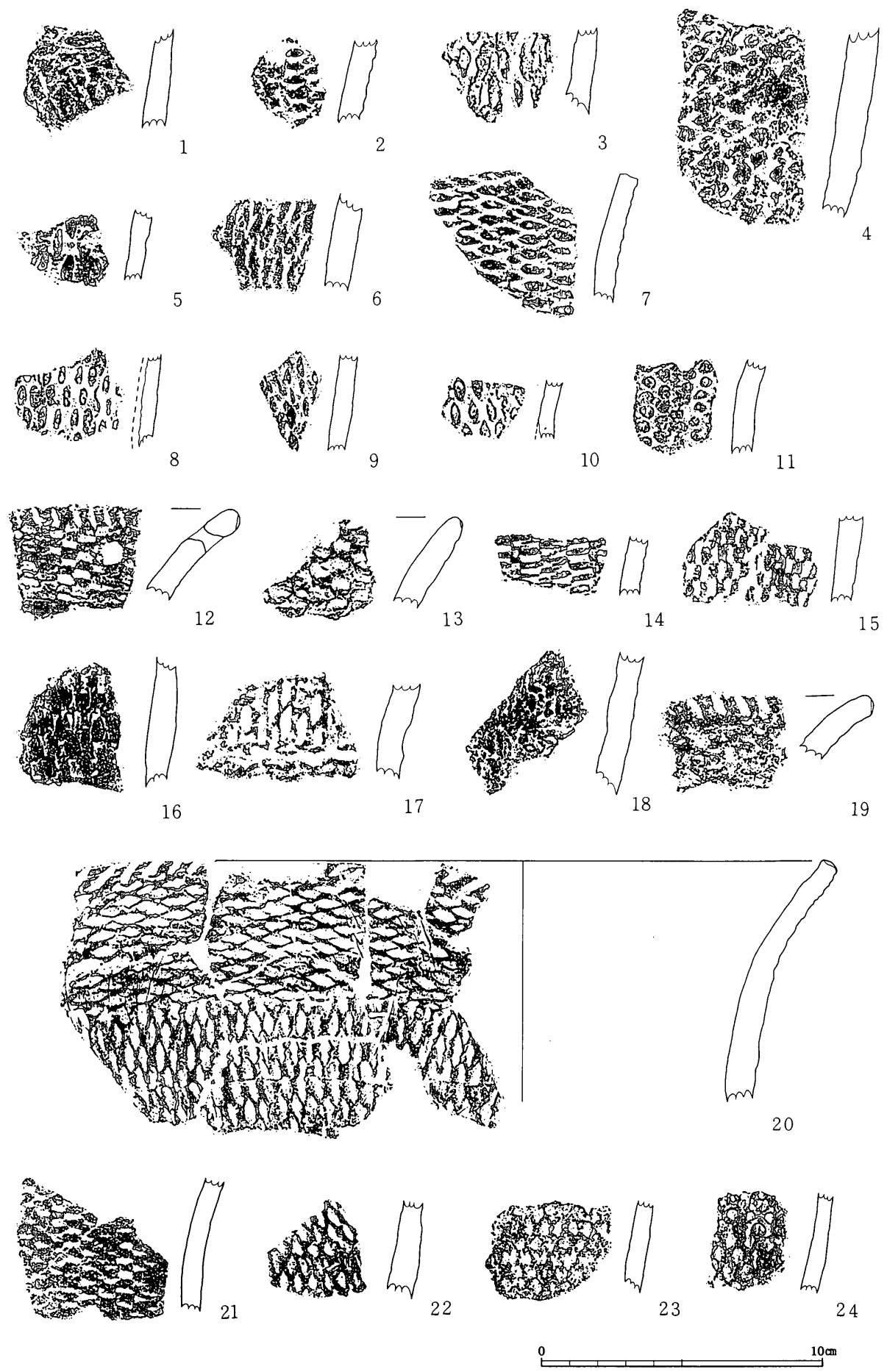


第9图 SB18出土遺物

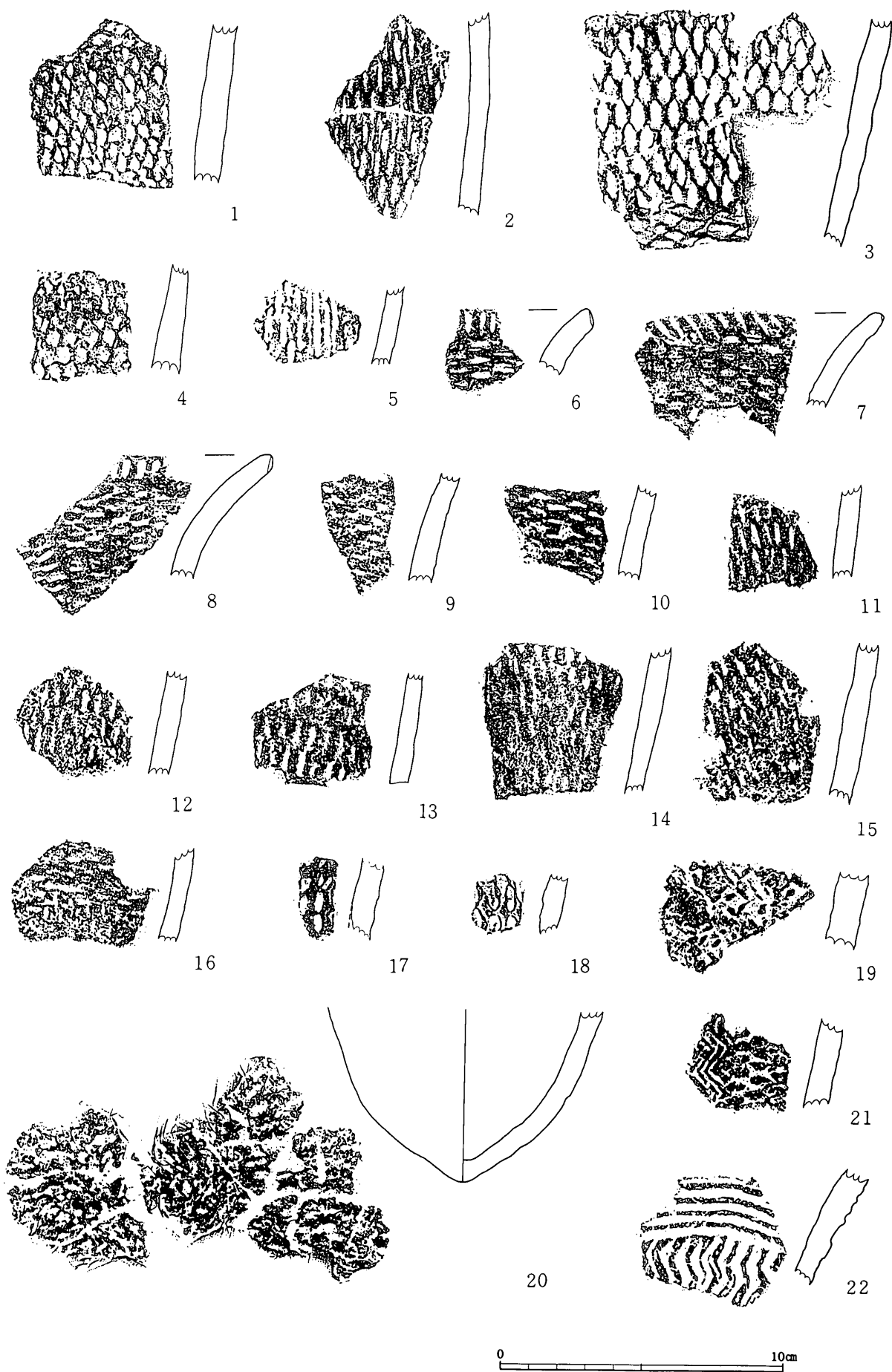


0 10cm

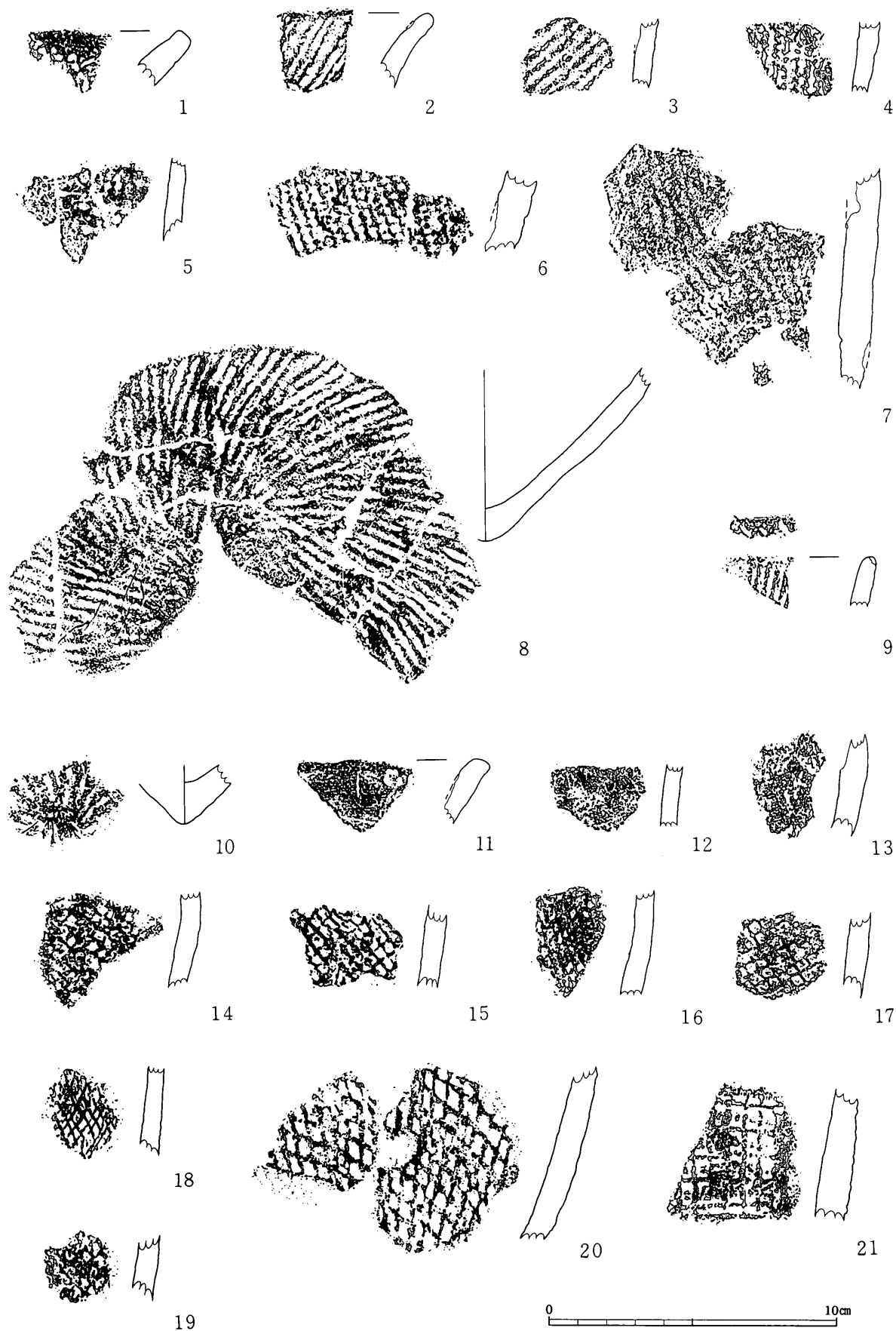
第10图 S B 19出土遺物



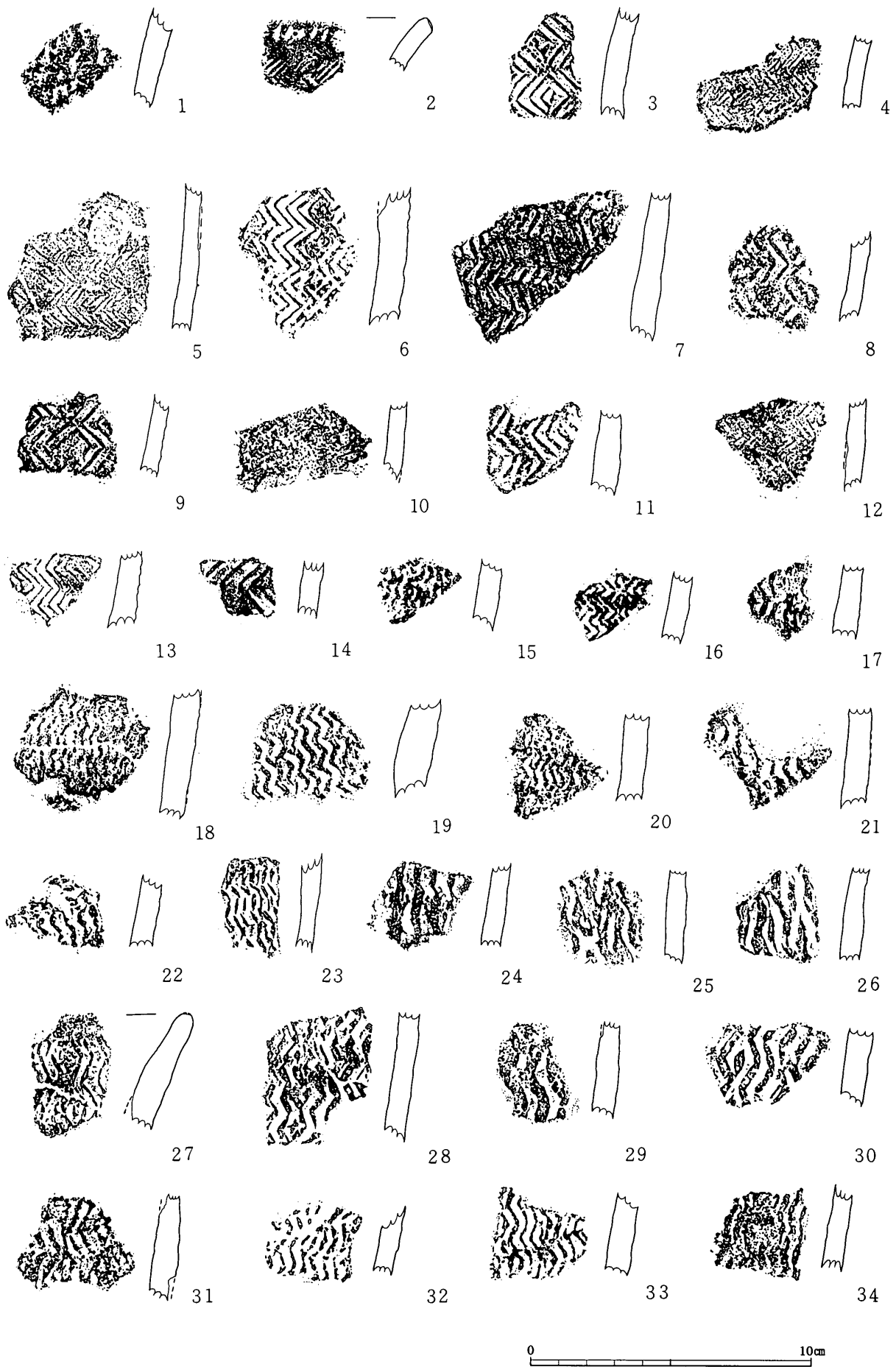
第11圖 S B19出土遺物



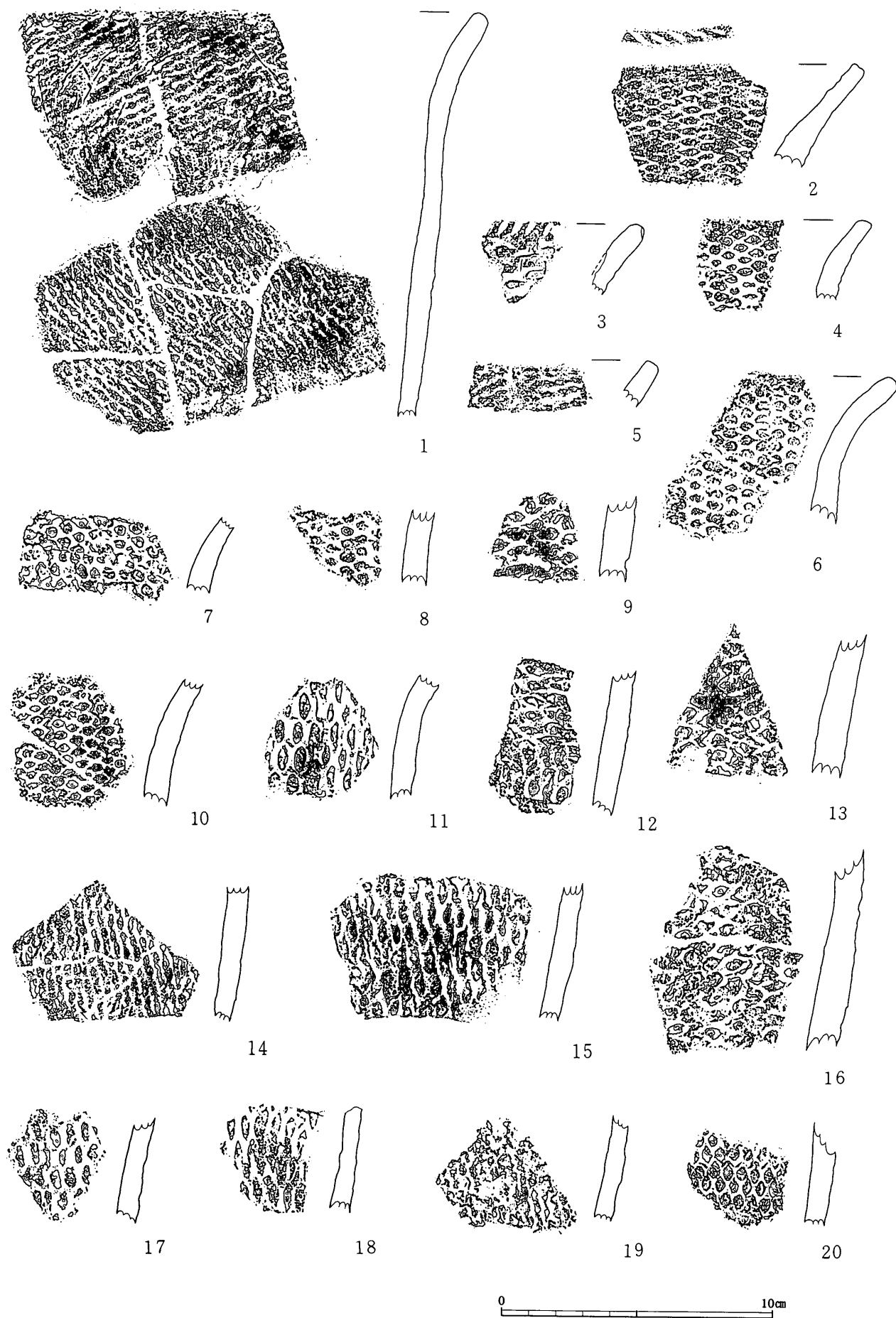
第12圖 SB19出土遺物



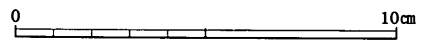
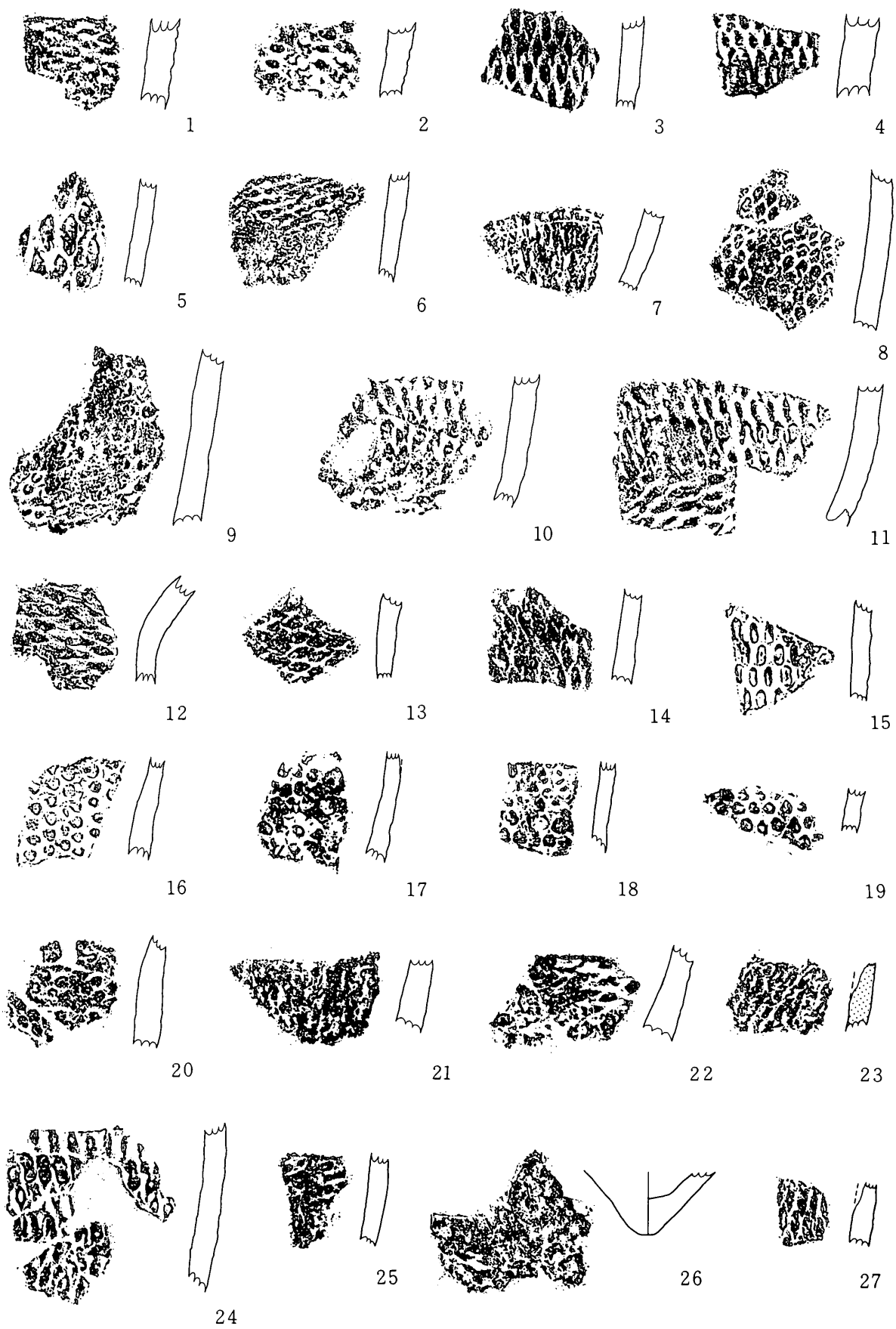
第13图 SB19・20出土遺物 (1~13 SB19、14~22 SB20)



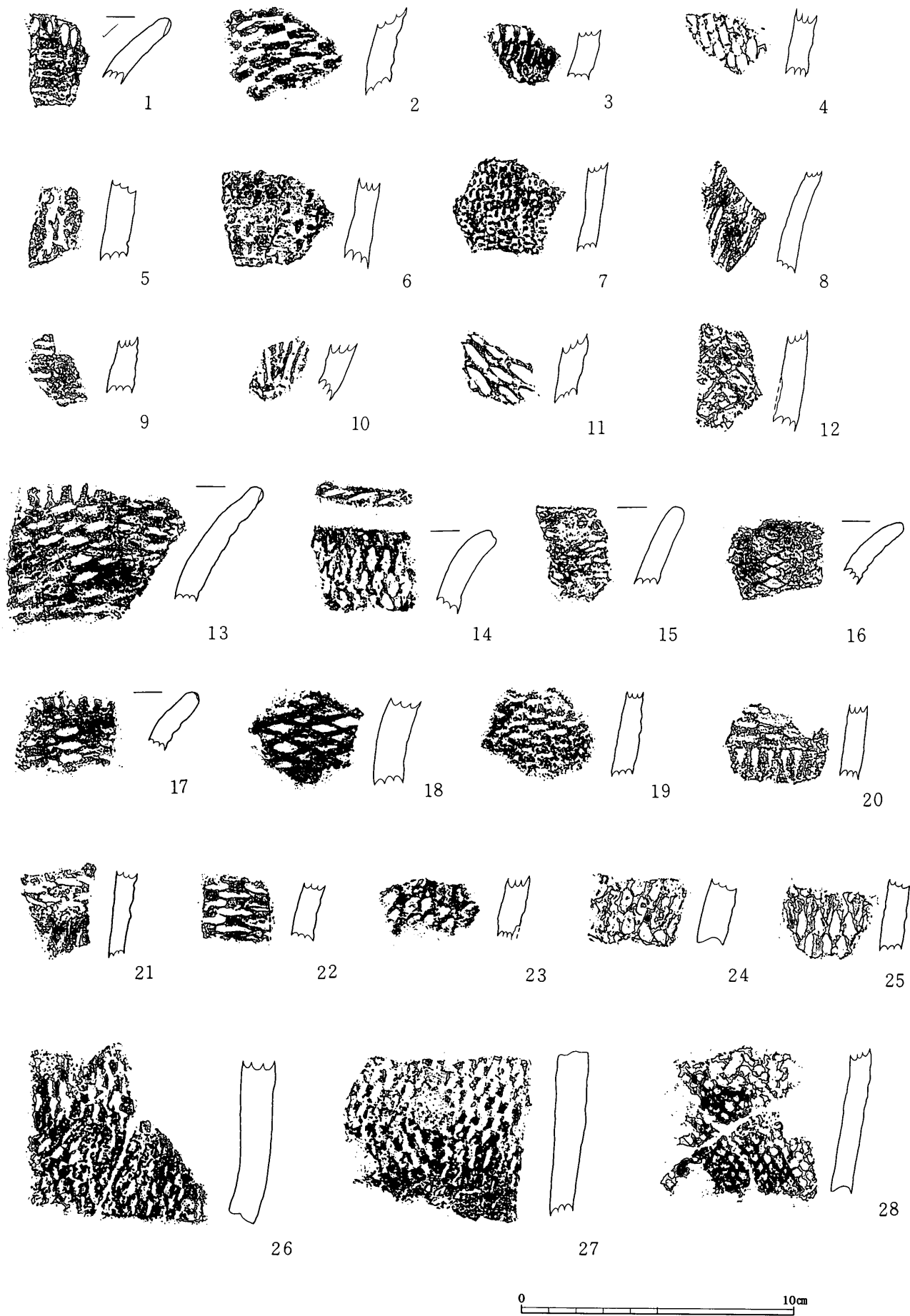
第14图 S B20出土遺物



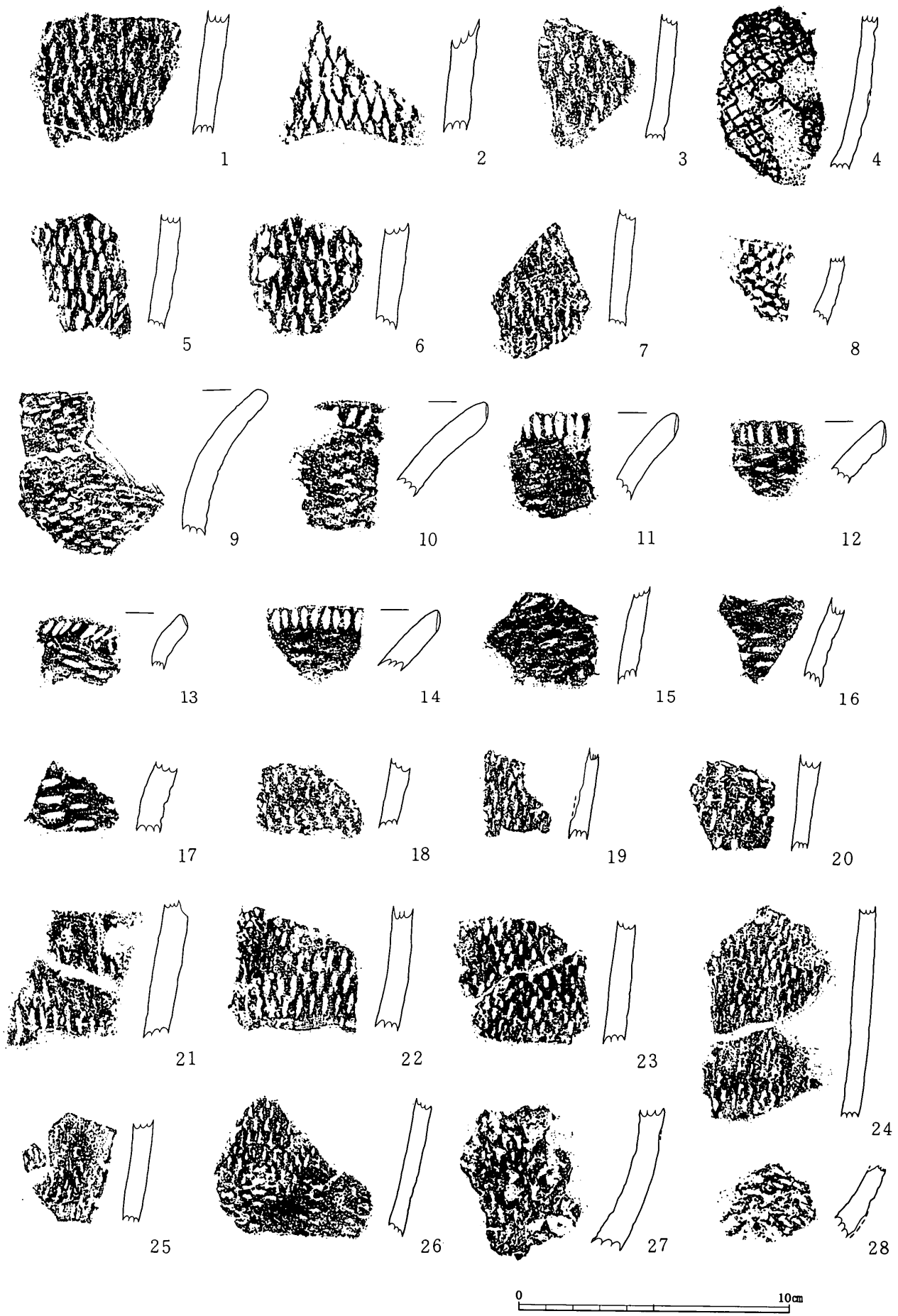
第15图 S B20出土遺物



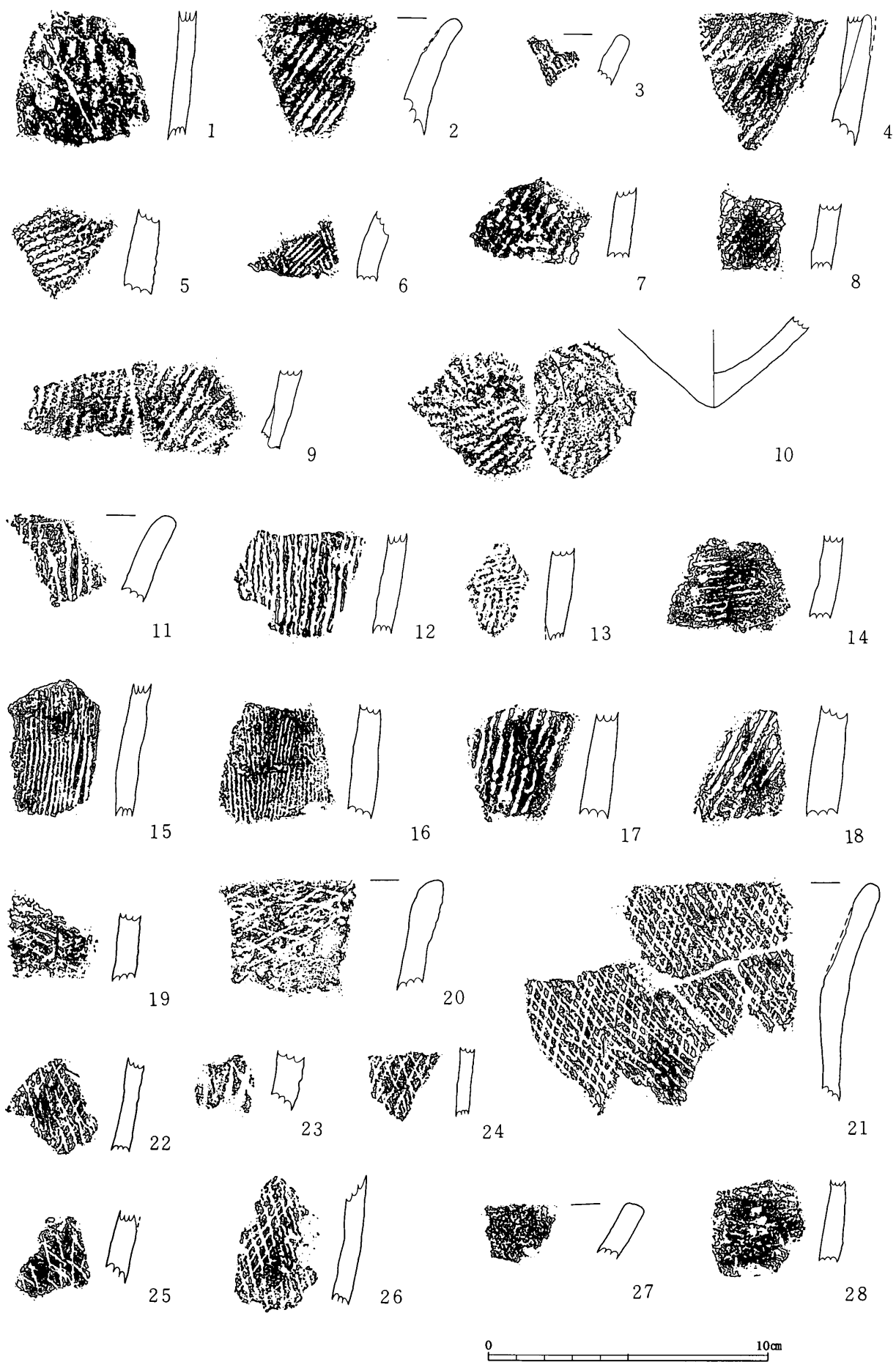
第16图 S B 20出土遺物



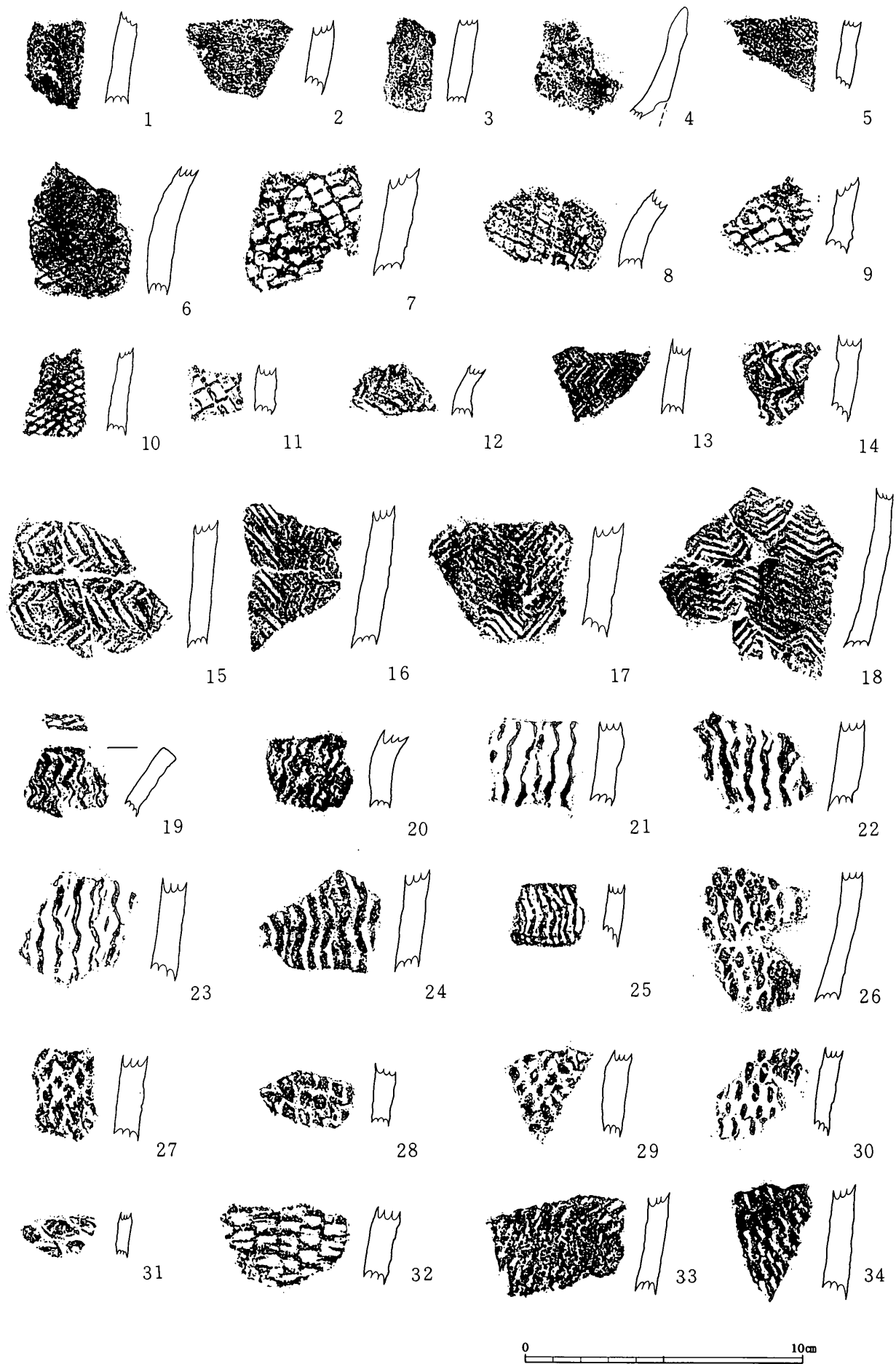
第17图 SB20出土遺物



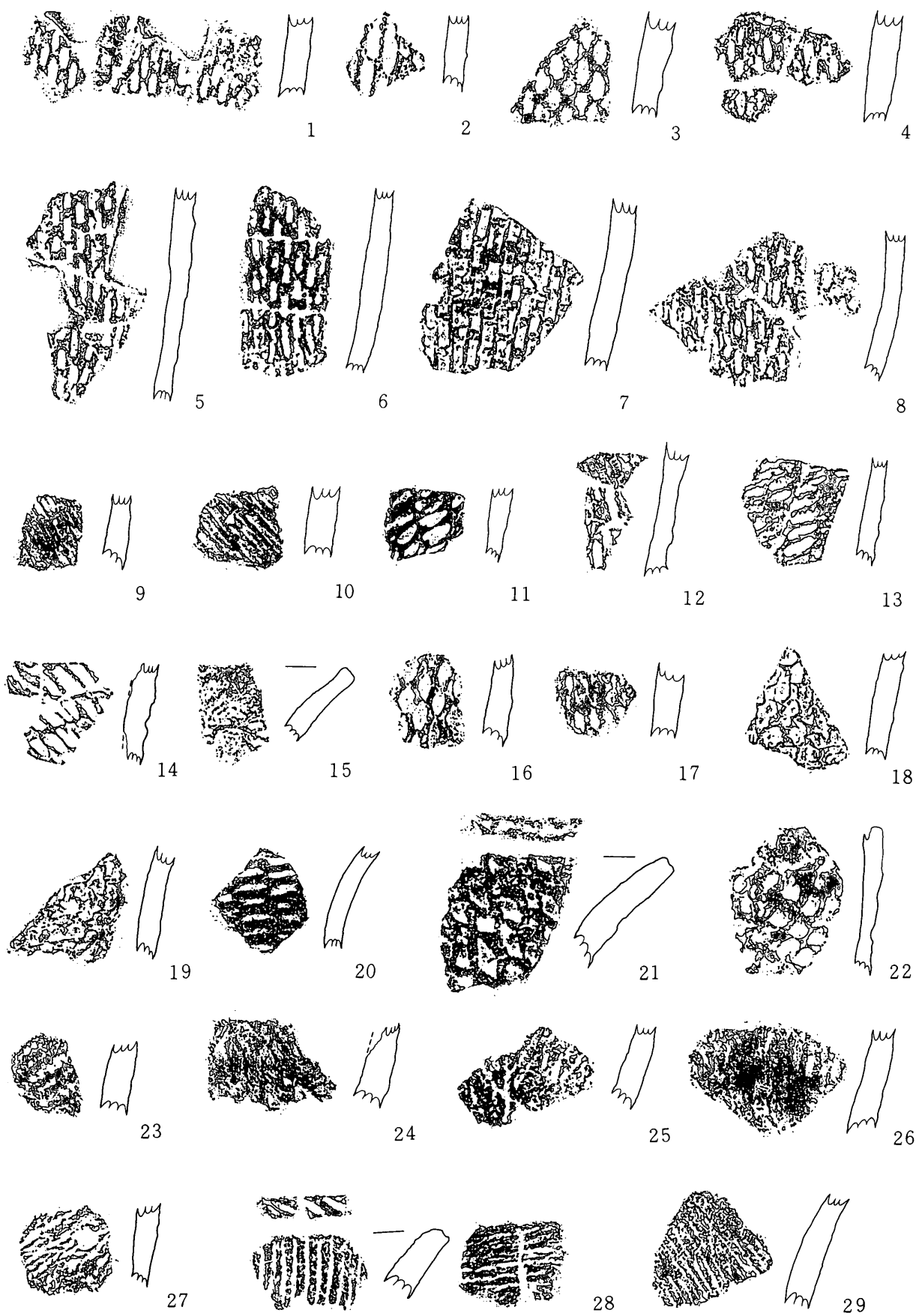
第18图 SB20出土遺物



第19图 S B20出土遺物

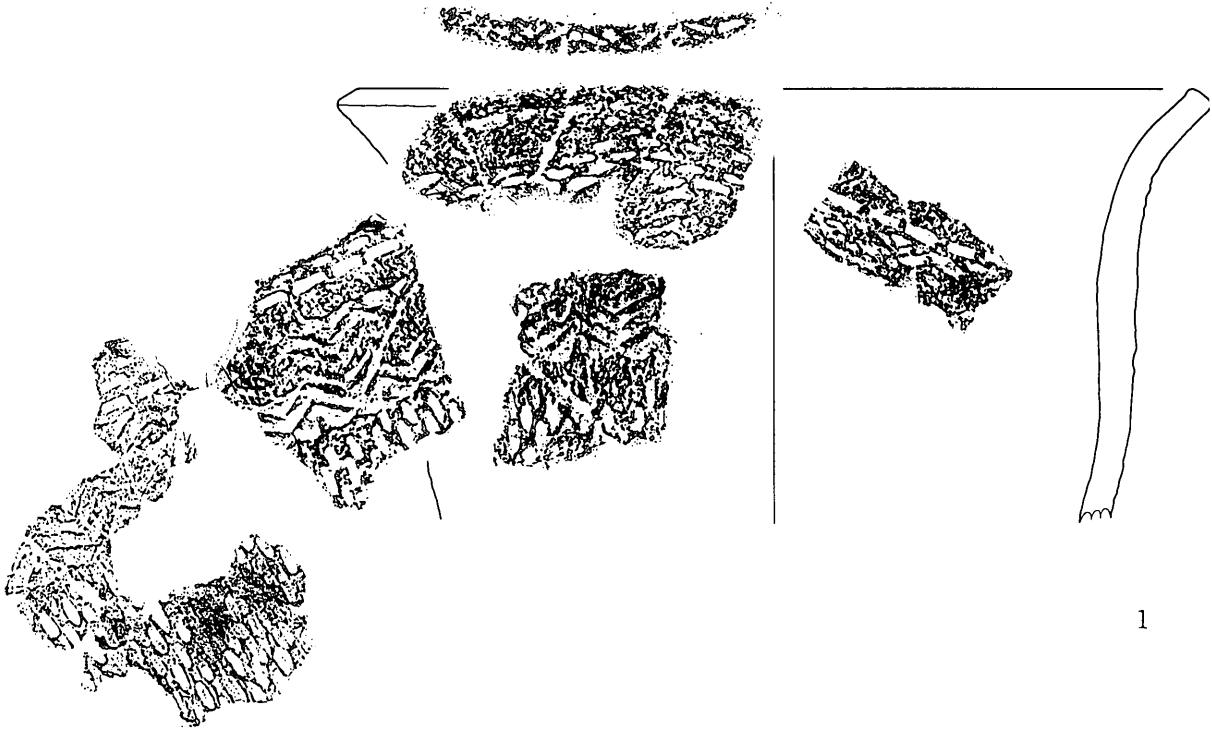


第20图 SB20·21出土遺物 (1~5 SB20、6~34 SB21)



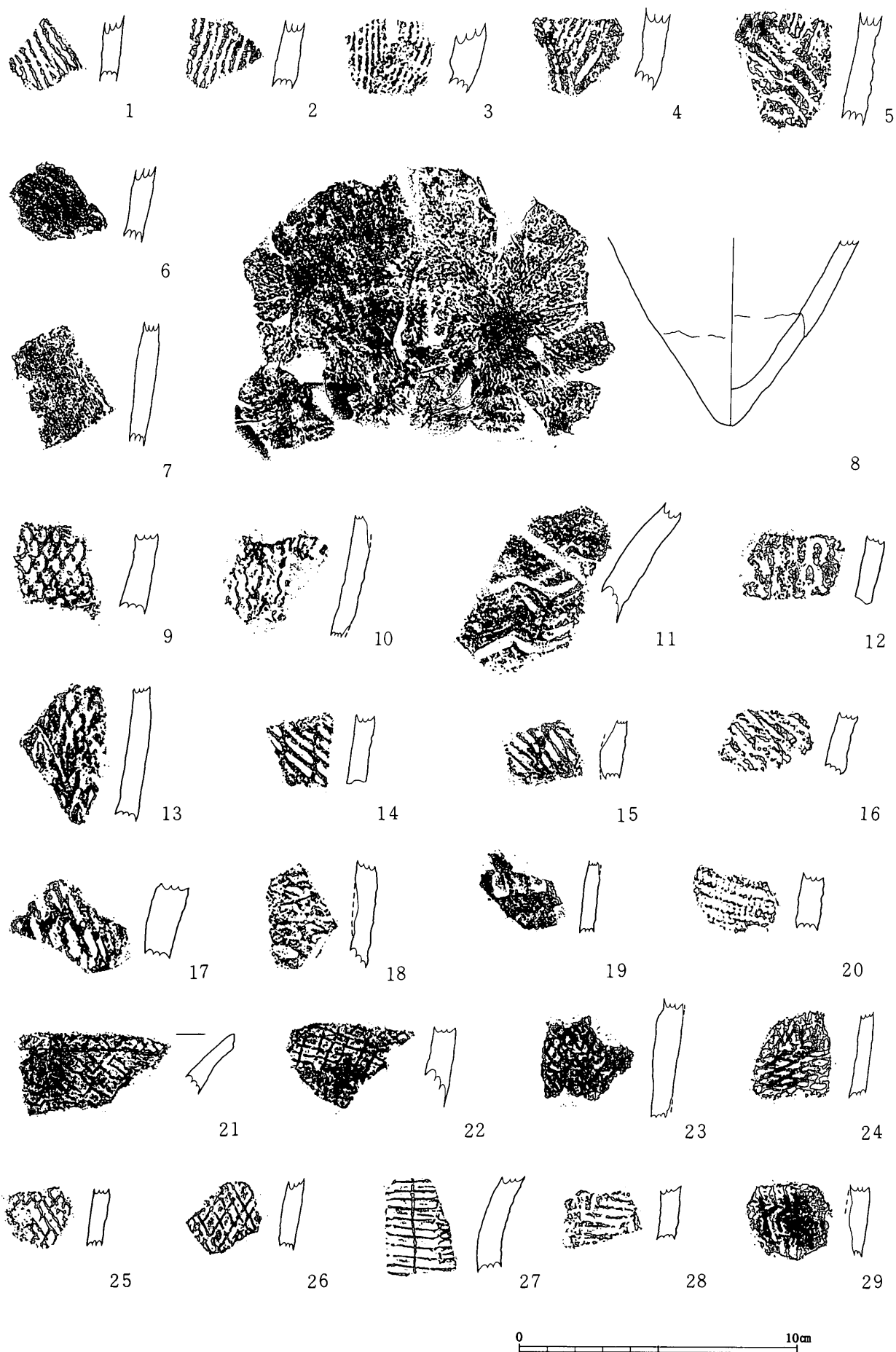
0 10cm

第21圖 S B21出土遺物

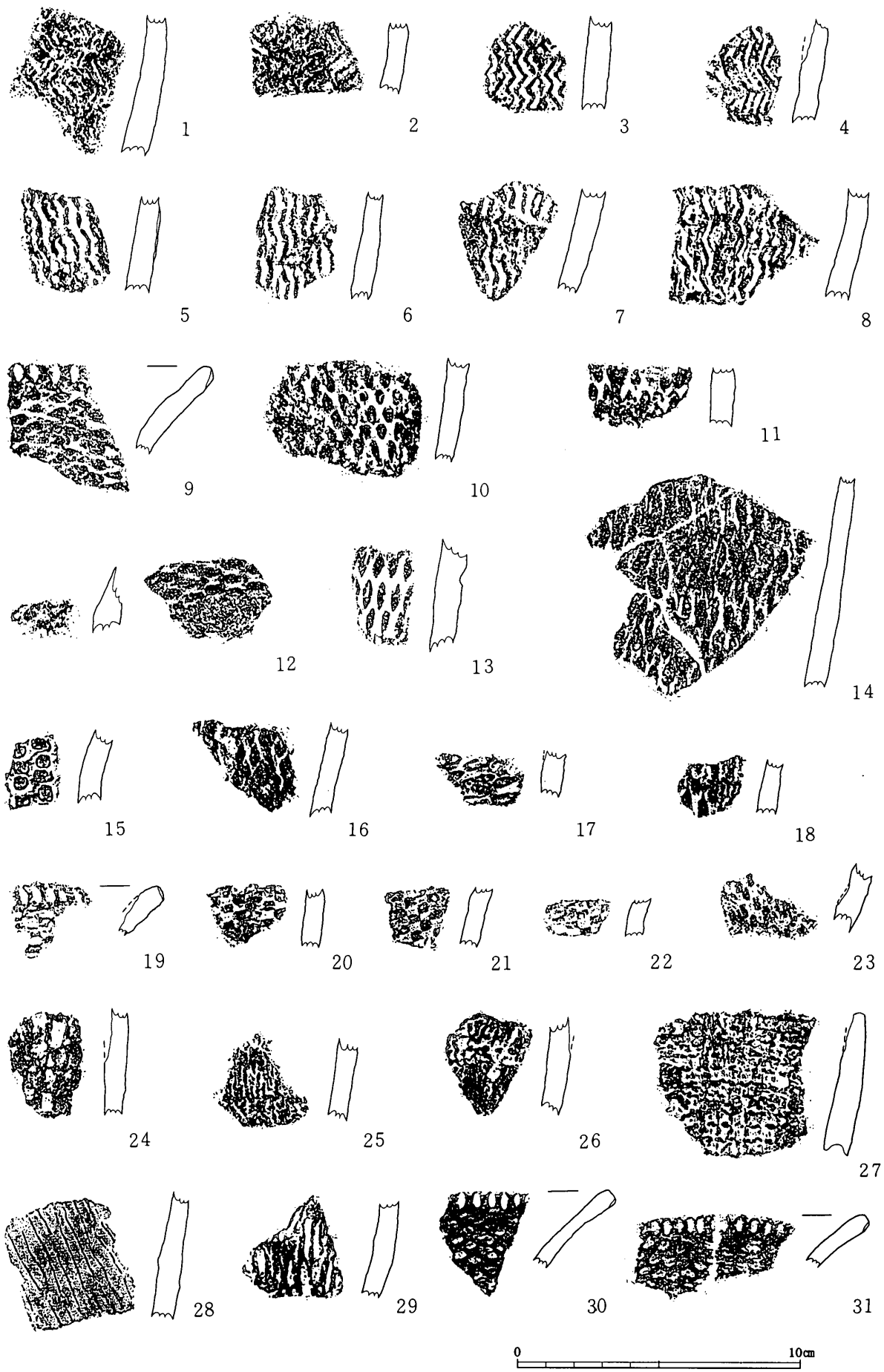


0 10cm

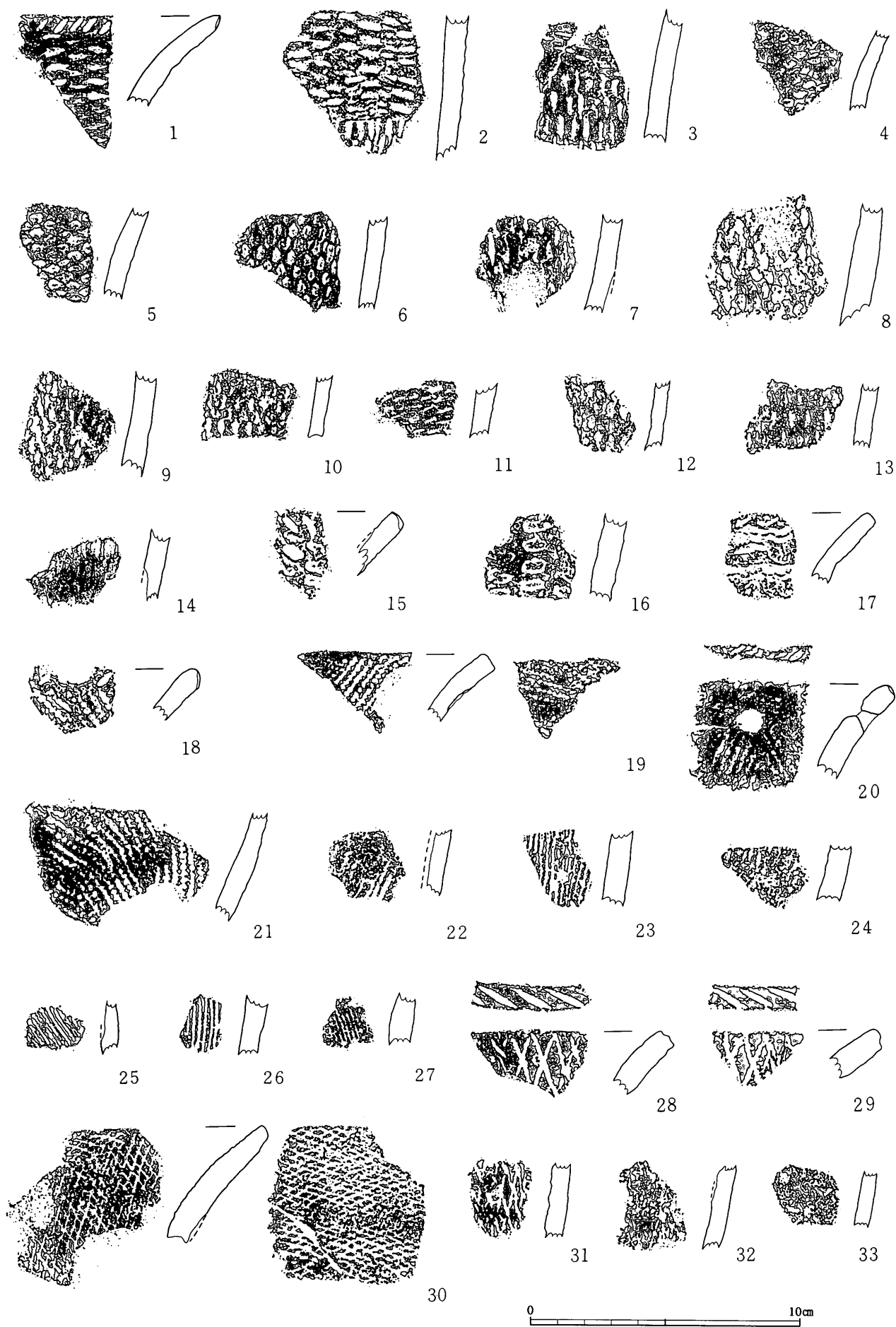
第22図 SB21出土遺物



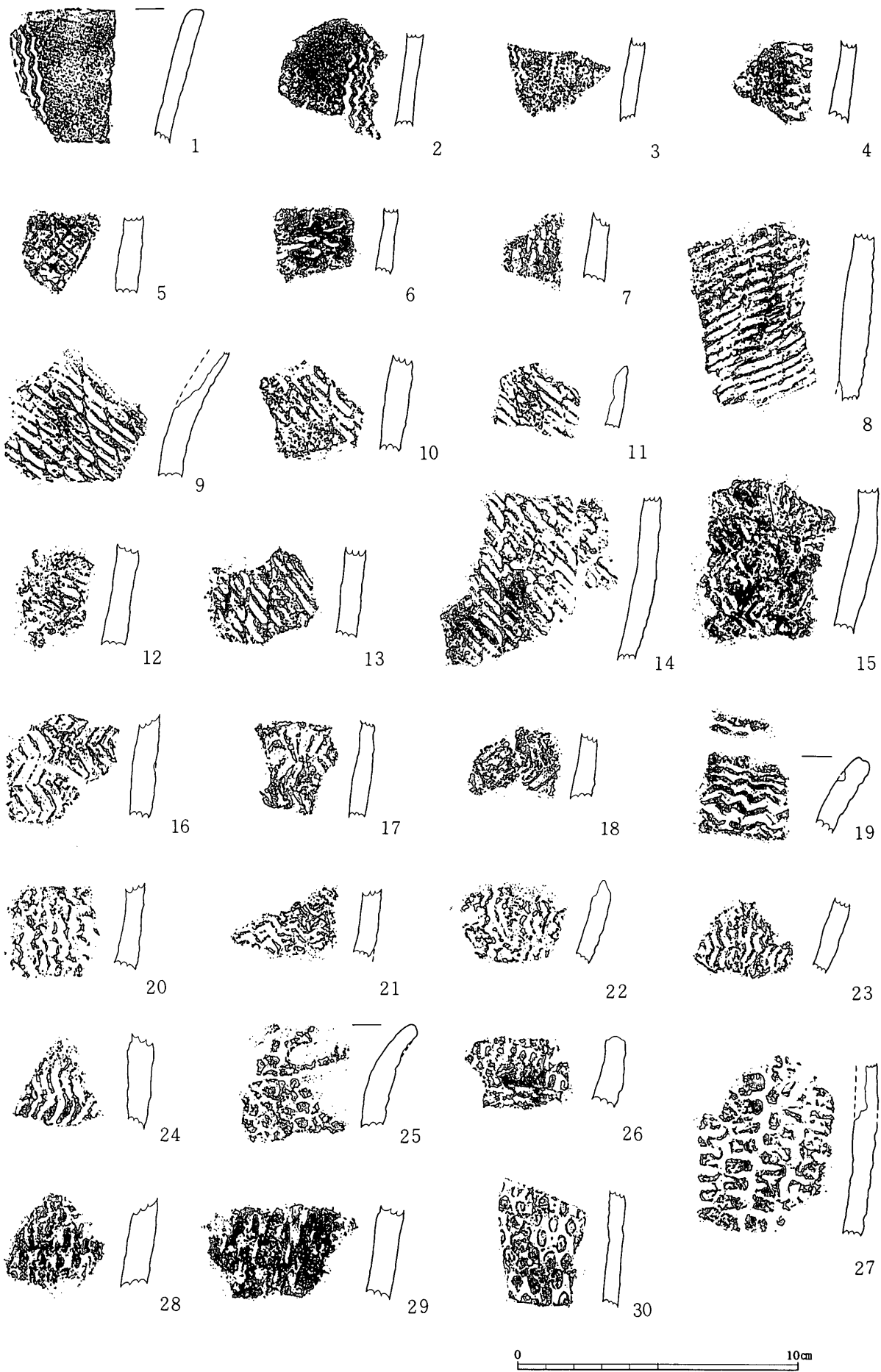
第23圖 SB21・24・25出土遺物 (1~8 SB21、9~20 SB24、21~29 SB25)



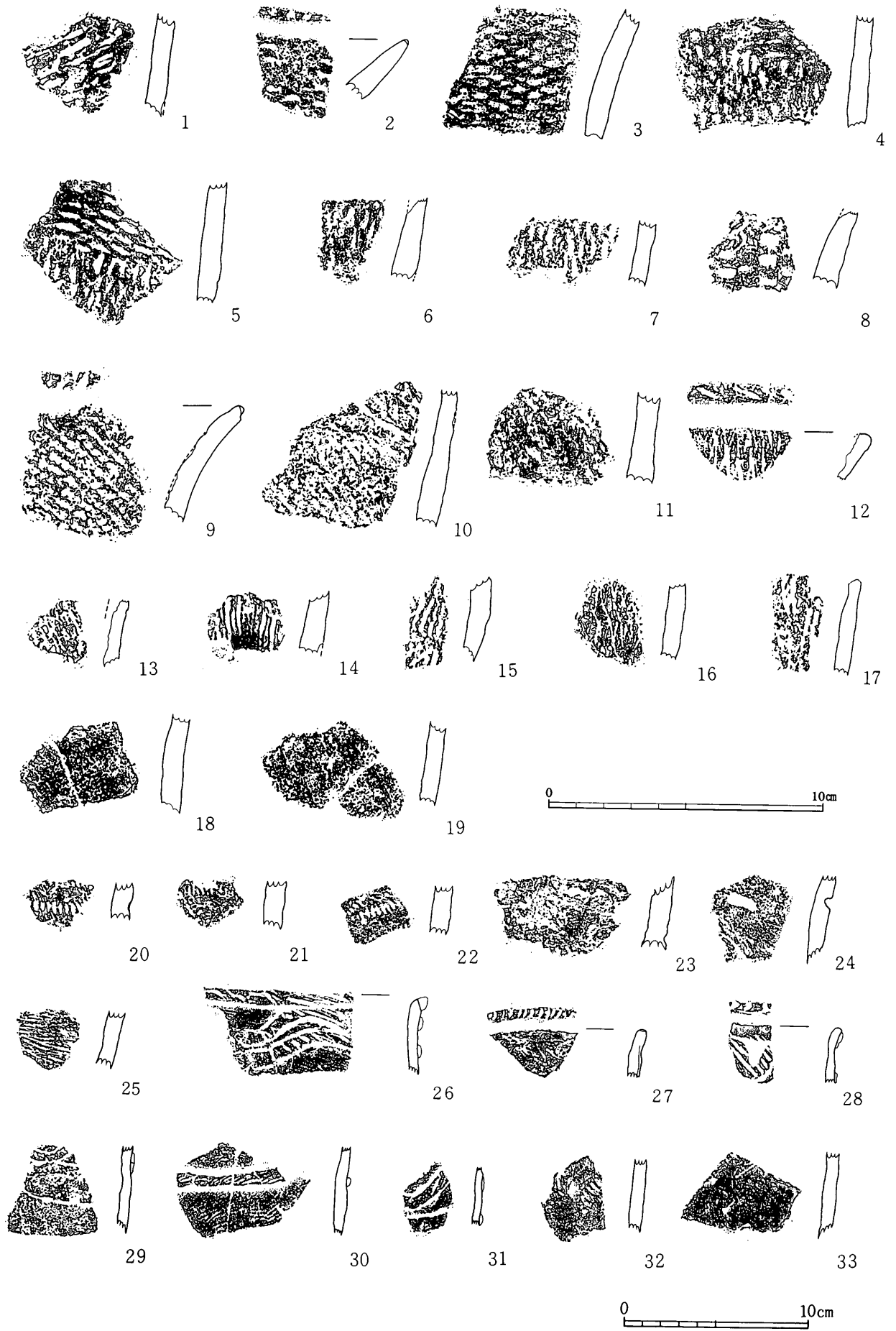
第24図 S B25出土遺物



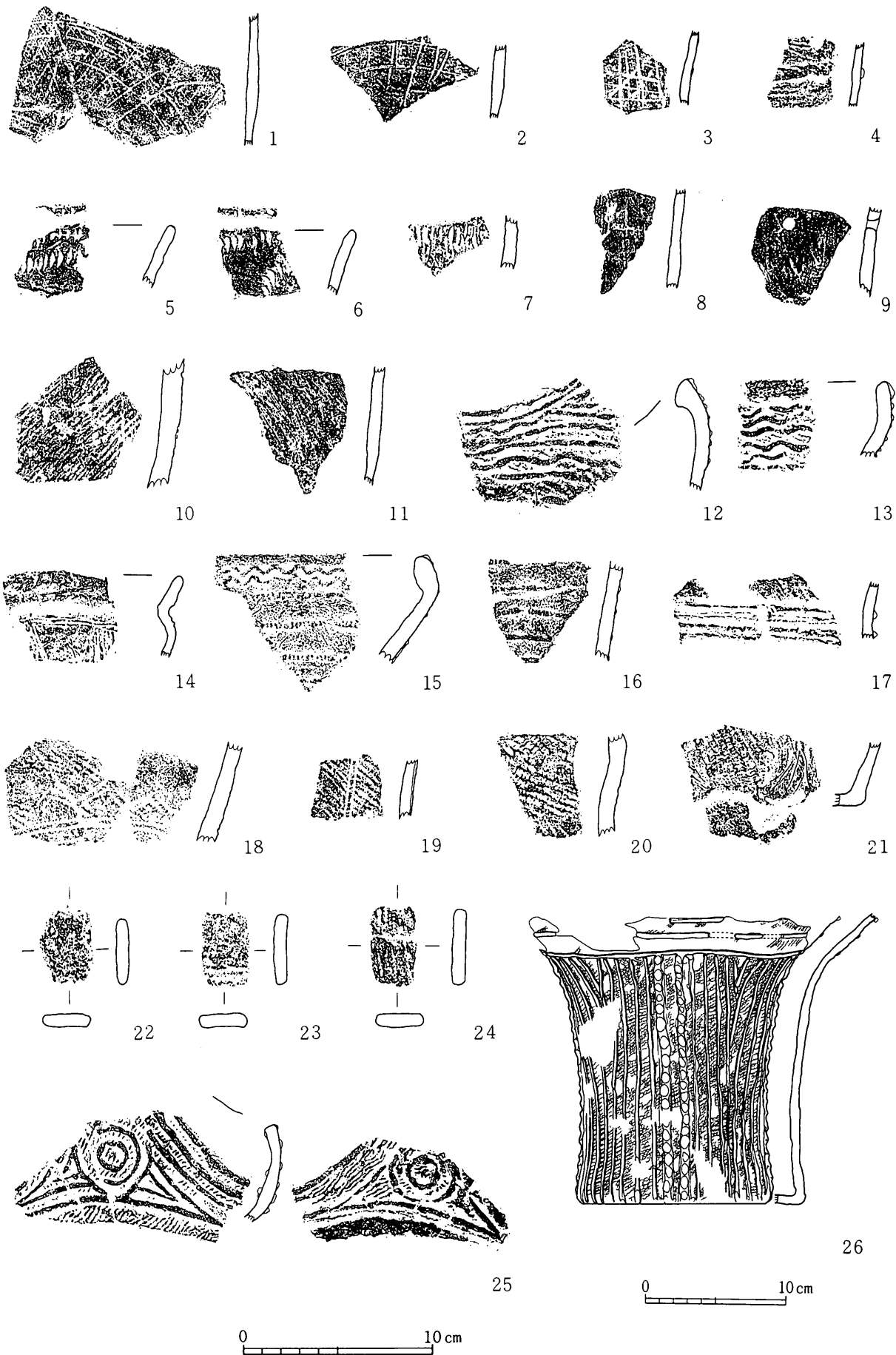
第25图 S B 25出土遺物



第26图 S B 25·26出土遺物 (1~4 S B 25、5~30 S B 26)

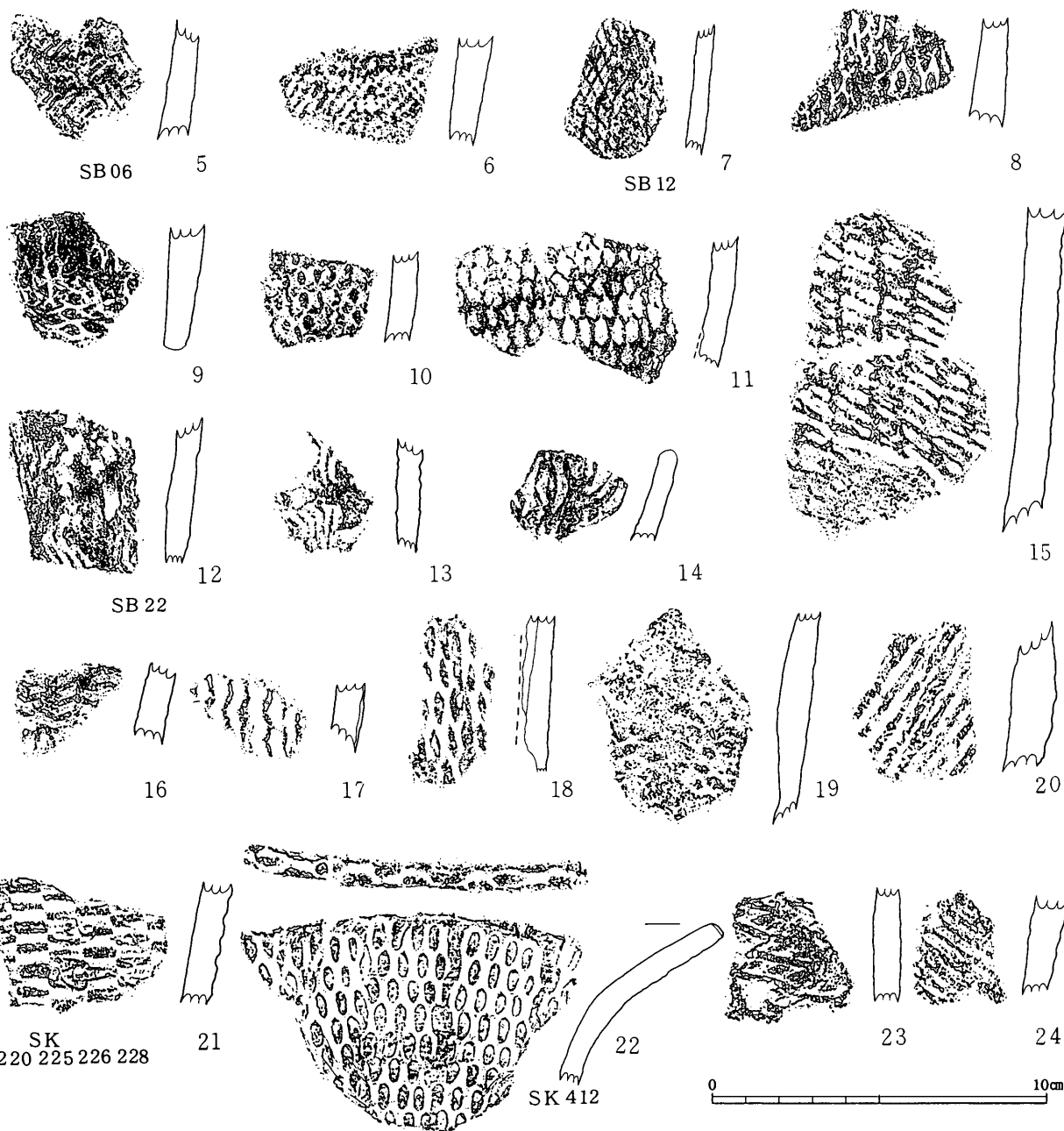


第27圖 S B 26・23出土遺物 (1~19 S B 26、20~33 S B 23)

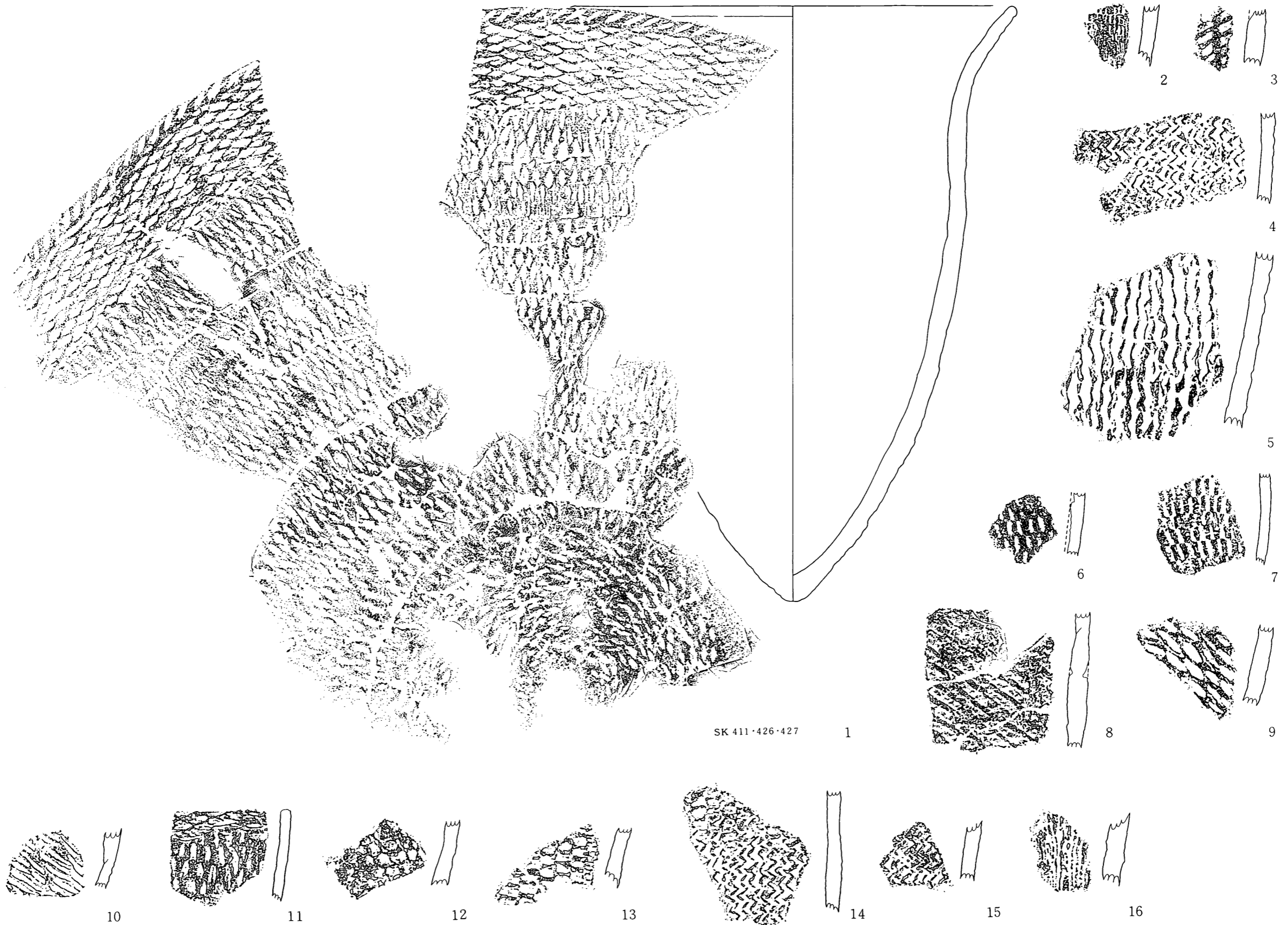


第28图 S B03·09·07·16出土遺物

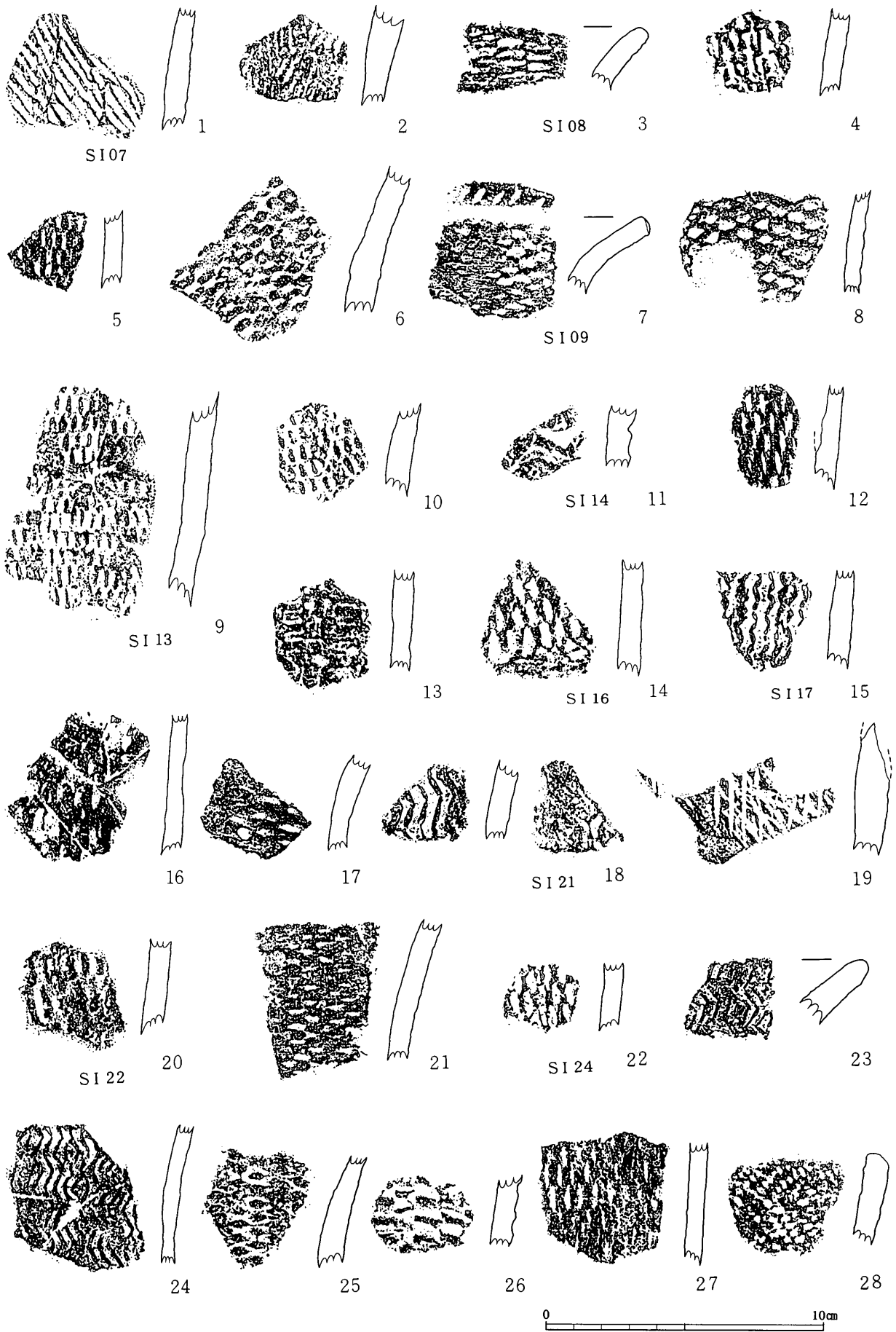
(1~4 S B03、5~11 S B09、12~24 S B07、25~27 S B16)



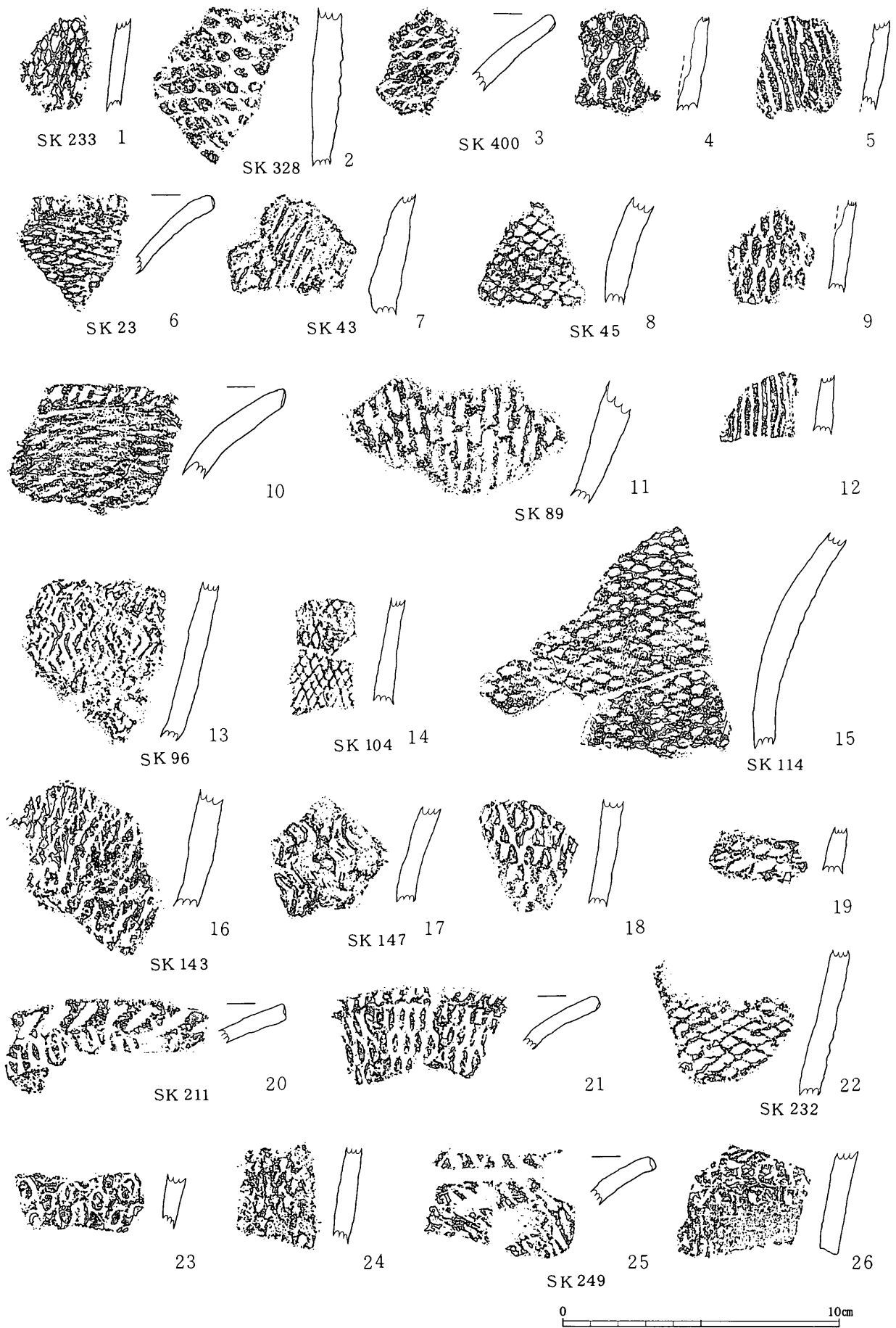
第29圖 SB16・17竪穴、炉穴出土遺物（1～3 SB16、4 SB17）



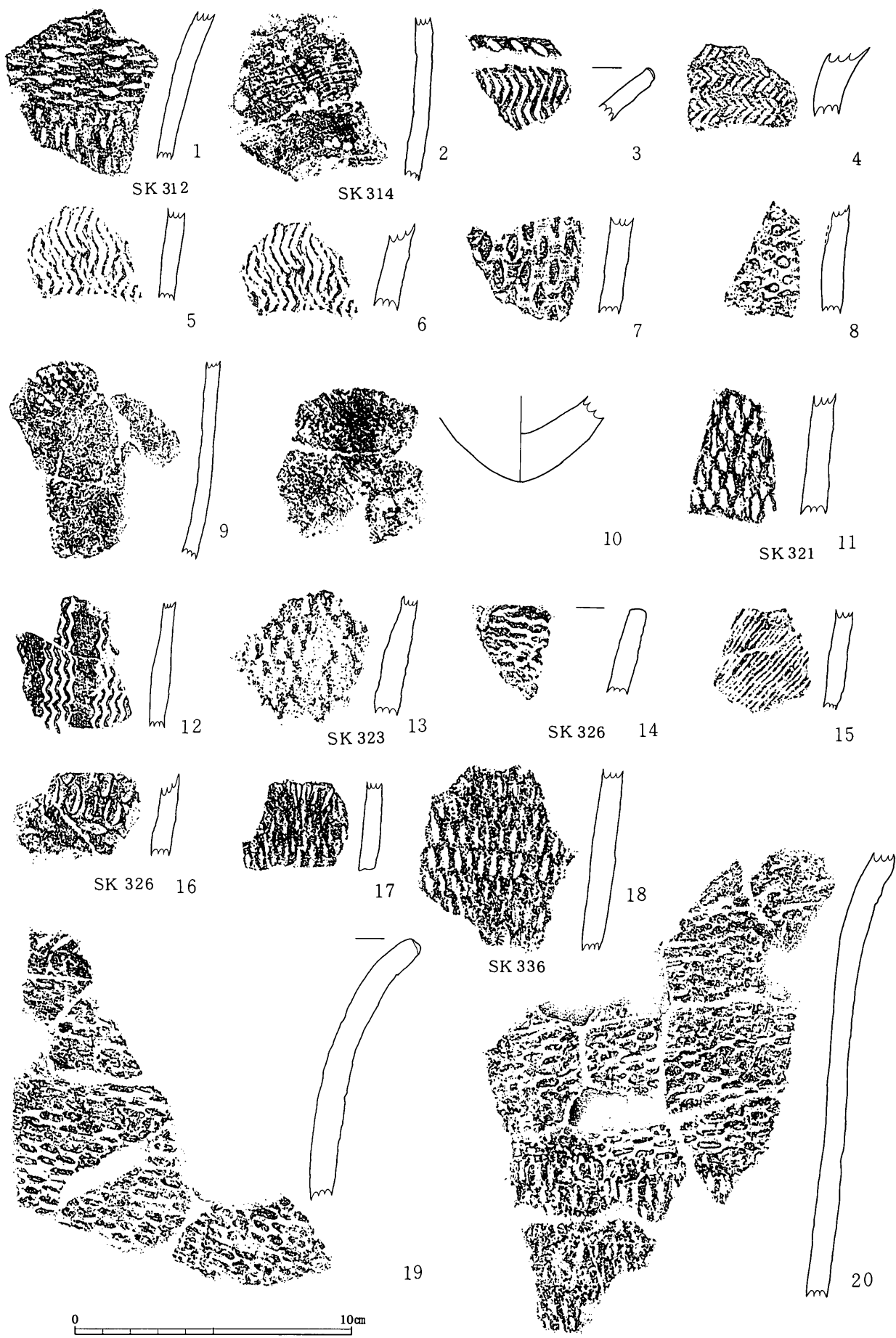
第30・31图 炉穴出土遺物



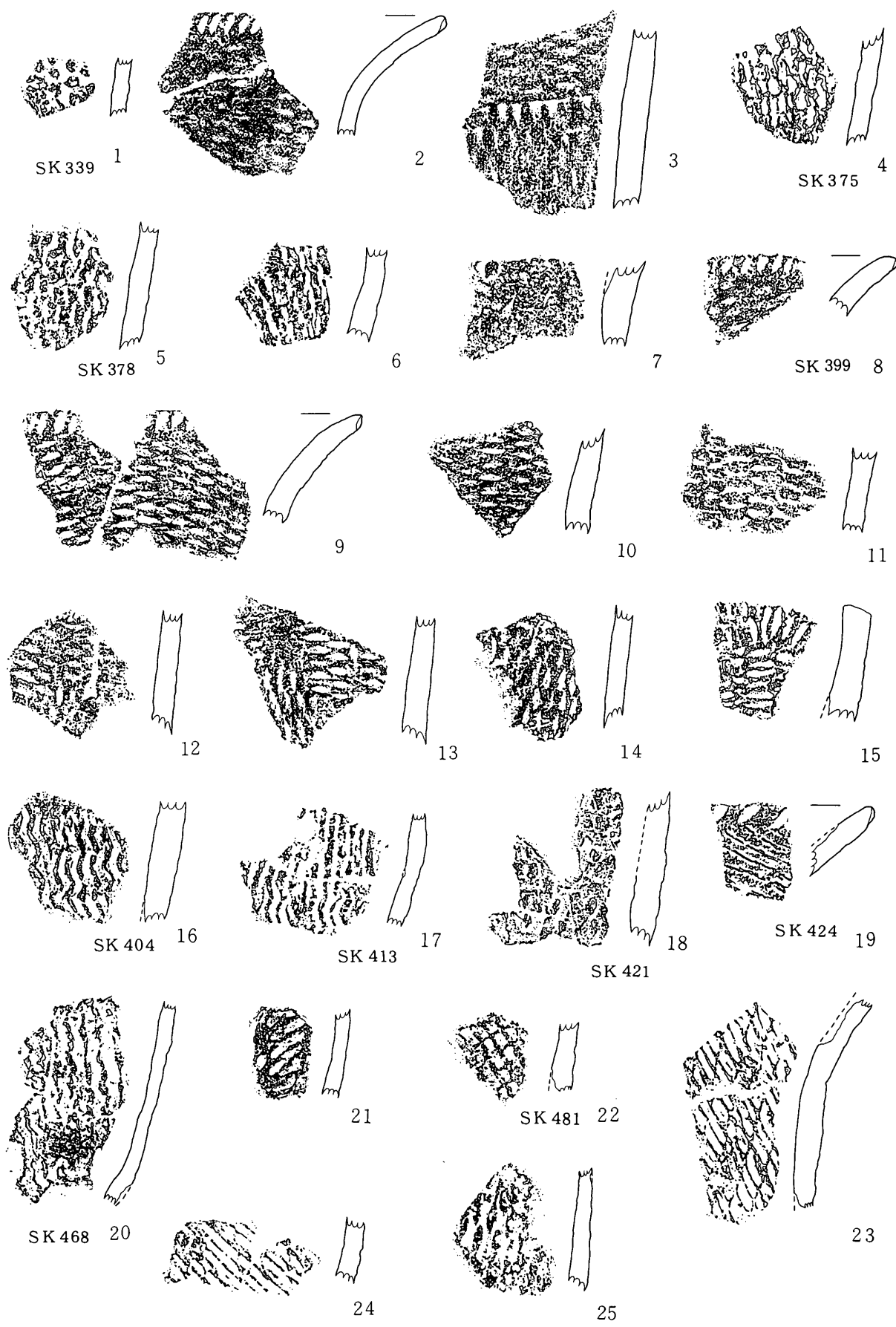
第32图 集石、貯藏穴出土遺物



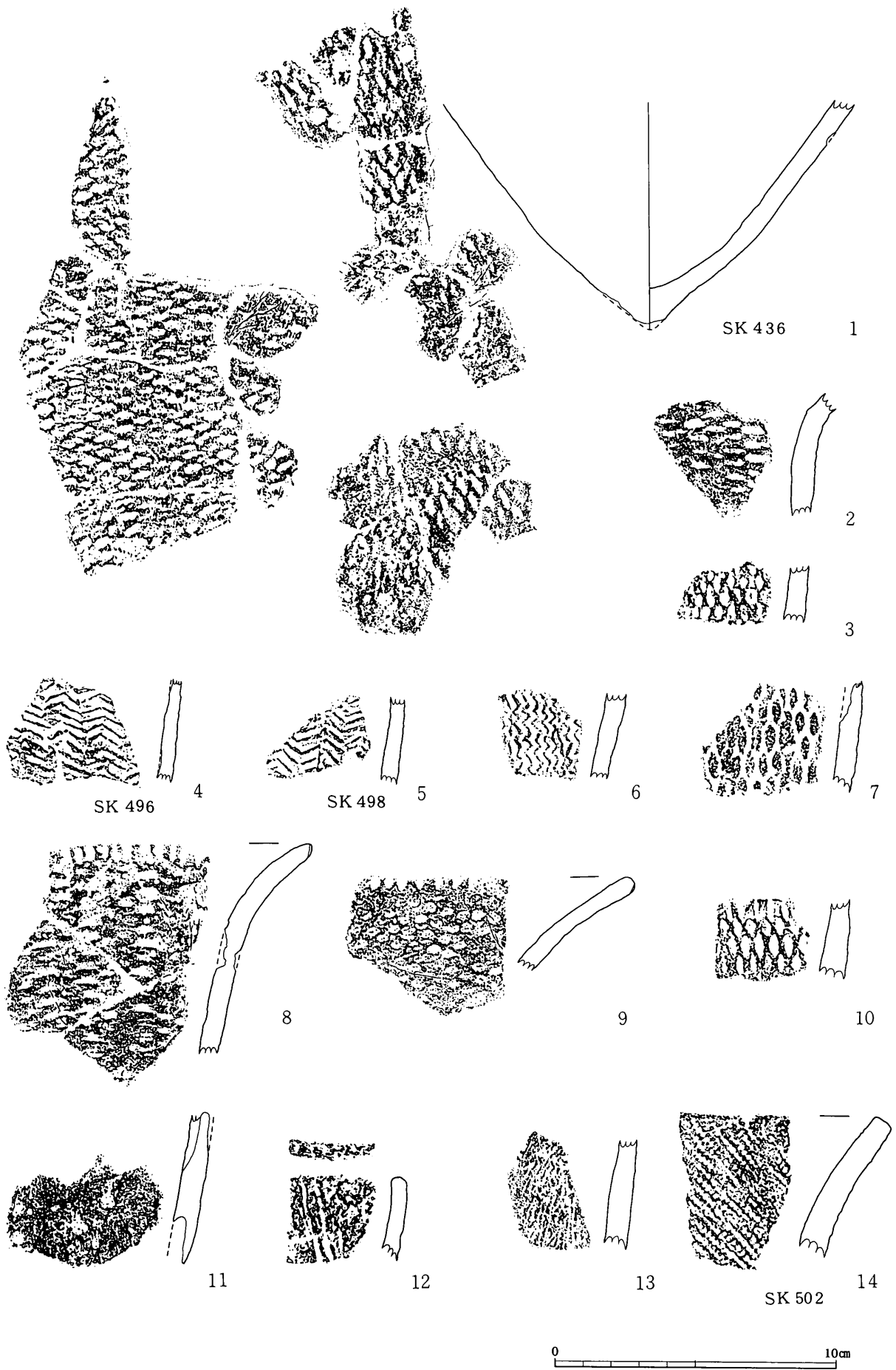
第33圖 貯藏穴、土坑出土遺物



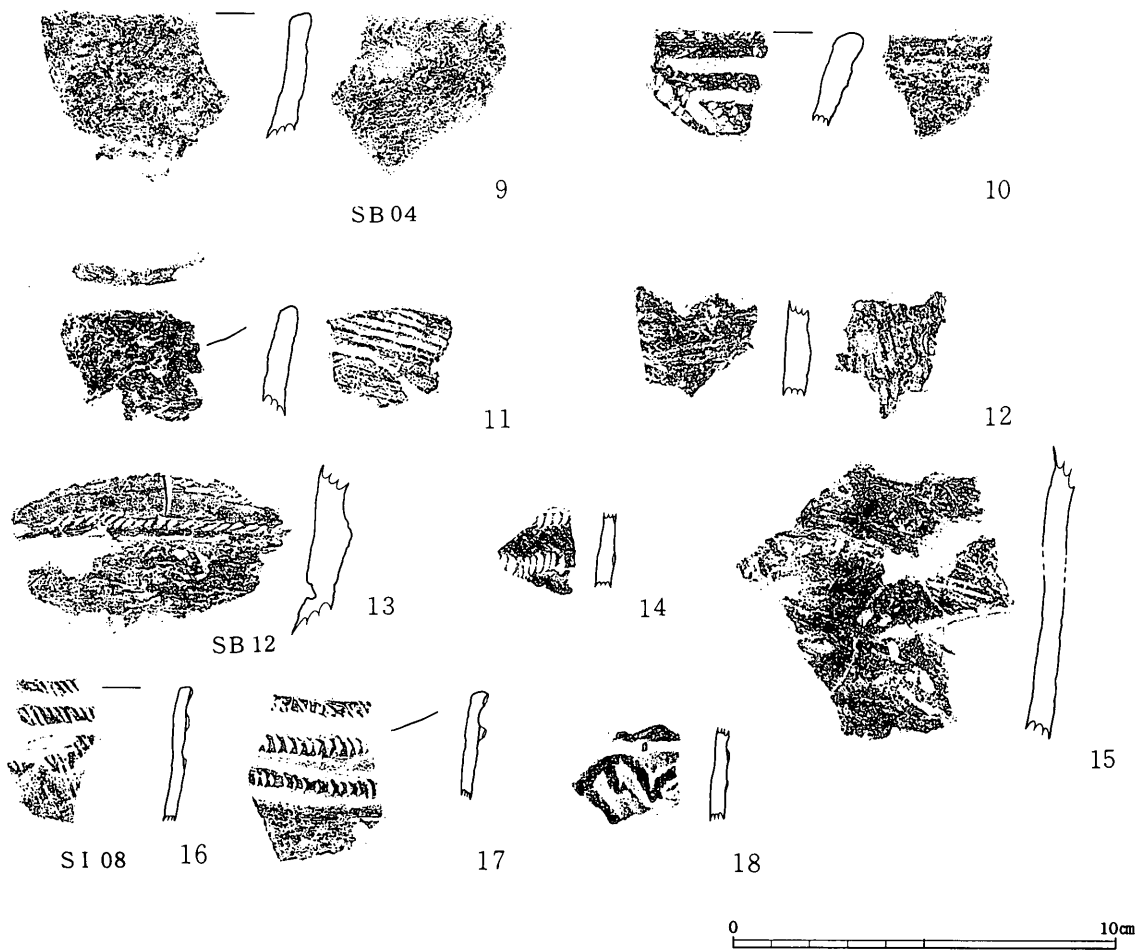
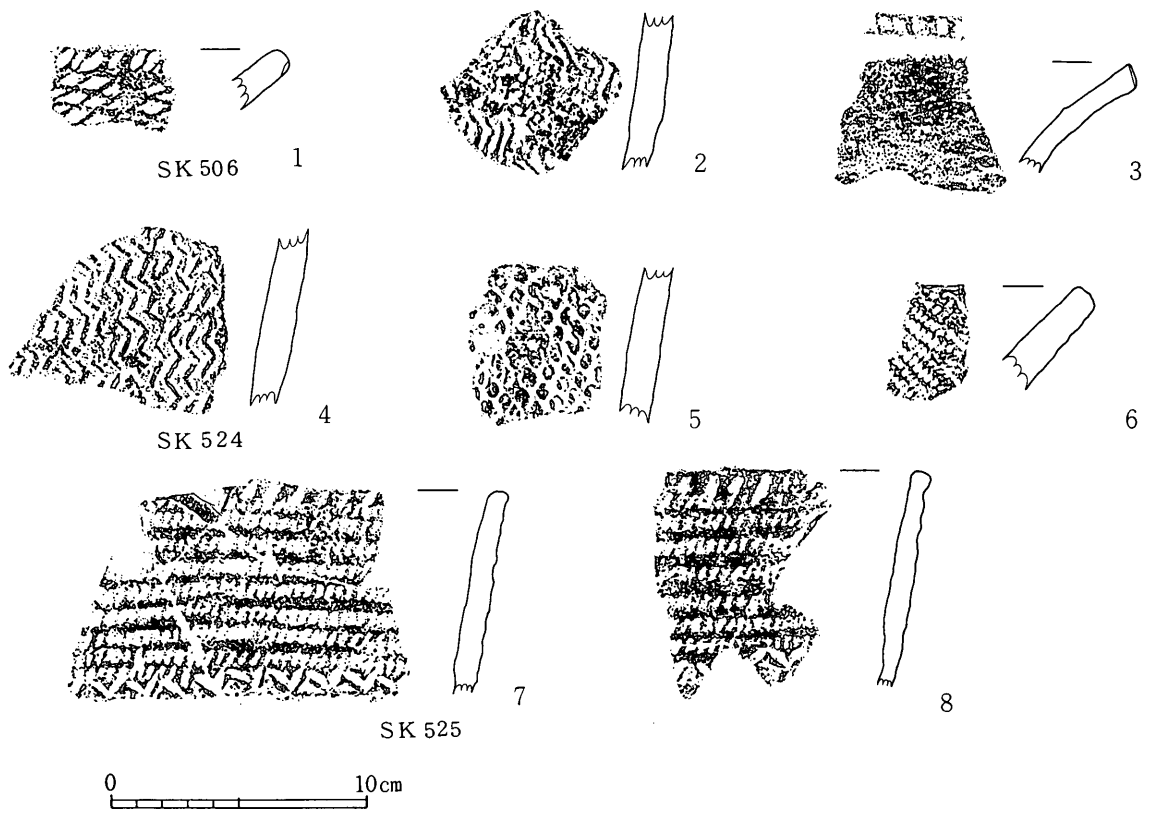
第34图 土坑出土遗物



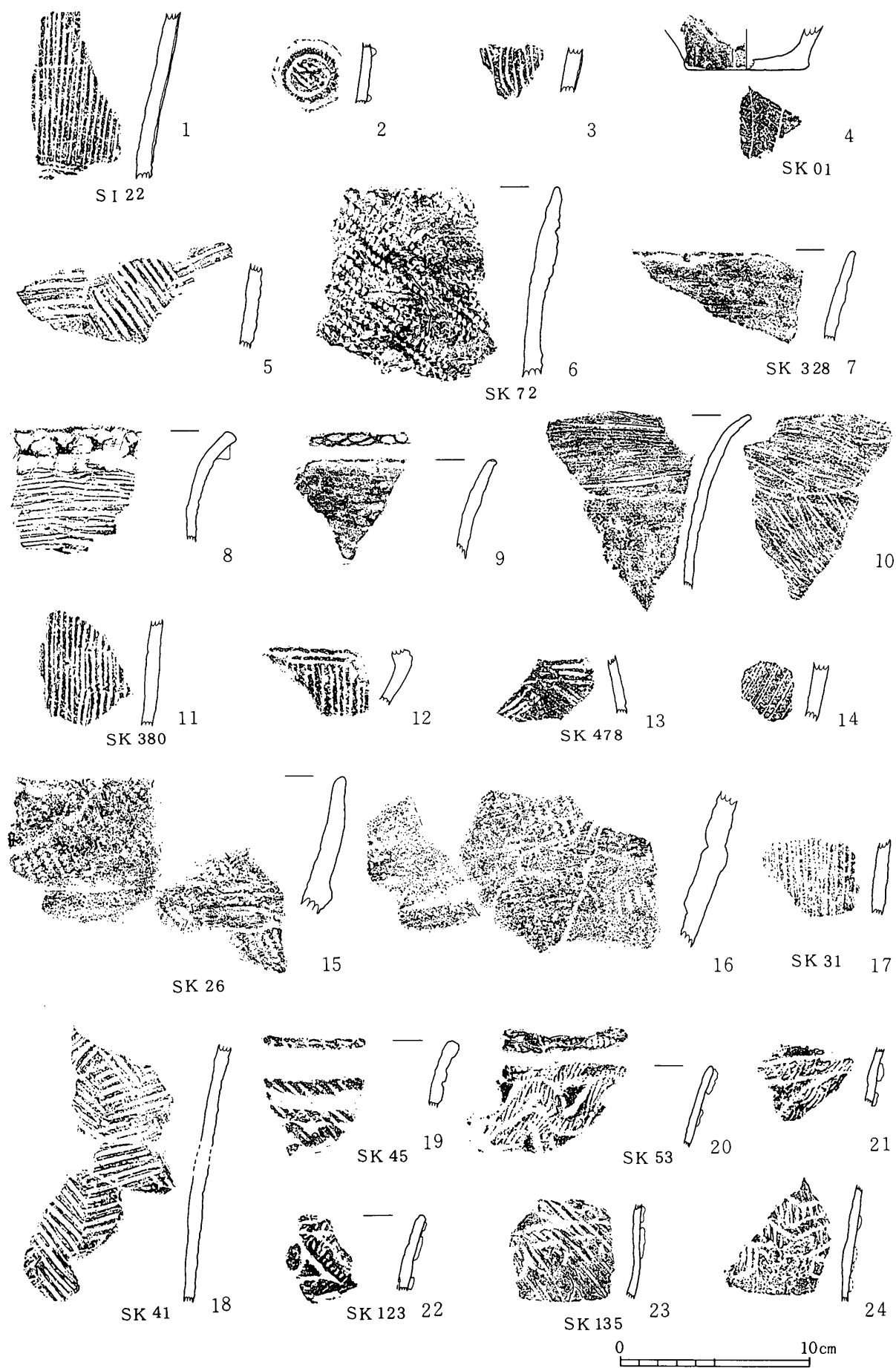
第35图 土坑出土遺物



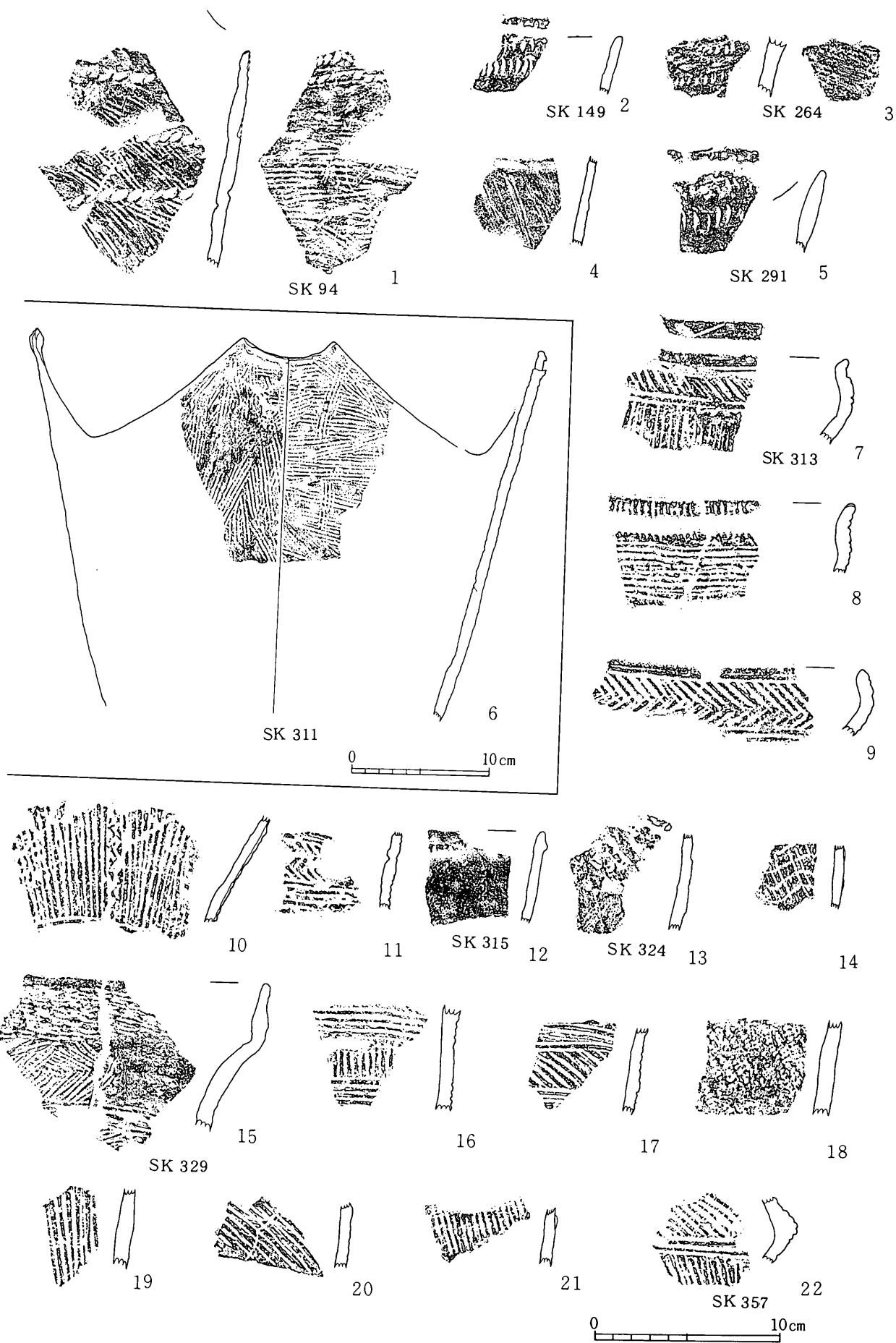
第36图 土坑出土遺物



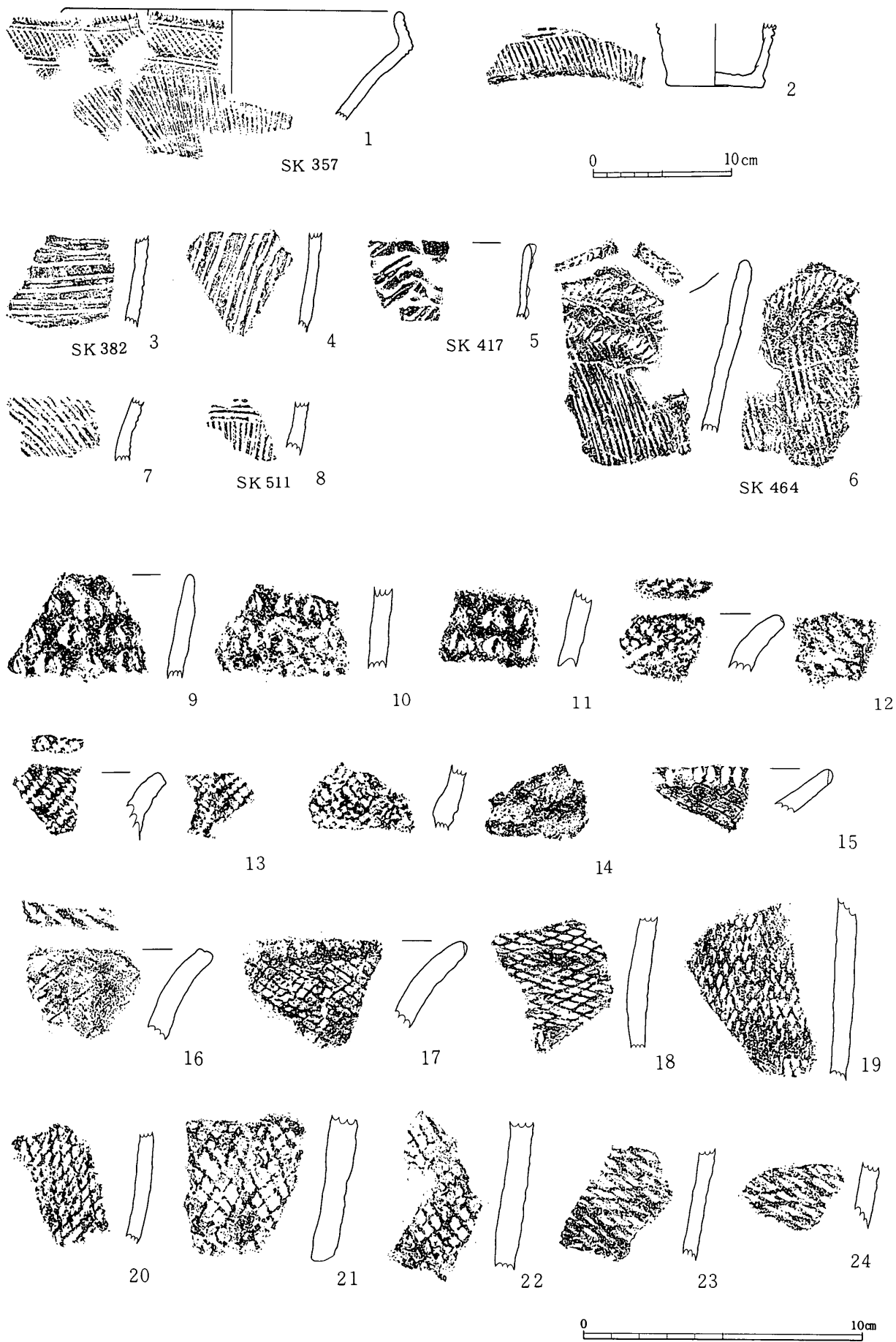
第37図 土坑、竪穴、集石出土遺物



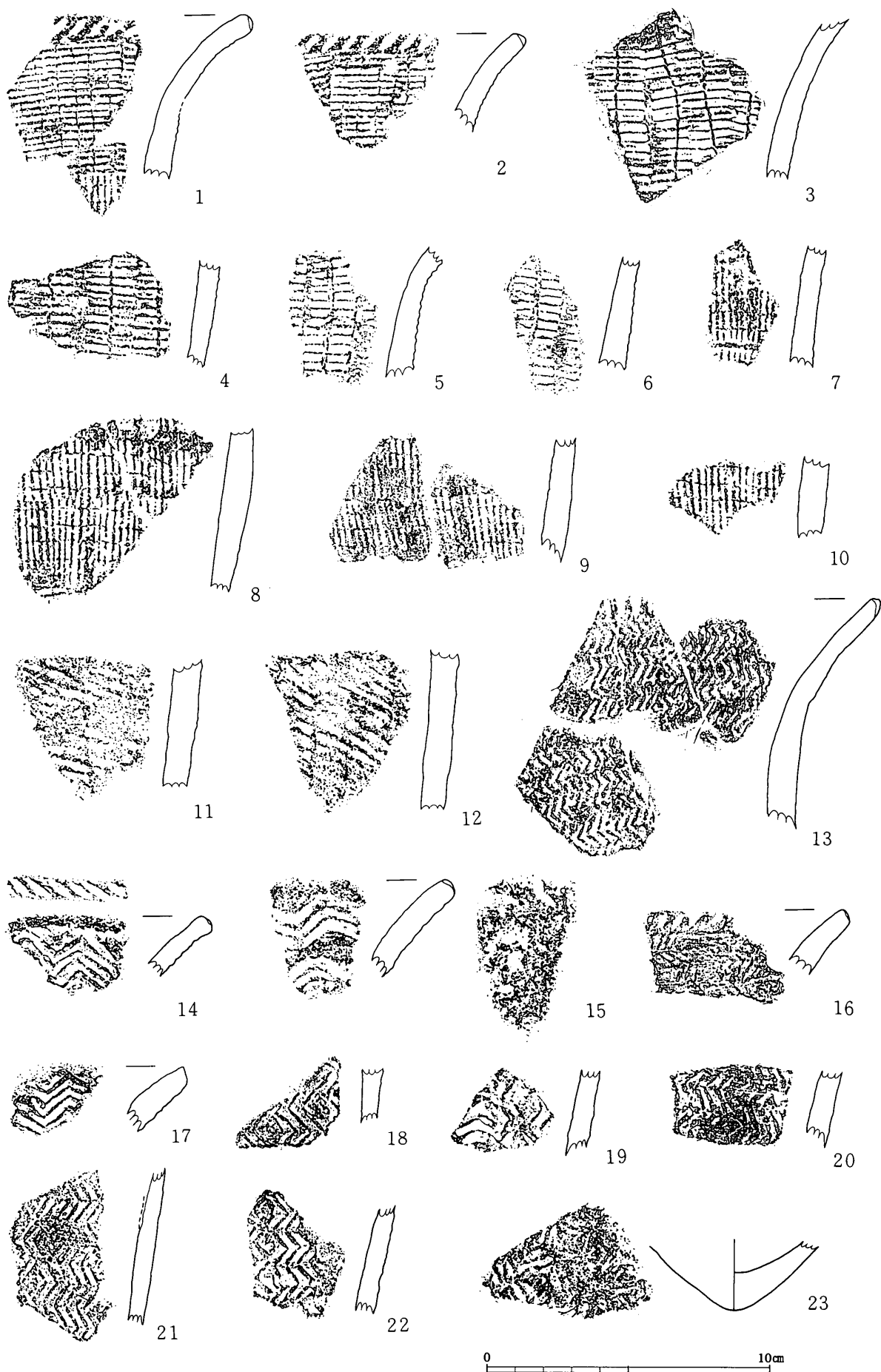
第38図 集石、貯蔵穴、土坑出土遺物



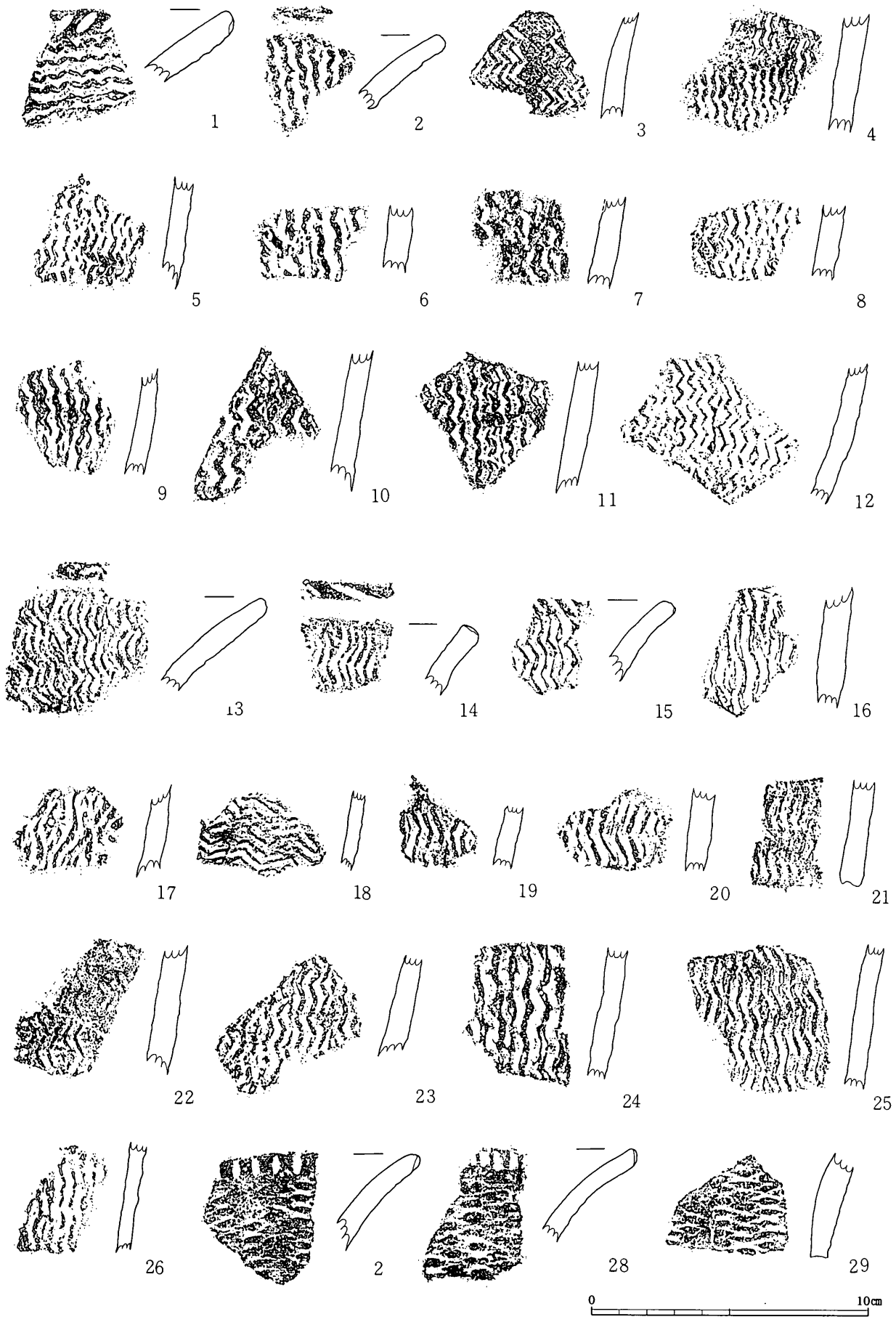
第39图 土坑出土遺物



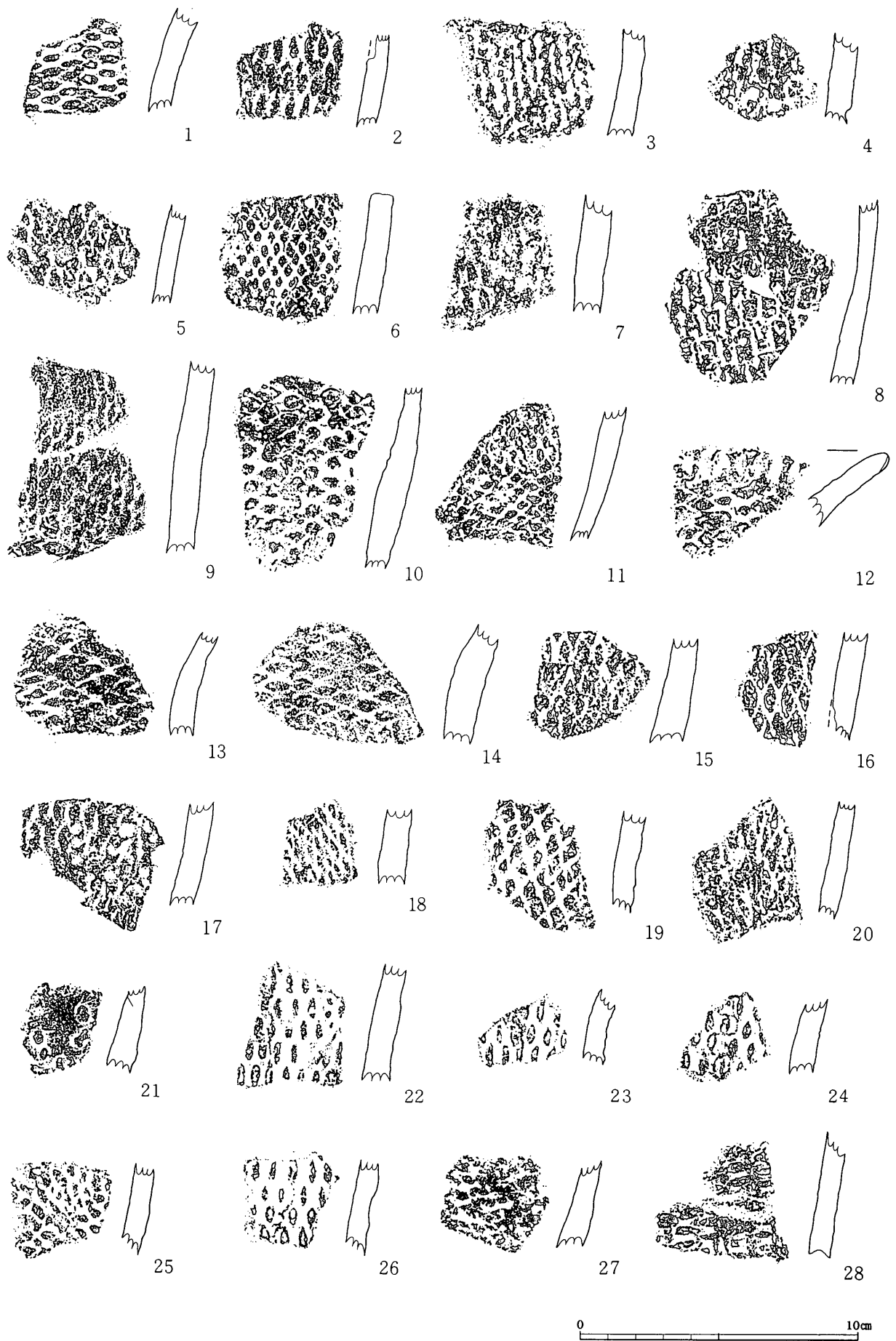
第40图 土坑、遺構外出土遺物(1)



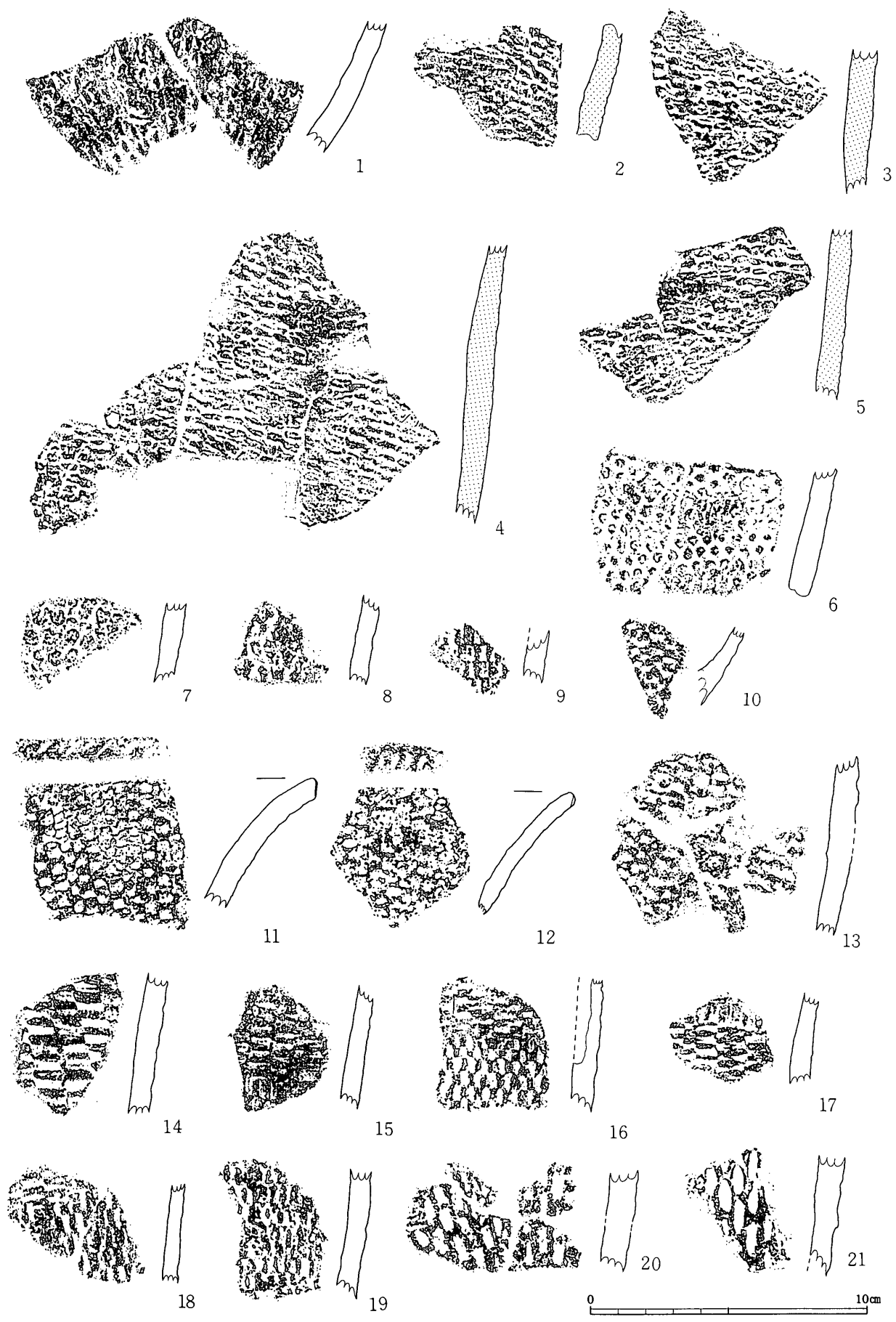
第41图 遺構外出土遺物 (2)



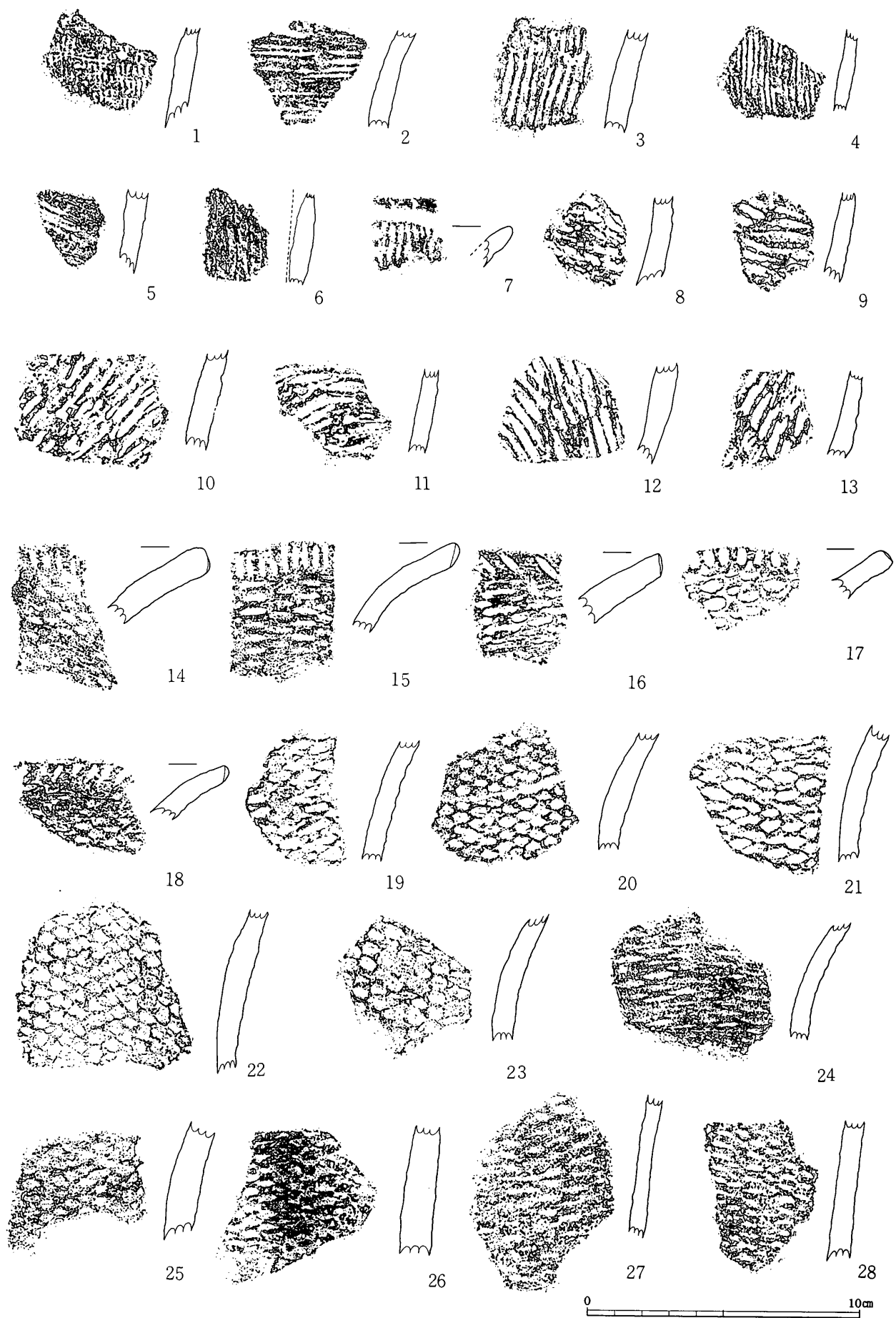
第42図 遺構外出土遺物 (3)



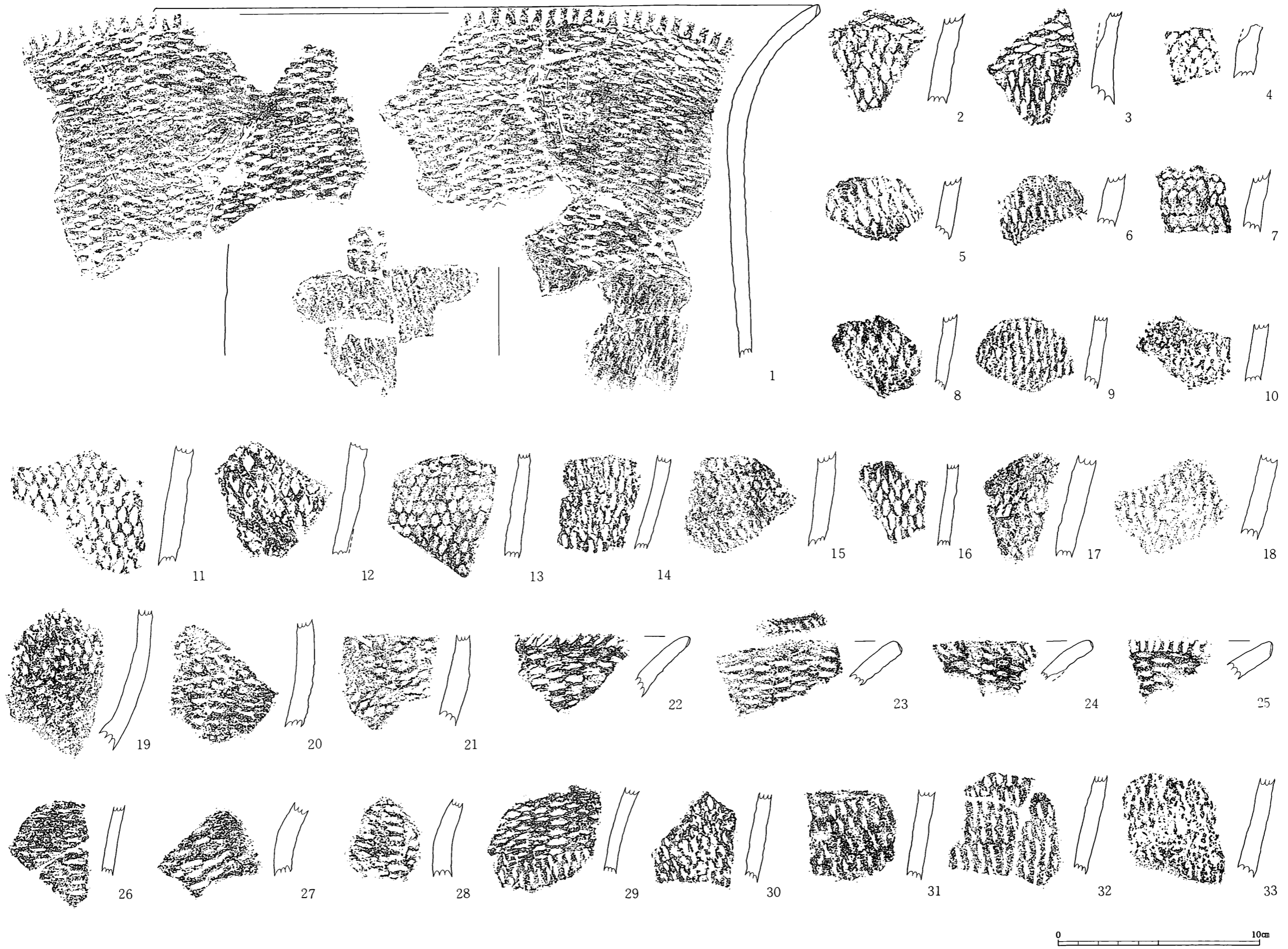
第43図 遺構外出土遺物 (4)



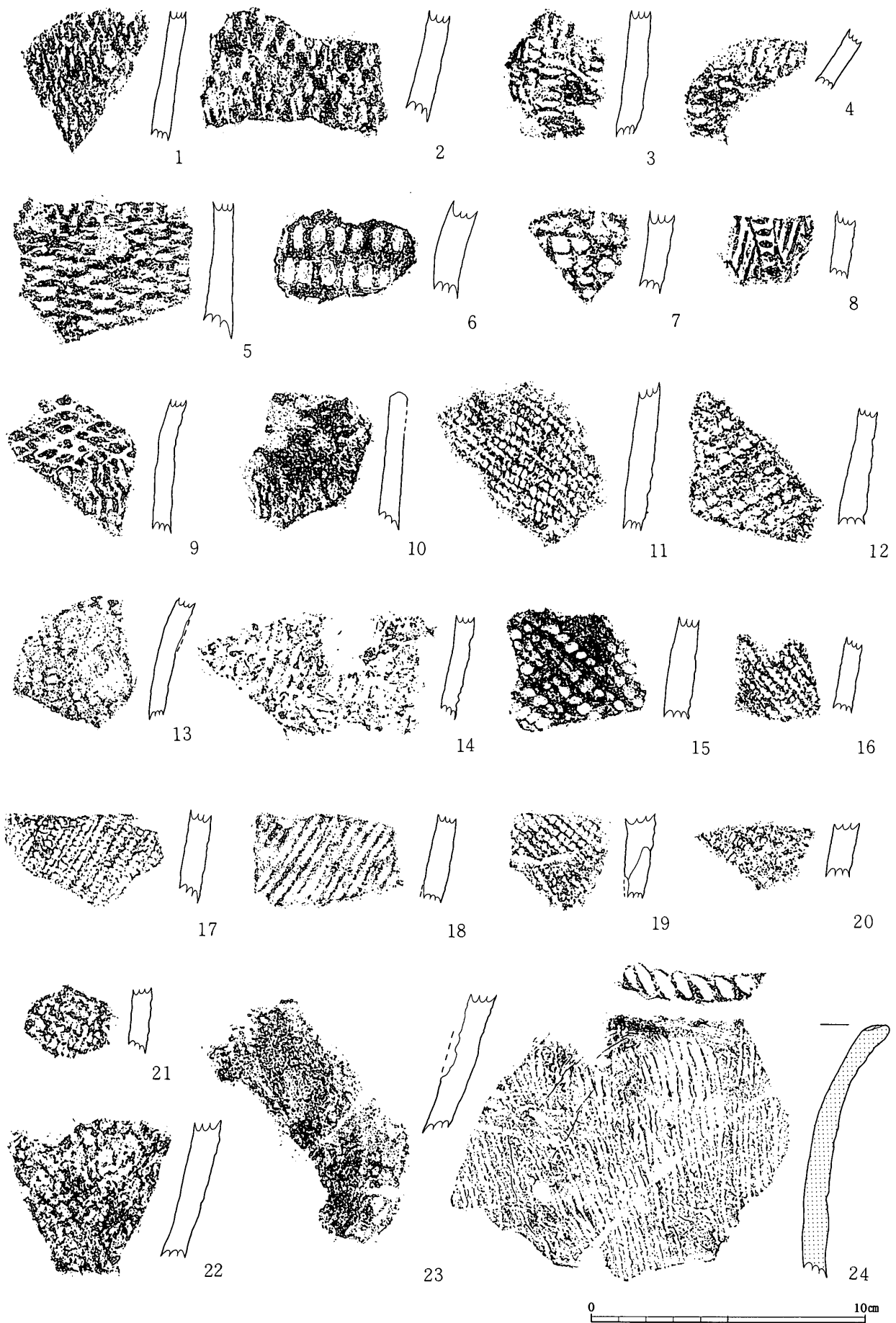
第44図 遺構外出土遺物 (5)



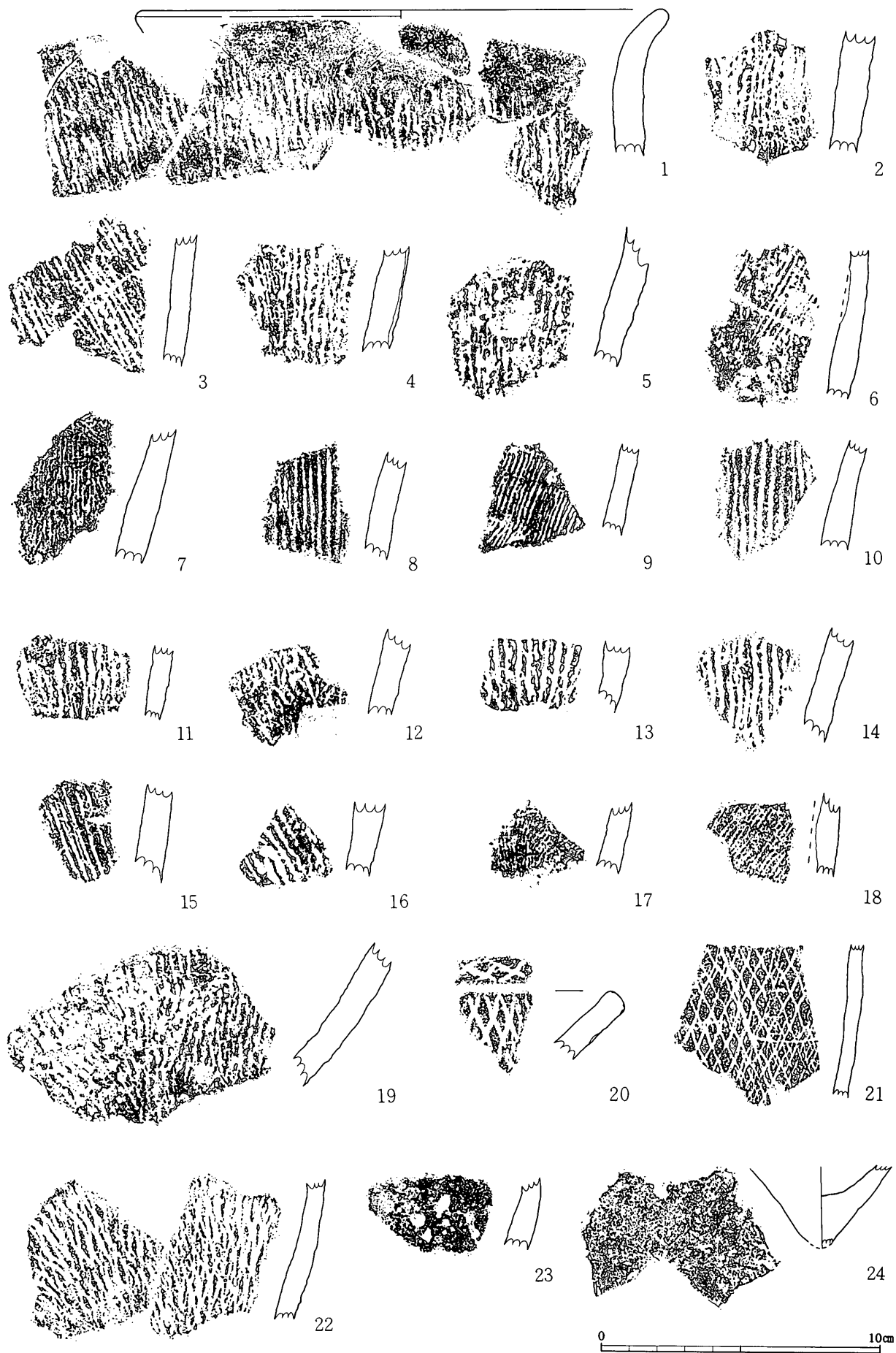
第45图 遺構外出土遺物 (6)



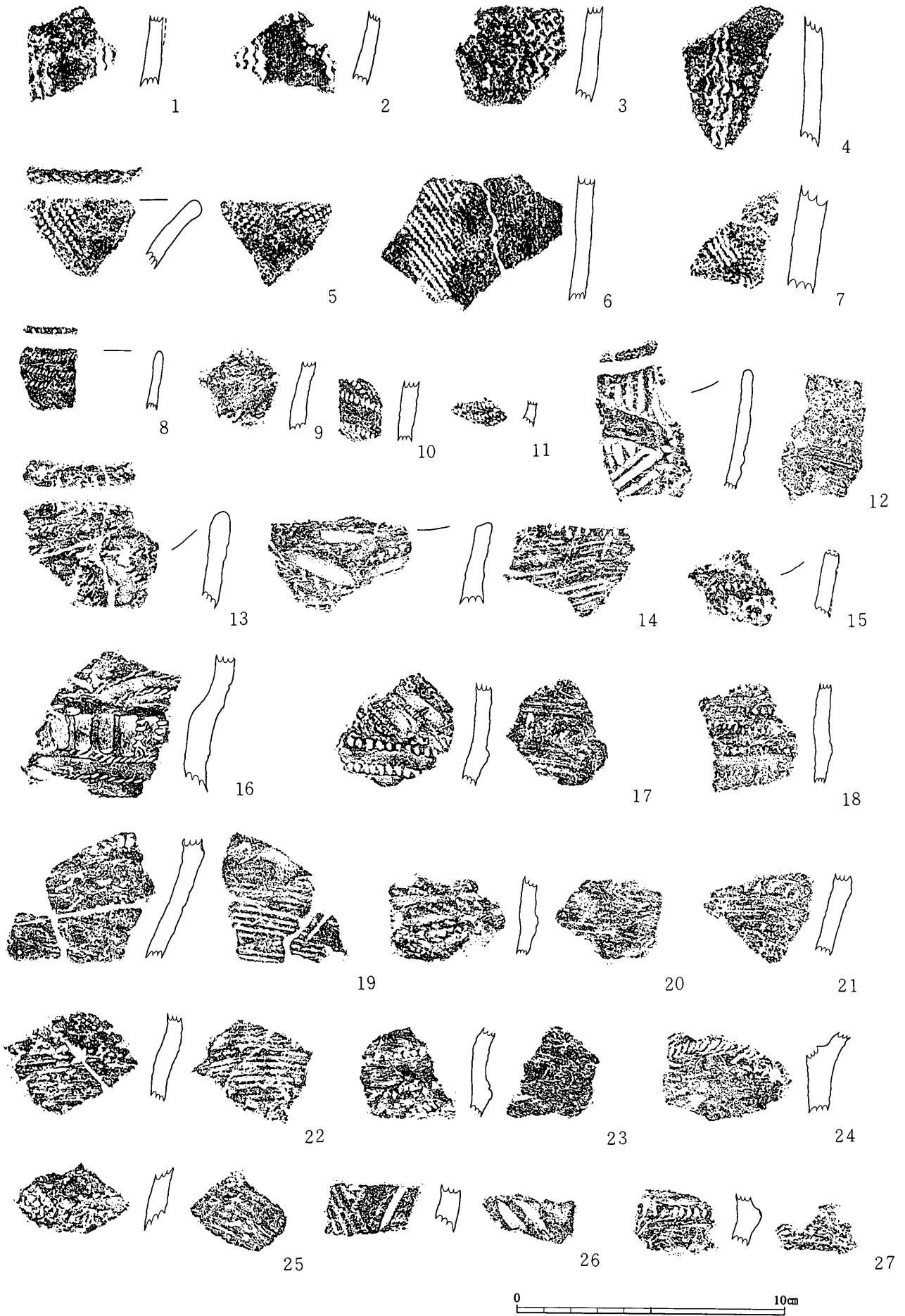
第46・47図 遺構外出土遺物（7）



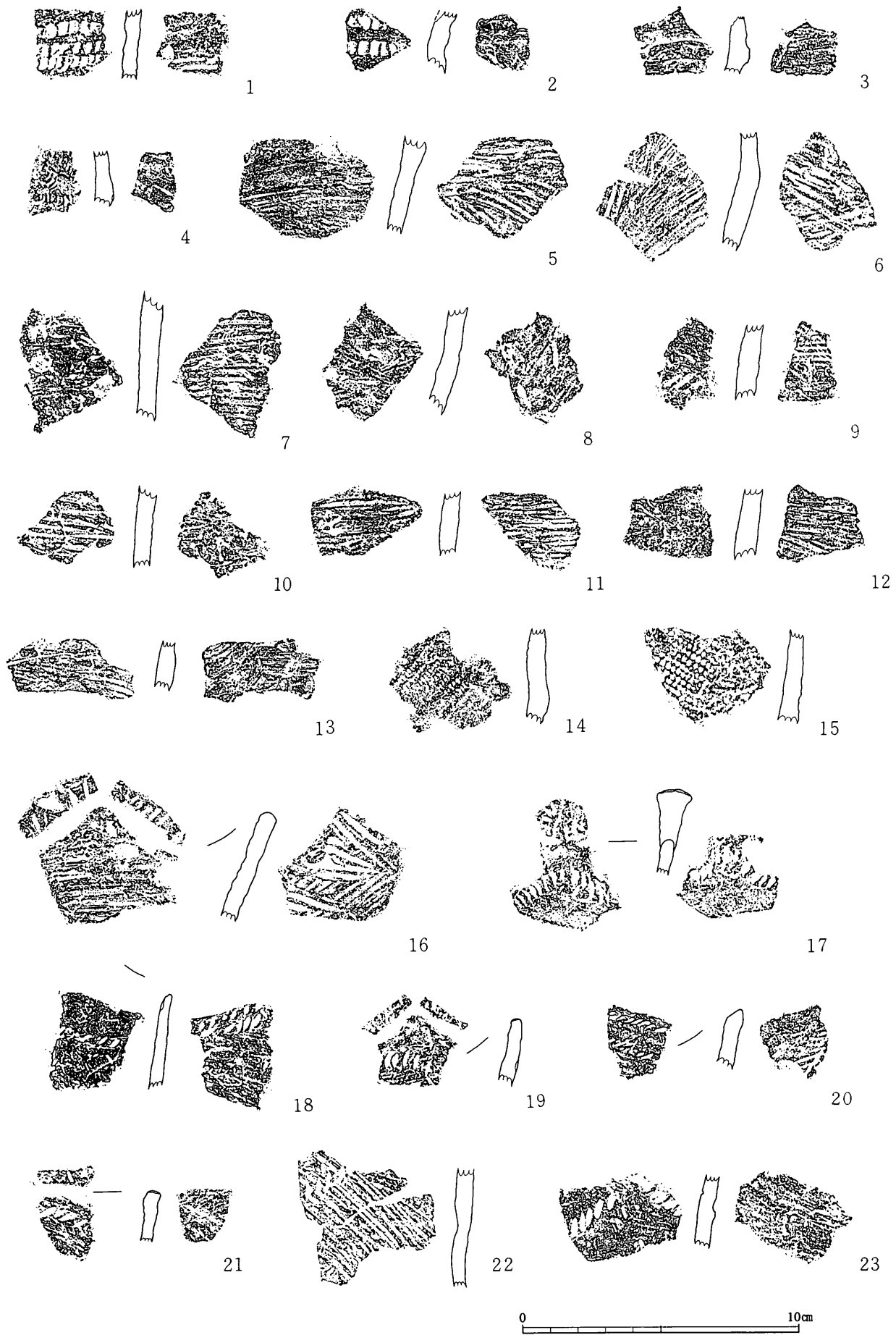
第48図 遺構外出土遺物 (8)



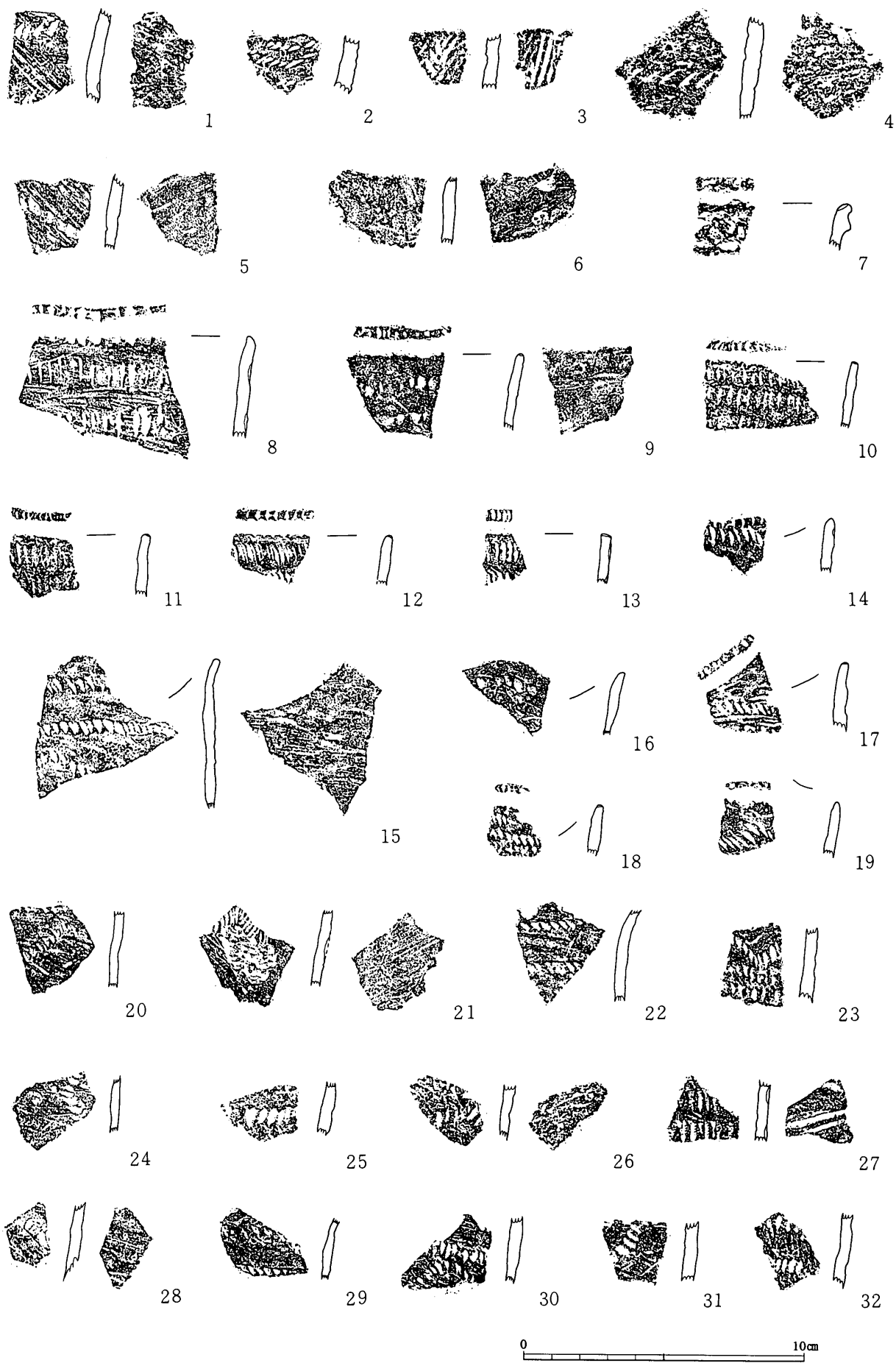
第49図 遺構外出土遺物 (9)



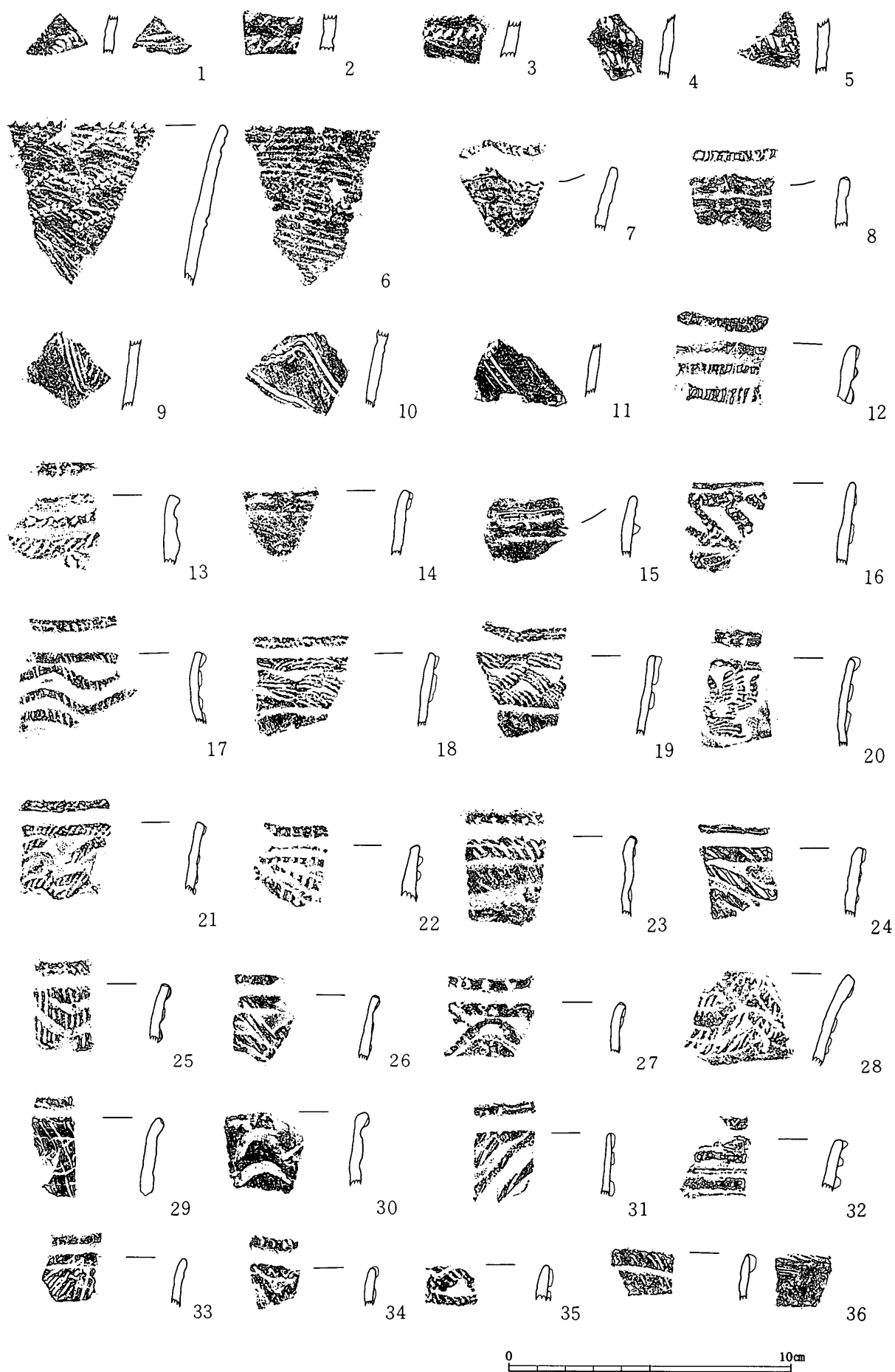
第50図 遺構外出土遺物 (10)



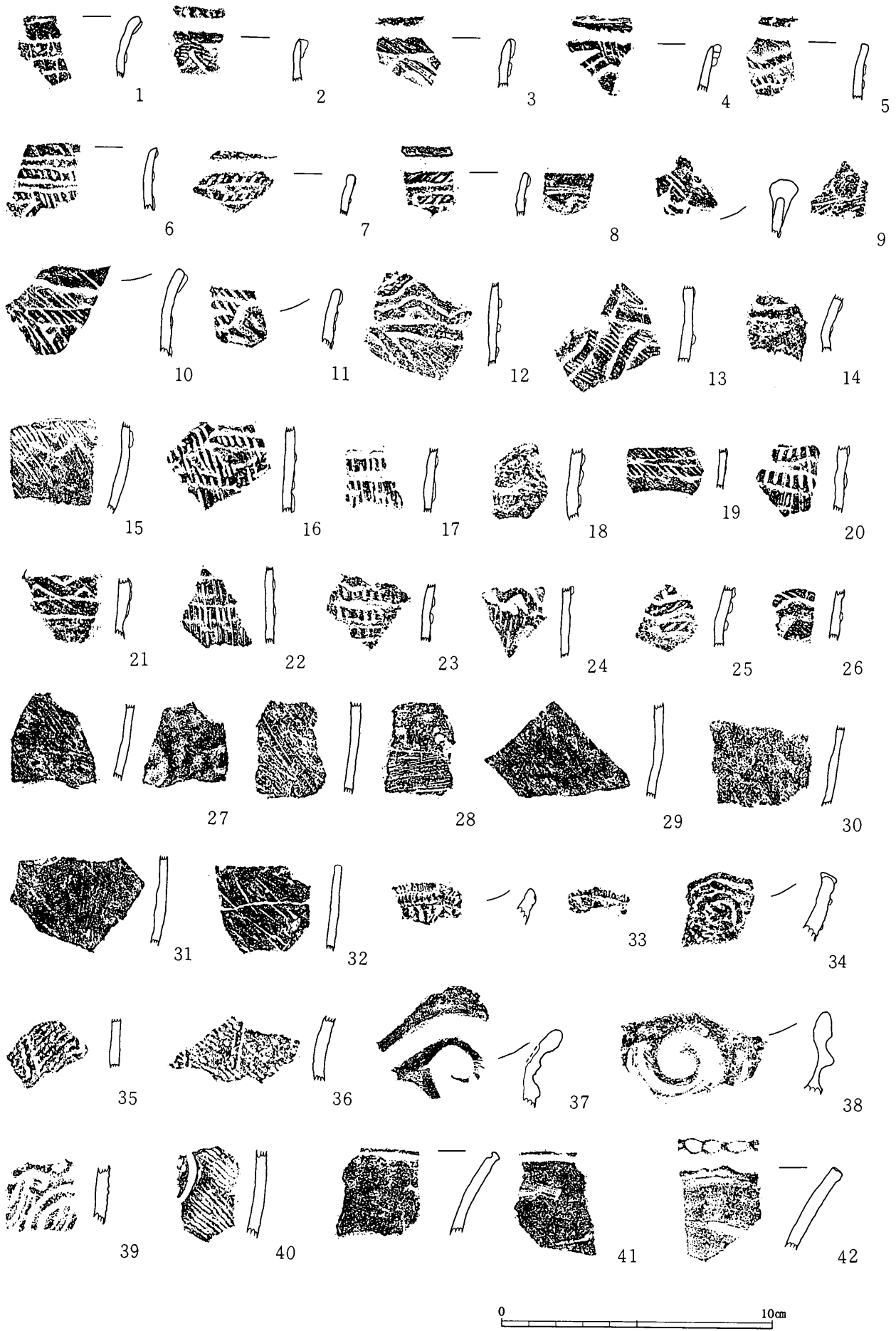
第51図 遺構外出土遺物 (11)



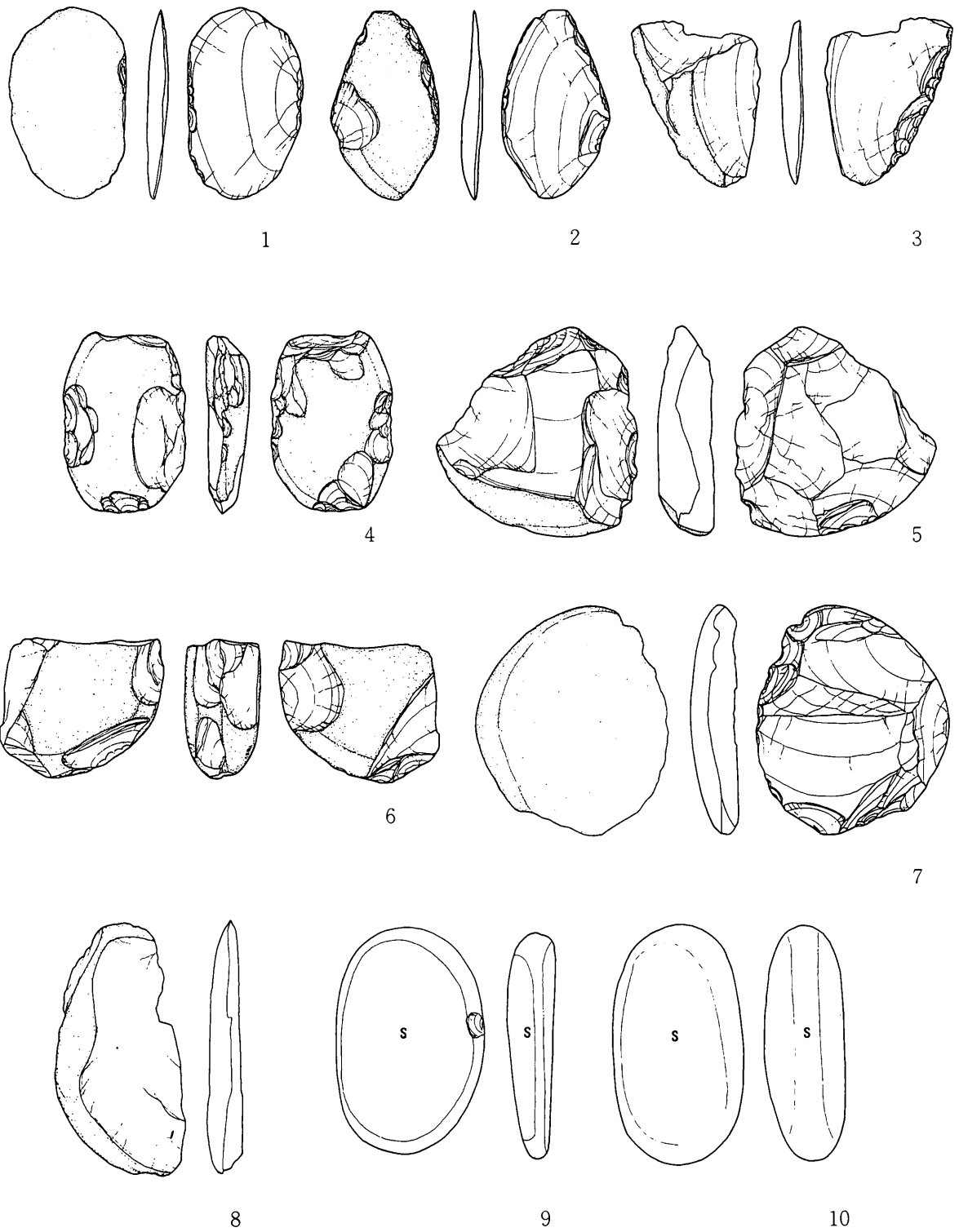
第52図 遺構外出土遺物 (12)



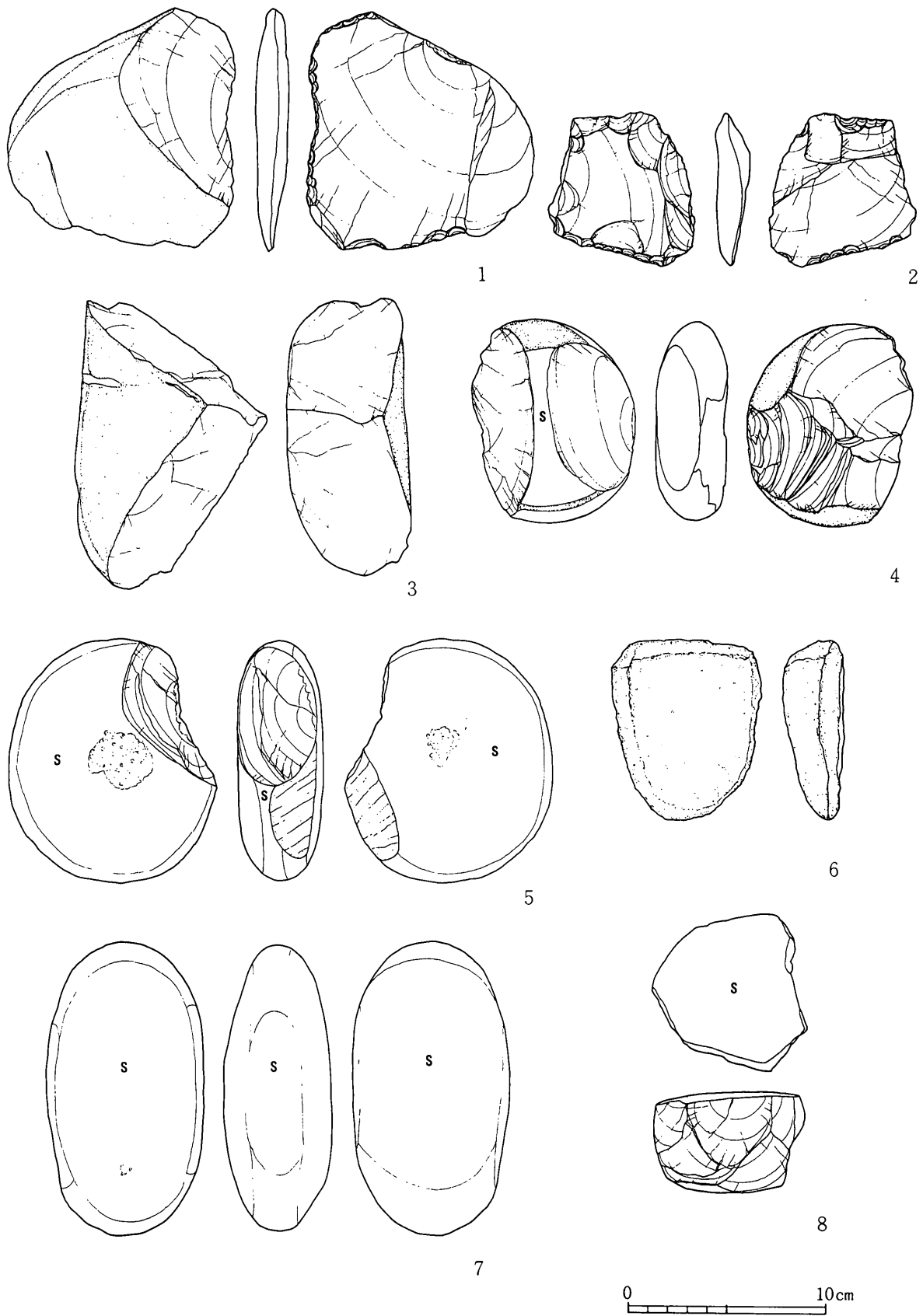
第53図 遺構外出土遺物 (13)



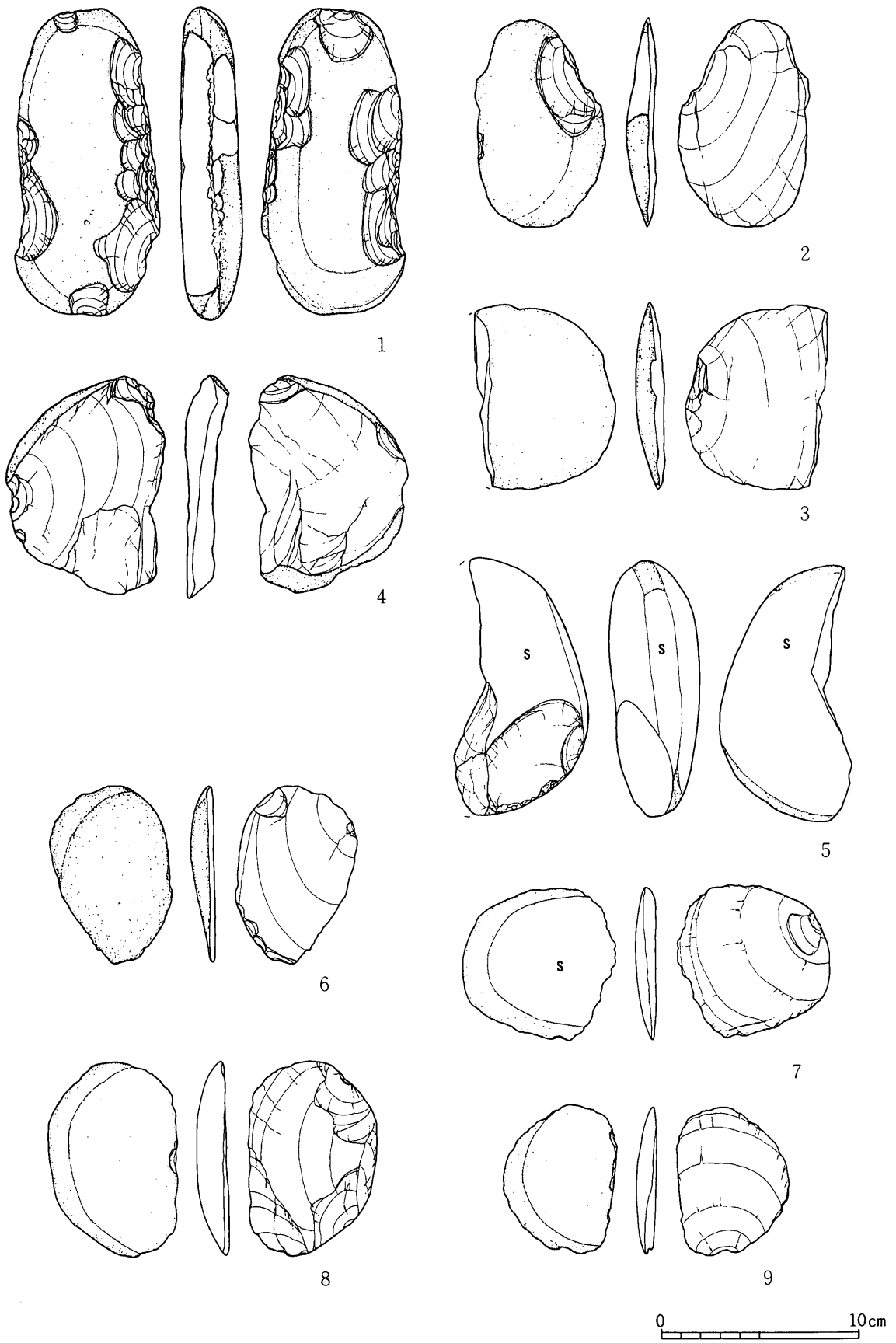
第54図 遺構外出土遺物 (14)



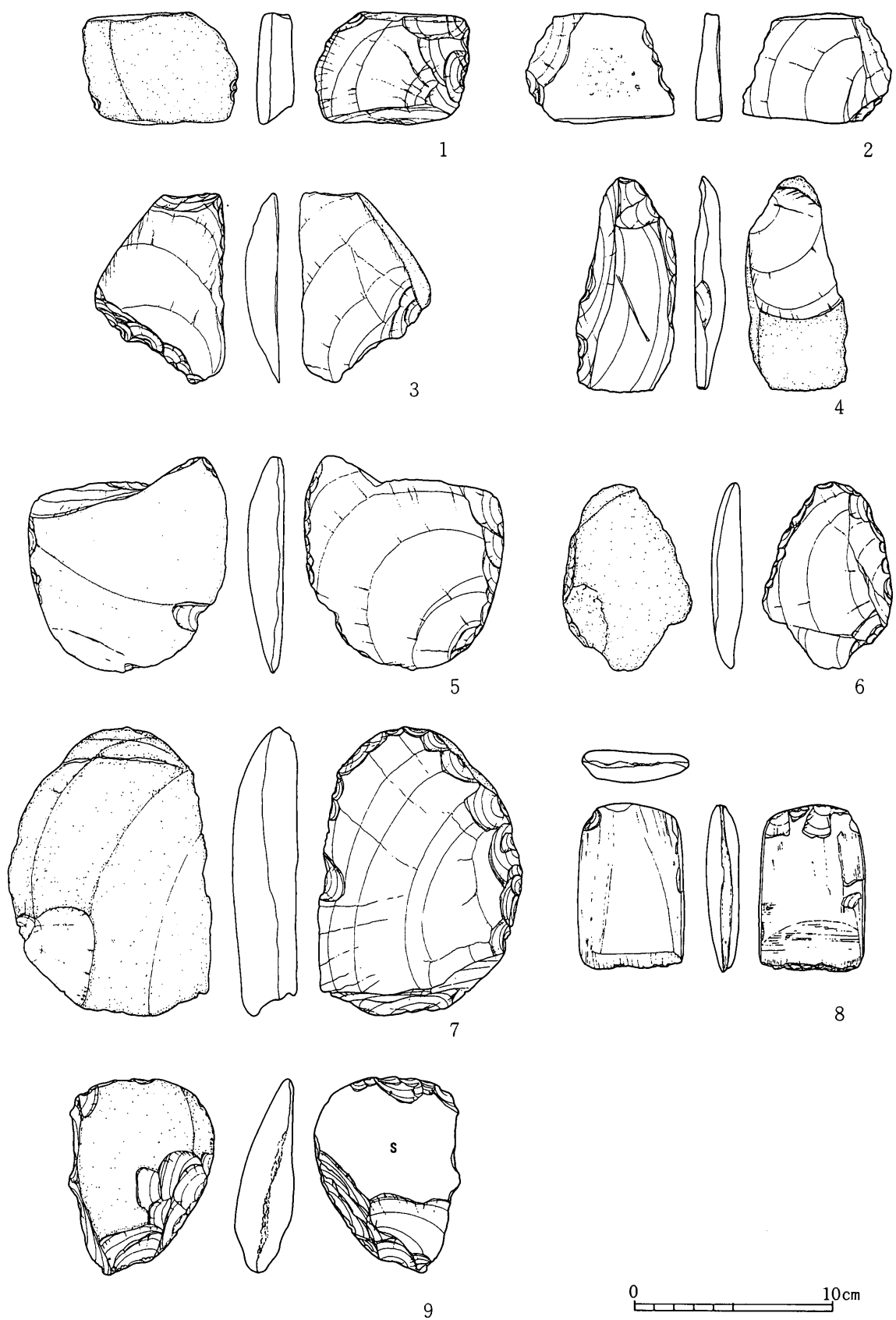
第55図 縄文時代早期前半の大形石器（1）



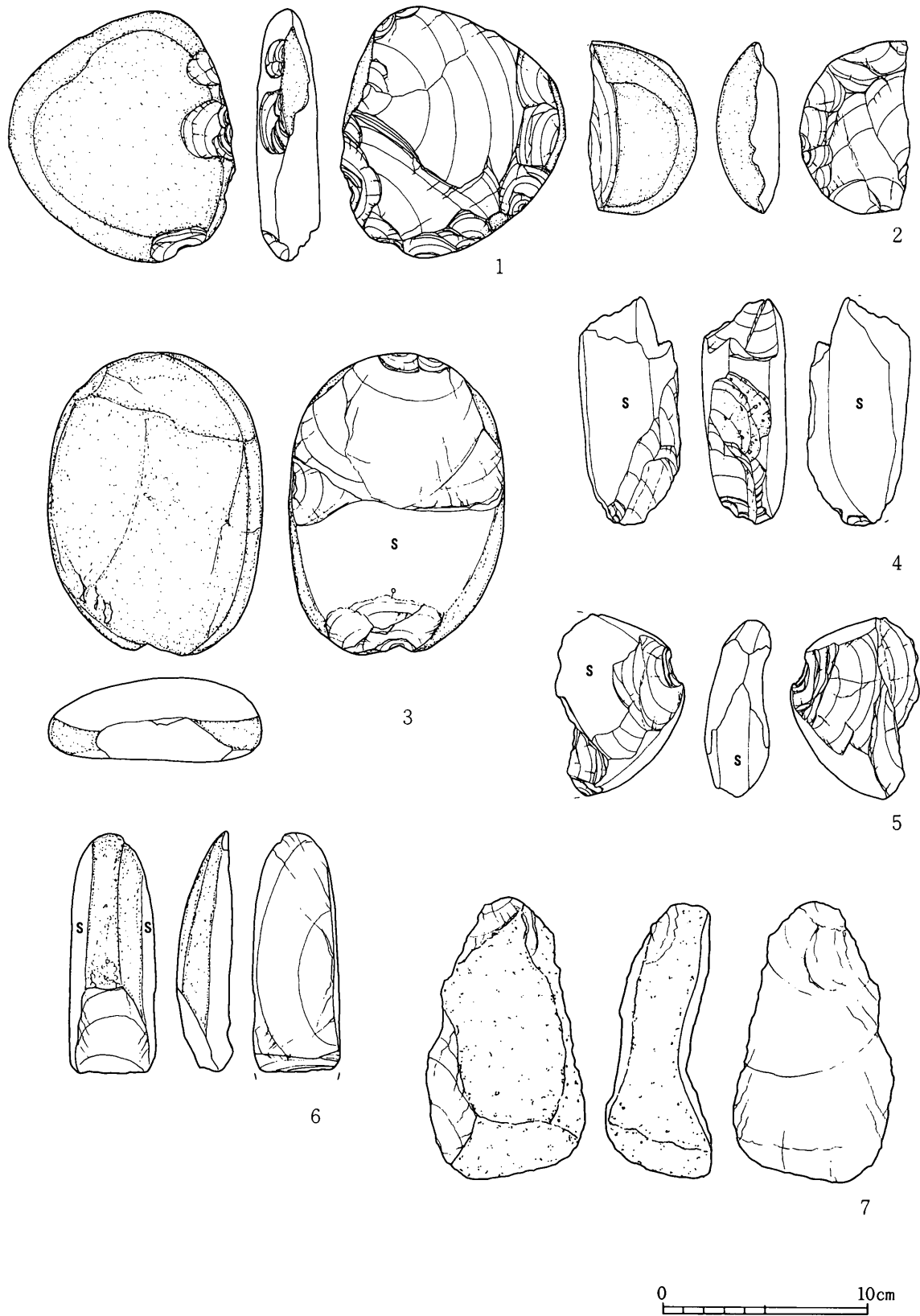
第56図 縄文時代早期前半の大形石器（2）



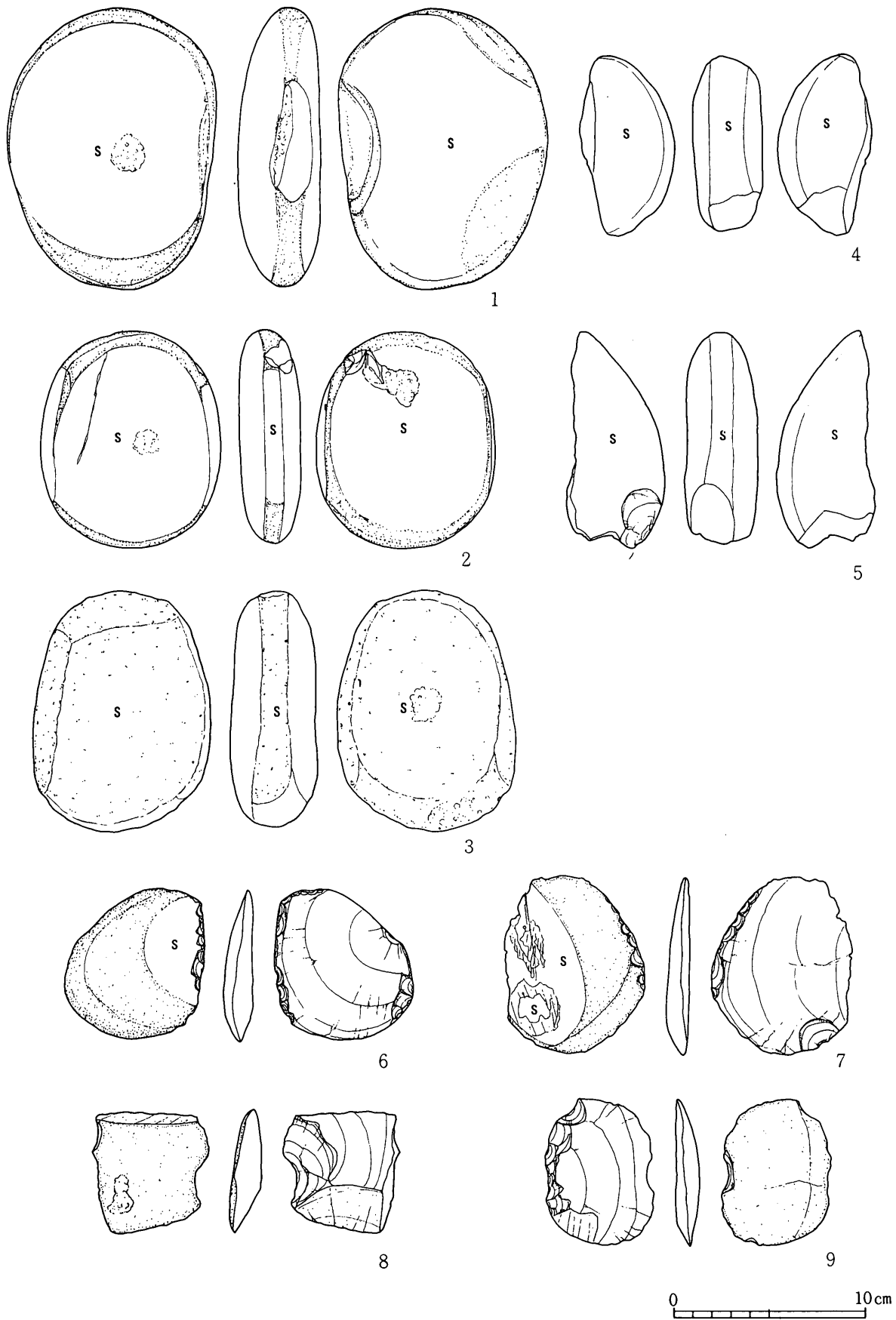
第57図 縄文時代早期前半の大形石器（3）



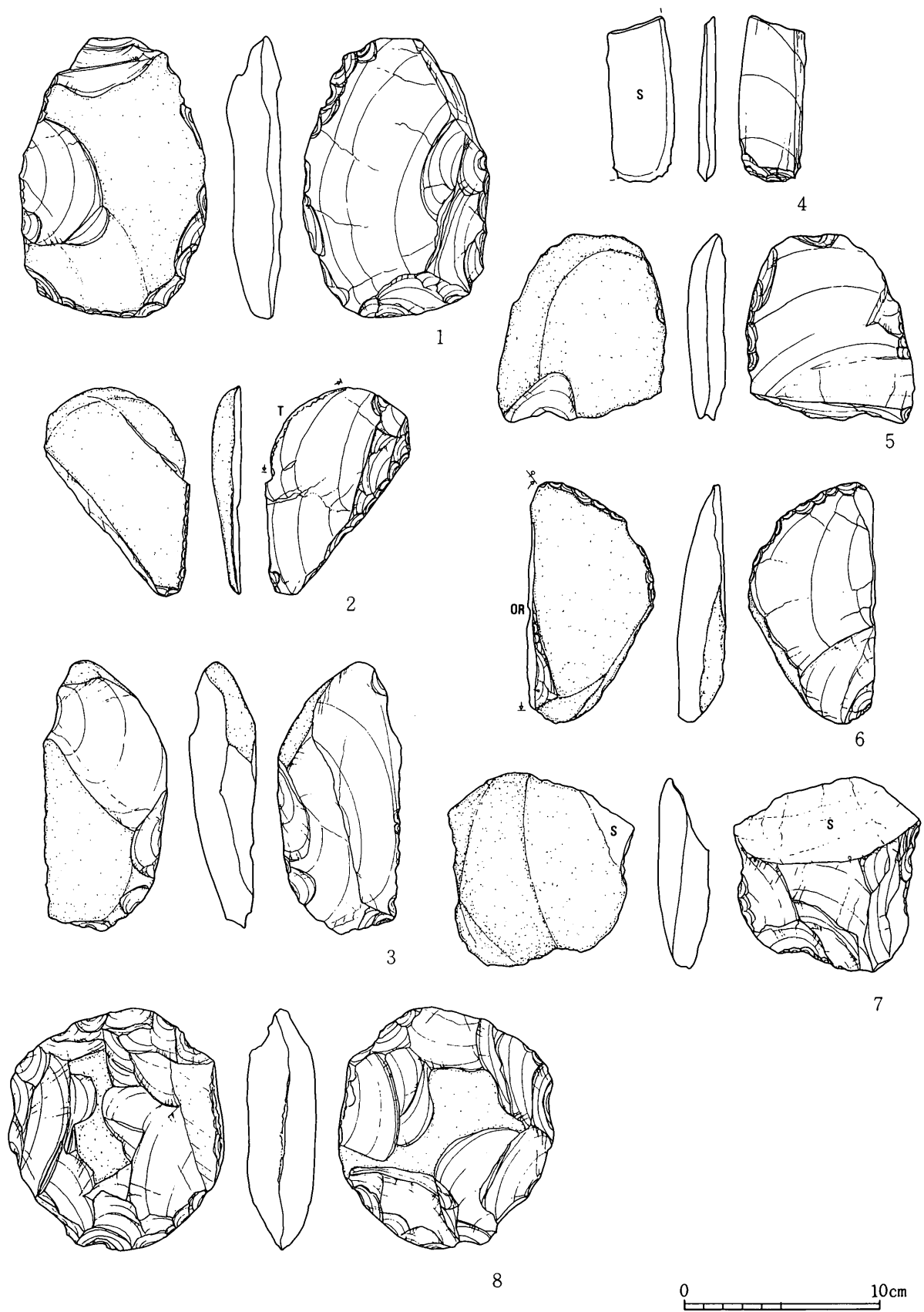
第58図 縄文時代早期前半の大形石器（4）



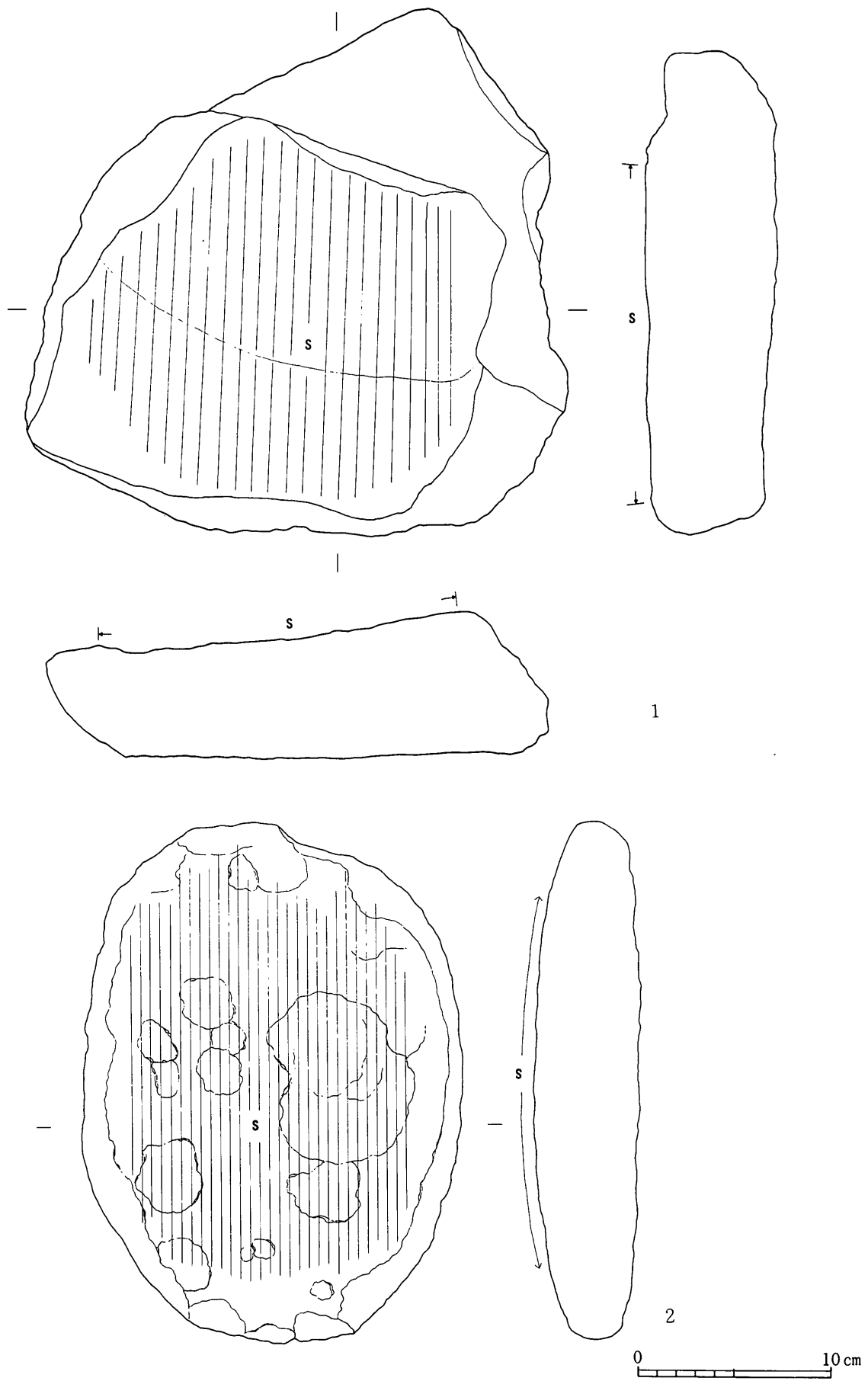
第59図 縄文時代早期前半の大形石器（5）



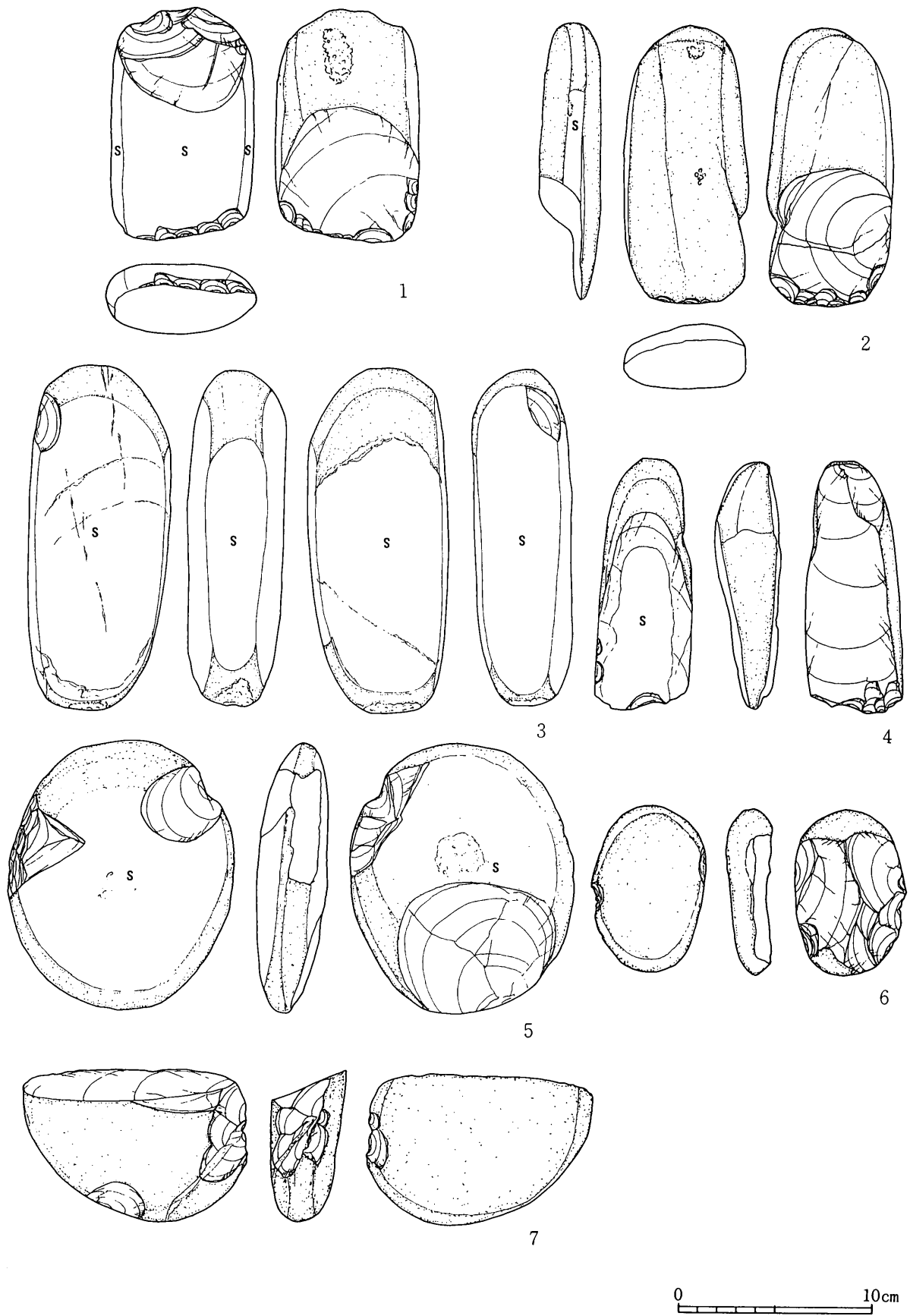
第60図 縄文時代早期前半の大形石器（6）



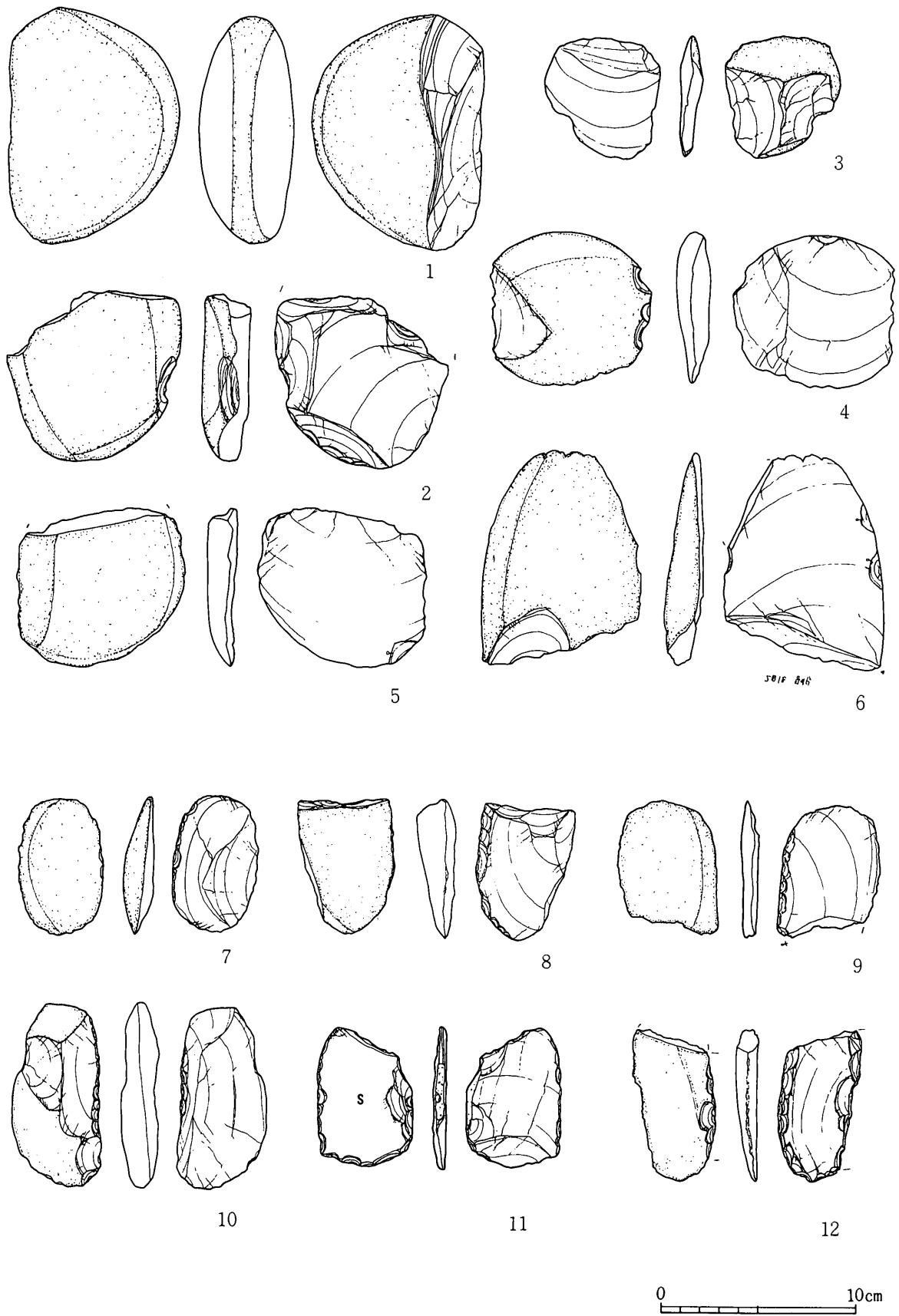
第61図 縄文時代早期前半の大形石器（7）



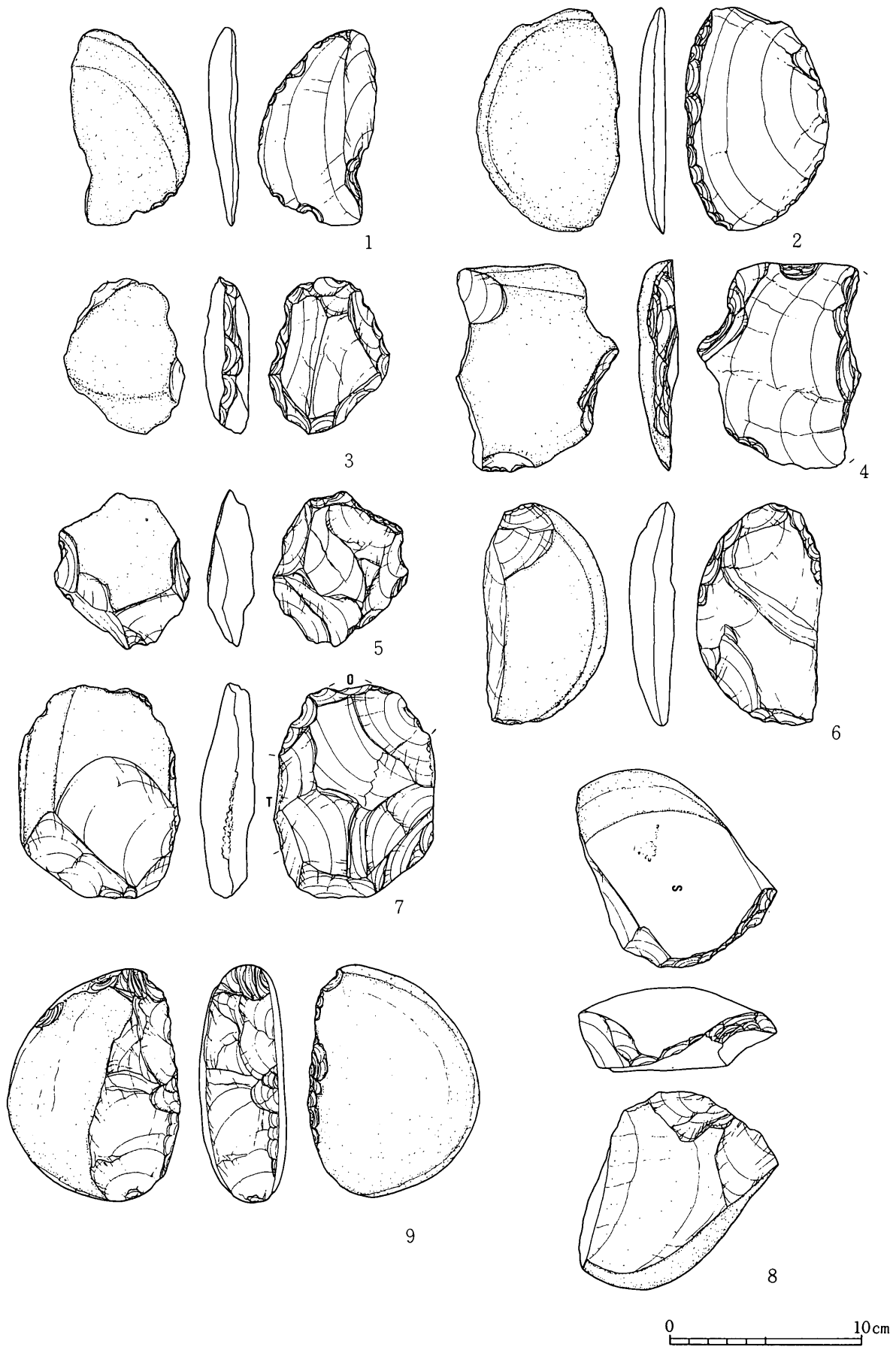
第62図 縄文時代早期前半の大形石器 (8)



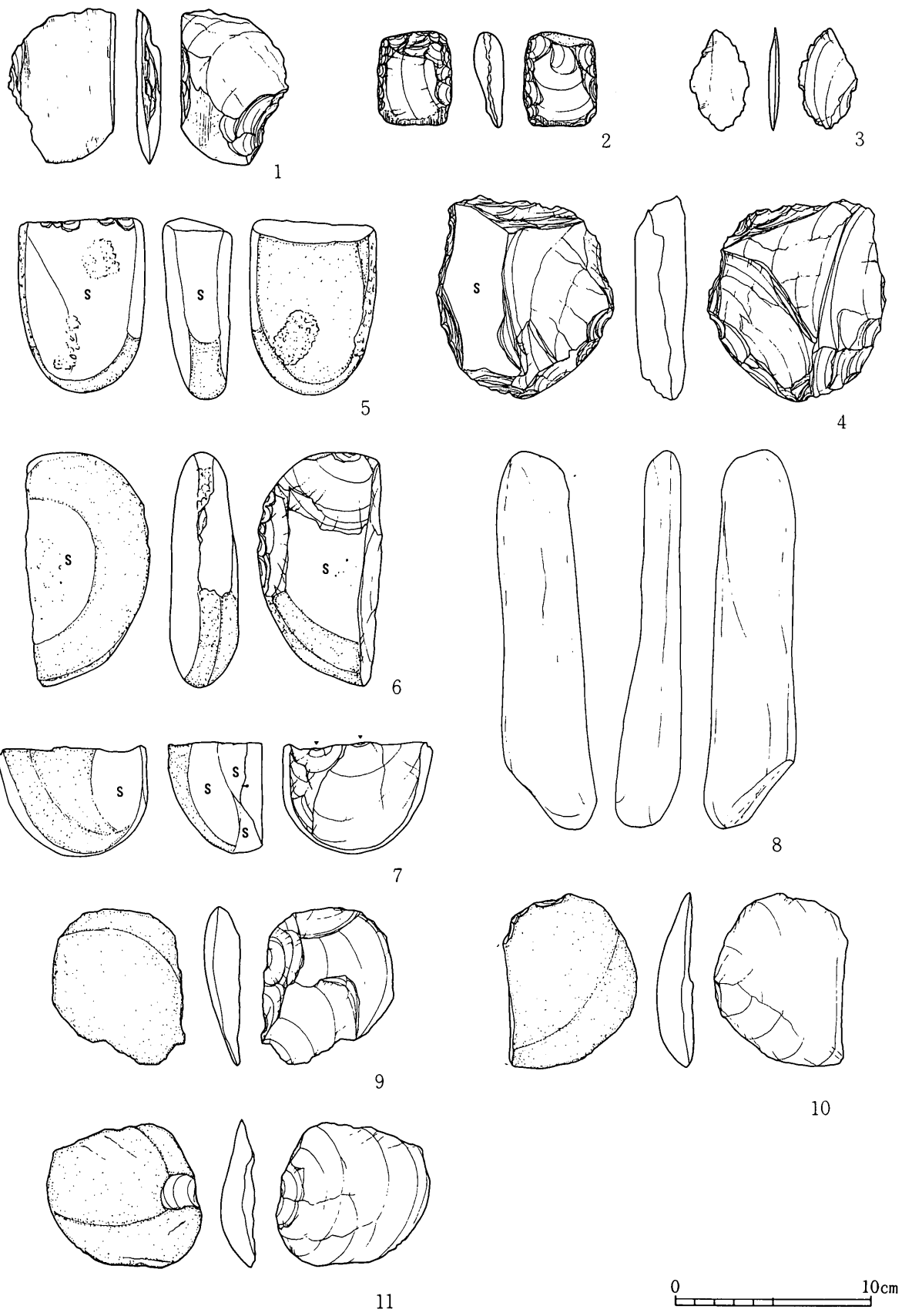
第63図 縄文時代早期前半の大形石器（9）



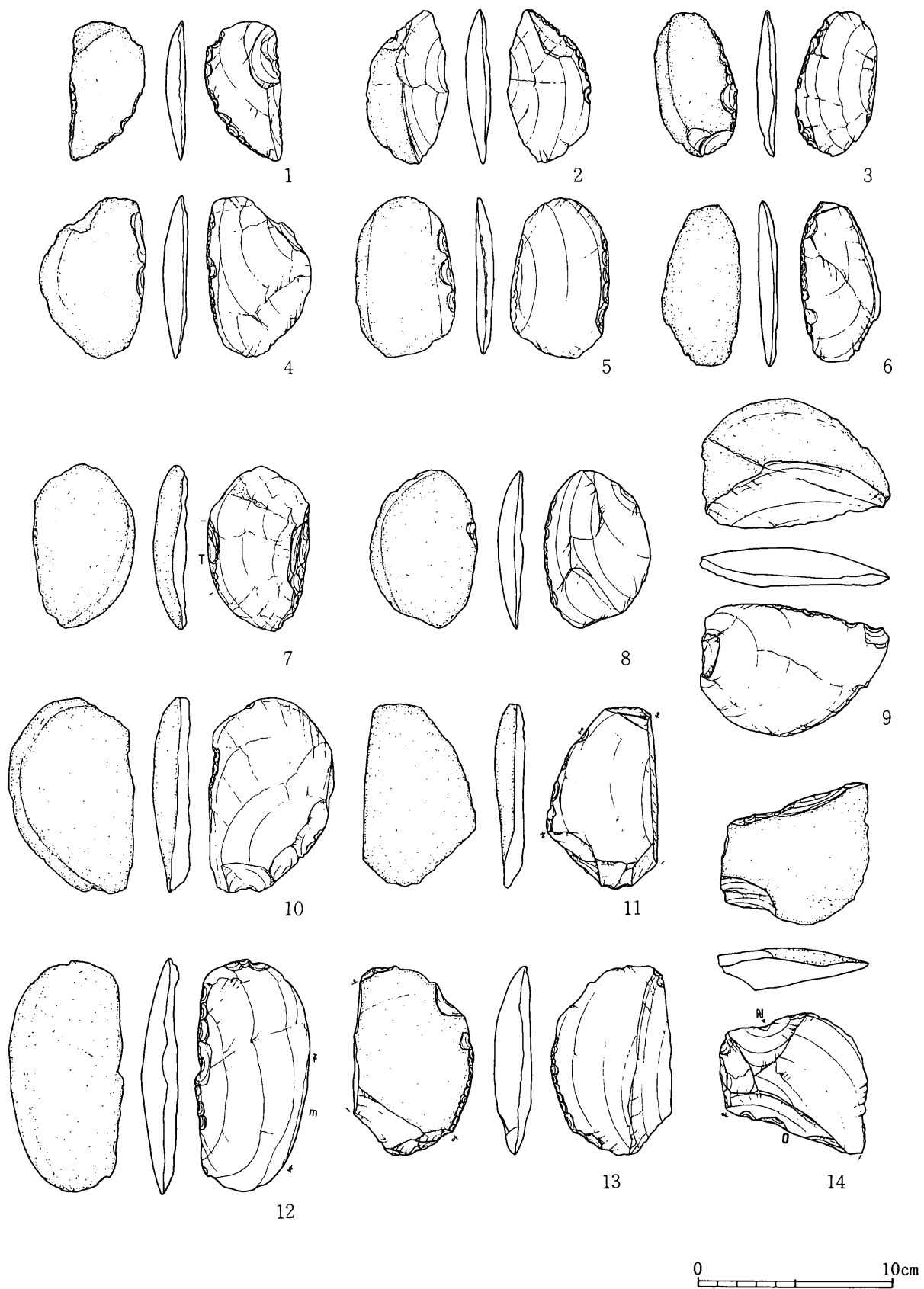
第64図 縄文時代早期前半の大形石器 (10)



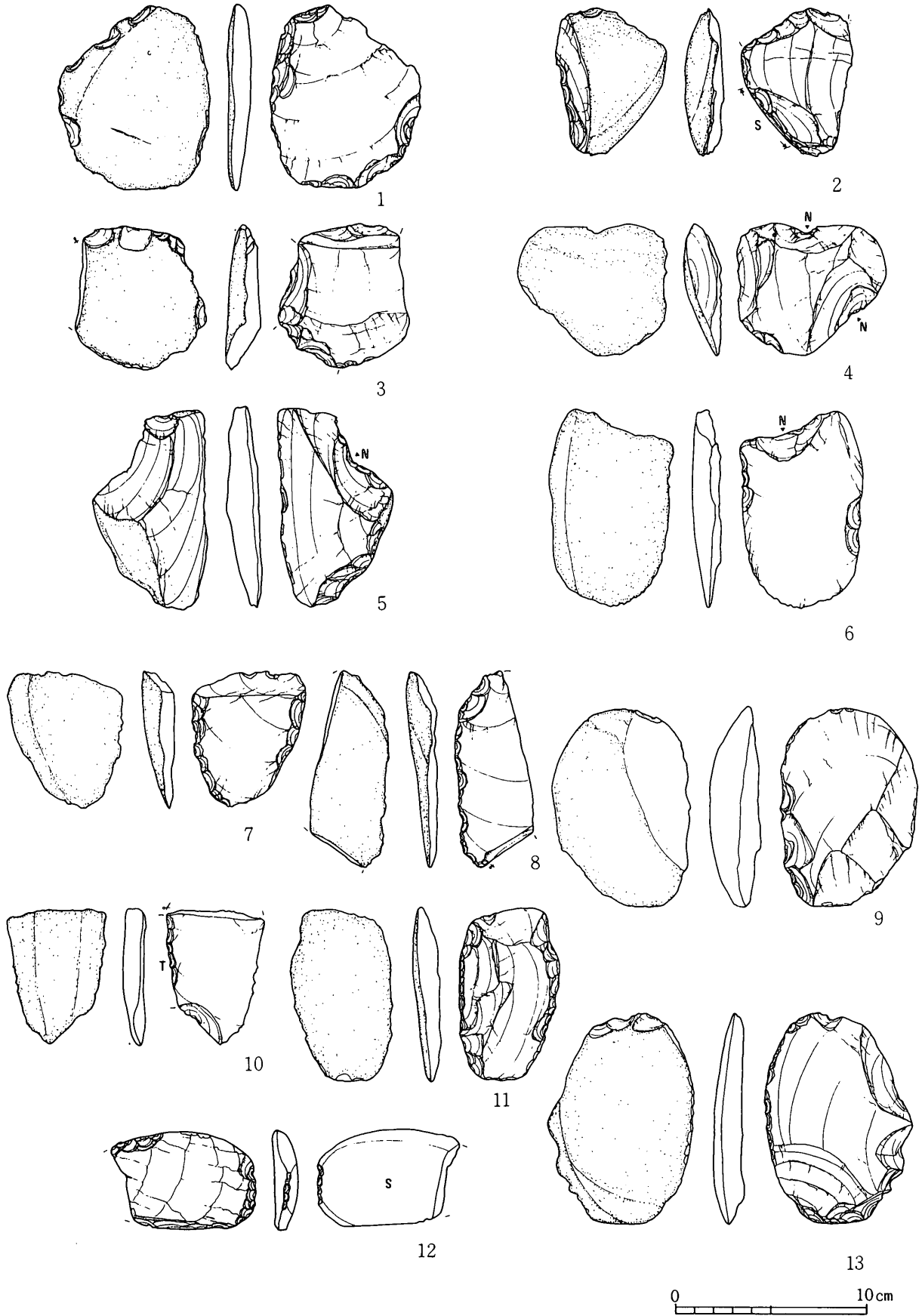
第65図 縄文時代早期前半の大形石器 (11)



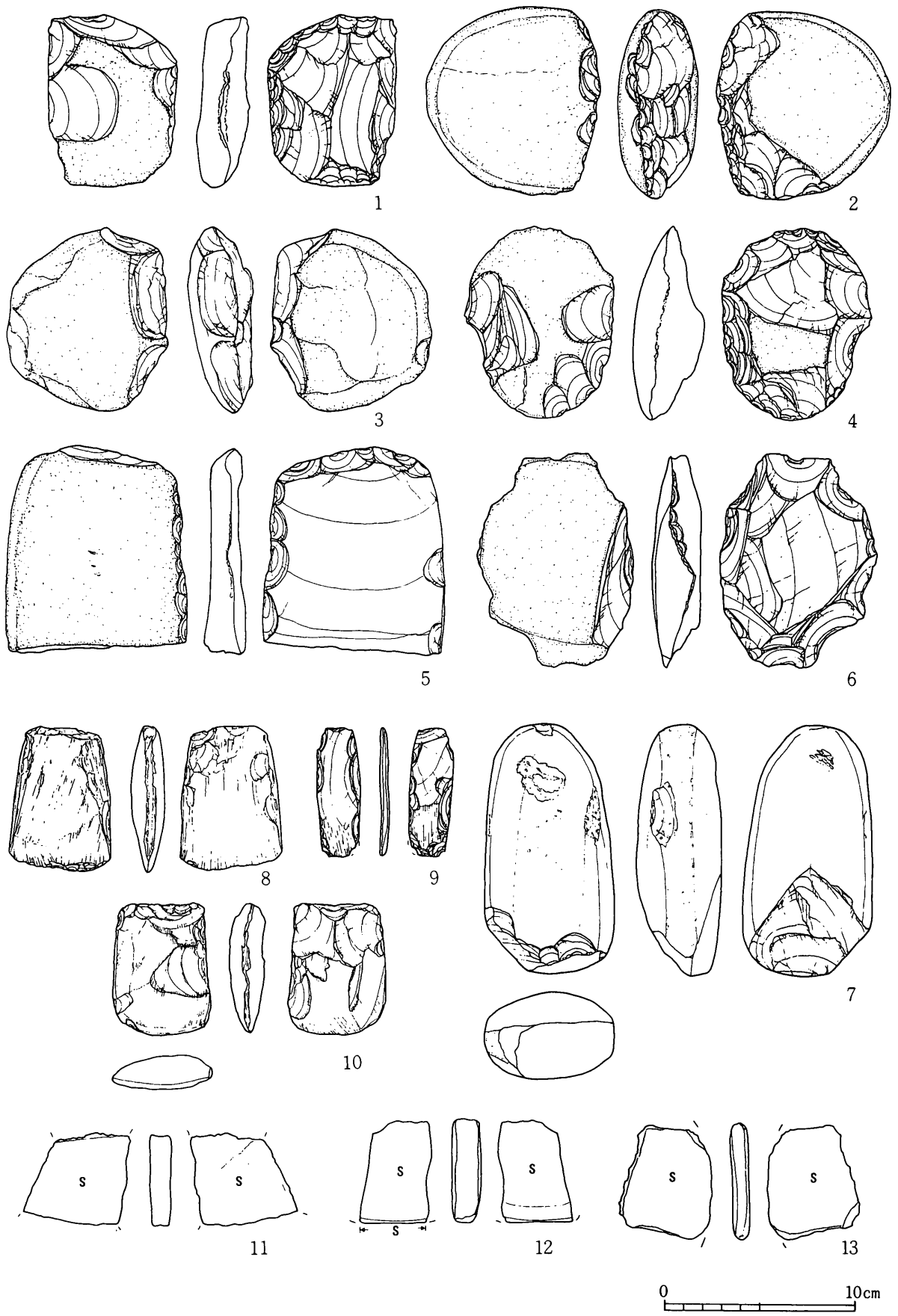
第66図 縄文時代早期前半の大形石器 (12)



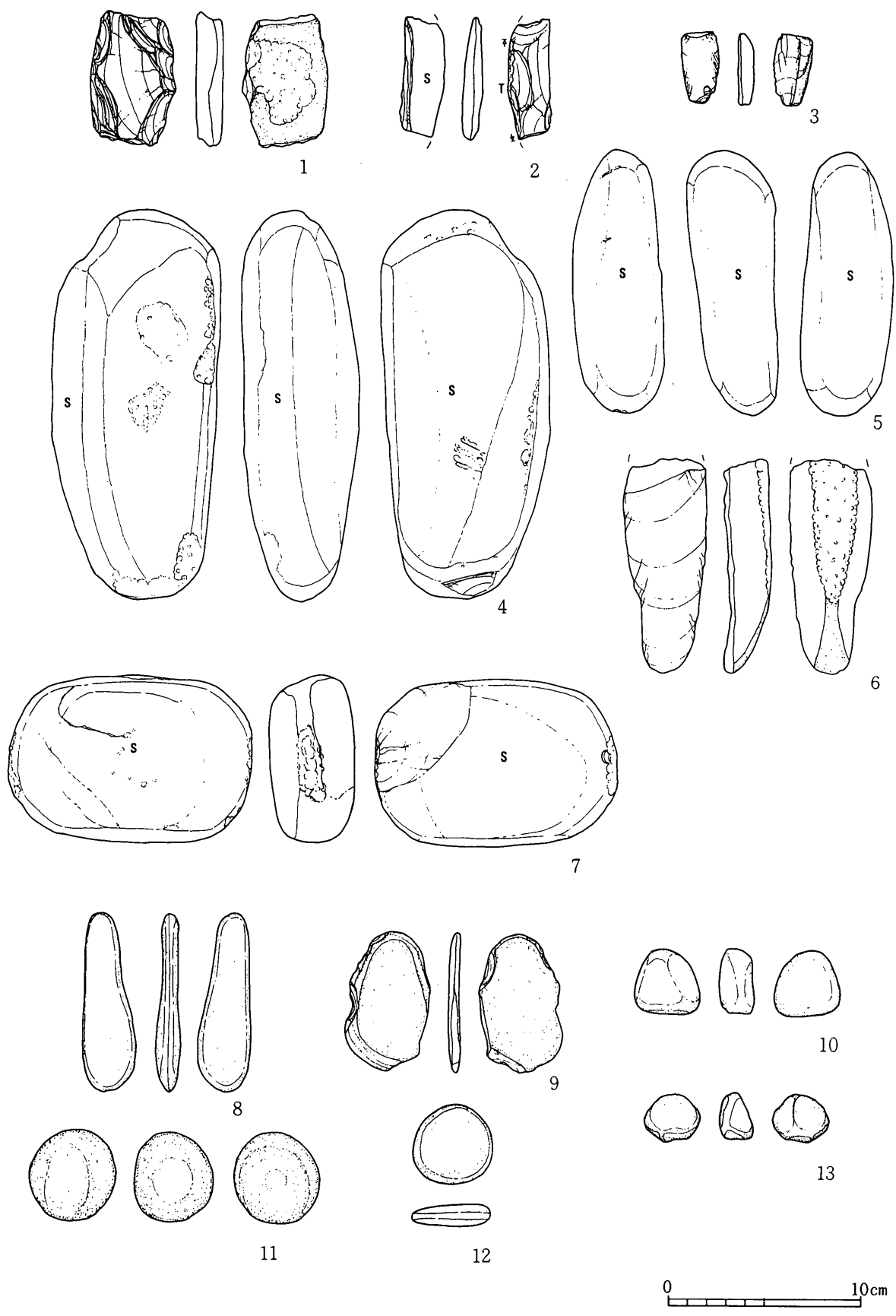
第67図 縄文時代早期前半の大形石器 (13)



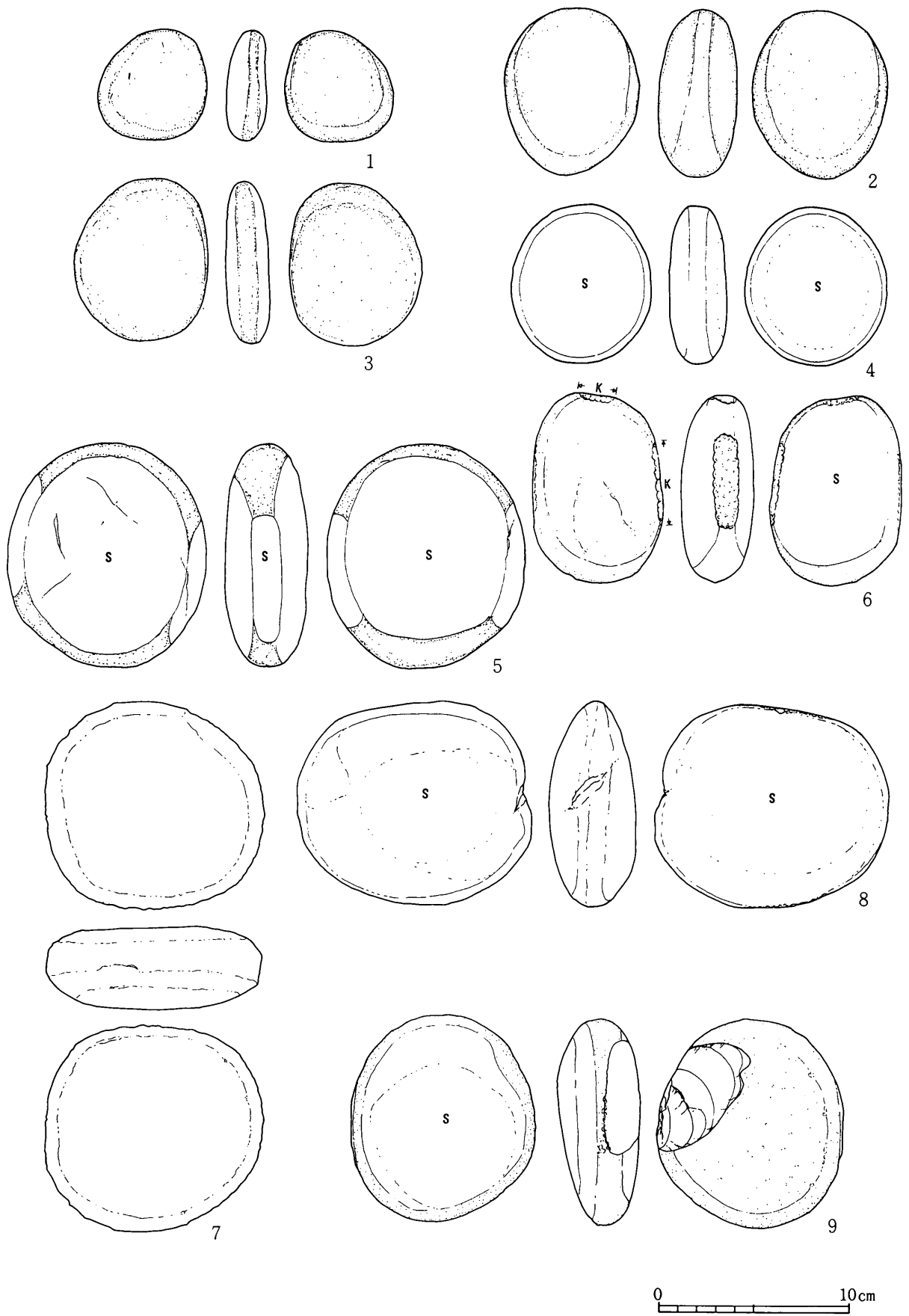
第68図 縄文時代早期前半の大形石器 (14)



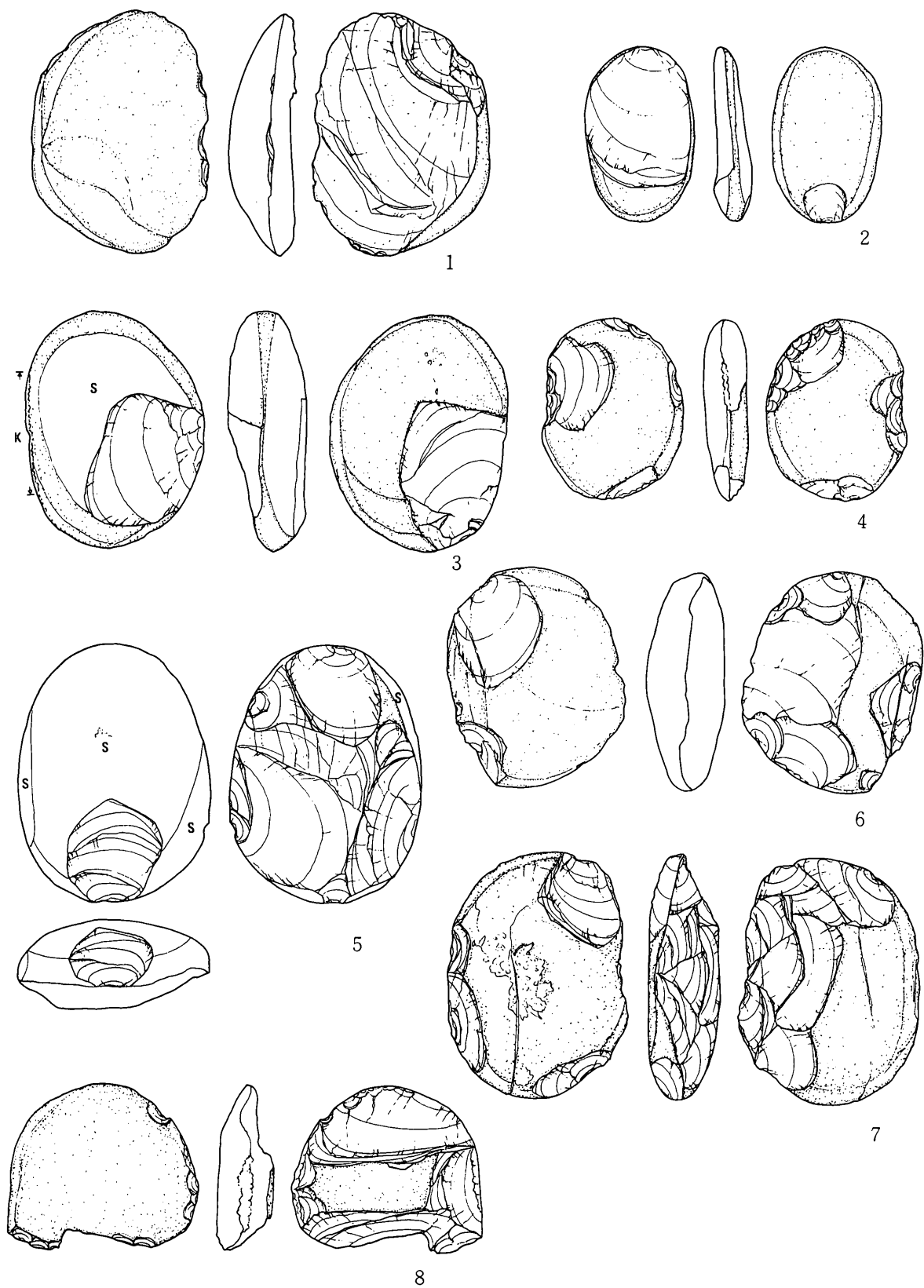
第69図 縄文時代早期前半の大形石器 (15)



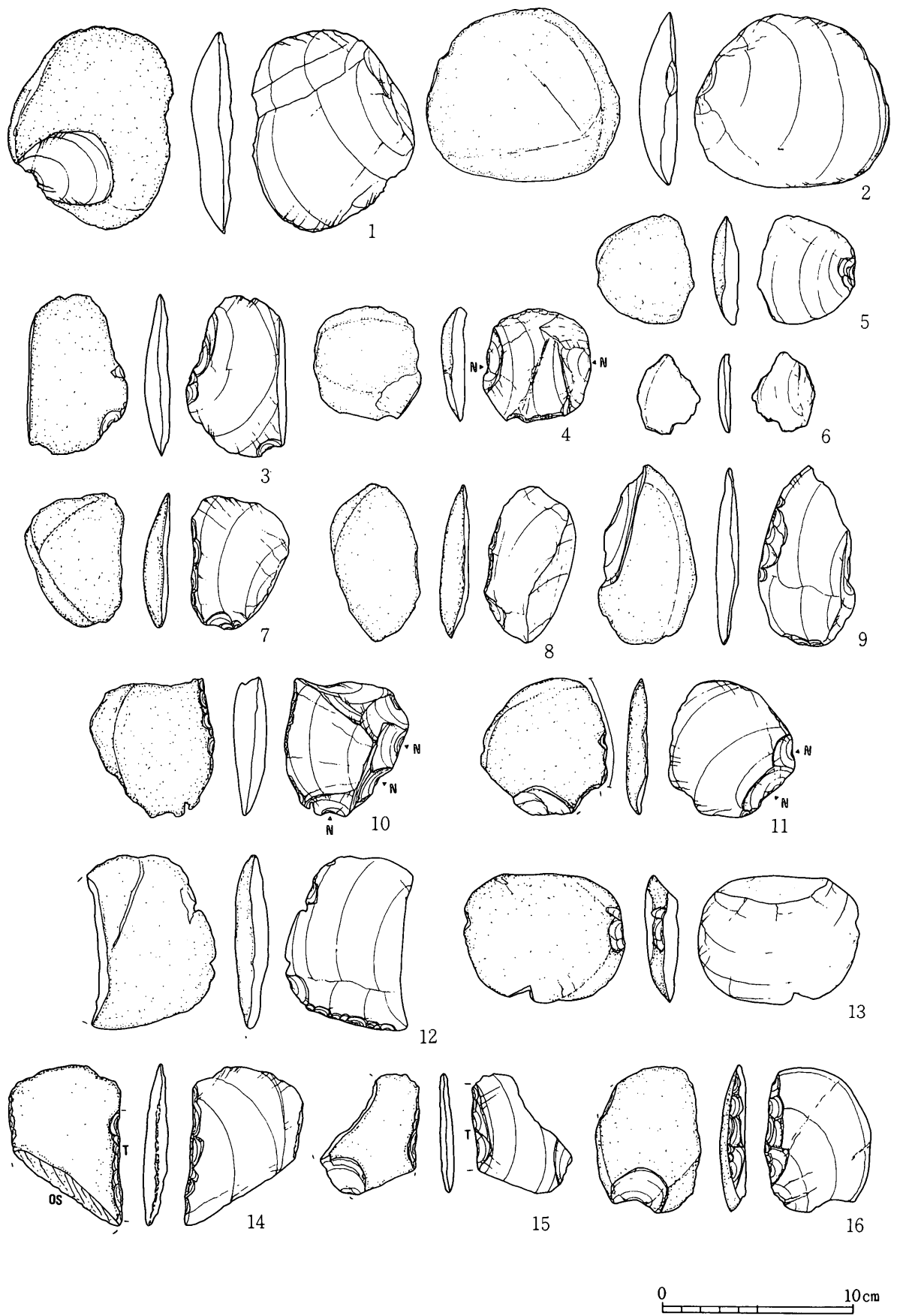
第70図 縄文時代早期前半の大形石器 (16)



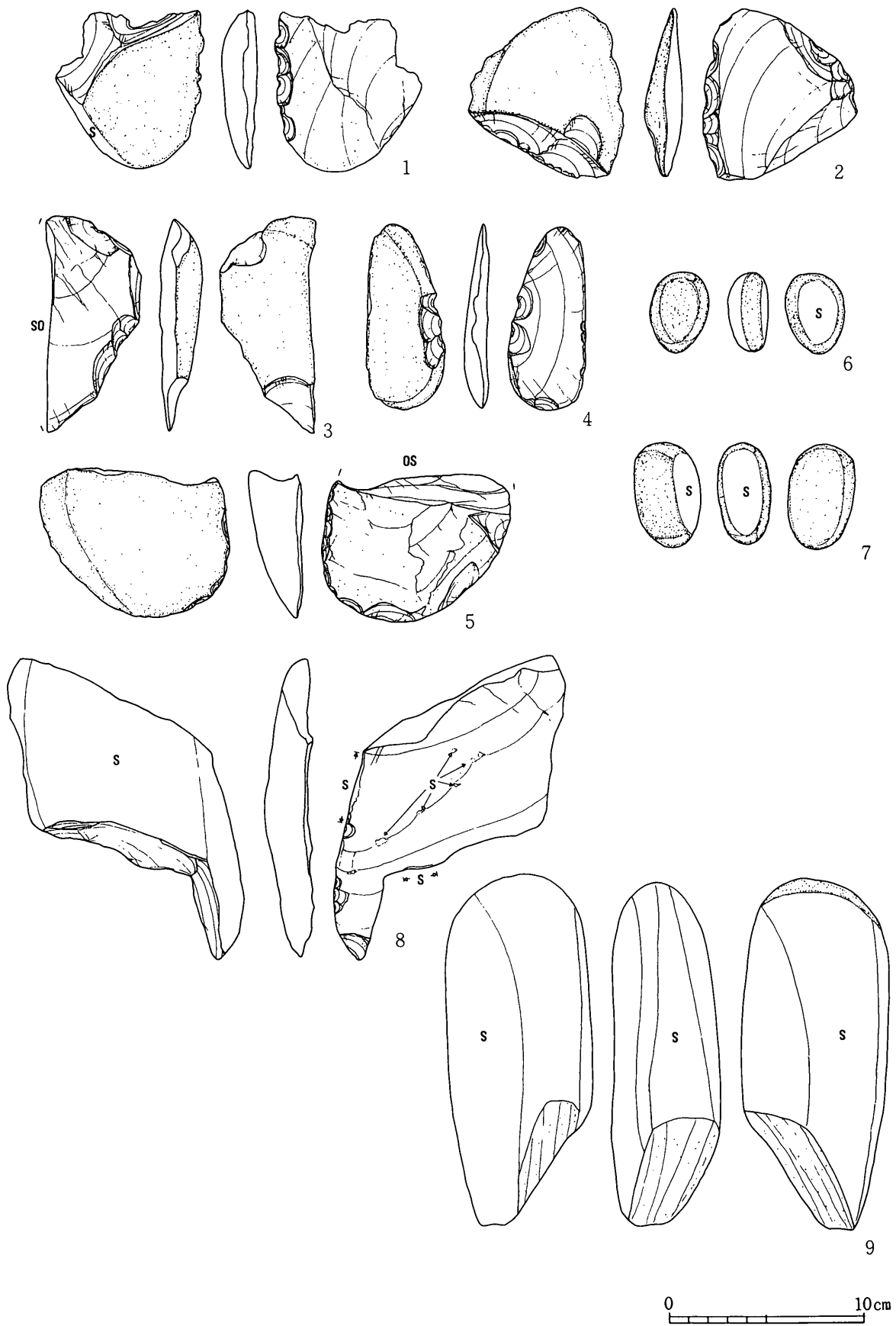
第71図 縄文時代早期前半の大形石器 (17)



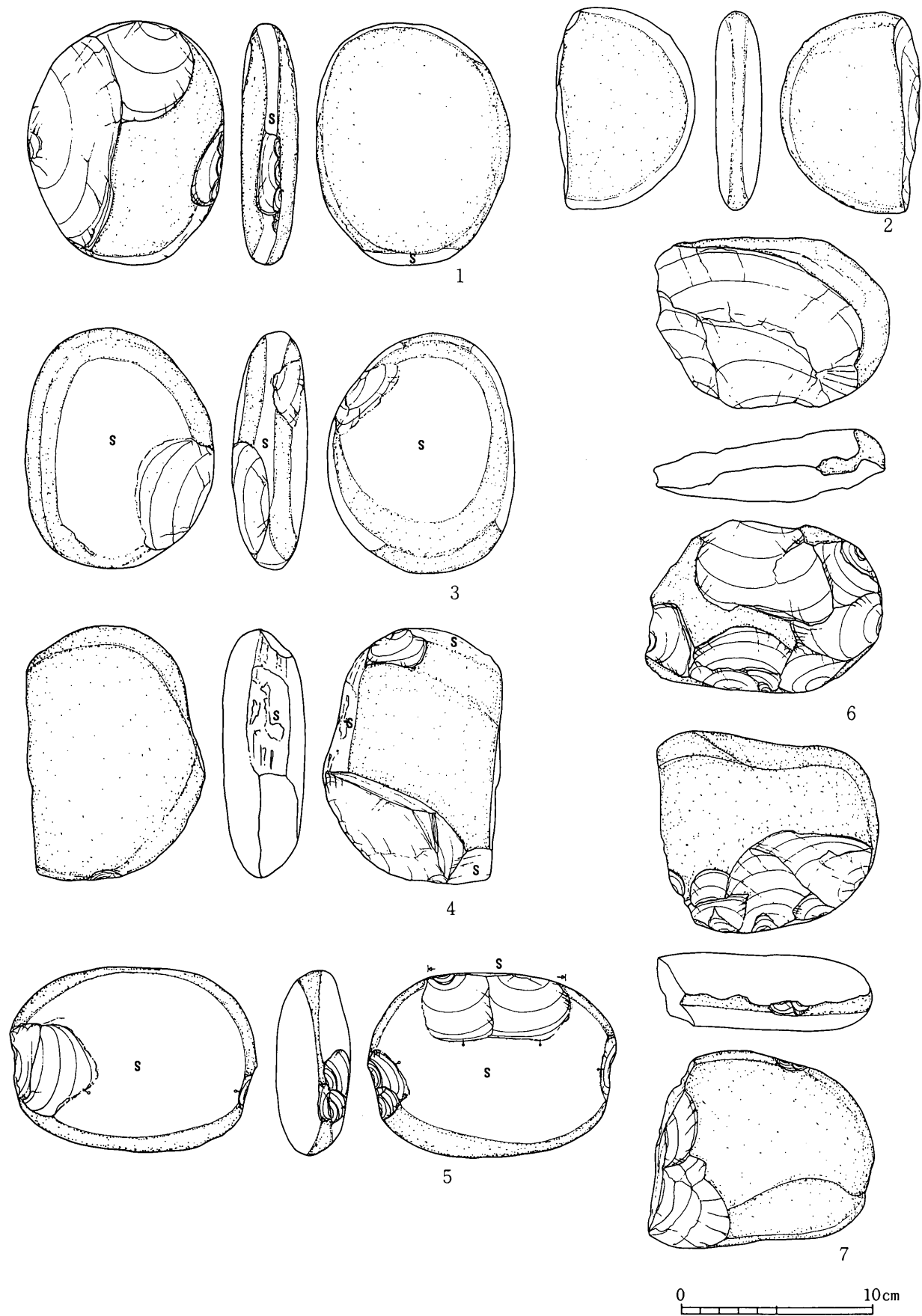
第72図 縄文時代早期前半の大形石器 (18)



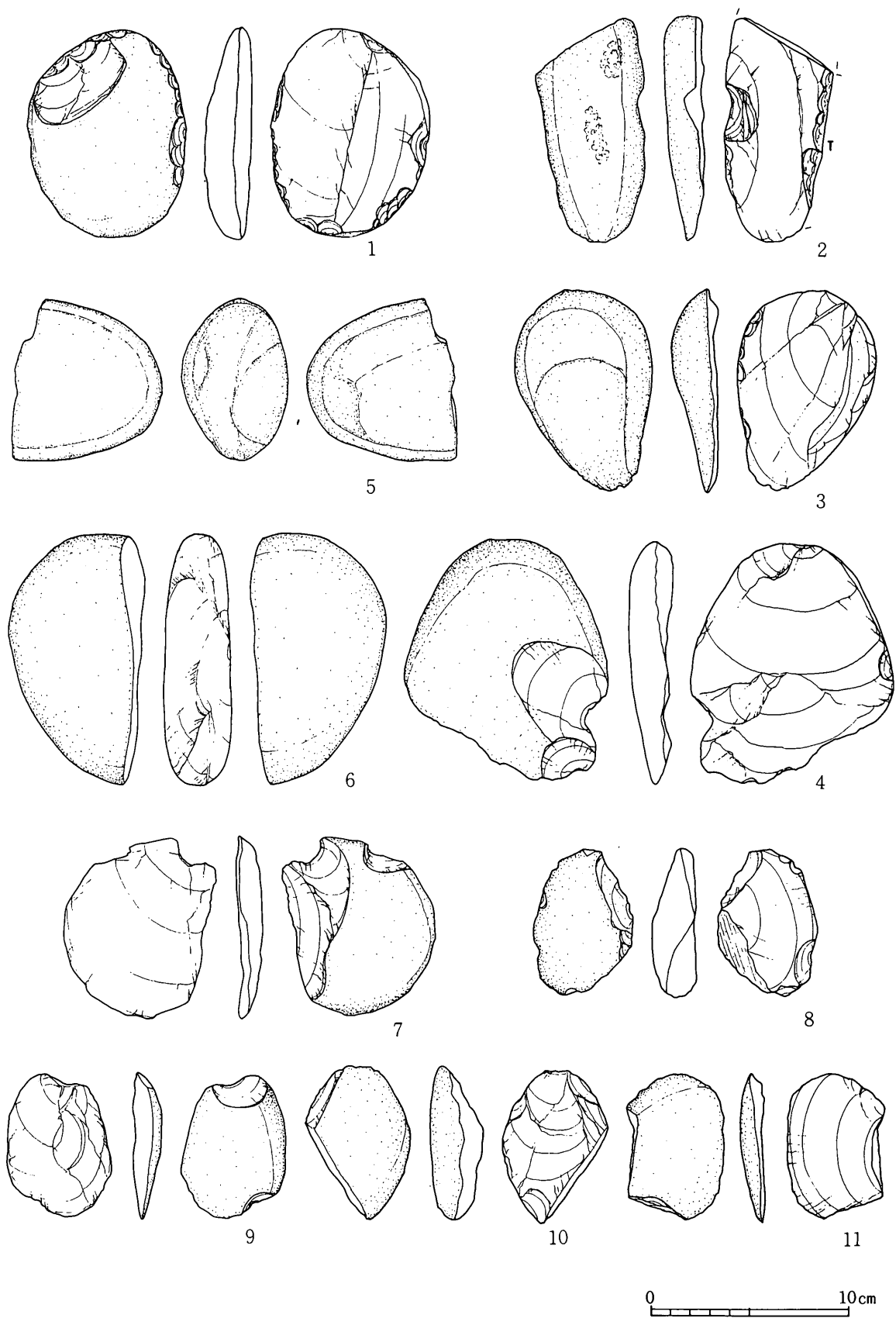
第73図 縄文時代早期前半の大形石器 (19)



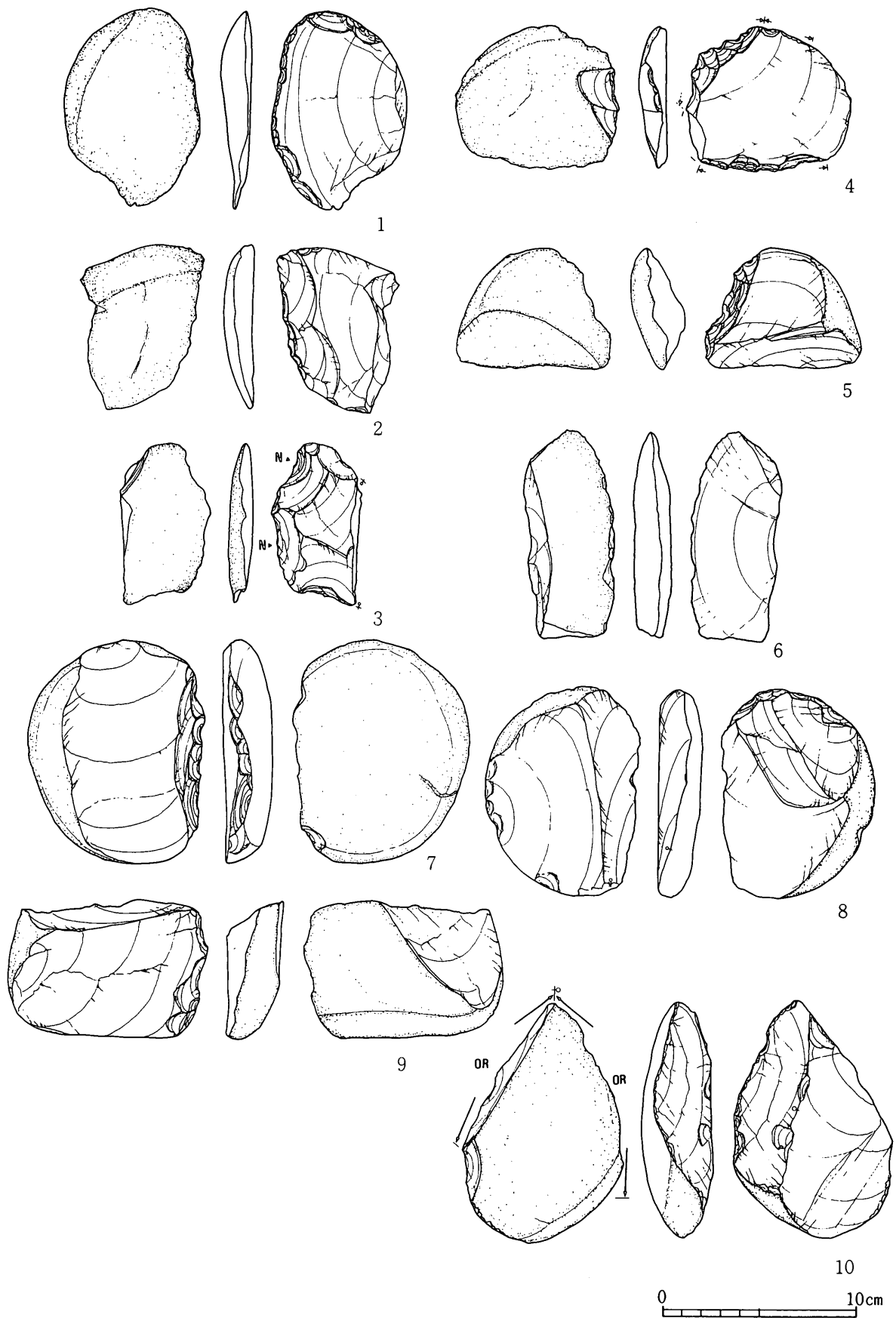
第74図 縄文時代早期前半の大形石器 (20)



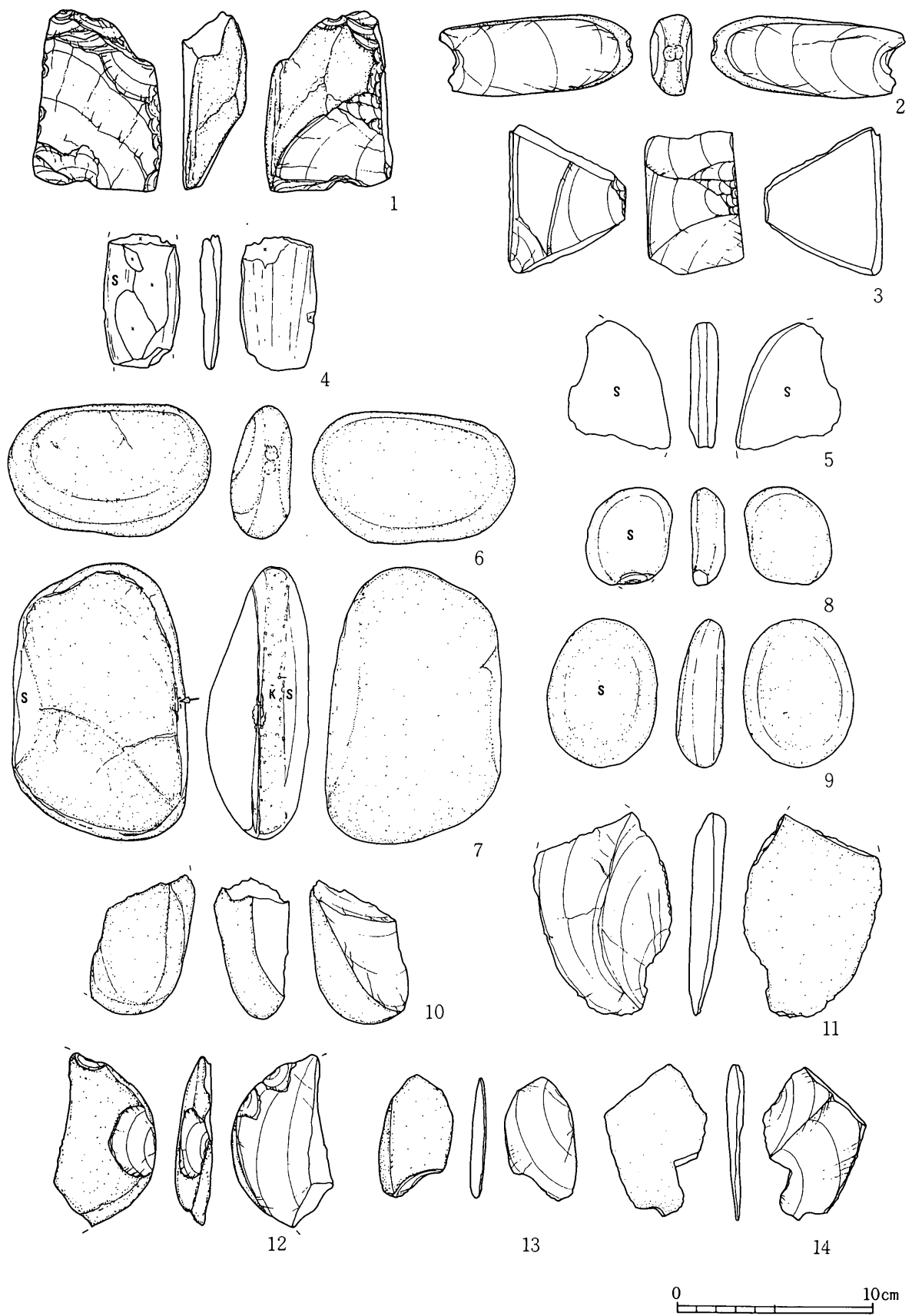
第75図 縄文時代早期前半の大形石器 (21)



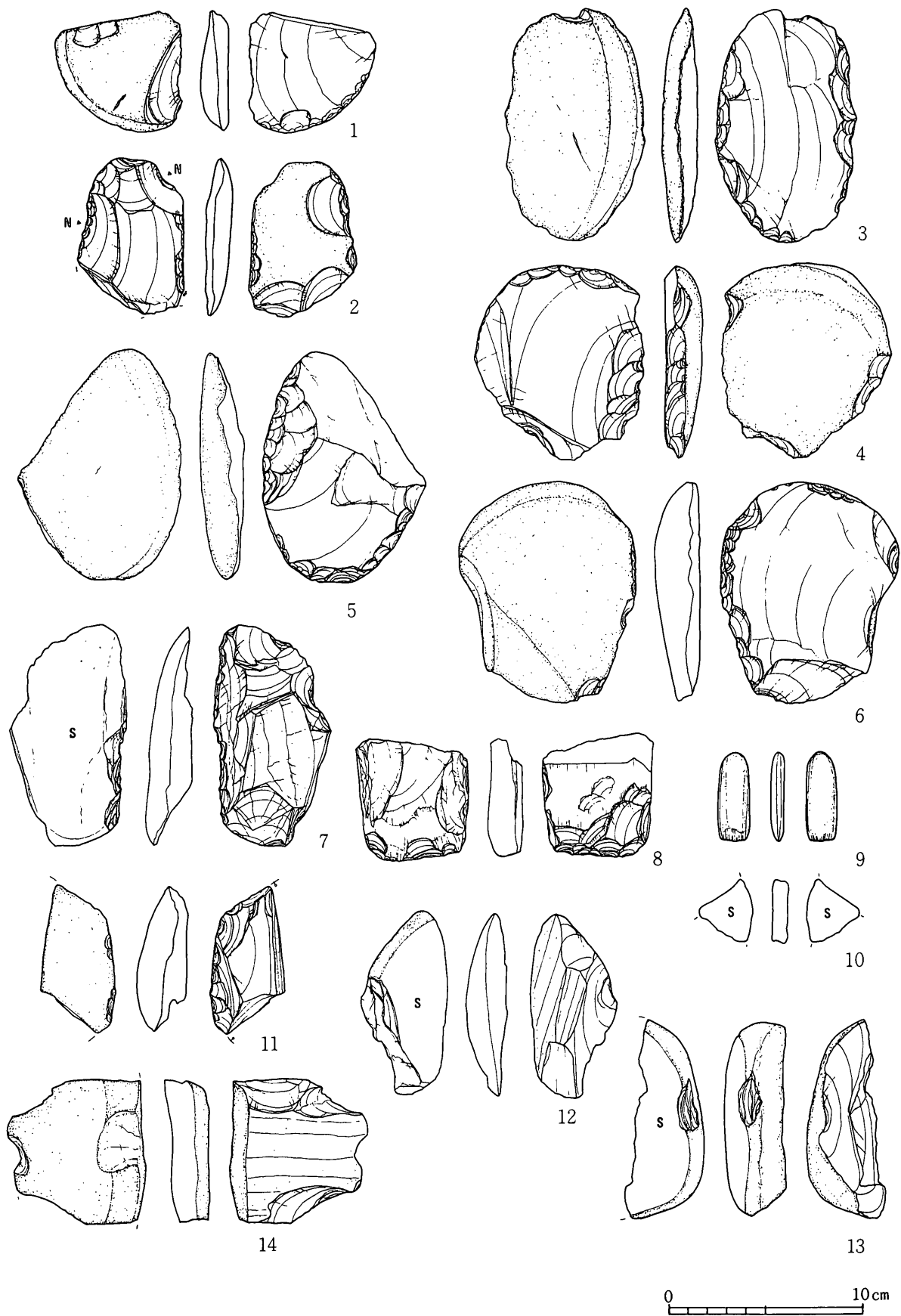
第76図 縄文時代早期前半の大形石器 (22)



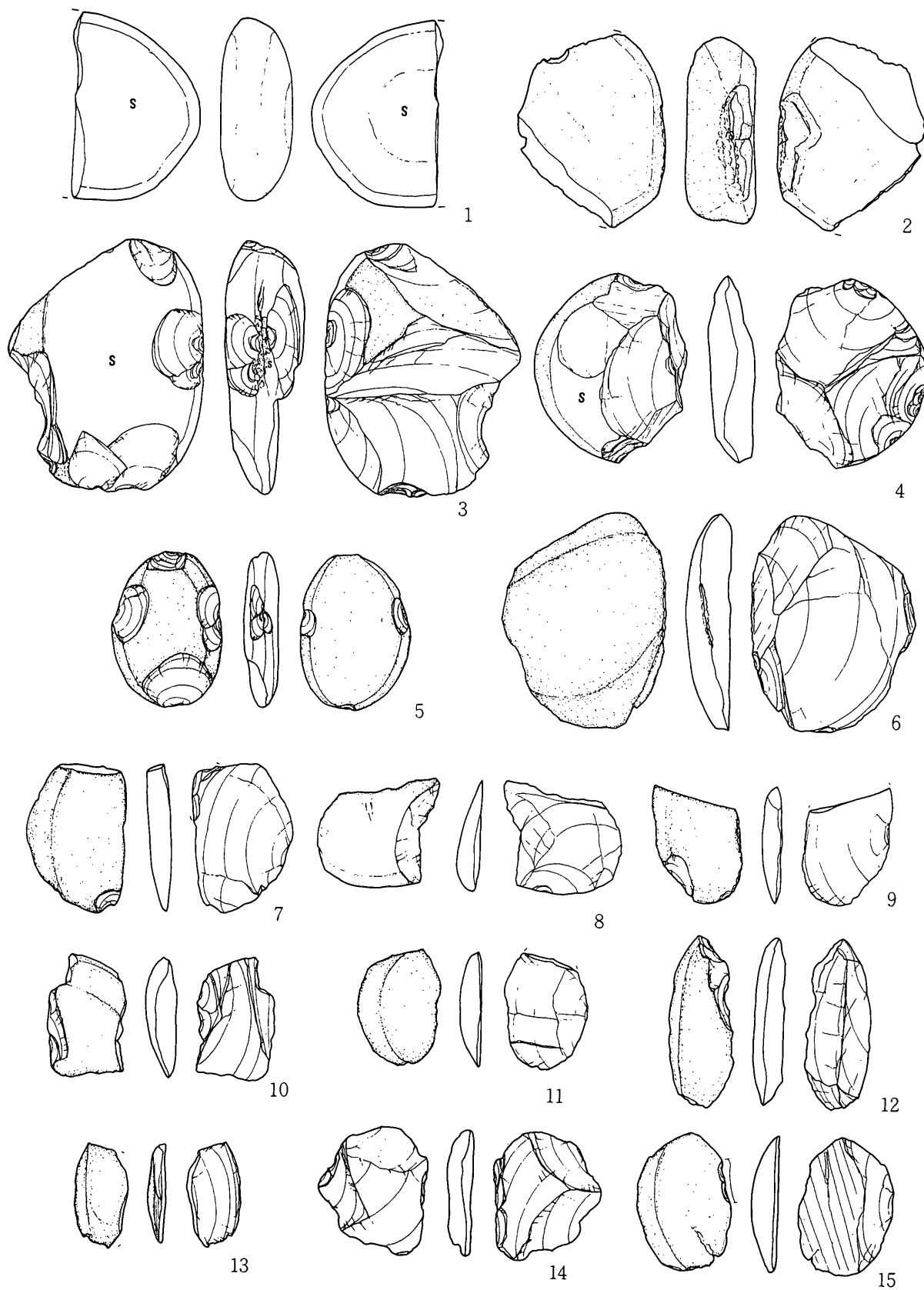
第77図 縄文時代早期前半の大形石器 (23)



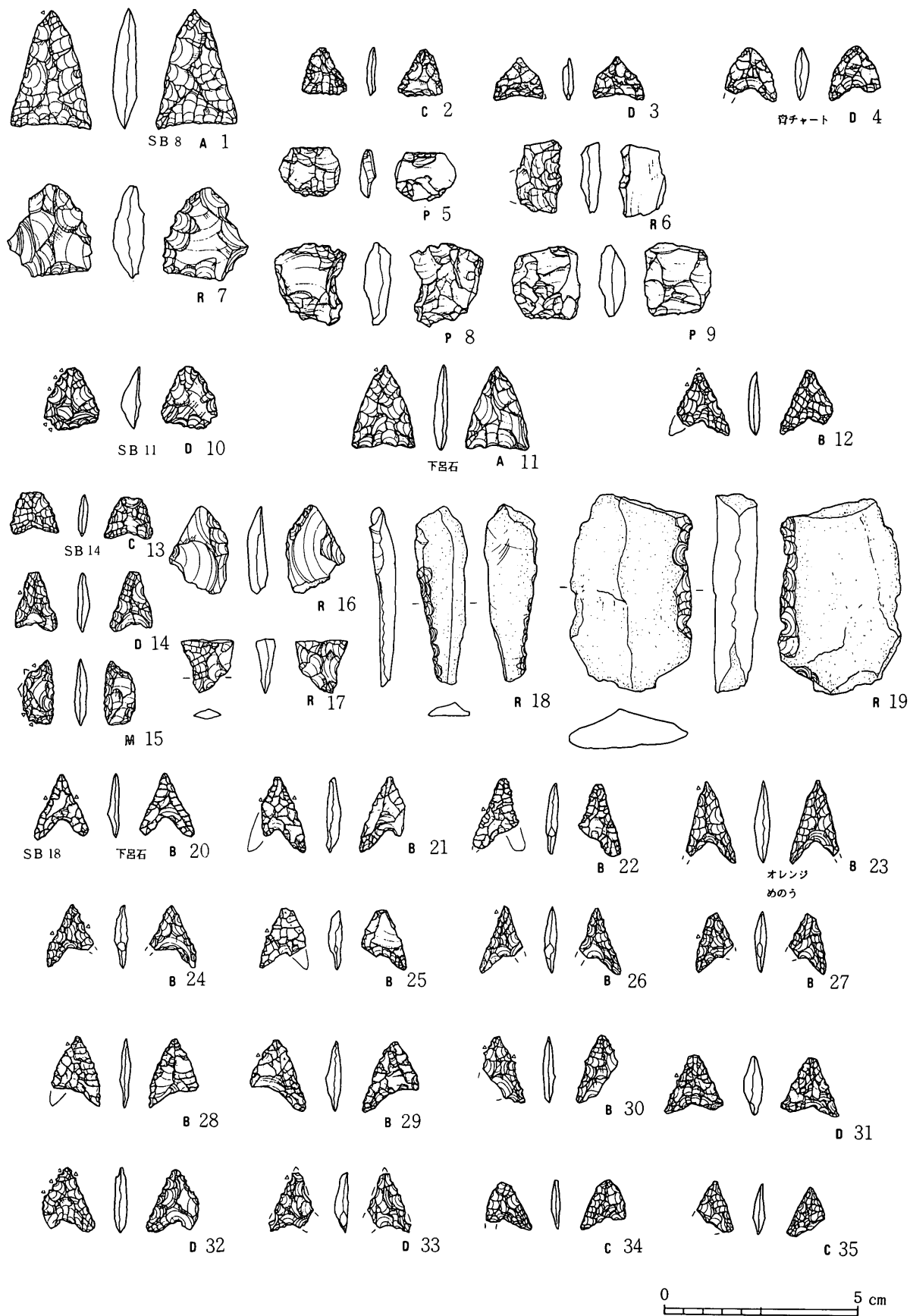
第78図 縄文時代早期前半の大形石器 (24)



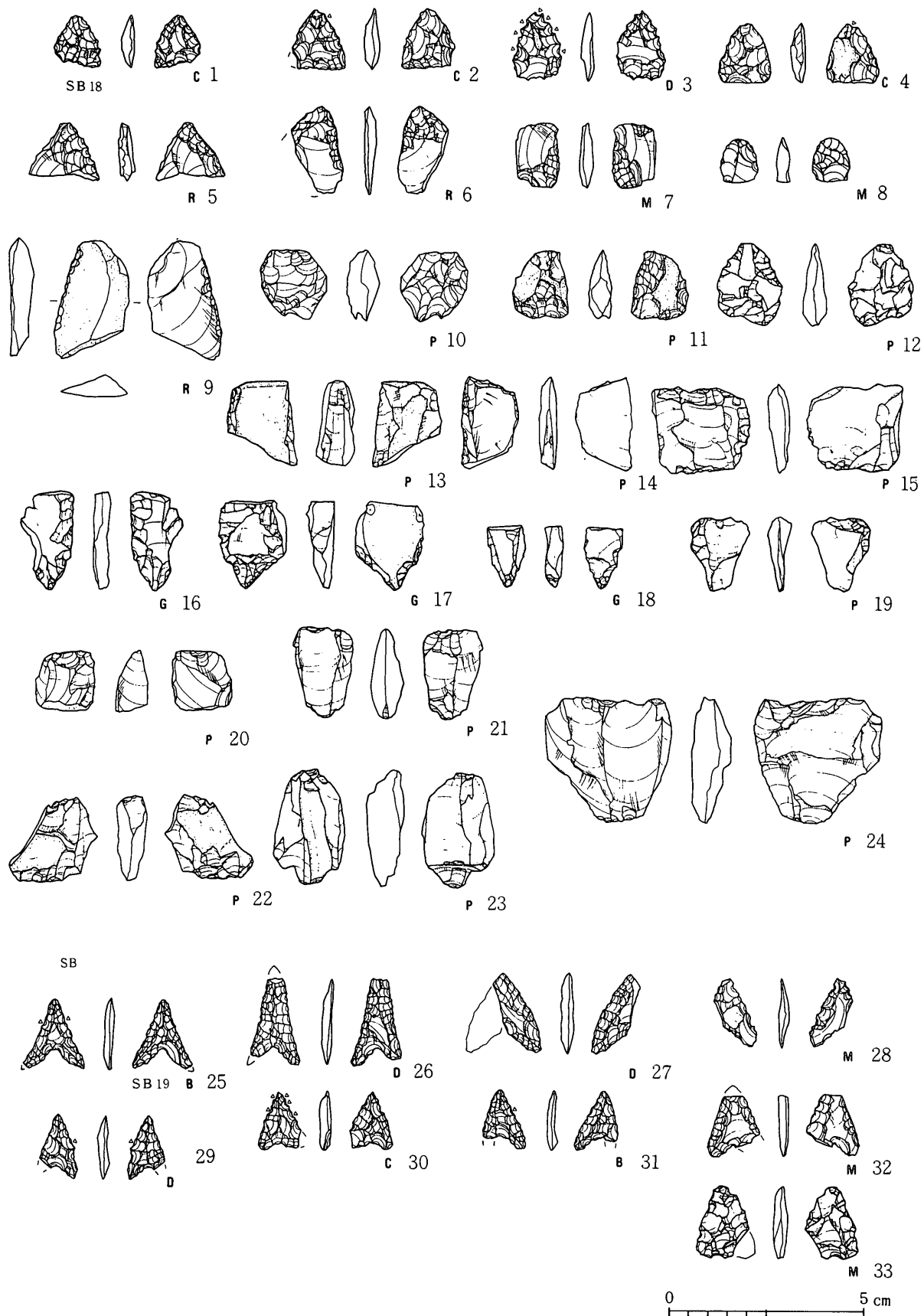
第79図 縄文時代早期前半の大形石器 (25)



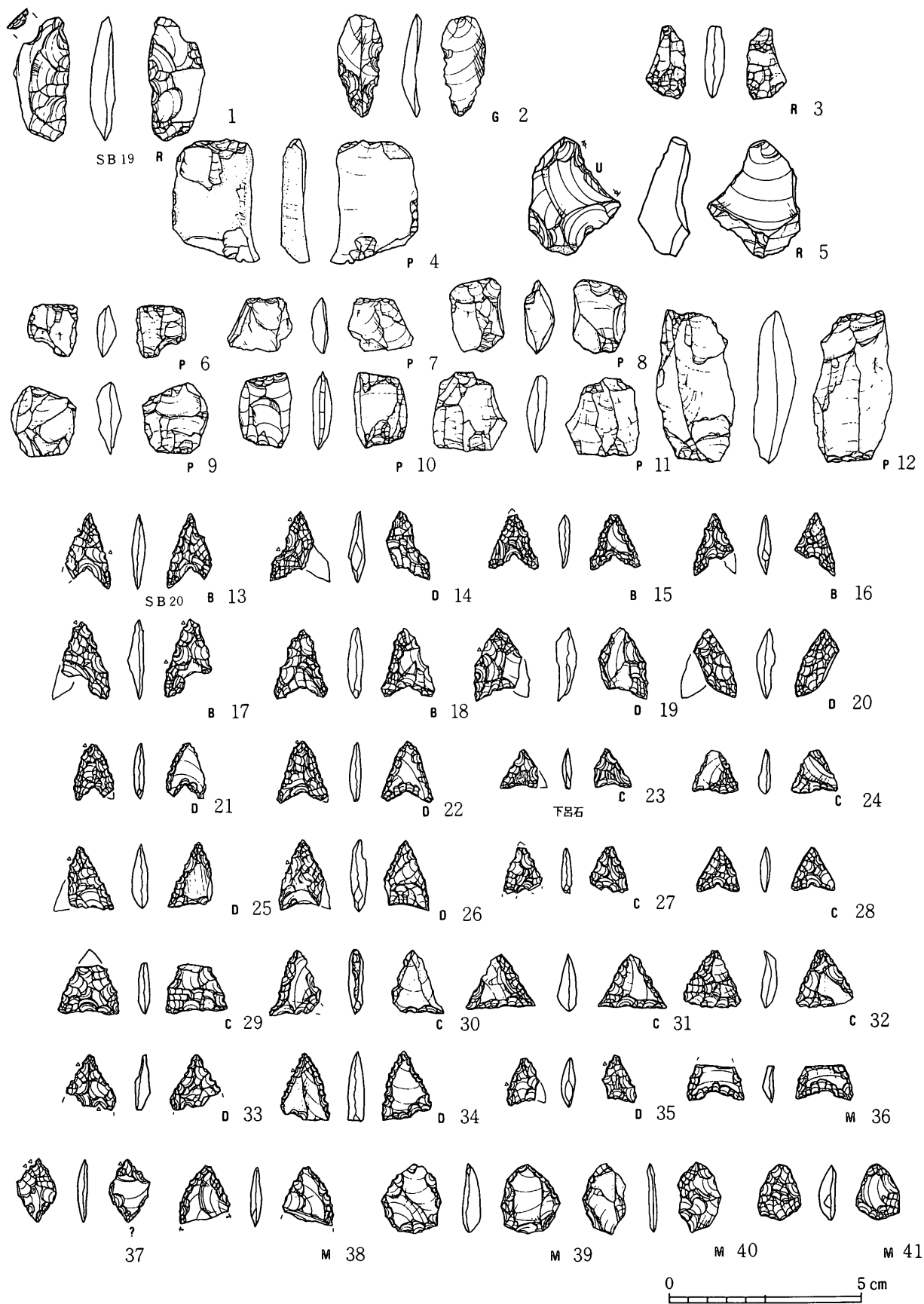
第80図 縄文時代早期前半の大形石器 (26)



第81図 縄文時代早期前半の小形剥片石器 (1)



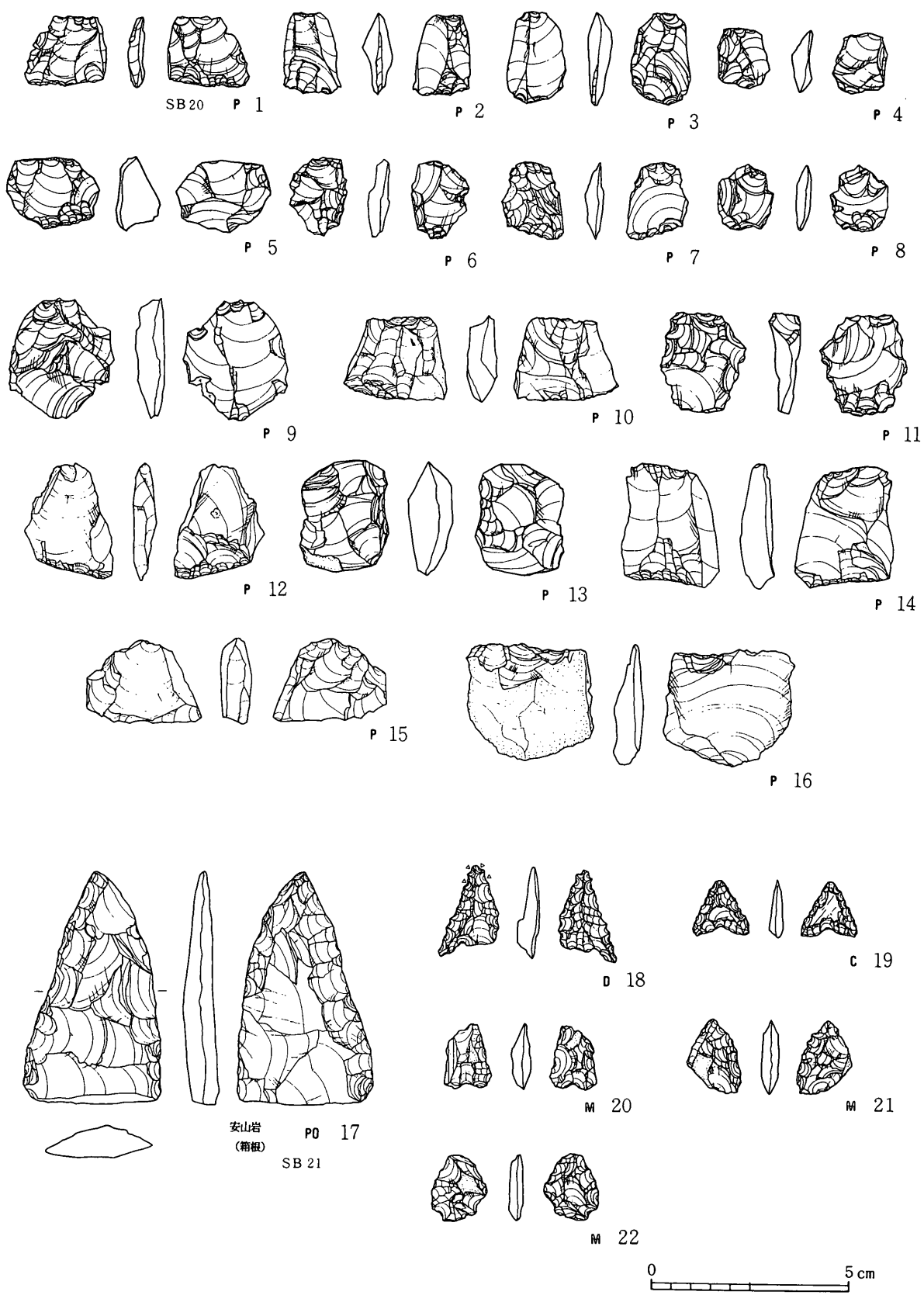
第82図 縄文時代早期前半の小形剥片石器（2）



第83図 縄文時代早期前半の小形剥片石器 (3)



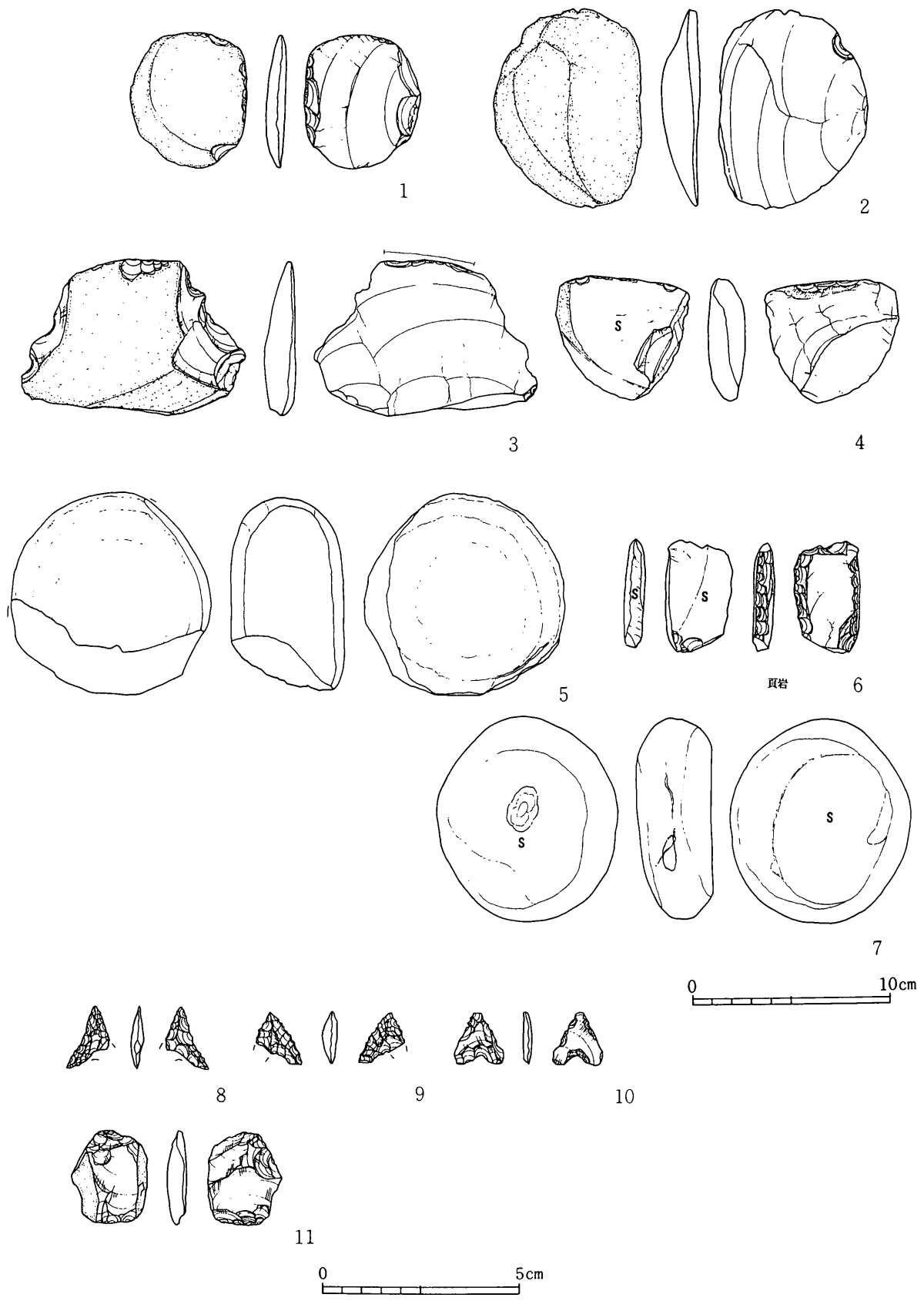
第84図 縄文時代早期前半の小形剥片石器（4）



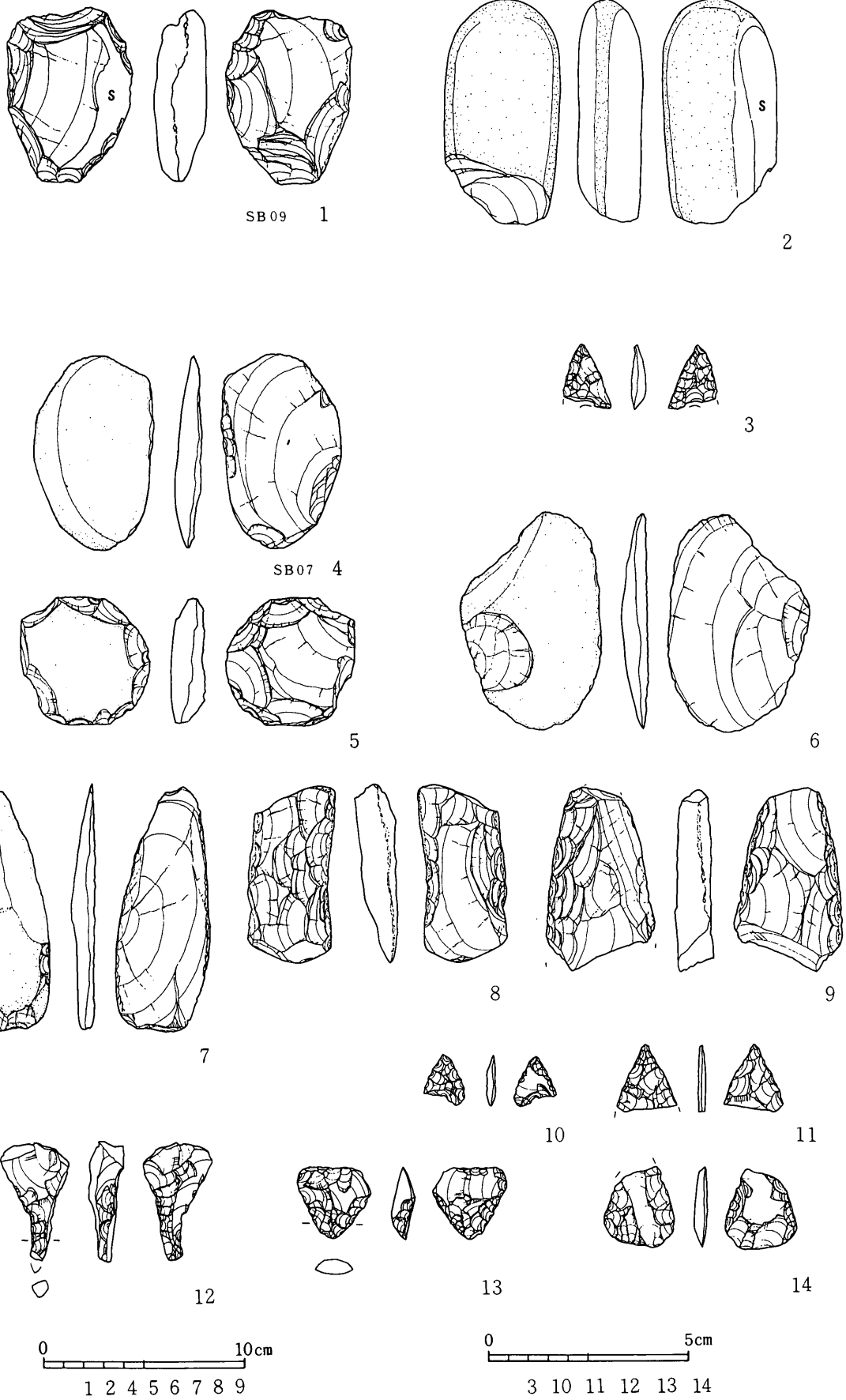
第85図 縄文時代早期前半の小形剥片石器 (5)



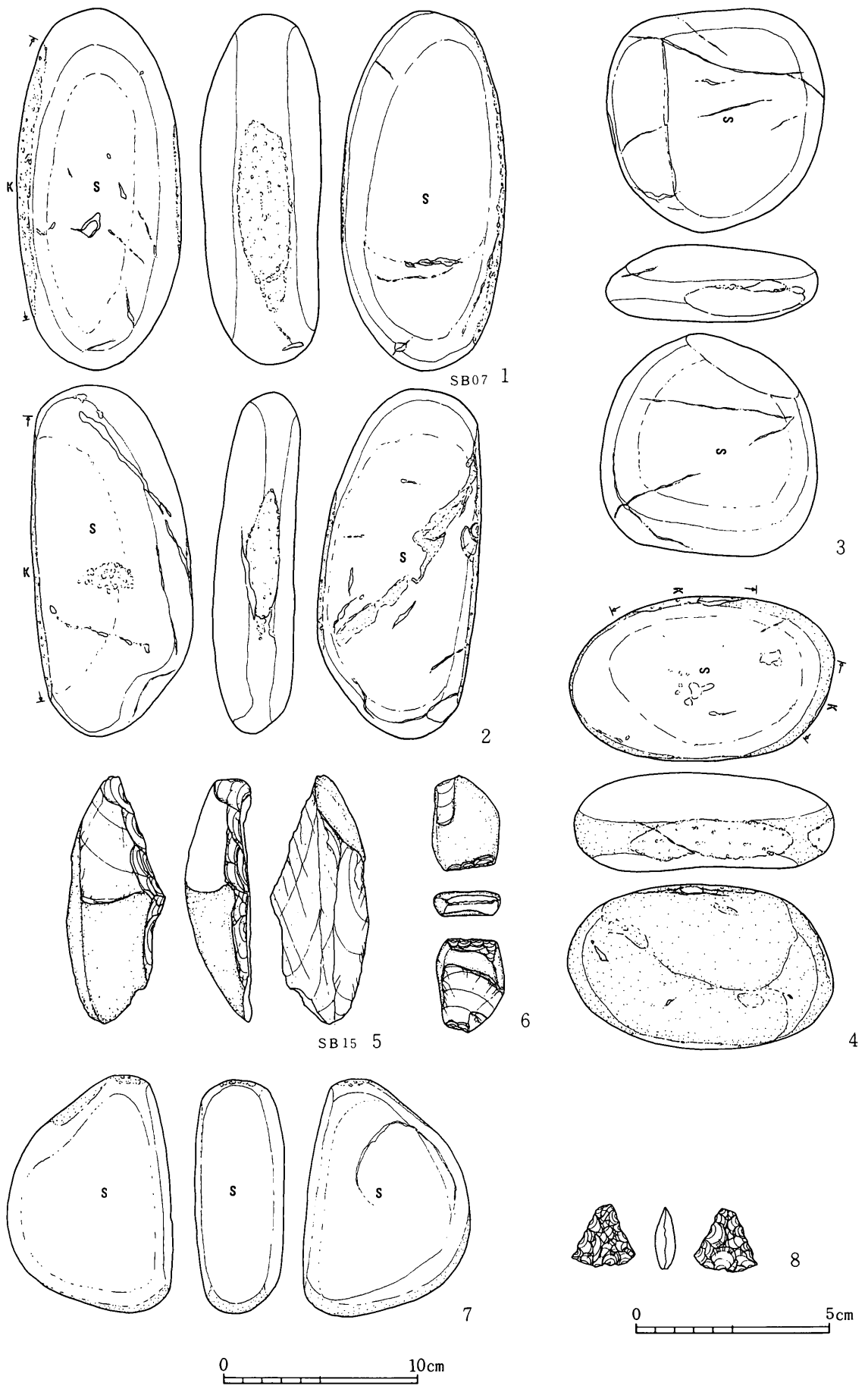
第86図 縄文時代早期前半の小形剥片石器 (6)



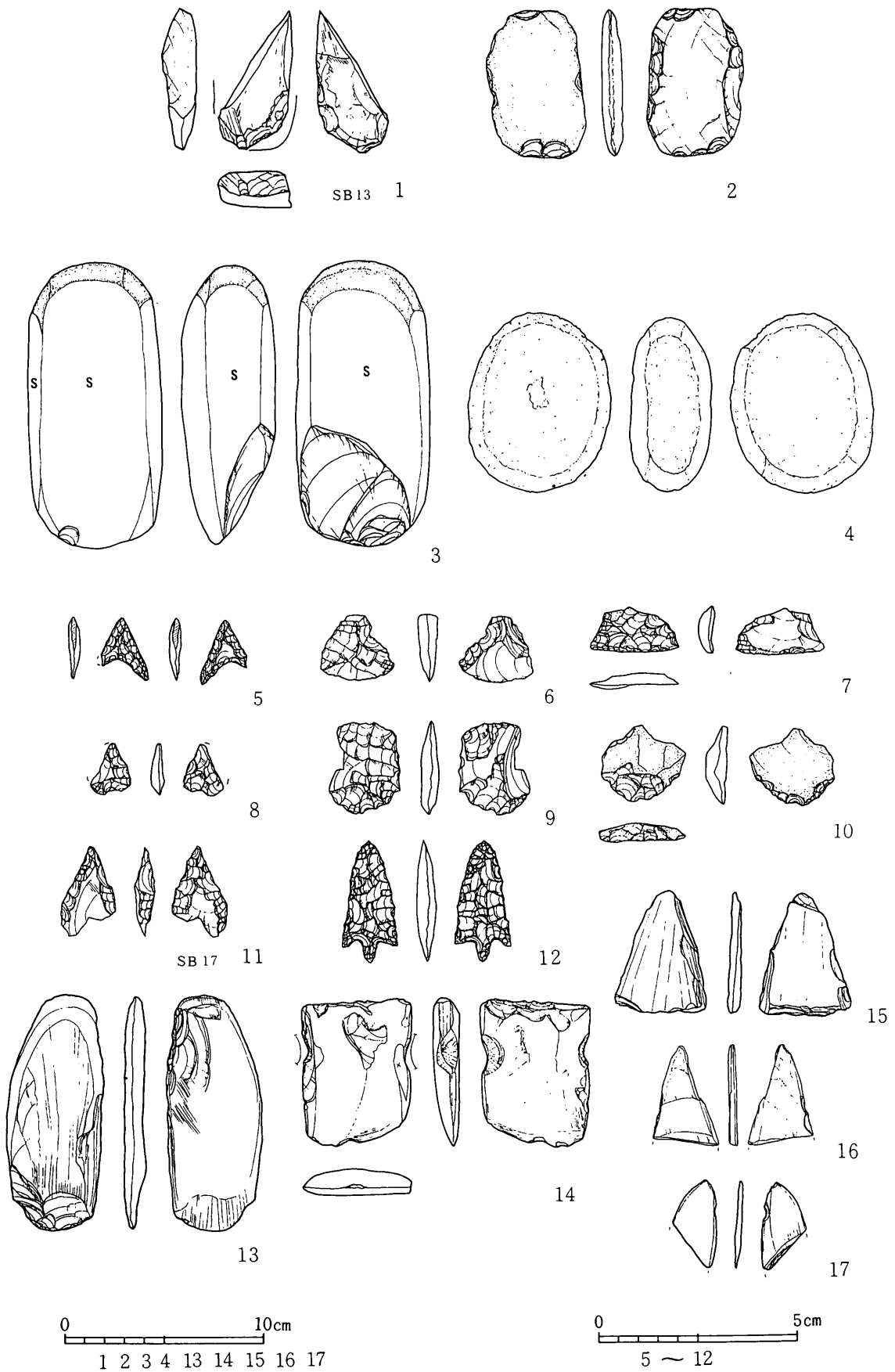
第87図 縄文時代早期後葉の石器



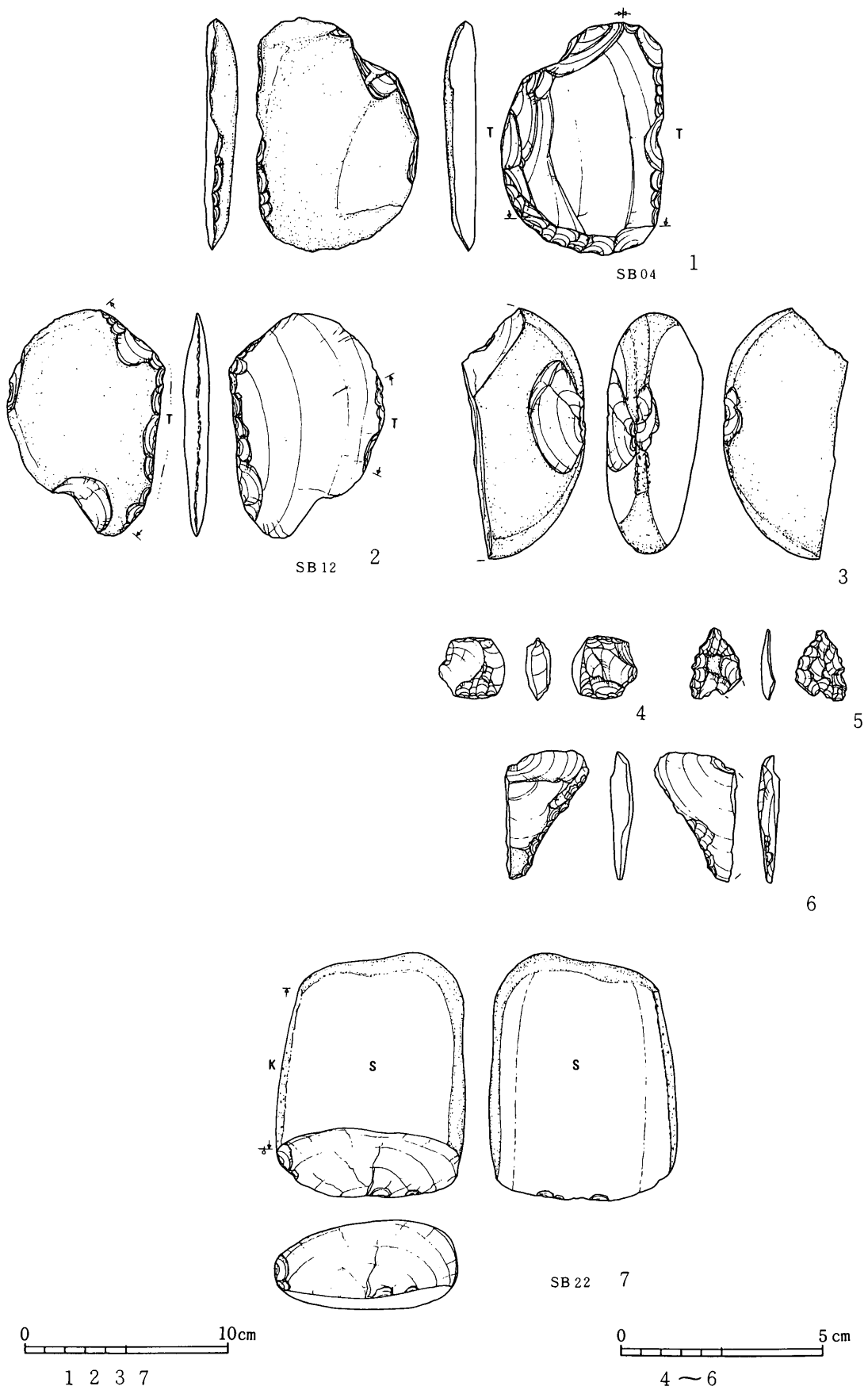
第88図 縄文時代前期と中期の石器（1）



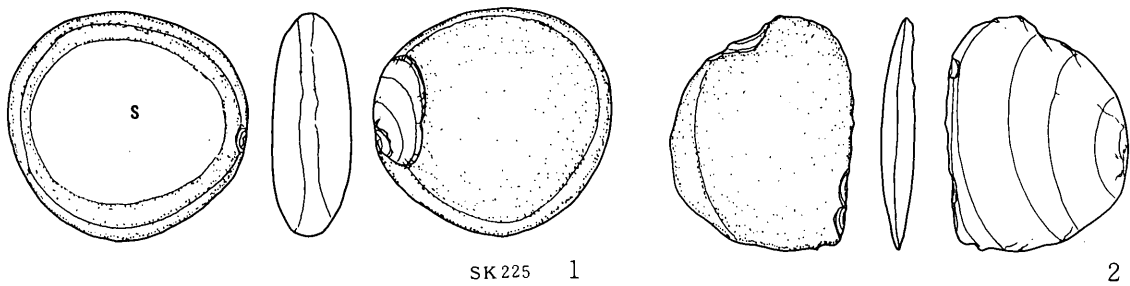
第89図 縄文時代前期と中期の石器 (2)



第90図 弥生時代後期の石器と、遺構外の弥生時代の石器



第91図 竪穴の石器

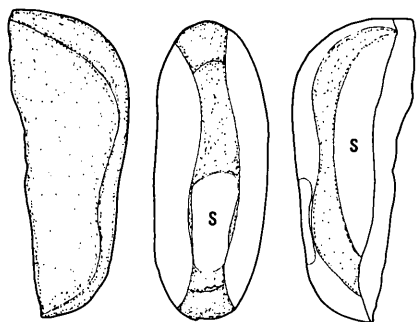


SK 225 1

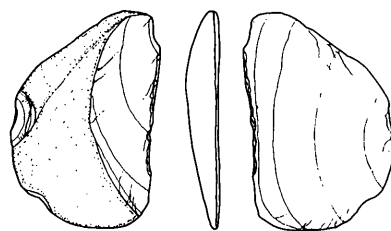
2



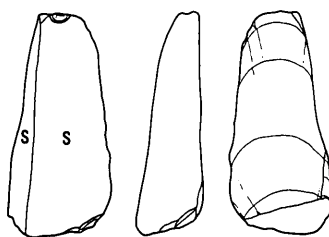
3



SK 412 4

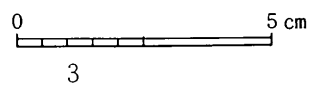
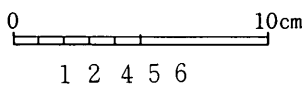


5

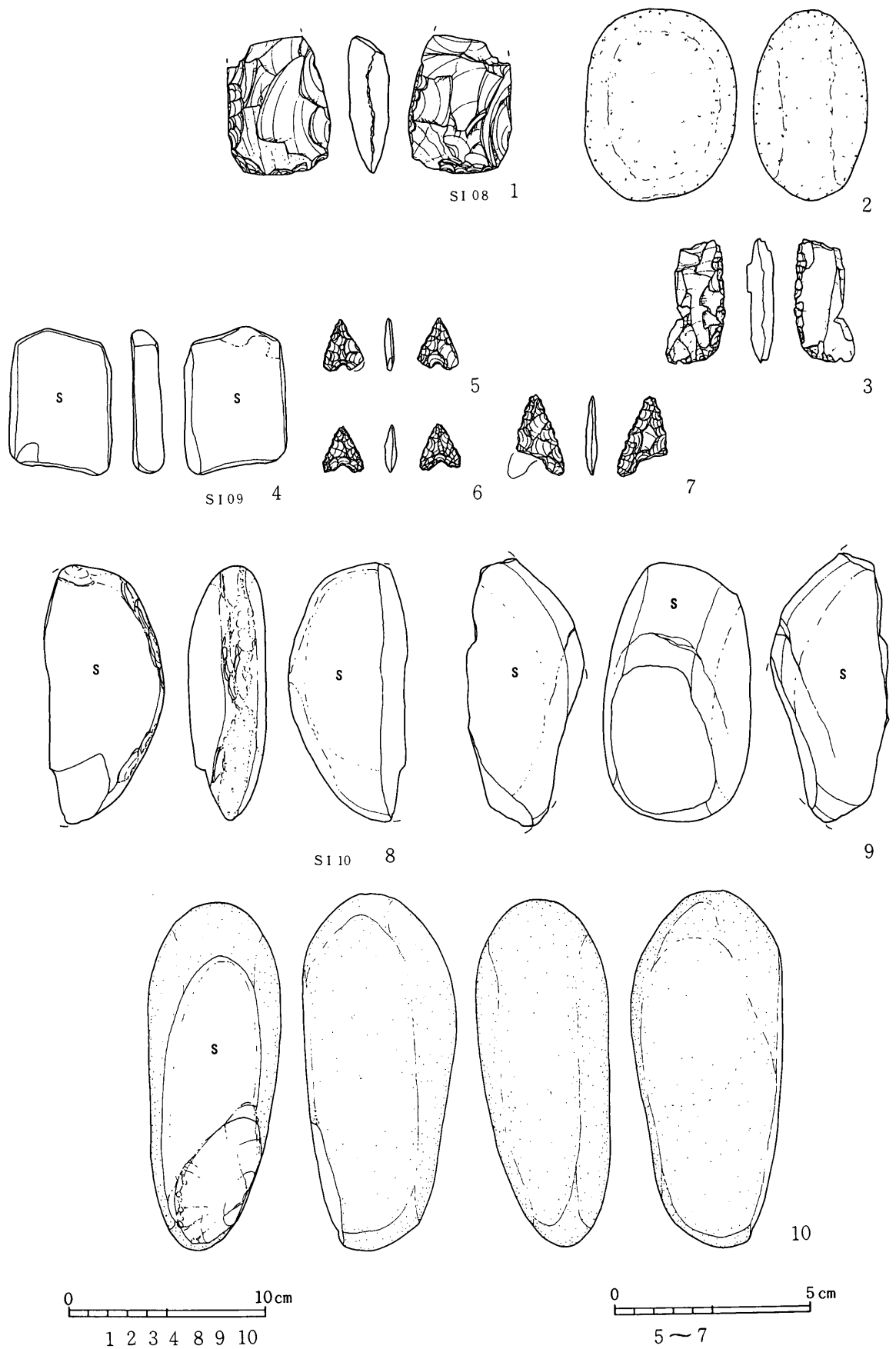


6

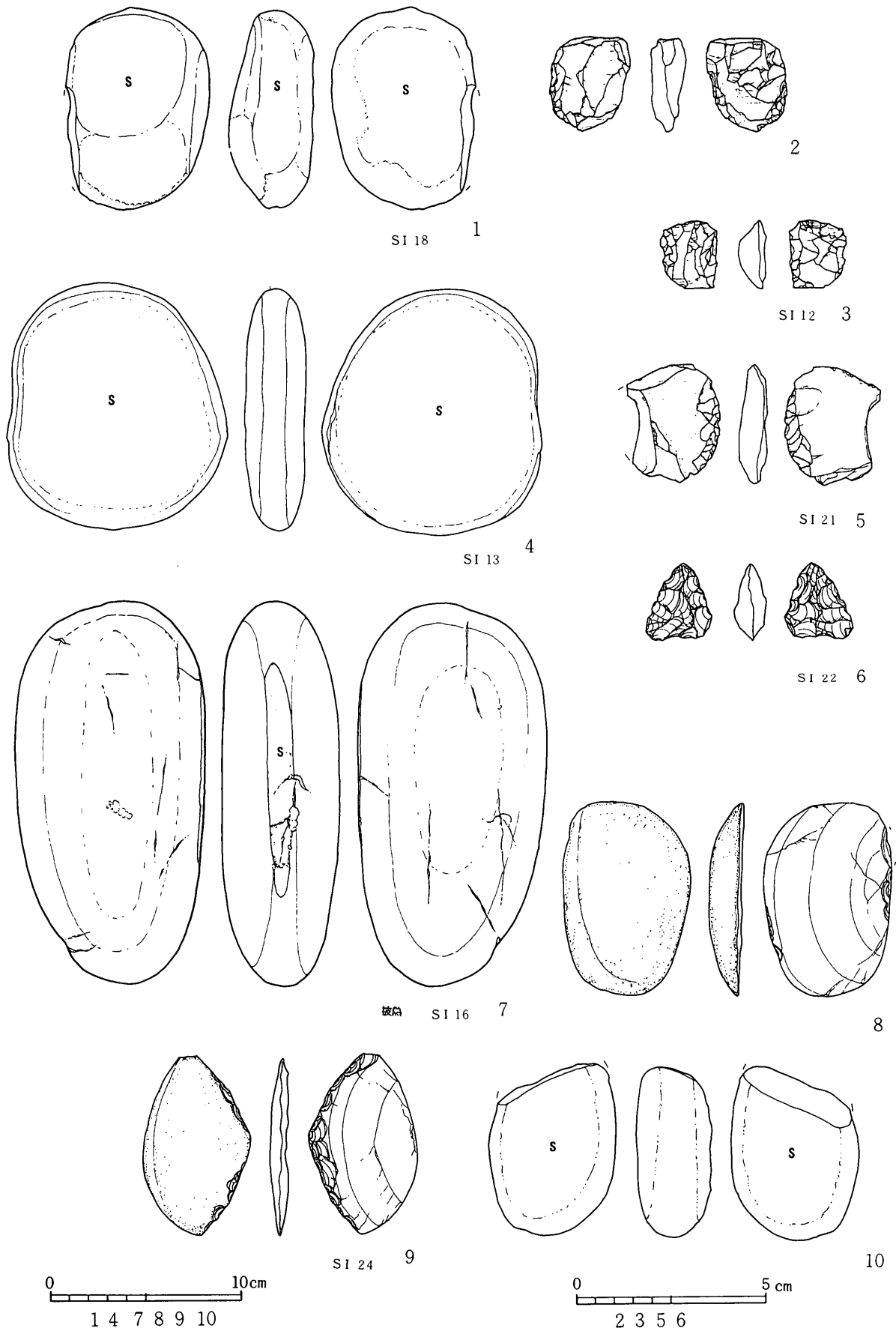
SK 456



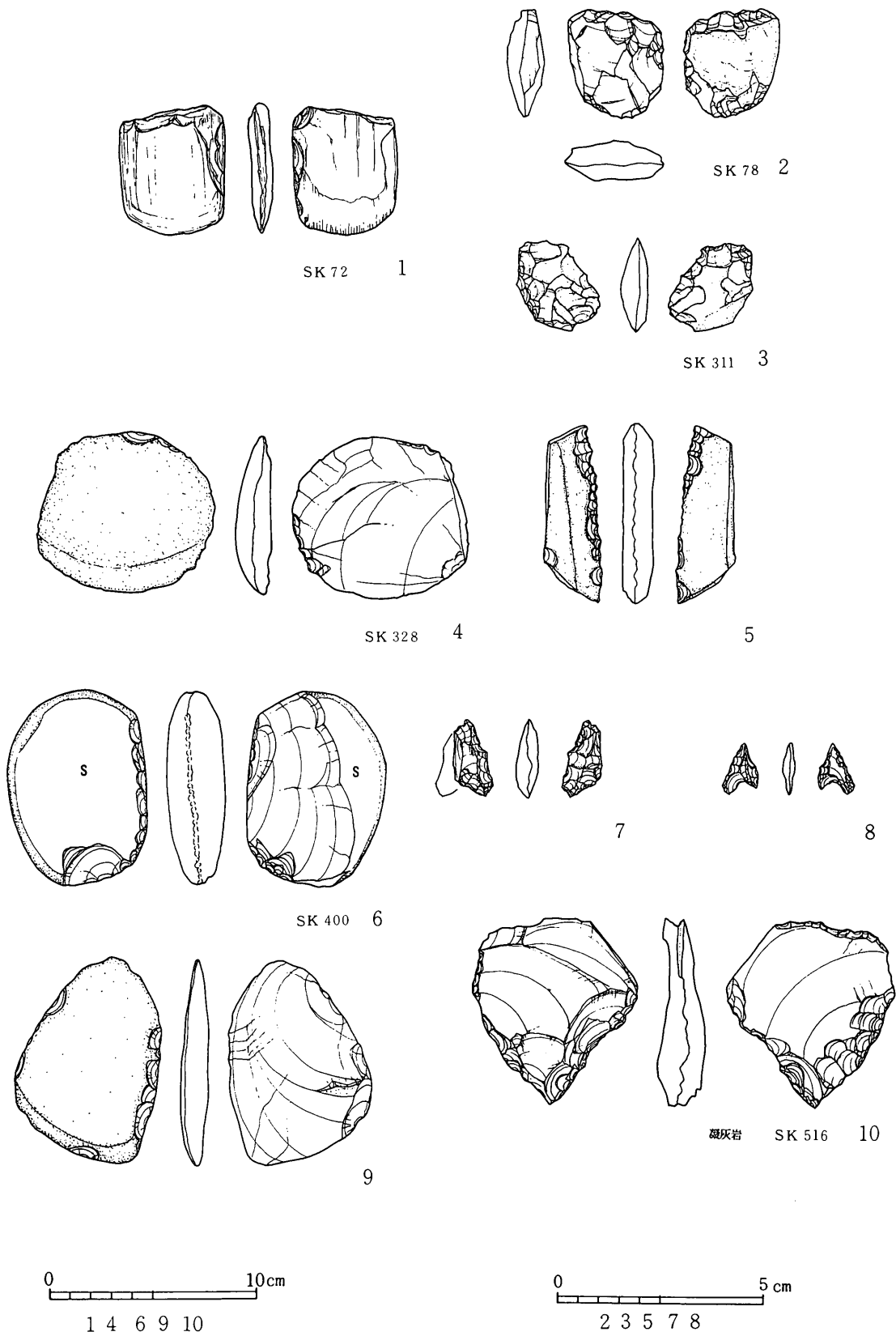
第92図 炉穴の石器



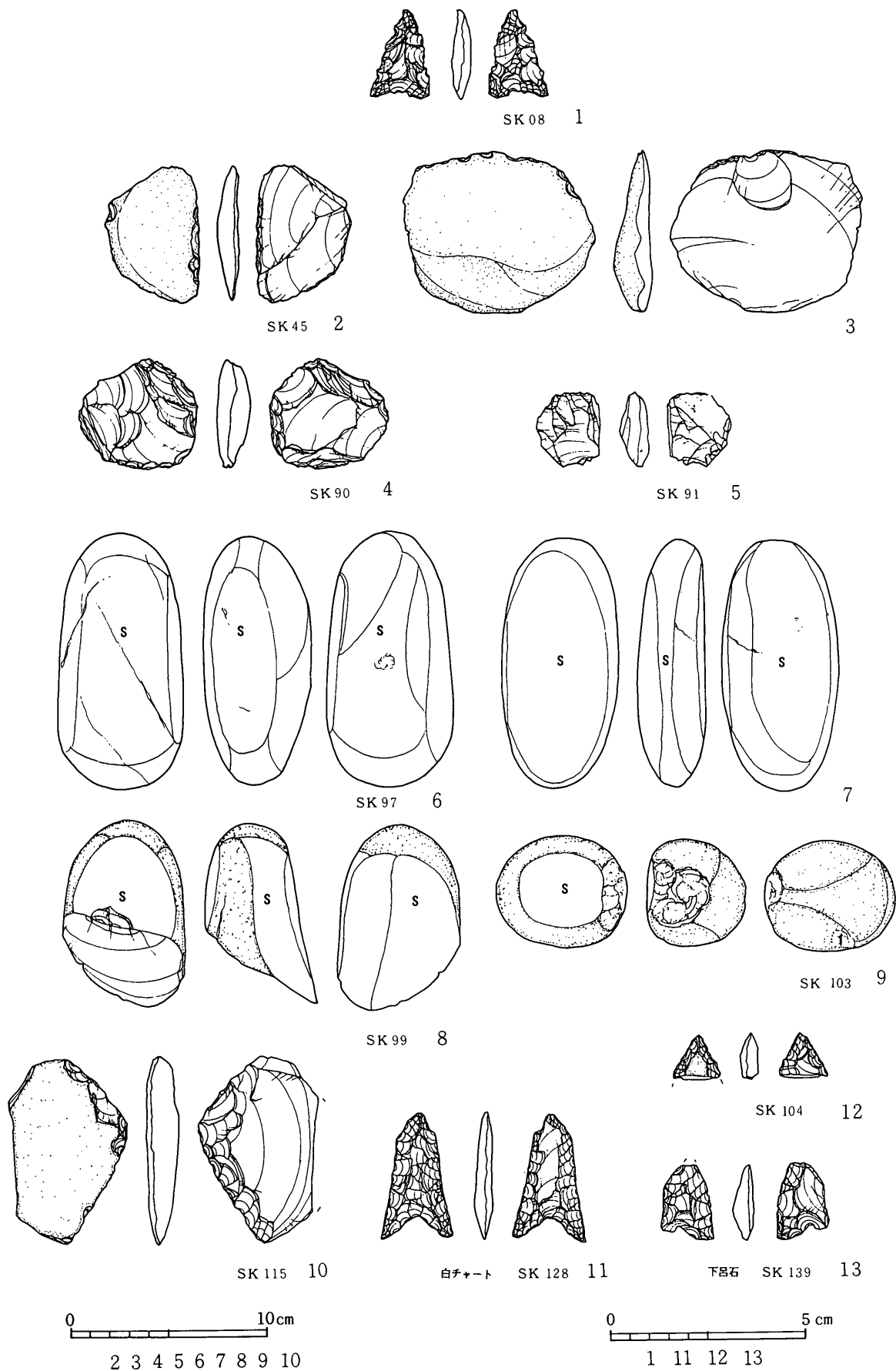
第93図 集石の石器(1)



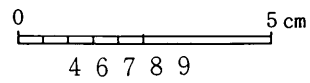
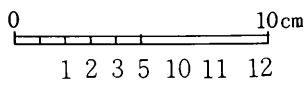
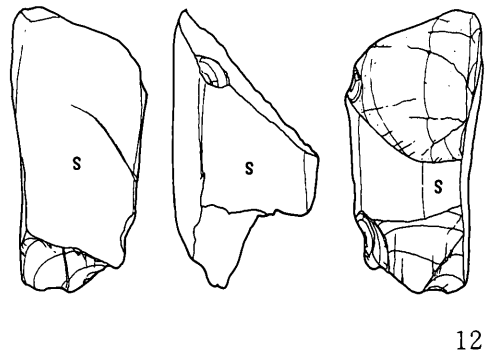
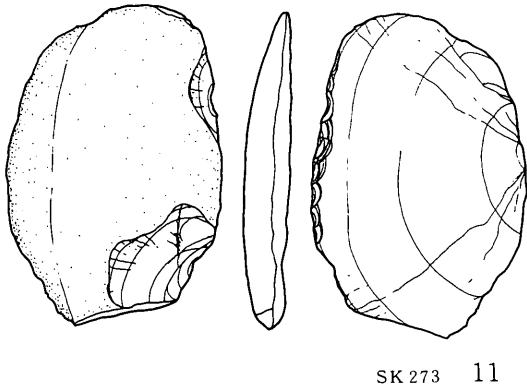
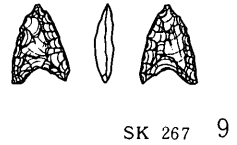
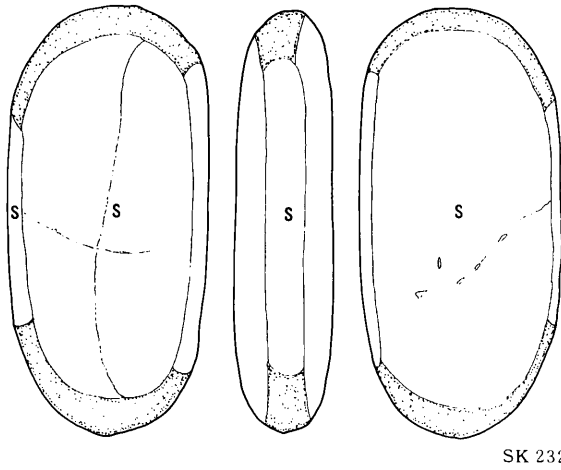
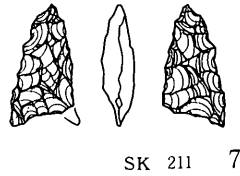
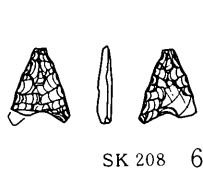
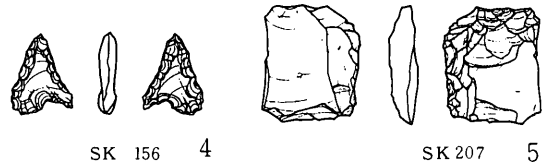
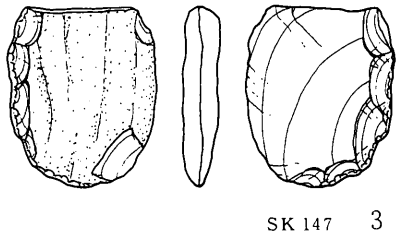
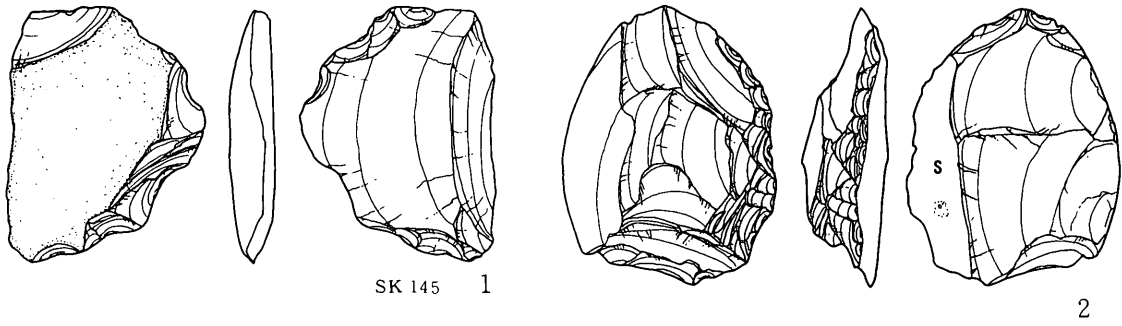
第94図 集石の石器 (2)



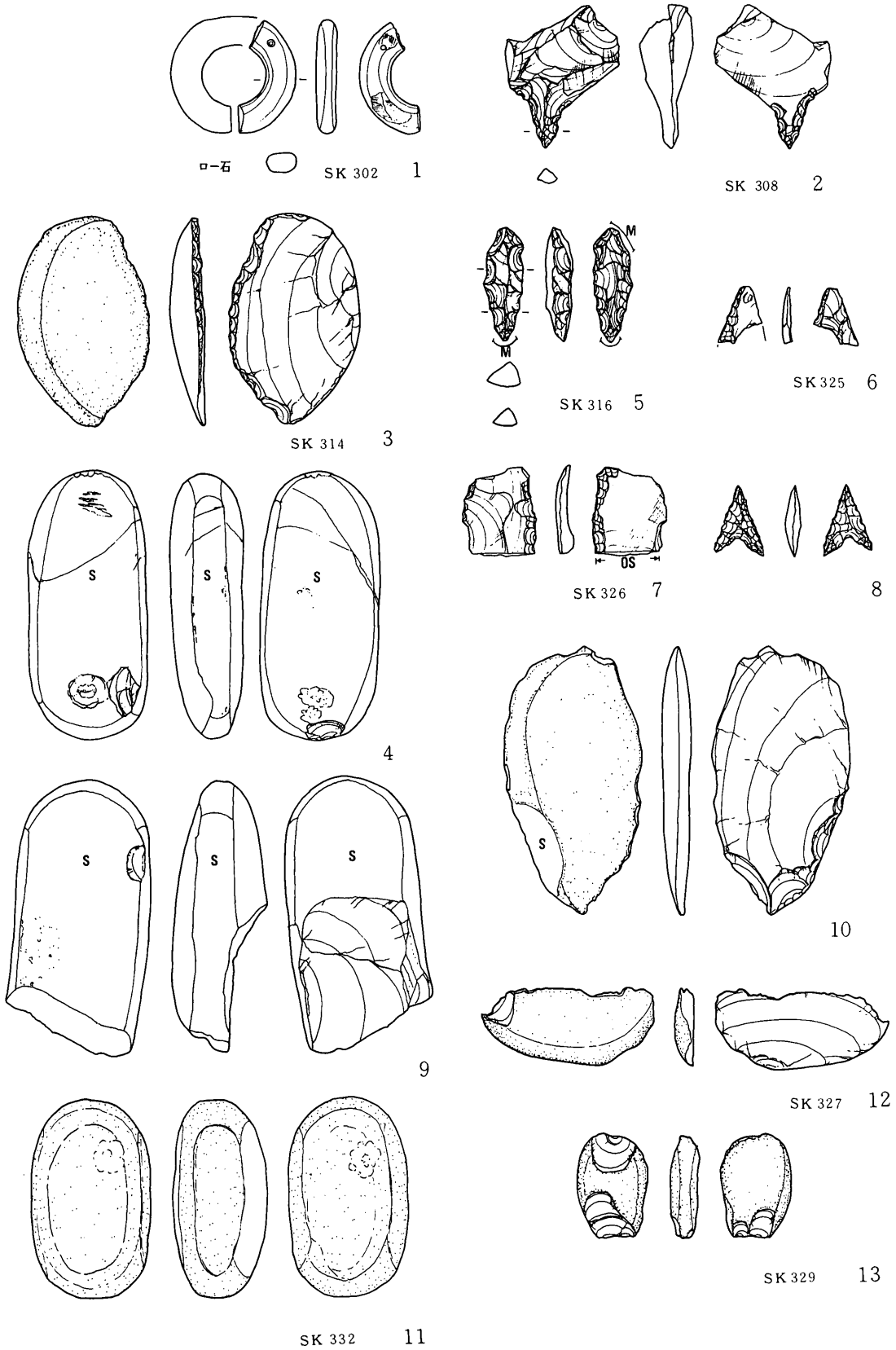
第95図 貯蔵穴の石器



第96図 土坑の石器 (1)



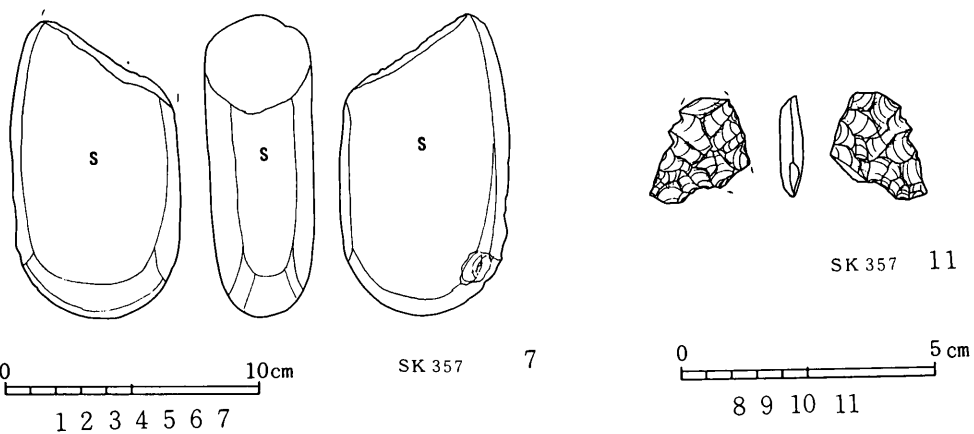
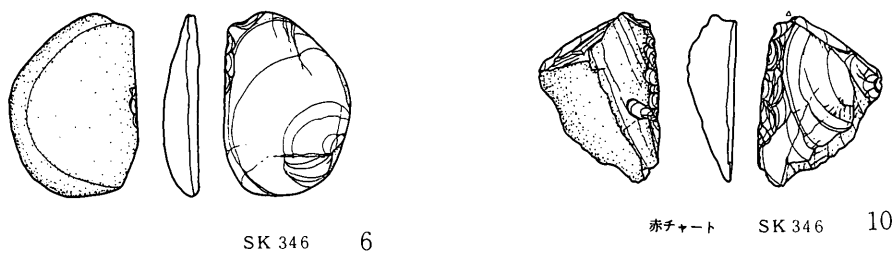
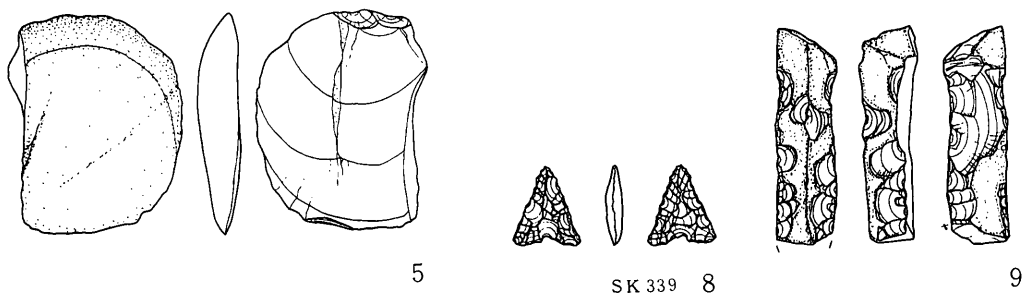
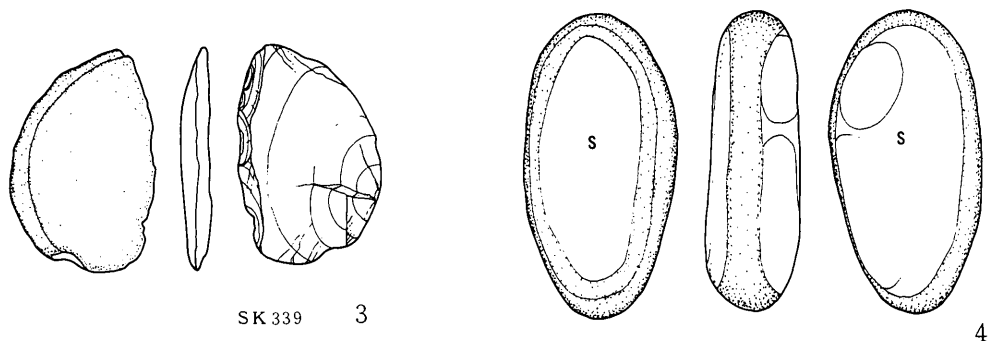
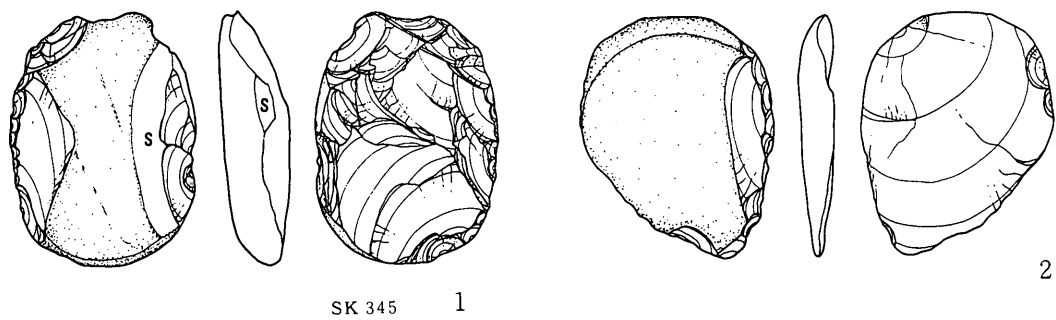
第97図 土坑の石器 (2)



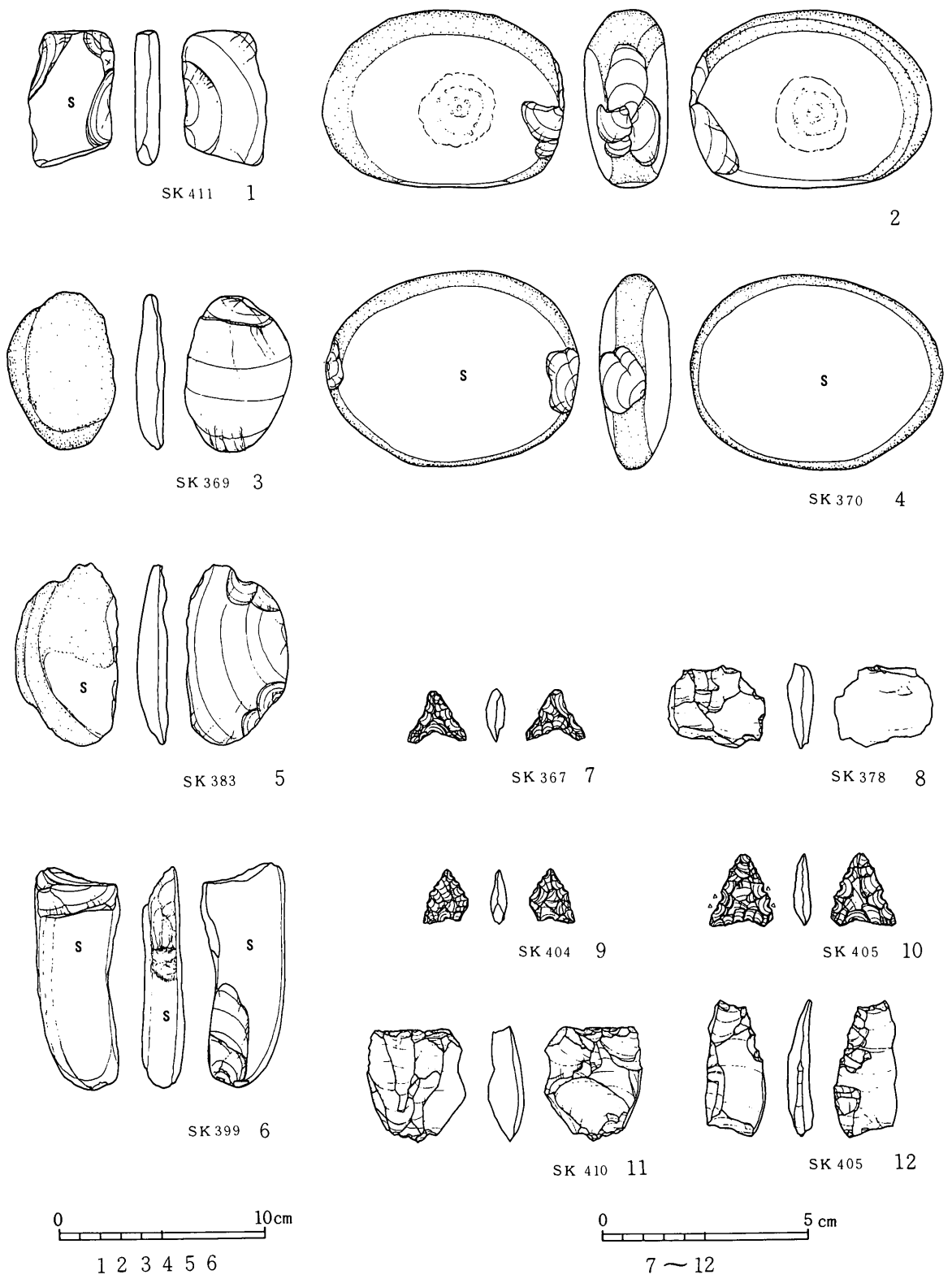
0 10 cm
1 3 4 9 10 11 12 13

0 5 cm
2 5 6 7 8

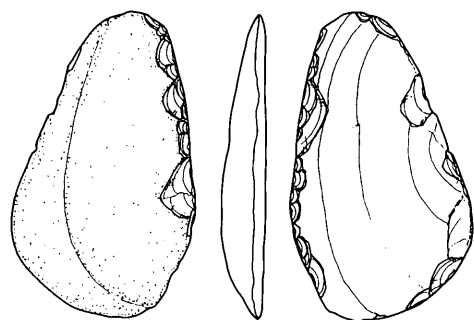
第98図 土坑の石器 (3)



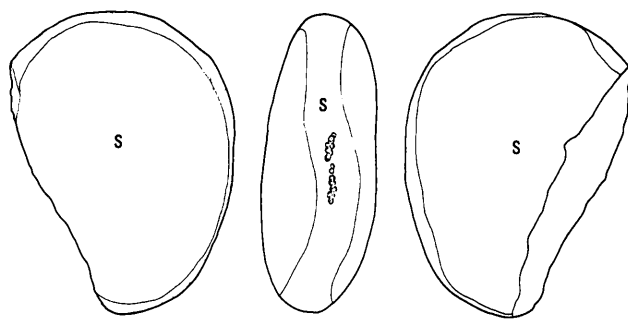
第99図 土坑の石器 (4)



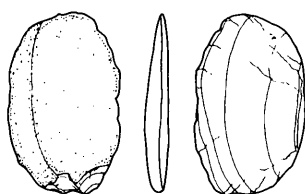
第100図 土坑の石器（5）



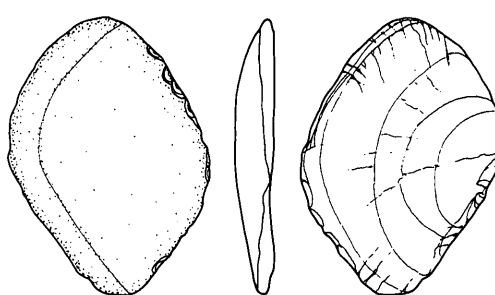
SK 413 1



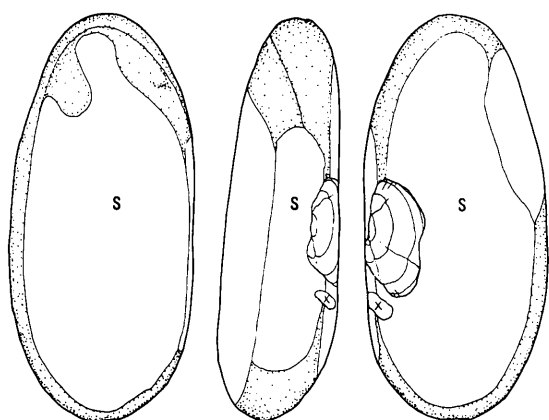
SK 441 2



SK 455 3



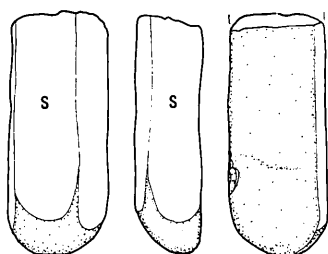
SK 472 4



SK 446 5



SK 446 7



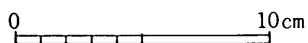
SK 469 6



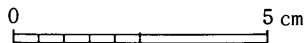
SK 469 8



SK 481 9

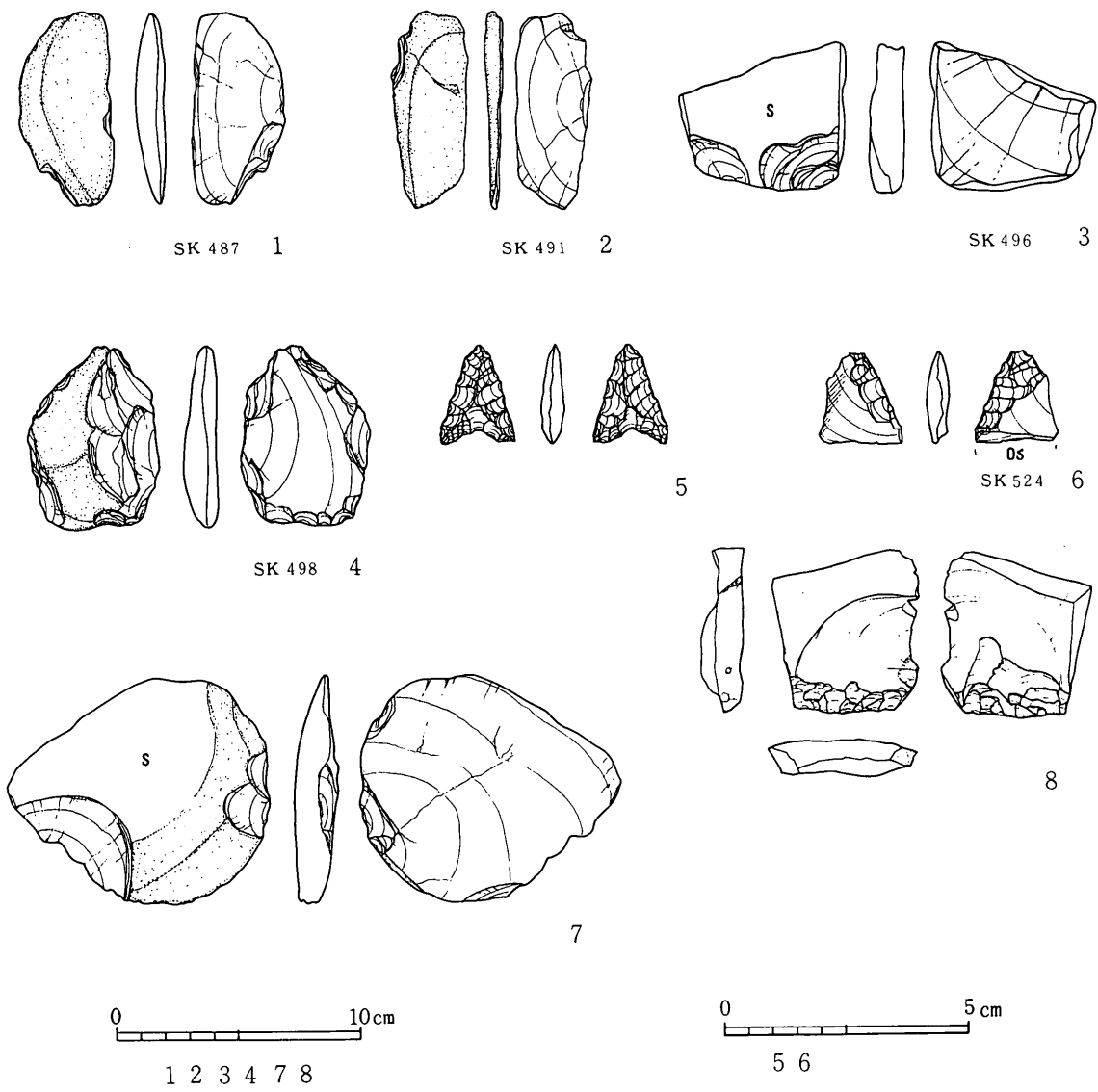


1 ~ 6

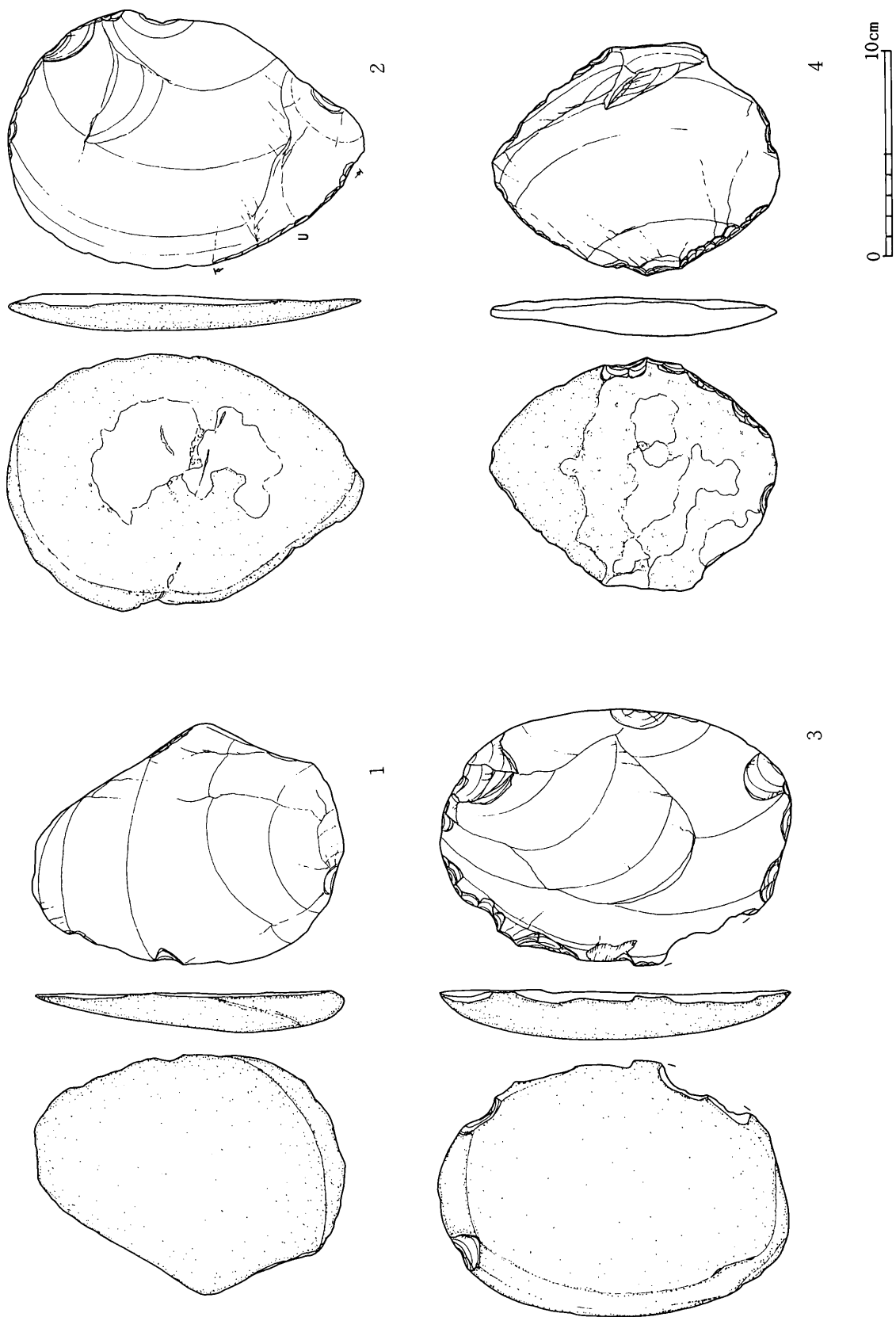


7 ~ 9

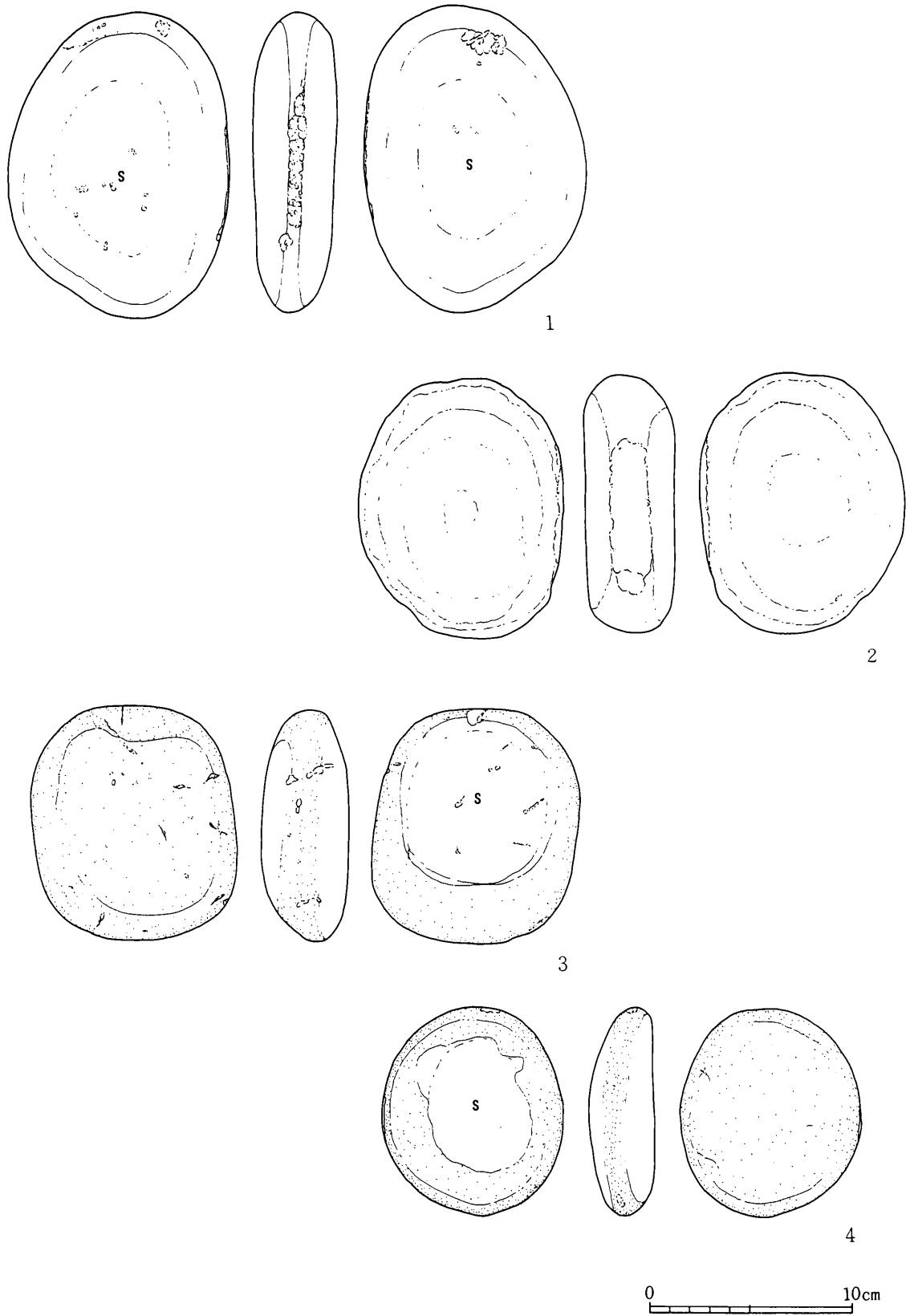
第101図 土坑の石器 (6)



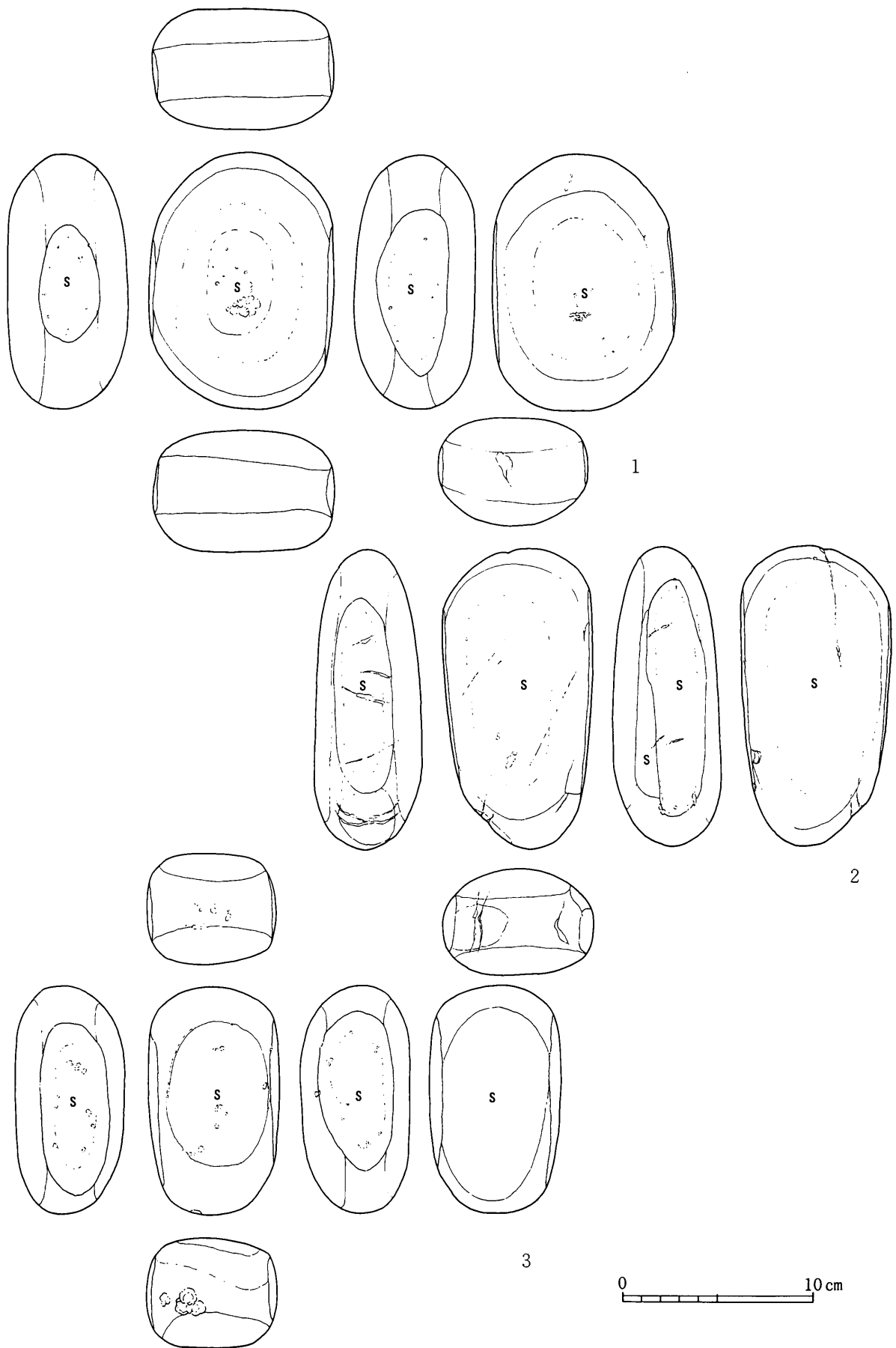
第102図 土坑の石器（7）



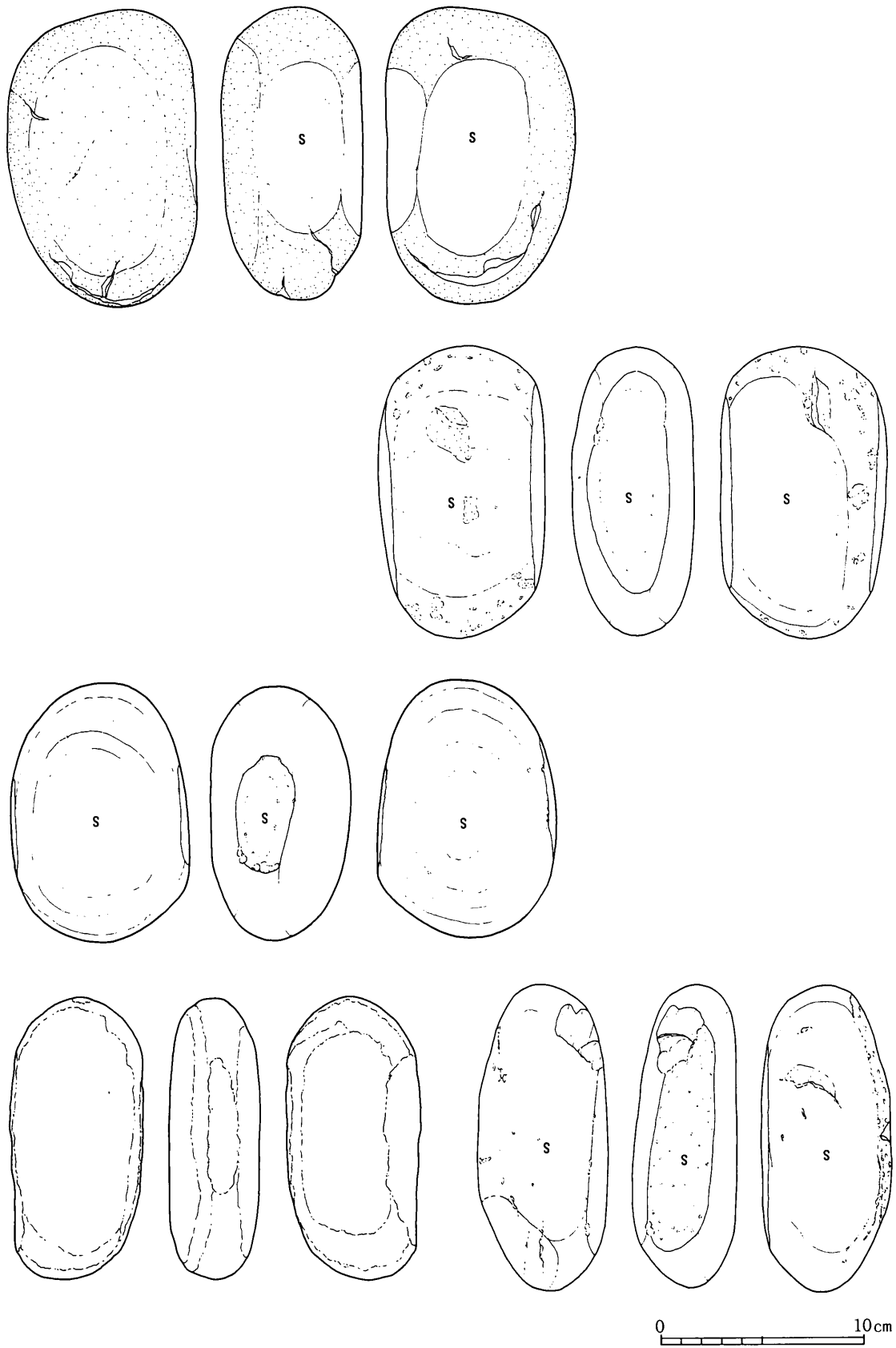
第103図 S K 243の石器 (1)



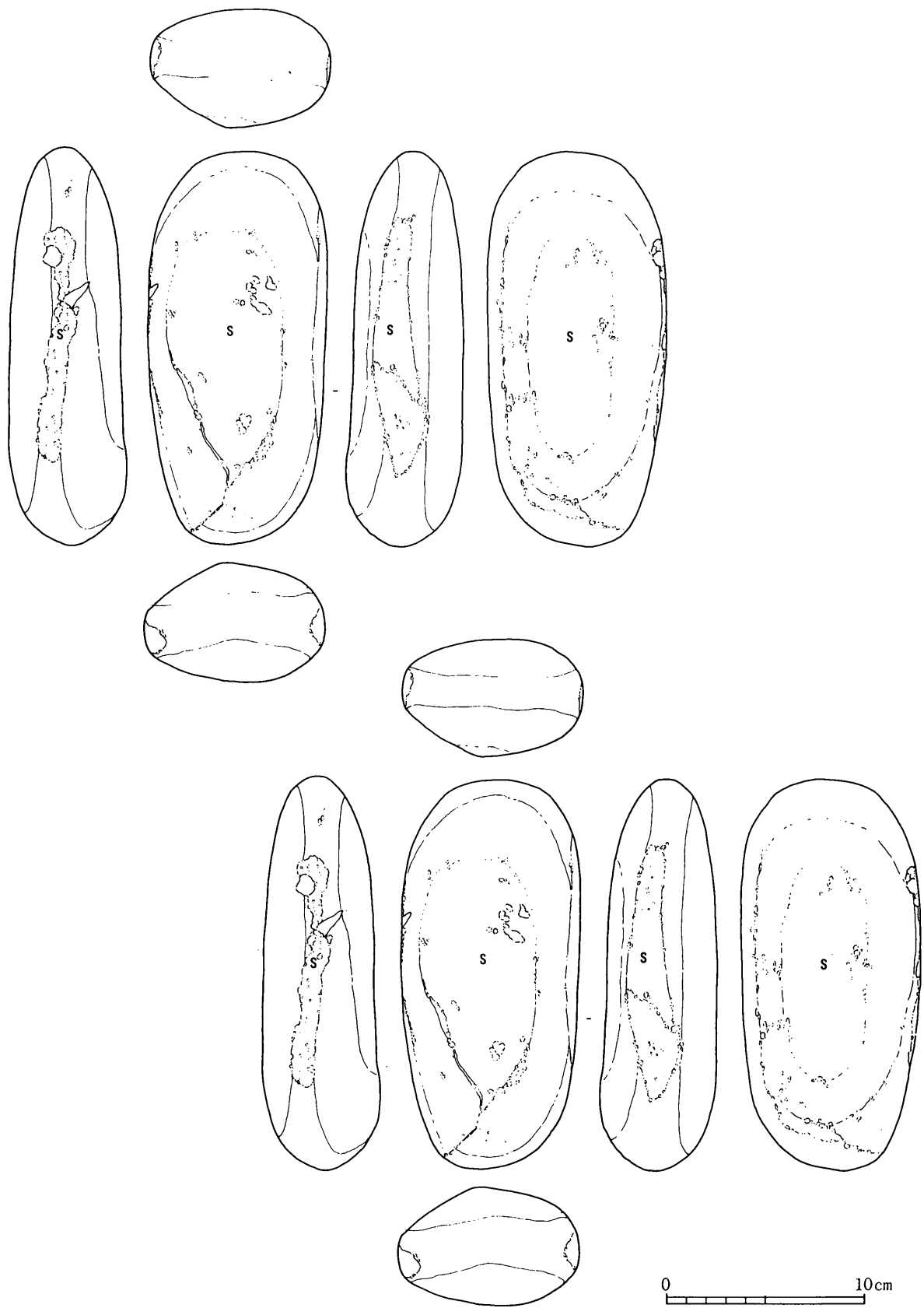
第104図 S K243の石器 (2)



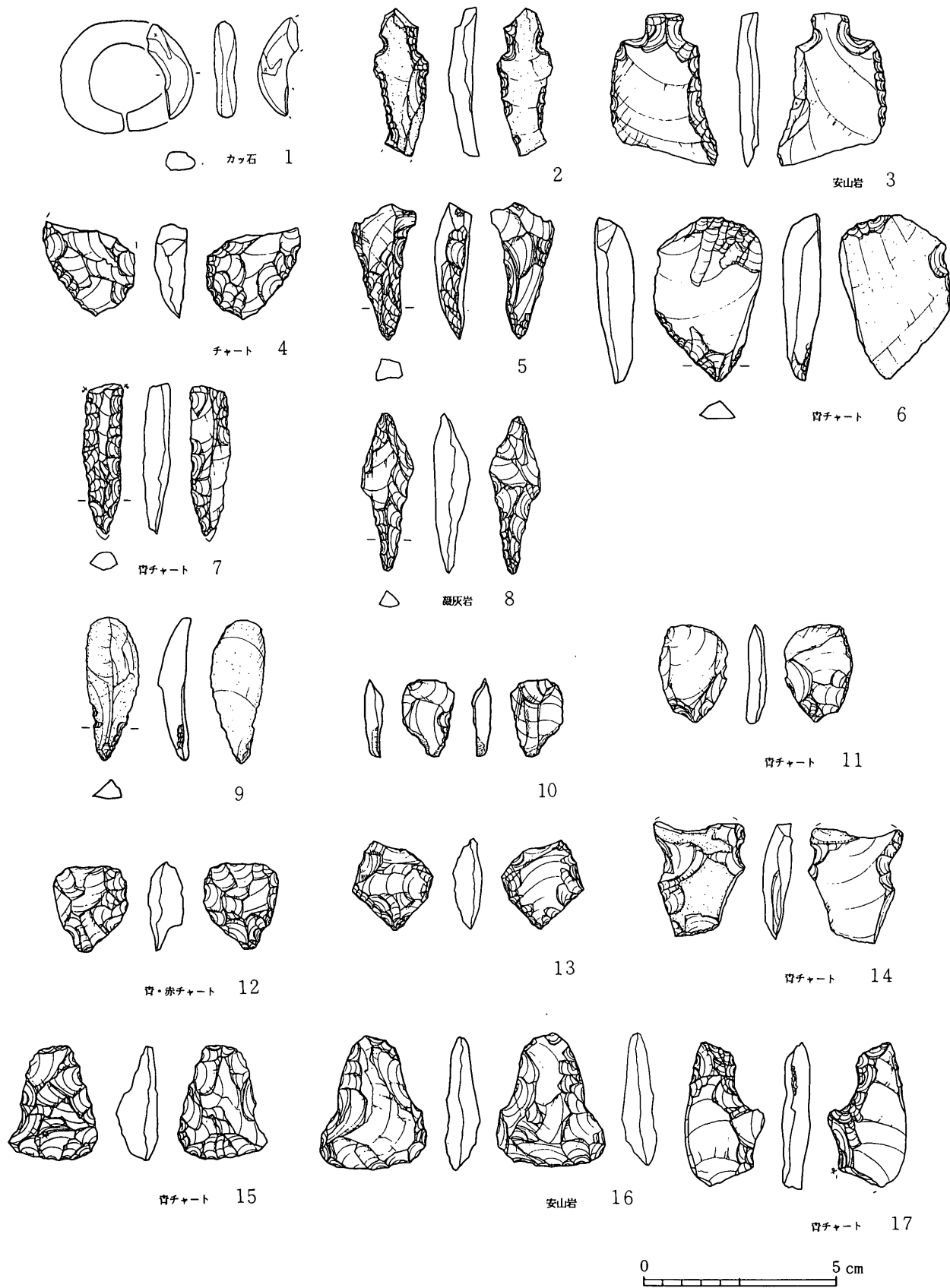
第105図 SK 243の石器 (3)



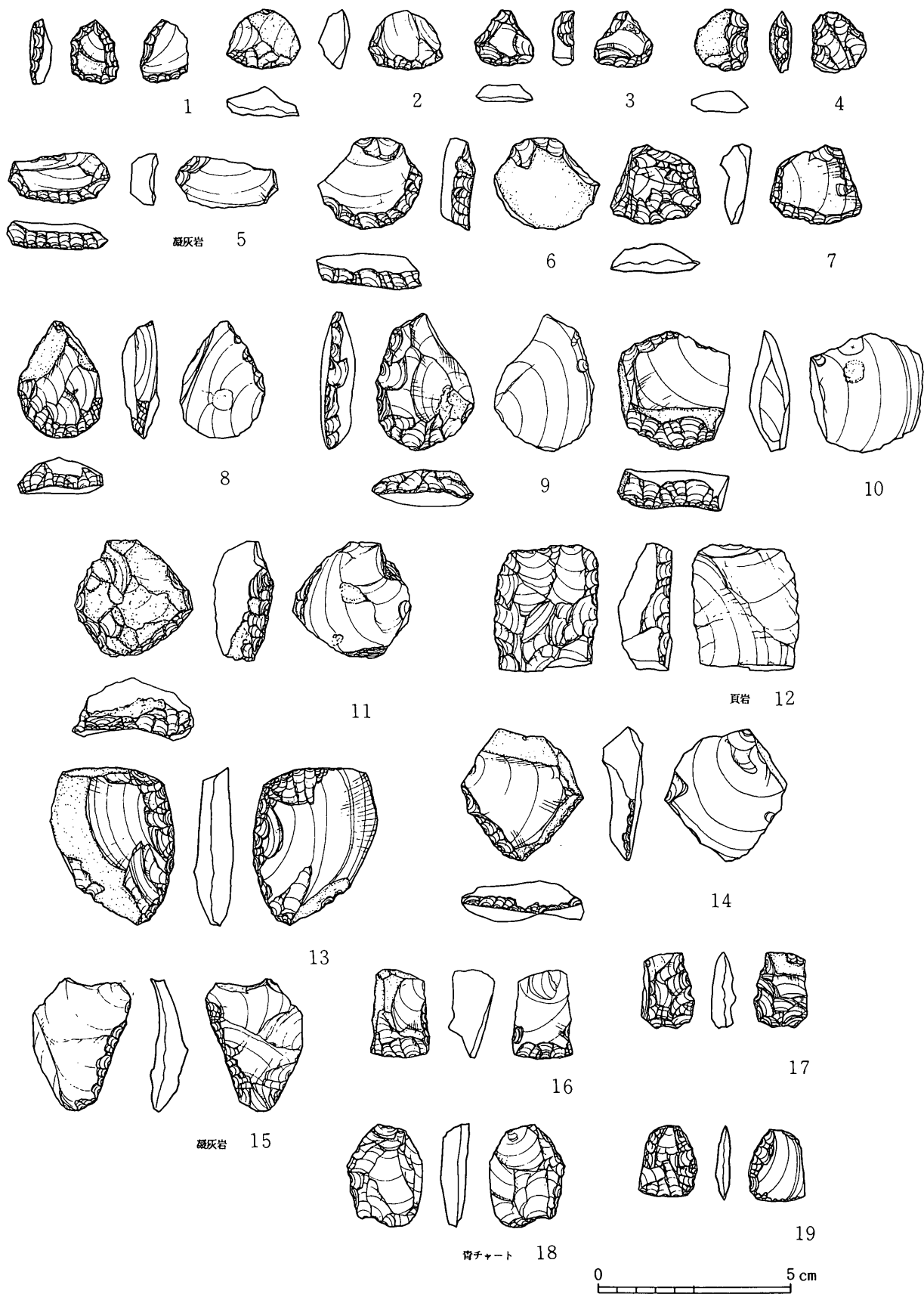
第106図 S K243の石器（4）



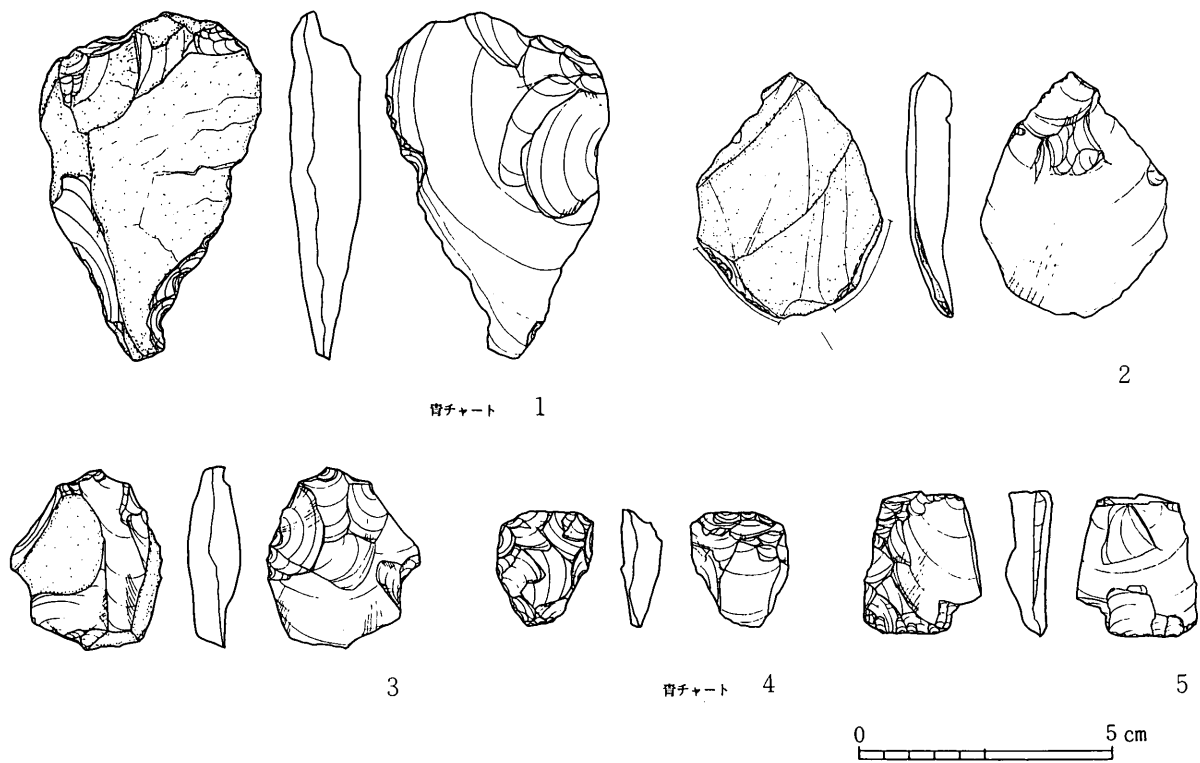
第107図 SK243の石器 (5)



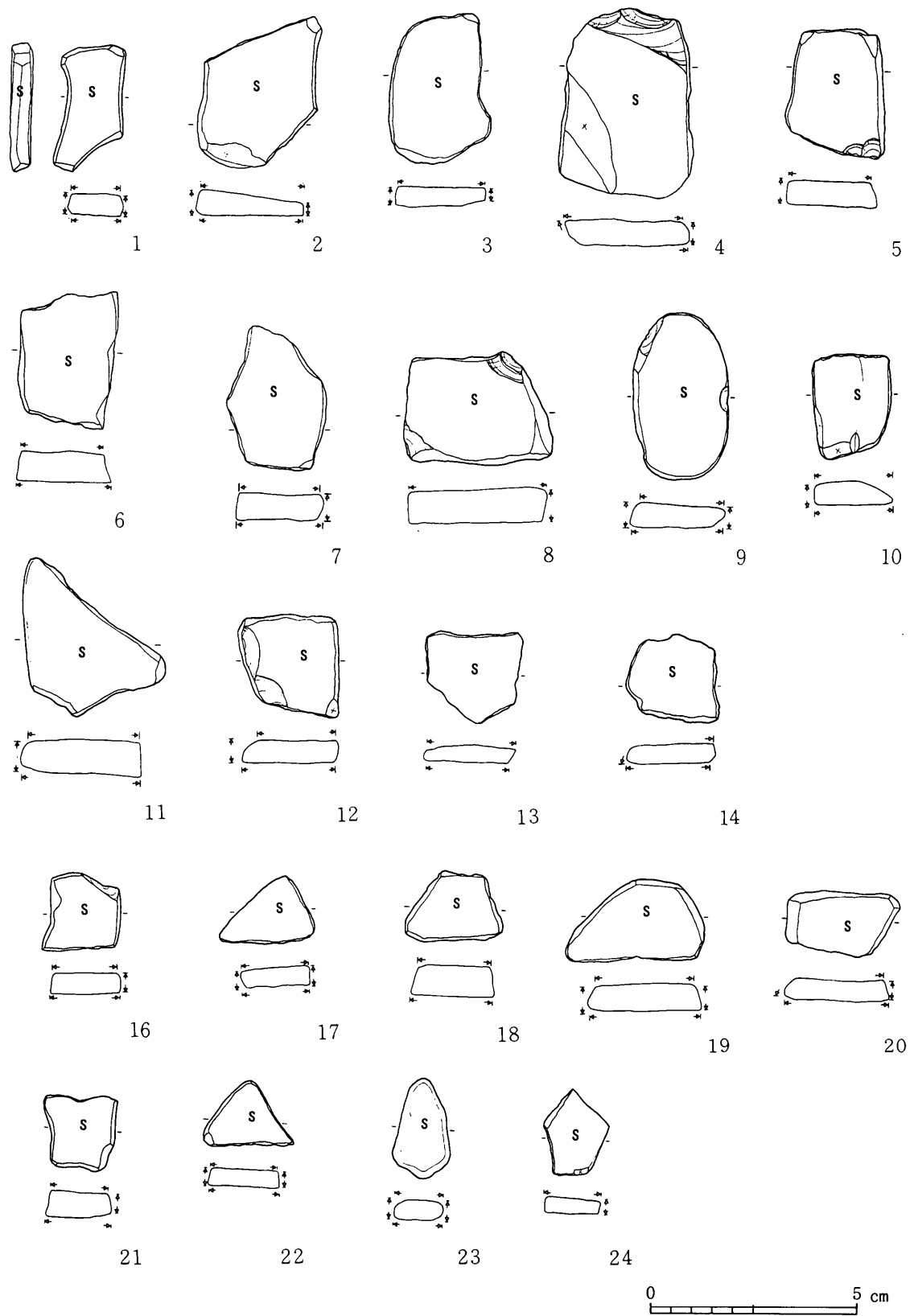
第108図 遺構外の小形石器（1）



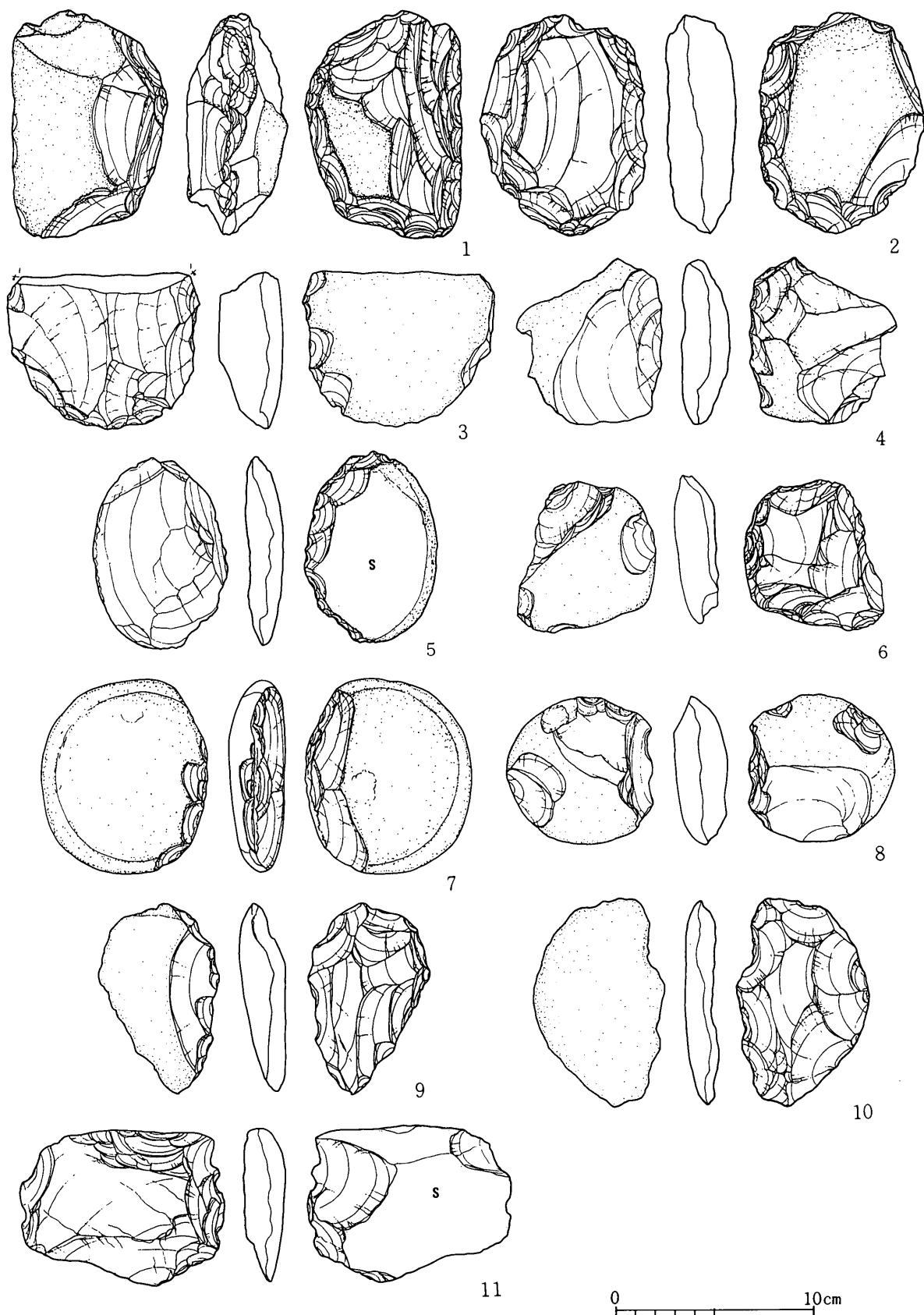
第109図 遺構外の小形石器 (2)



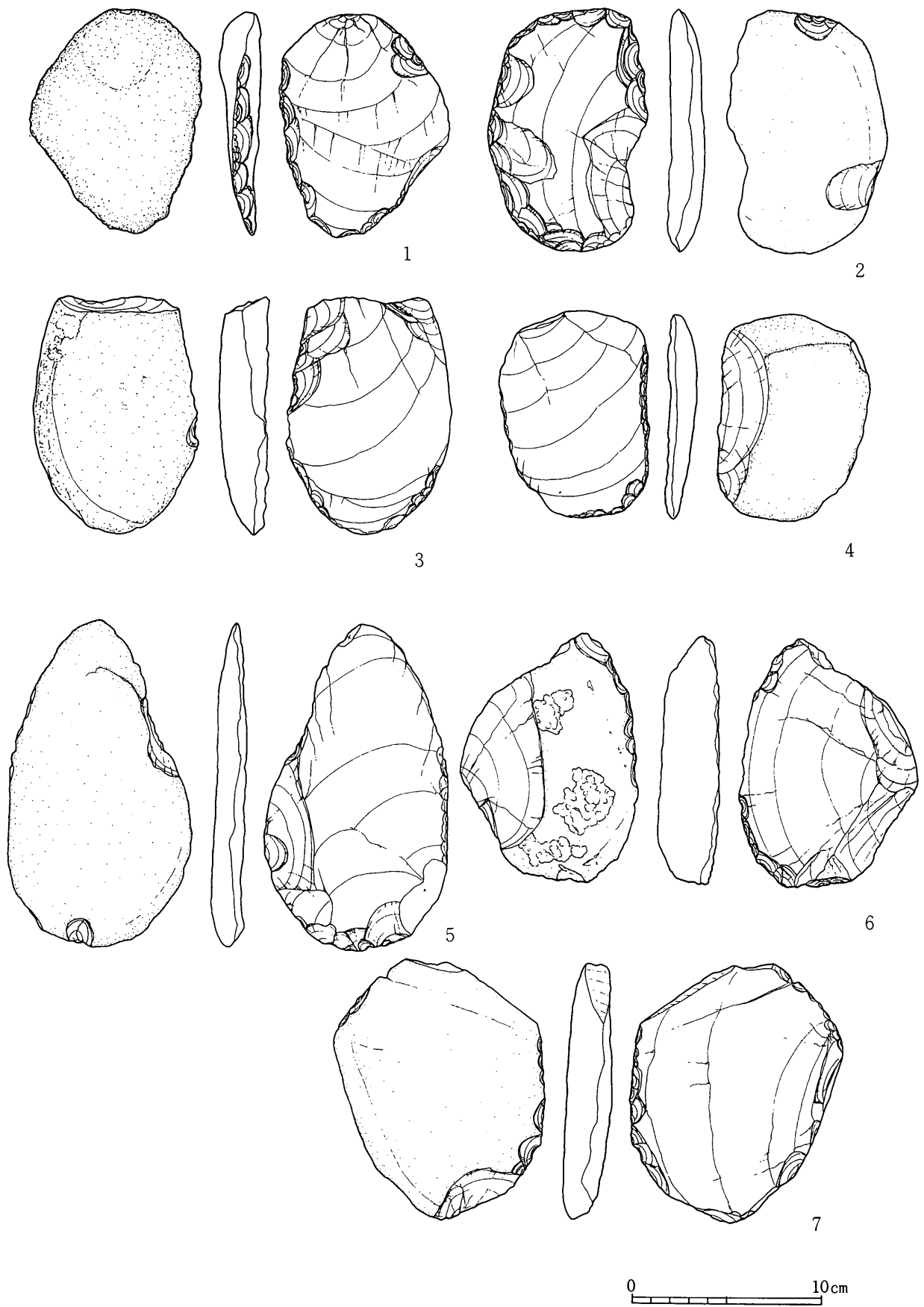
第110図 遺構外の小形石器（3）



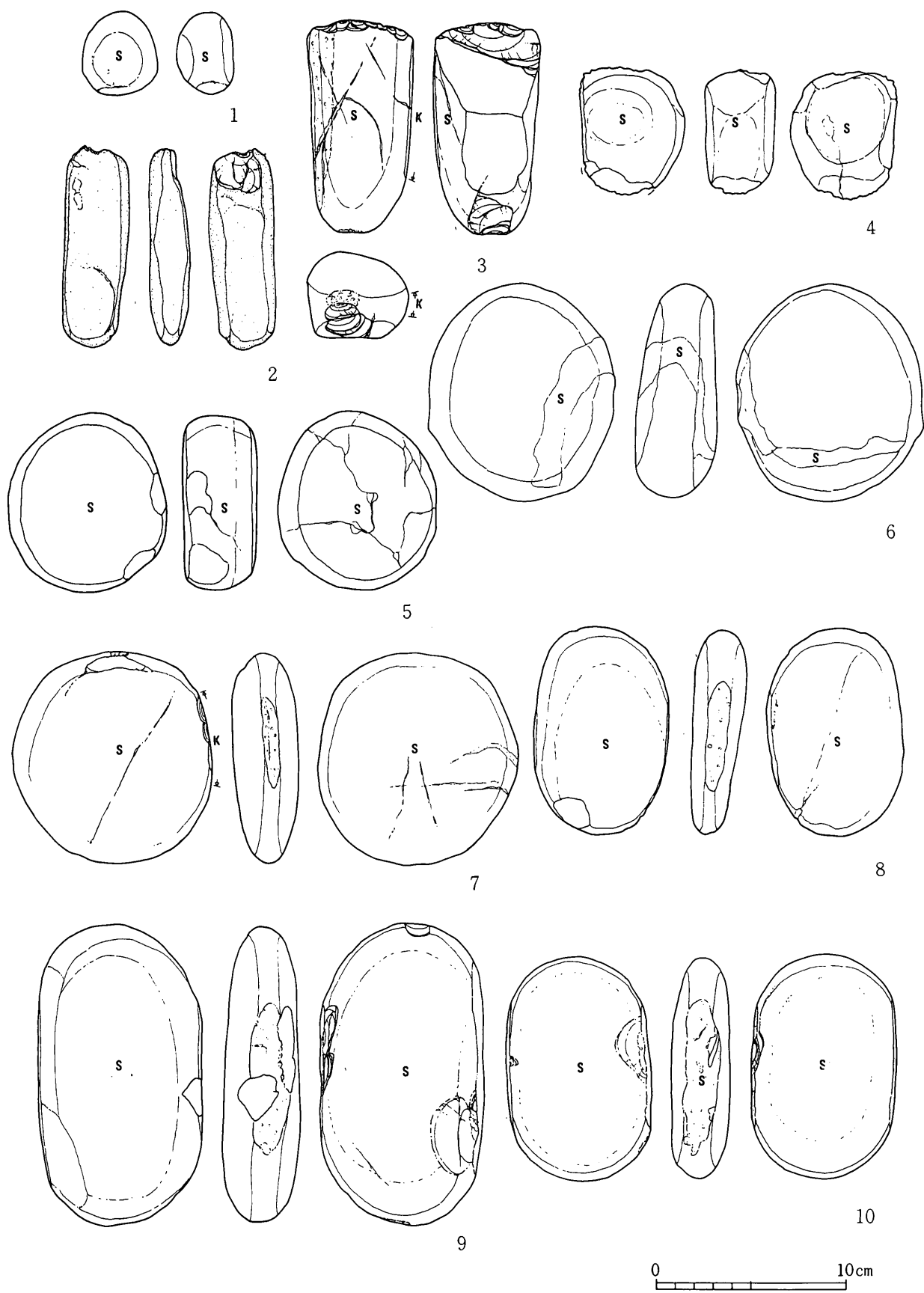
第111図 遺構外の砥石



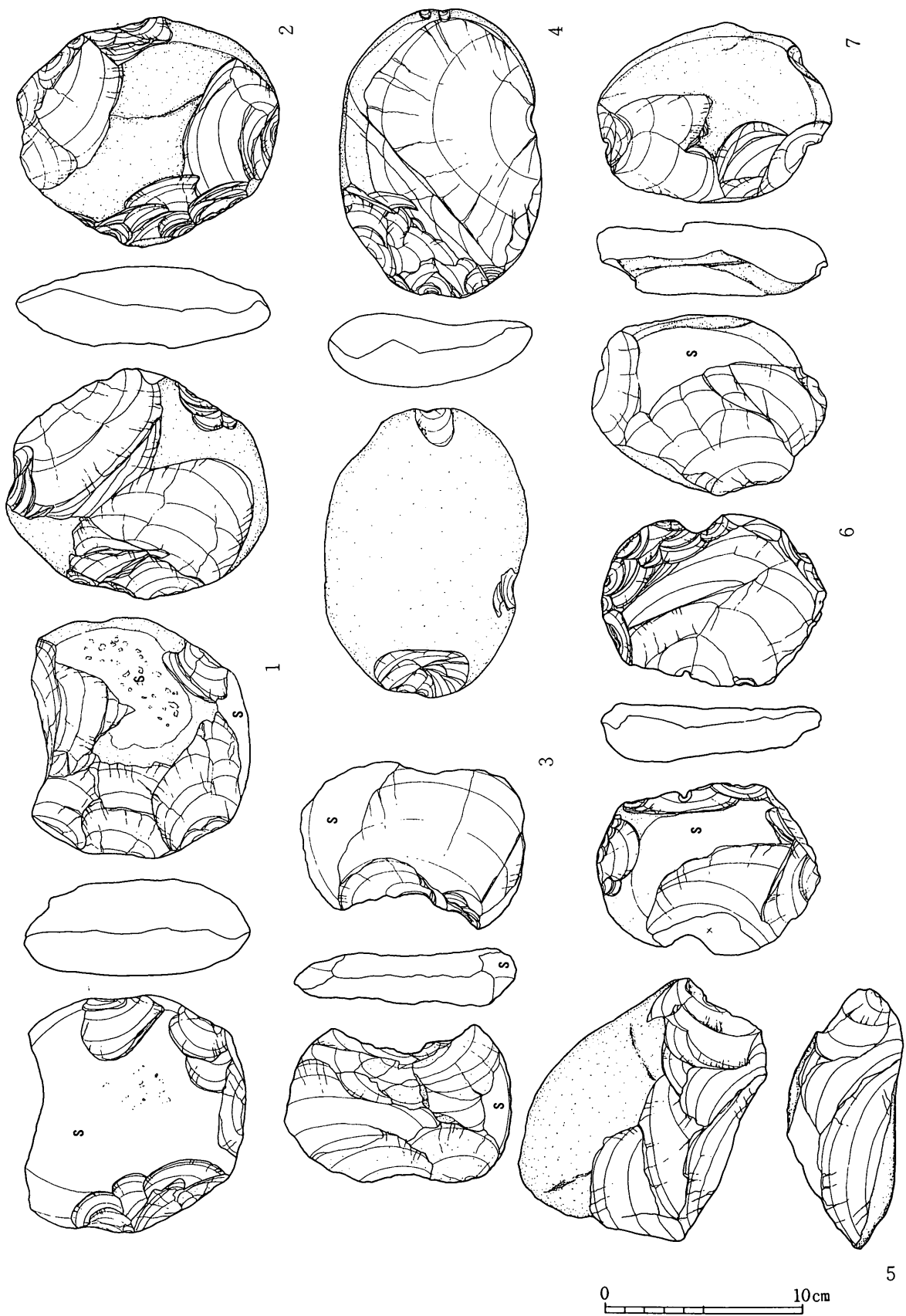
第112図 遺構外の礫器



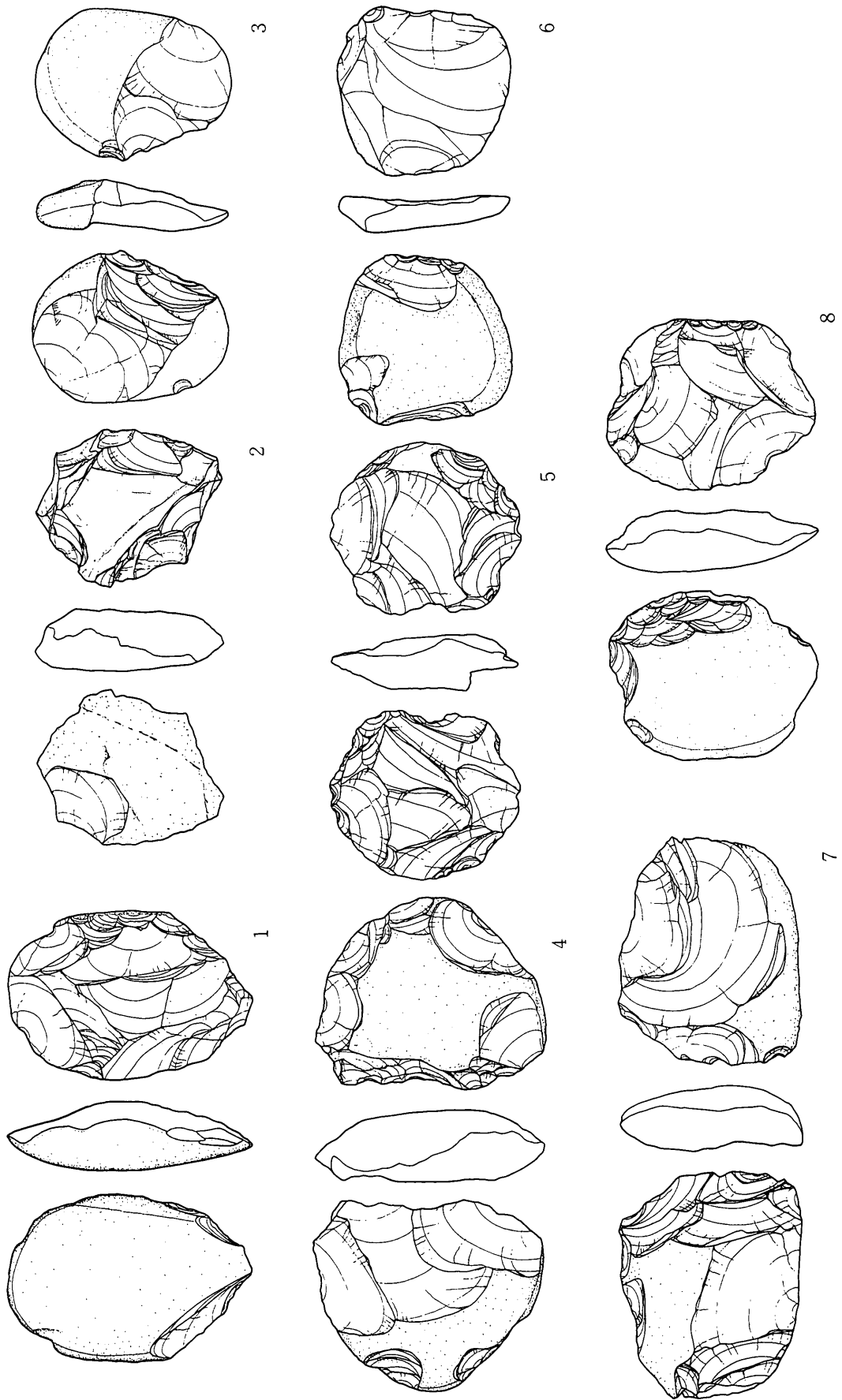
第113図 遺構外の大形剥片素材の石器



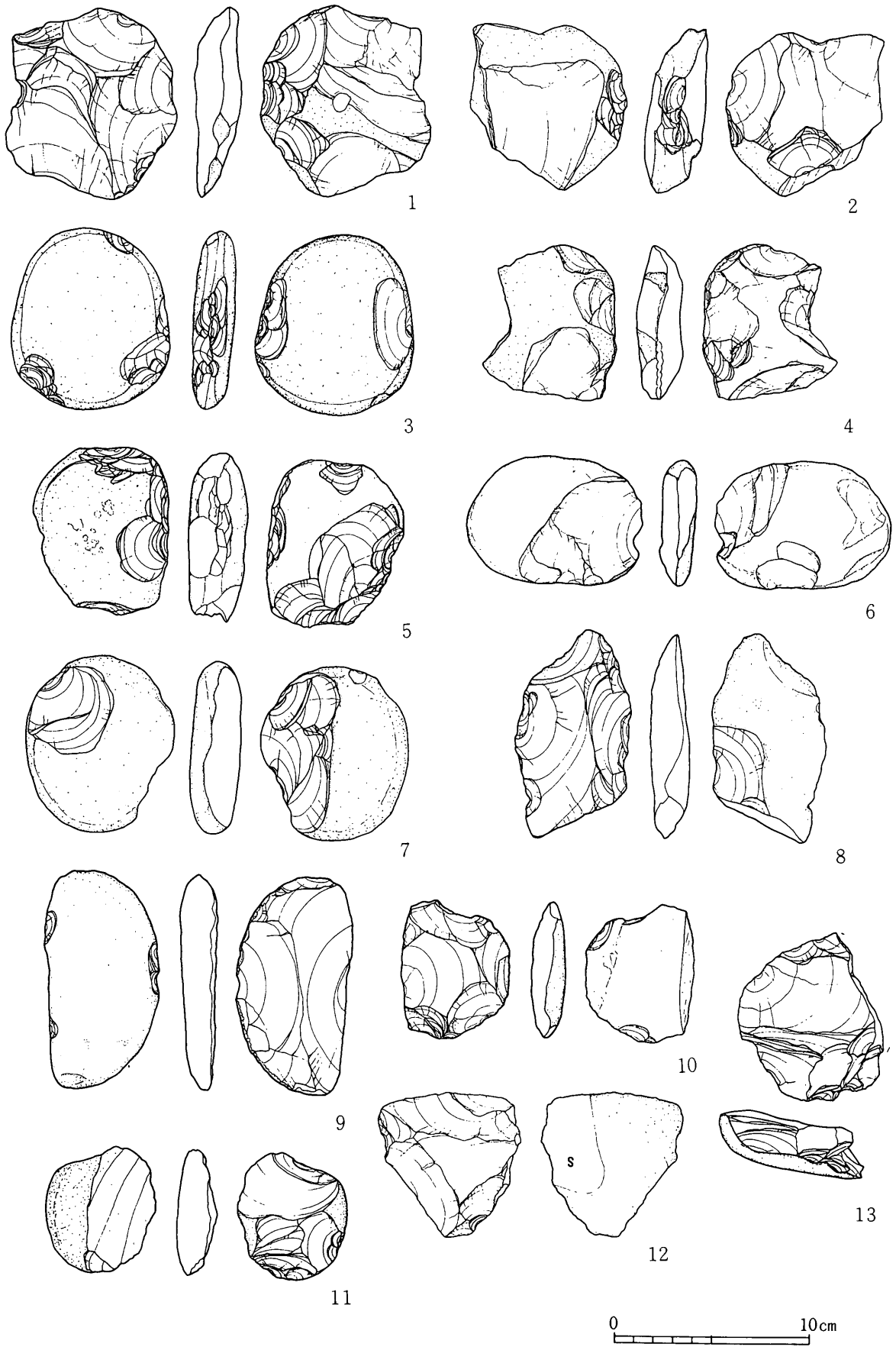
第114図 遺構外のハンマーと石核素材



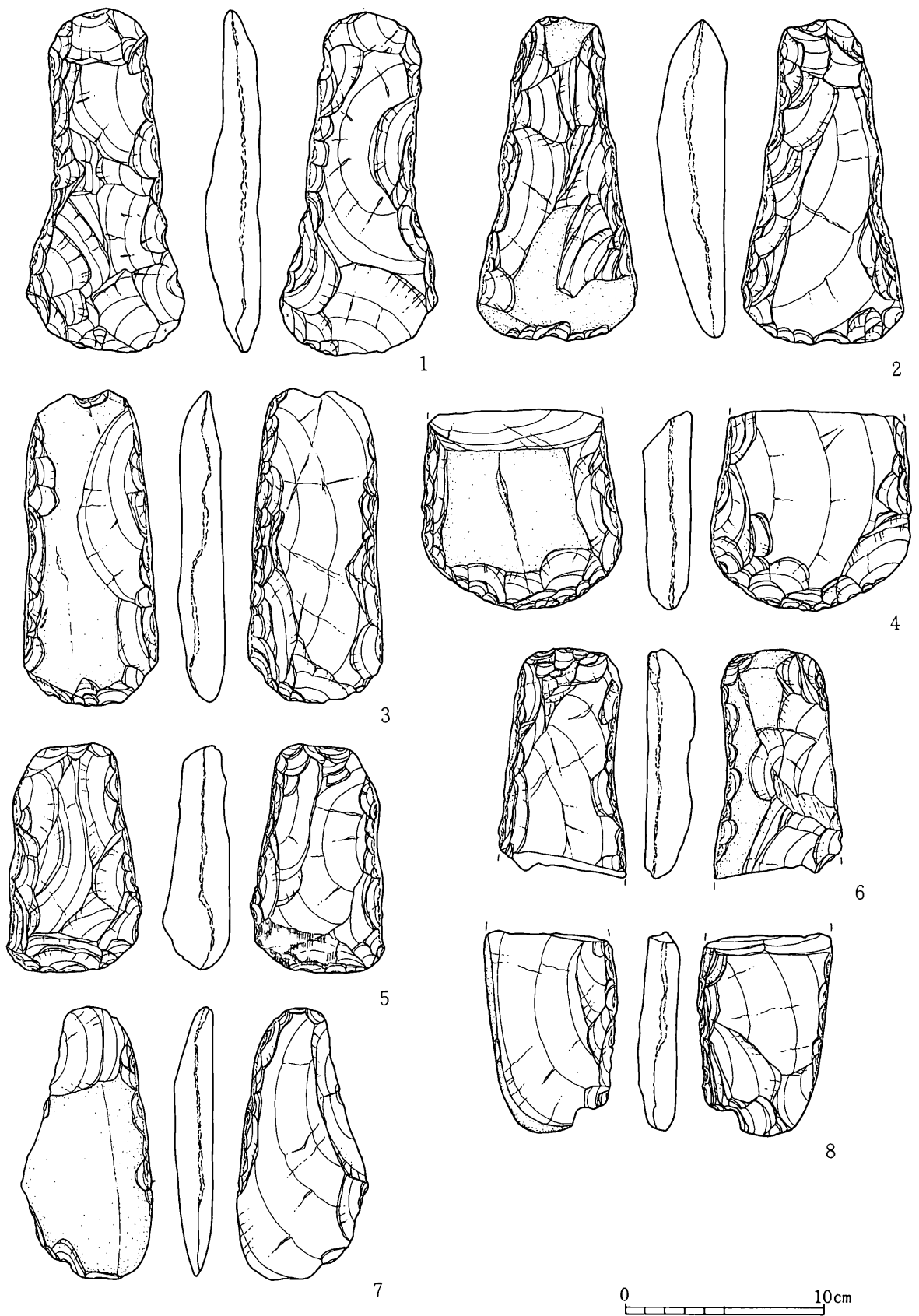
第115図 遺構外の石核（1）



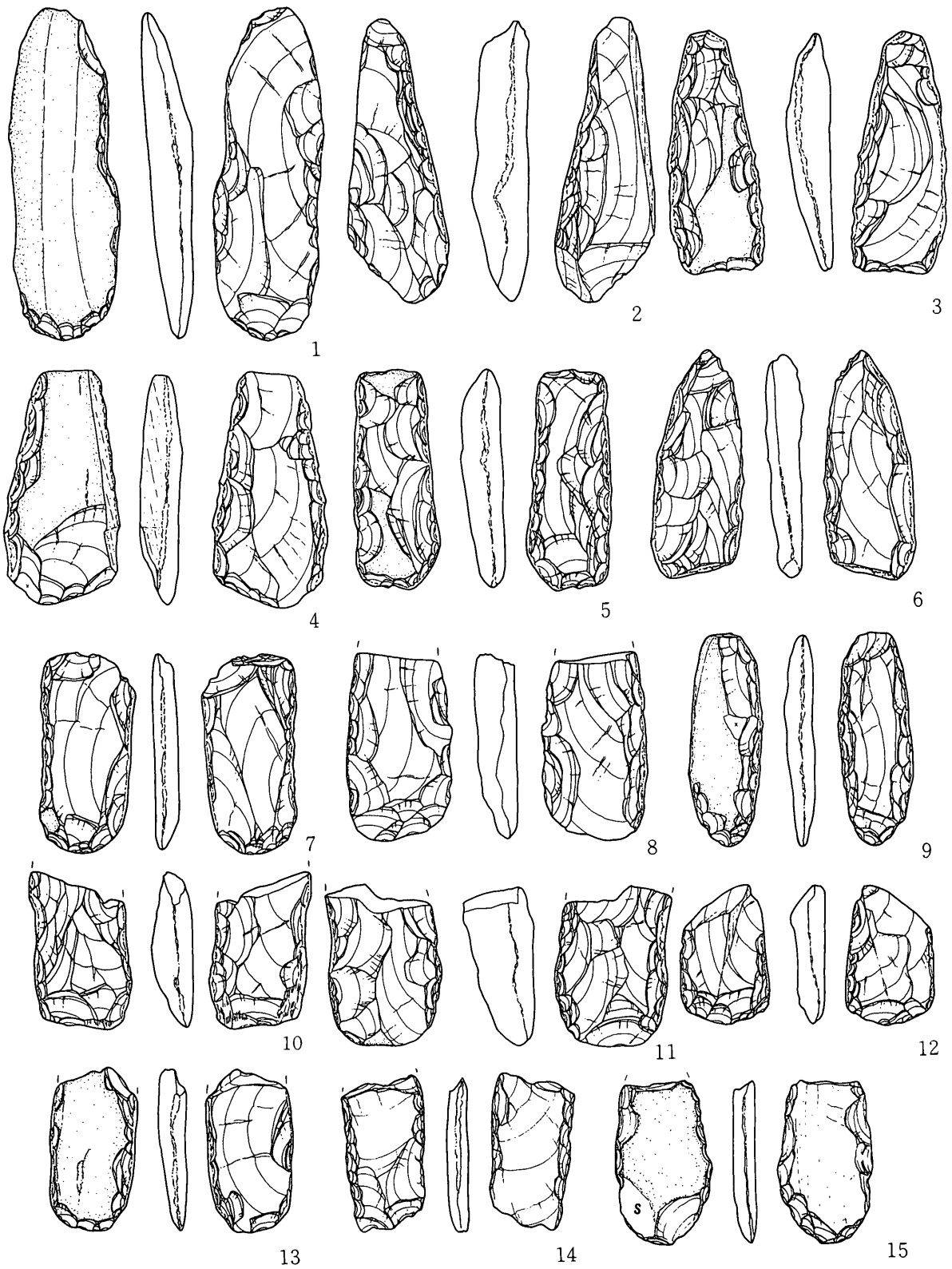
第116図 遺構外の石核（2）



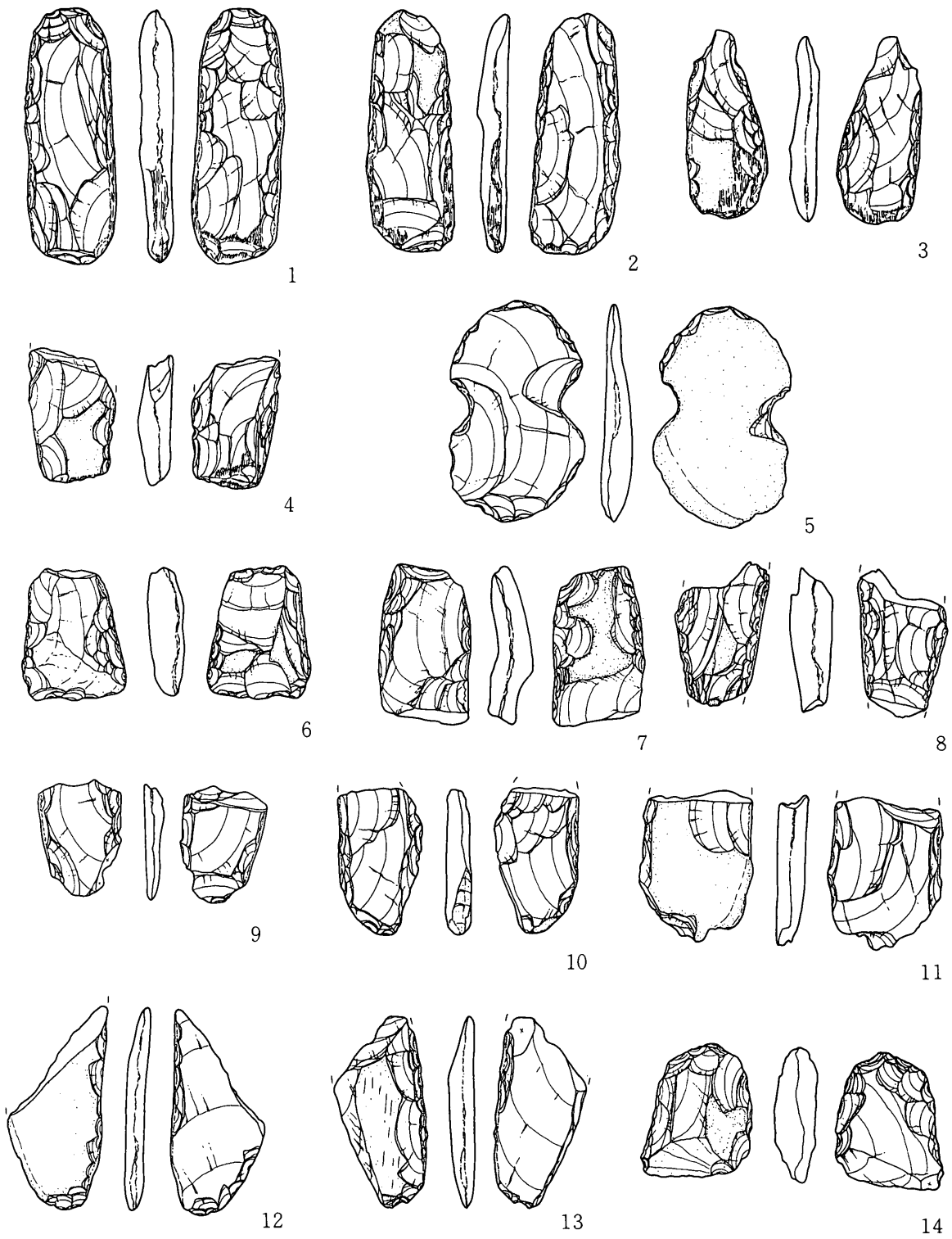
第117図 遺構外の石核 (3)



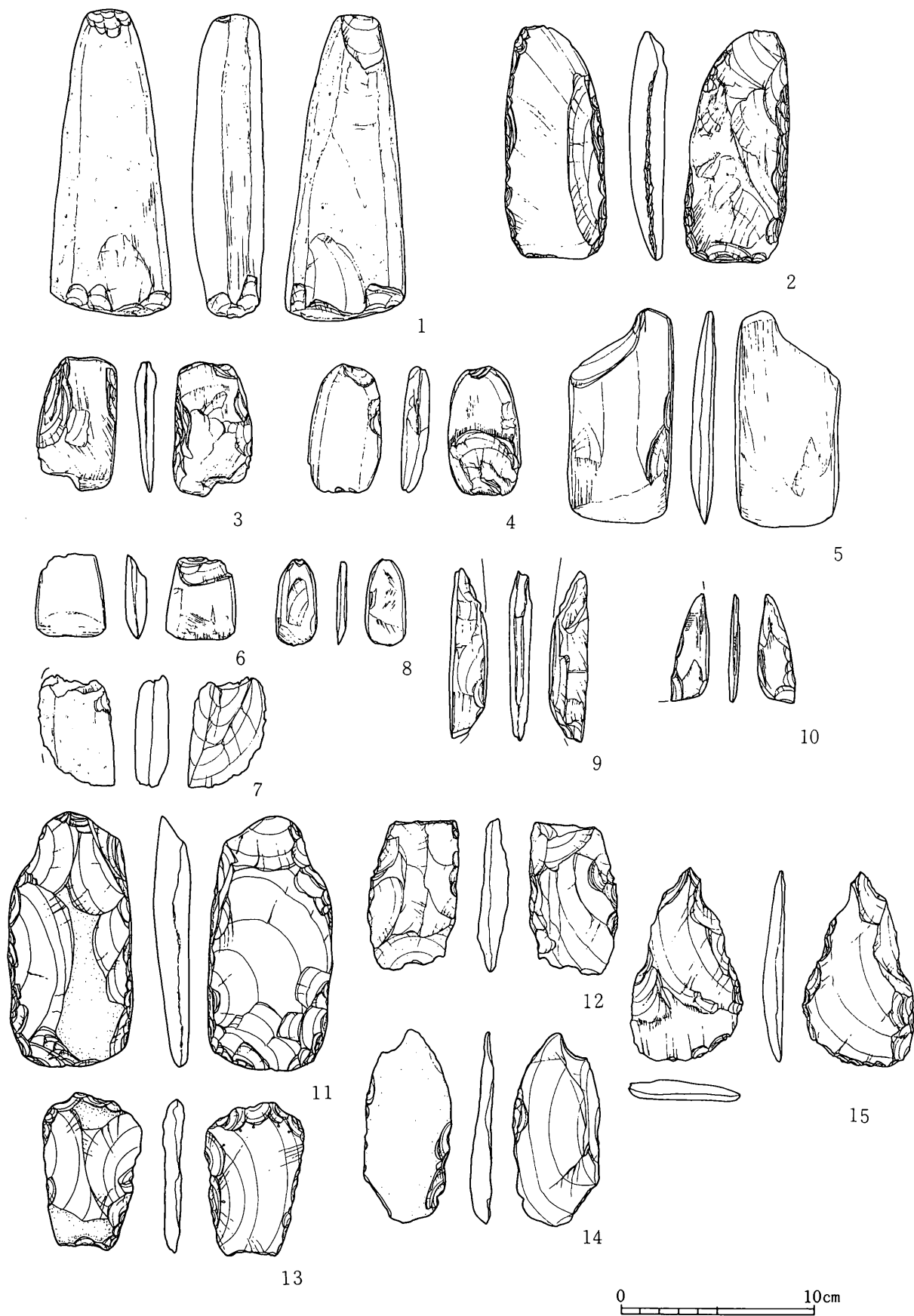
第118図 遺構外の打製石斧（1）



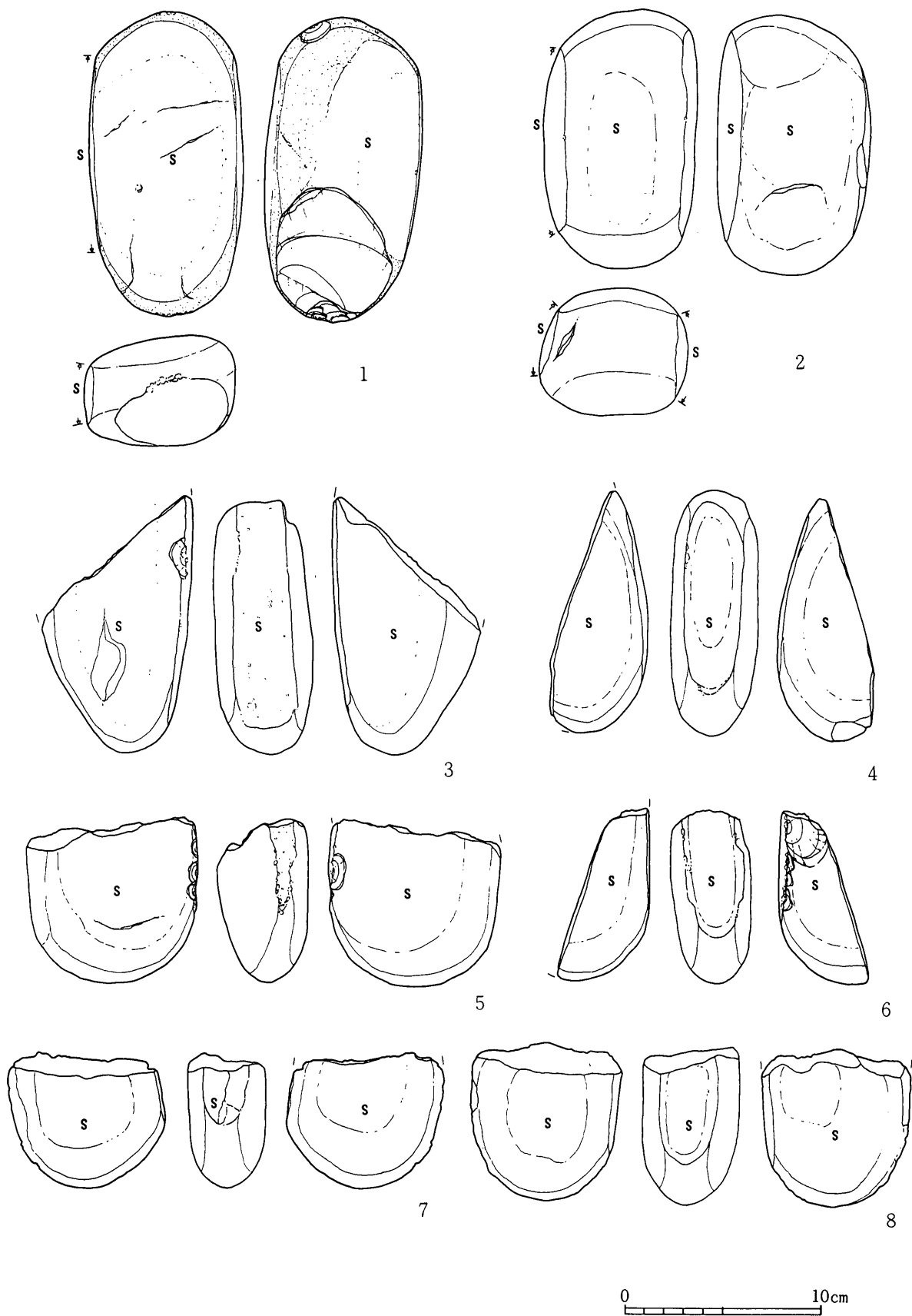
第119図 遺構外の打製石斧（2）



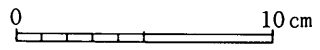
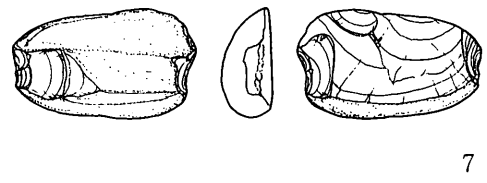
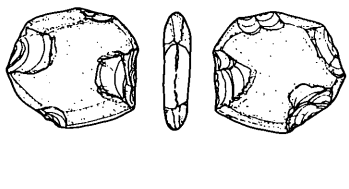
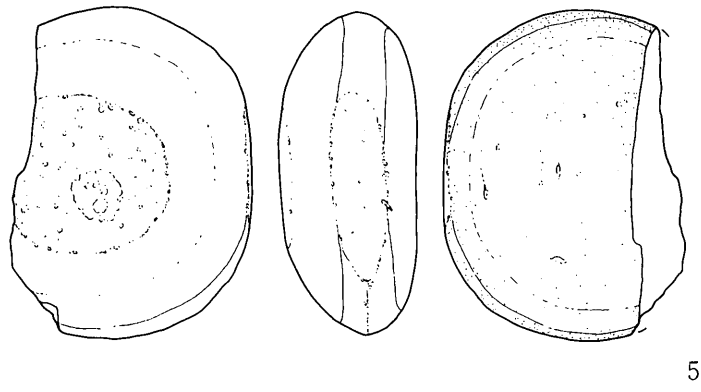
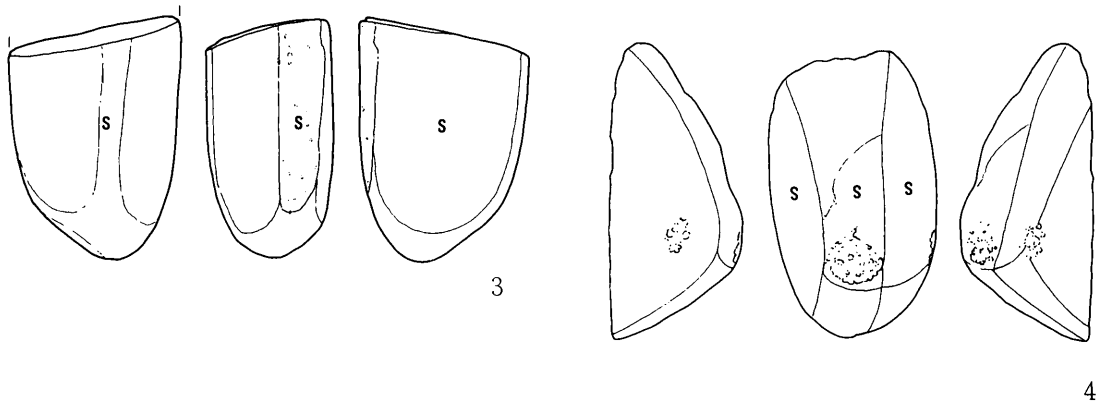
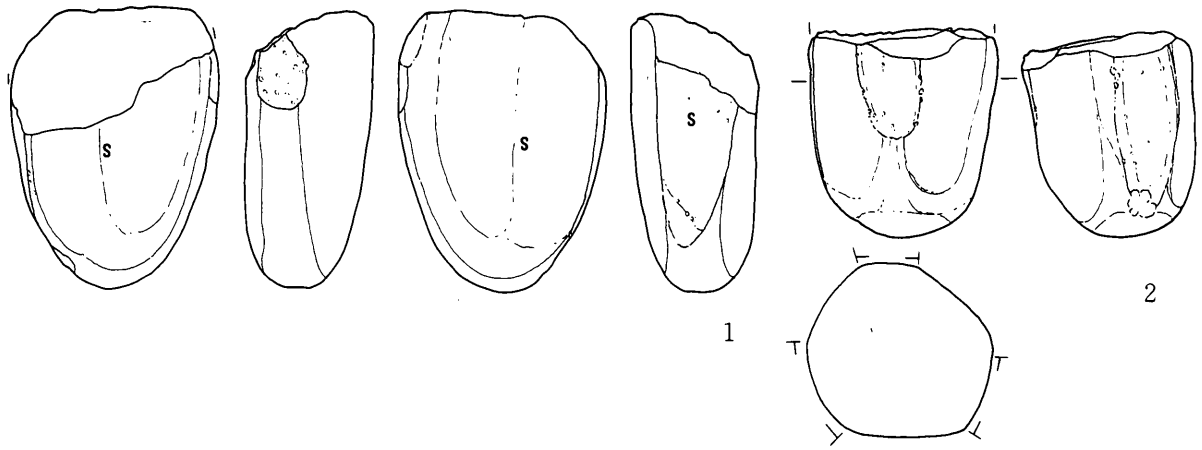
第120図 遺構外の打製石斧（3）



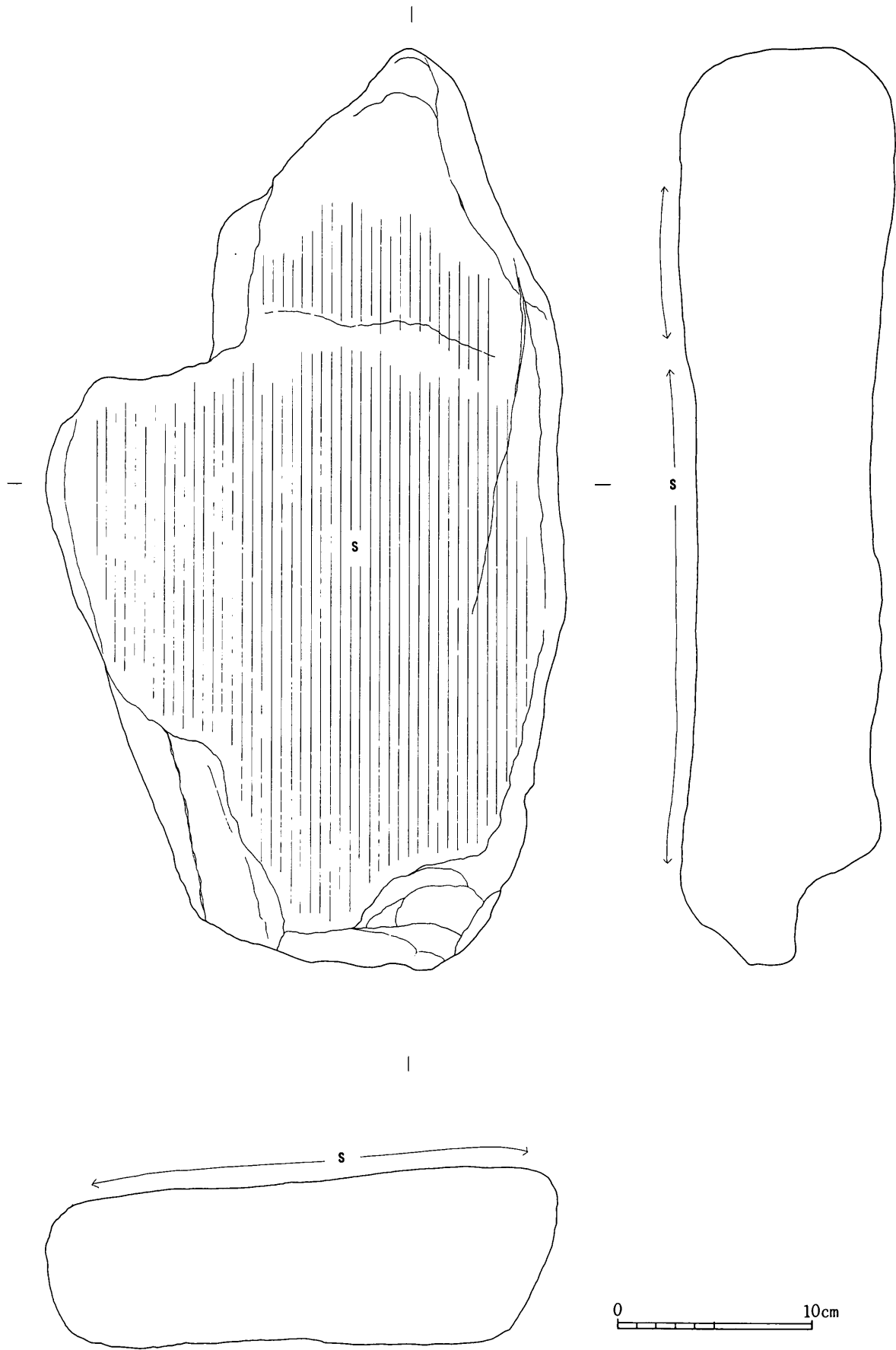
第121図 遺構外の磨製石斧とその素材



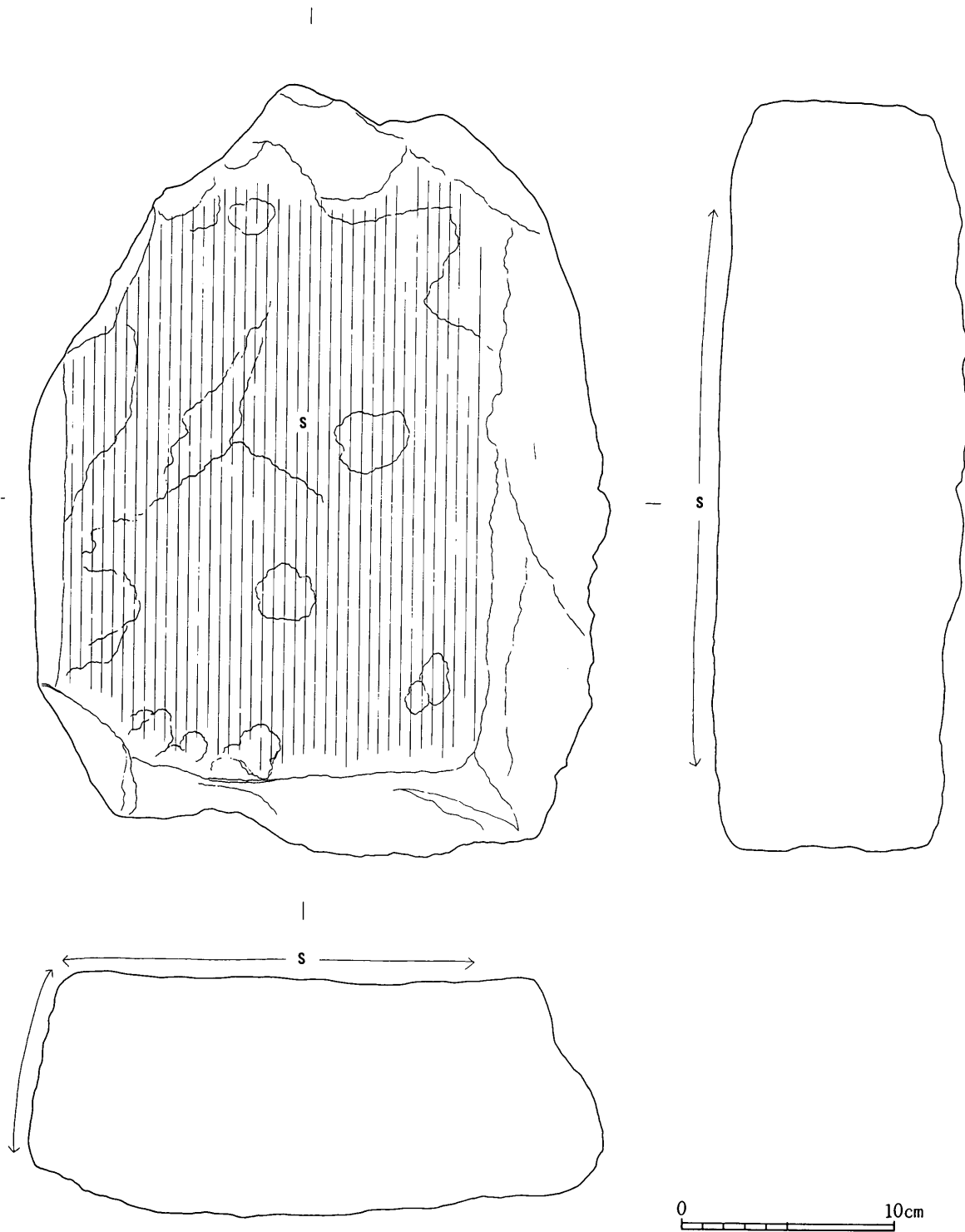
第122図 遺構外の磨石類 (1)



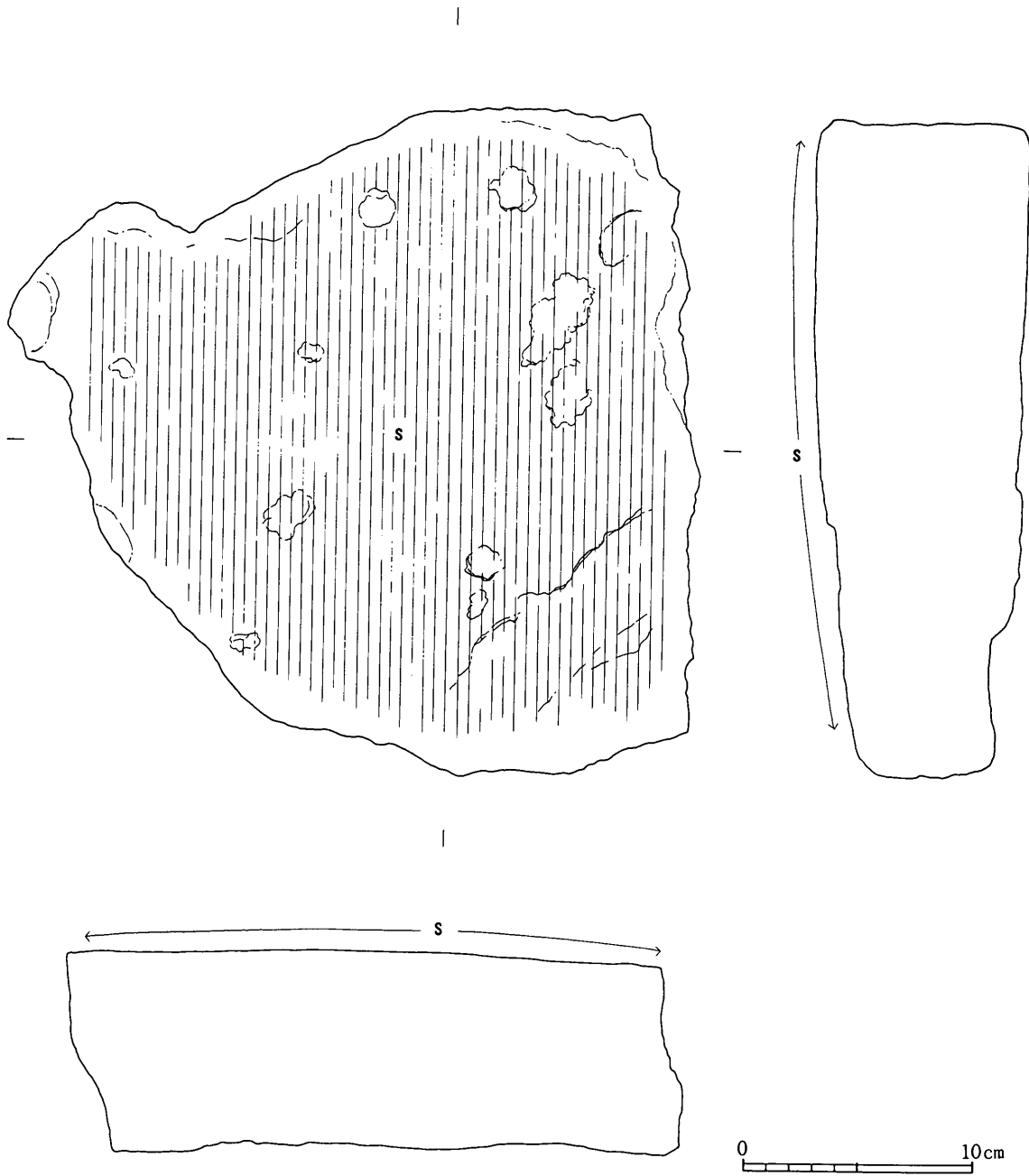
第123図 遺構外の磨石類（2）



第124図 遺構外の石皿（1）



第125図 遺構外の石皿（2）



第126図 遺構外の石皿（3）

び しょう い せき
美 女 遺 跡

— 遺物編 —

平成10年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会

印刷 龍共印刷株式会社
